孤剣は折れず

柴田錬三郎

孤剣は折れず

柴田錬三郎

孤剣は折れず

柴田錬三郎

新潮文庫〔草〕一五〇P

440

徳川幕藩体制の確立期にあたる三代将軍家光の治世……剣をもって一国をつくる世が去った時代にあって、孤剣に己れの運命を賭け、時の強権に抗する小野派一刀流の剣客神子上源四郎の壮絶な半生を描く。可憐な乙女との恋を織り込み、柳生但馬守、宮本伊織、大久保彦左衛門、春日局、松平伊豆守らが続々登場し、忍者あり、切支丹あり、雄大な構想で展開される本格的長編時代小説である。

新潮文庫

0193-115016-3162

¥ 440

〜〜新潮文庫〜〜

柴田錬三郎の作品

剣は知っていた（上）
〃（下）
江戸群盗伝
続江戸群盗伝
美男城
眠狂四郎無頼控（一）〜〃（六）
眠狂四郎独歩行（上）
〃（下）
眠狂四郎殺法帖（上）
〃（下）
孤剣は折れず
赤い影法師
運命峠（前）
〃（後）
剣鬼

カバー印刷　錦明印刷

カバー　御正伸

新潮文庫

孤剣は折れず

柴田錬三郎著

新潮社

孤剣は折れず

柴田錬三郎著

新潮文庫

孤剣は折れず

柴田錬三郎著

新潮社版

1551

孤剣は折れず

駒場野

秋――。

澄みきった碧空を、とんびが一羽、ゆるやかに、弧を描いている。

静かな明るい陽光が、宙に満ちていた。

昨日の午（ひる）に来て、天地を荒れ狂うだけ狂って、夜のうちに去ったあらしは、まさしく、悪夢だったようである。

しかし、その暴力のなごりは、曠野のすがたを、むざんに変えていた。

見わたすかぎり、萱は、なびき伏していたし、樹々は、葉をむしられ、枝をへし折られていた。

野をうねる流れは、濁水をふくれあがらせて、渦をまいていた。

それにしても――。

あの凄じいあらしの中をどこに息をひそめていたものであろう、草の下で、虫たちは、さかんに啼いていた。いかにも、愉しげに、生きのいのちを、いっぱいに、その音にこめているのであった。

と――。

彼方の丘陵上に、ぽつんと、ひとつの人影が出現した。

夜明けてから、この曠野が、迎えたはじめての人間であるだけに、その者もまた、狂おしい一夜をぶじに生きのびて来た感がふかい。
木綿の小袖の着流しで、深編笠をかぶっていたが、濡れてはいなかった。
いそぐでもない足どりであったが、長身であったし、独特の歩調をそなえているとみえて、萱に映して行く影は、迅（はや）かった。
道は、流れに沿うて、やがて、櫟林（くぬぎ）に入ろうとした。
ちょうど――。
その地点まで来たおりであった。急に、林の中から数騎の蹄の音がひびいて来たので、牢人者は、身をさけて、くさむらに立った。
馬をあおって来たのは、いずれも陣笠、陣羽織、野袴のいでたちであった。
林のむこうは、駒場野であった。
駒場野、とは駒ならしの場という意味である。
牢人者は、騎士たちが、そのまま駆け抜けて行くものと思って、じっとしていると、いきなり、眼前へ馬が、いなないて、前脚をたかくはねあげた。
「おいっ！」
たづなを引いた先頭の騎士が、するどく、声をかけた。
「何用あって　駒場野に入る？」
あたまから怪しい者、ときめてかかった語気であった。
牢人者は、笠の窓ごしに騎士を仰いで、なぜか、黙っていた。

「貴様っ！」
騎士は、その無言を、予感があたったと合点して、陣笠の下の眼光を燃やした。
同時に、うしろの三名の騎士は、ぱっと、地へとび降りた。
にもかかわらず、不気味だったのは、牢人者の態度である。
彼は、三名に、左右と背後と、退路を断たれるにまかせて、微動もしなかったのである。
「引きたてるぞ！　神妙にせい！」
馬上からその叱咤をあびても、なお、なんの反応もしめさなかった。
四方からの殺気の放射に、このように、黙然と、その静止の姿を変えずにいられるのは、これは、尋常一様の使い手ではないと受取れたことであった。また、そう見てとるだけの目を、騎士たちは、持っていたのである。
じりじり……と、騎士たちもまた厳しい沈黙をまもって、包囲の距離をちぢめて行った。
完全に、おのが長身を、刃圏内に容（い）れられた時、はじめて、牢人者は、編笠の内で、口をひらいた。
「おぬしたちは、いつから、柳生の門下になった？」
ひくいが、冴えた声音だった。
騎士たちの陣笠には、将軍家師範柳生但馬守宗矩（たじまのかみむねのり）の紋がついていたのである。
「なに?!　貴様、何者だ？」
正面の士が、吼えるように、さけんだ。

他の三士も、あきらかに、闘志を燃やした胸中を、かき乱された気配をしめした。

「菅、大館、那須、庭瀬――」

牢人者は、しずかに、おのれをとりまいた騎士たちの姓を、ゆっくりと言いあてた。

「いずれも、小野道場二千の門人中、将来の四天王と目されていたはずだ。……おぬしたち、いつ、信義をすてて、柳生へはしった？」

ひくくおさえた語気が、かえって、鋭いものとなって、士たちの肺腑に刺さった。

とたんに――。

左側にまわった士が、烈しい驚愕の目をひきむいた。

「おおっ！　貴様は……」

その叫び声にこたえて、牢人者は、編笠を、うしろへはねた。

額ひろく、鼻梁の通った、兵法者以外の何者でもない若い貌が、あらわれた。ややくぼんだ双眸の放つ光が、異常なまでに冷たく冴えてその彫ふかい貌をひき緊めていた。

「神子上源四郎！」

正対した士が、呻くように、その名前を、口にした。その表情と口調が、自分たちがいちばん怖れていた存在が、ついに、眼前に出現した衝撃の大きさを、しめしていた。

伊藤一刀斎の嫡伝、小野派一刀流始祖の次郎右衛門忠明が、逝ったのは、三年前――寛永五年秋のはじめであったが、その初七日の夜、小野道場から忽然として姿を消した一人の門弟があった。

師忠明から、その卓絶した天稟をみとめられ、特に前名（神子上典膳）をもらった若者――すなわち、この源四郎であった。

一通の書置ものこさずに、行方を絶ったので、その出奔の理由は、誰にもわからなかった。

忠明には二子があり、忠也、忠常といったが、両名とも、優れた使い手ではあったが、源四郎の神速の技には、冷汗を流さざるを得なかった。

その源四郎が、飄然として、江戸へ舞いもどって来たのである。

しかも――。

はじめて出会ったのが、小野道場を去って柳生道場へはしった嘗ての朋輩たちであったとは、皮肉な神のとりはからいであったといえようか。

いくばくかの後――。

林の中の、そこだけ近年火事でもあったものか、立枯れた樹木を数本のこして空地となった場所がえらばれていた。

四周からは、この空地は、見えないのであった。

源四郎は、枯樹の一本を後楯にとり、三尺あまりの無反りの剣を、青眼にとって、正面の敵へ、目を置いていた。

静寂が、つづいていた。

冷気をふくんだ風音だけが、梢をそよがせて、澄んだ中空を渡っていた。

それぞれが、足場を定めると、微動もせずに、この固着した状態は、いつまでつづくかと思われた。

源四郎の方で、あえて、この決闘をのぞんだわけではなかった。

四士の方で、のっぴきならなくなったのである。

まるで、源四郎が、小野道場から柳生道場へ寝返った自分たちを斬るために出現したかと、思いなされたのである。

四士の双眸は、異常にひき剝かれて、狂的に光っていた。

さらに——どれくらいの時刻が移ったろうか。

陽が移って、草むらを透すまだらな光の箭(や)が、源四郎のやや蒼ざめた彫ふかい顔の半面を浮きあがらせた。

しかもなお、深く冴えてすわったその眼光は、うごかなかった。

刃先をふれあわせて、その眼光に射られつづけた那須なにがしは、ついに、この固着状態を破る猛気を、全身に、ふくれあがらせた。

なおも、それから、数秒間、猛気の爆発をおさえたのは、それが他の三名へ伝播して、気息の脈絡が、完全につながり、一瞬の勝利を期したからであった。

突如——。

「やあぁっ！」

虚空をつんざいて、那須は、地を蹴った。

五体は、鋼(はがね)の発条(ばね)と化したとみえた。

せつな——。

源四郎は、うなり落ちて来た刃風に、あおられたように、くるっと身をひるがえして、枯樹をまわった。

かつて道場にあった当時の源四郎ならば、一撃を受けて、これを撥ねかえす闘志を発揮しない男ではなかった。

三年間何処で、いかなる至妙の極意をさとったものか——まず、怒濤の猛撃から、かげろうのように、のがれたのである。

那須の白刃は 枯樹の幹を、ざくっと嚙んだ。

他の三名は、枯樹の蔭へ吸いこまれた源四郎のすがたに、異口同音に、

「おおっ！」

と、うなった。

この意表をつく匿身の業が、自分たちの油断をとらえるものと、気がついた時には、すでにおそかった。

次の瞬間、ぱっとおどり出た源四郎が、疾風をおこして、閃光を送りこんで来るのを、彼らは、なんら、なすところもなく、面へ、肩へ、胴へ、あびて朱(あけ)となって、地へ伏したのであった。

うつ伏した一人の野袴で、血ぬれた刀身をぬぐって、鞘におさめた源四郎は、足ばやに立ち去ろうとしかけて、一瞬、眼光するどく、ふりかえった。

くさむらの中が、がさ、と鳴った——その気配が、なみのものでない、と神経につたわったのである。

源四郎は、視線を、うろつかせることなく、くさむらの一点へまっすぐに投じた。

「なんだ？」
べつにけわしさをふくまぬ声音を送った。
そこにひそんだ者は、それきり、ひそとして、反応を断っていた。
「こちらにさとられたからには、いさぎよく、出て来い！」
源四郎は、うながした。
すっと、身を起したのは、ねずみ色の布で頬かむりをした、布子すがたの、小柄な人間だった。野差刀をおびて、右手に、鉄砲をつかんでいた。
一瞥では、猟師であったが――。
「……！」
じっと、見すえた源四郎は、急に、眉宇をひそめた。
「女だな！」
しかも、若い。
源四郎が、つと一歩、寄って行こうとふみ出すや、対手は、さっと鉄砲をかまえた。もとより、火縄を燃やしているわけではなかったので、武器とはならないのであった。
ただ、鋭敏な小動物のように、本能的に警戒してみせた――その態度に、不敵なものが感じられた。
源四郎は、立ちどまって、
「駒場野に、鉄砲を持込むとは、いい度胸だし、何かの仔細があろうと思える」
と、言いかけた。

まだ、幕府が、江戸十里四方鉄砲改めの制を敷いていない時代ではあったが、将軍家の狩猟場に、地下（じ）の猟人が、鉄砲を持ちこむことは、厳禁されていた。
発見されれば、死罪に処せられた。
「おたがいに、この鷹場においては、公儀からゆるされぬ身であることだ。すみやかに、立去るに、しくはなかろう」
源四郎は、言いすてると、きびすをまわした。
ついに、対手は、無言だった。
ずんずん遠ざかって行きながら、
――ただの猟師のむすめではなかったようだ。
そう思った。
大きくみひらいた双眸のきらきら光った美しさがこちらの目の底にのこっていた。
細く通った鼻すじも、口もとも、品がよかったようである。
妙に、しつっこくこびりついて離れなくなったその俤（おもかげ）を、源四郎は、かぶりを振って、追い払おうとした。
――あのむすめが、何を企てていようと、おれと、なんのかかわりもないことだ。
自身へ、そううつぶやいていた。
ものの七八町も、あらしのあとの野を辿ったろうか。
ひとつのかなり高い丘陵を越えた源四郎は、萩や旗すすきの、繊細な、茫々たるひろがりに、

目をほそめた。

　天災に遭うて、かえってその雄大な風趣を増したとさえ思える武蔵野のながめが、源四郎の幻想を呼びさましたのである。

　というのも――。

　ちょうど、源四郎がまっすぐに目を置いた野の中央の、楢と竹の林の中から、まっすぐに立ちのぼっている白い煙が、ふと、往昔の武蔵七党武士の烽火と、見たてられたのである。

　もとより、農家のかまどの平和な火に相違なかった。

　ほんのしばしの幻想から、われにかえると、源四郎は、空腹をおぼえた。昨夜は、朽ち毀れた杣小屋で、風雨をさけて、夜明けとともに、曠野を横切って来て、いまだ、食事をとっていなかった。

　足をはやめて、丘陵を降りた。

　林に近づいてみると、樹間にのぞく家は、農家のかまえではなかった。

　いずれは、その先祖に名ある武将を持っている、由緒ある郷士の隠れ住む屋敷らしい、とうかがわれた。

　土塀がめぐらされ、古びて茸をつけている冠木門が、どっしりと扉を閉ざしていた。

　源四郎は、土塀に沿うて、萩をふみわけつつ、裏手へまわって行った。

　土塀につづいて、土壁の建物があった。窓は、厳重な鉄格子をはめられ、これは、あきらかに狭間造りであった。

　その前に立ちどまった源四郎は、ちょっと、耳をすまして、建物の内に、人がいるのをさとった。

「おたのみ申す」

　声をかけて、待っていると、窓にあらわれたのは、白い顔であった。

　まだ二十歳まえの娘であった。

　一瞥した瞬間、源四郎は、

　――おや、病人か？

　と、疑ったほど、その面差は、よわよわしく、影うすい印象だった。

　もっとも、その病的なたおやかさは、この旧家に住むにふさわしいものと思われた。

「旅の者ですが、野を遠まわりいたしたので、いささかひもじい思いをいたして居ります。あまりものでよいが、めぐんで頂けまいか。失礼ながら、路銀は所持つかまつる。ご迷惑はかけぬが……」

「はい――」

　娘は、うなずいたもののあきらかに、当惑の色を目もとにうかべた。

「いや、家の中へ入れて頂かなくともよいのです。その窓から投げて下されば結構です」

　意外だったのは、娘が、窓から、食物を投げずに、建物わきの樫戸を開けて、

「どうぞ――」

　といざなったことだった。

「よろしいのですか？」

　源四郎の方が、ためらった。

陽を受けたその顔は、蜉蝣の薄翅にも似た青味をおびて、いたいたしかったので、病牀からむりをして起きあがったのではないか、と疑われたのである。

「無人でございますゆえ、なんのおもてなしもできませぬが……」

娘の態度は、作法にかなった、品のあるものだった。

「いや、わたしは、ただ、腹を満たせばよいので……幾日も露宿して、野生のもので飢えをしのぐことに馴れて来た男です。おかまい下さると、かえって、のどがつかえます」

もともと口の重い人付きのわるい源四郎が、やさしくふるまおうと心をつかったのも、こうした深窓育ちそのものの娘とはじめて口をきくからであった。

娘は、源四郎のその心づかいがぎこちなくあらわれた素朴な様子に、好意を感じたものか、かすかな微笑を、その細おもてに刷いて、

「あちらへどうぞ――」

と、すすめた。

そこは、母屋と渡廊でつながる柿葺きの離れだった。

土庇のふかい玄関がついていて、造りは、古雅な、くすんだ匂いをふくんでいた。

これは、主人の、茶道の趣味の深さをしめした。

鮮苔の中の石だたみをふんで、玄関に入ると、娘は、つつましく、土間の隅にひかえて、源四郎の上るのを待った。

框から、畳へ――一歩、上ったとたんであった。

源四郎は、娘の口から、微かではあるが、はげしいおどろきの声がもれるのをきいた。

娘のまなざしは、框へ投じられていた。

そこには、べっとりと赤い汚染がついていた。源四郎の蹠が捺したものであった。

「あ――これは、失礼いたした」

源四郎は、あわてて、懐中から、汗ぬぐいの布をとり出して、拭こうとした。

「いえ、わたくしが……」

娘は、いそいで、じぶんがそれをしようとして、ふたたび、

「あ――」

と、声をたててすくんだ。

源四郎の着ものの裾にも血の汚染は、はね散っていたのである。

源四郎は、嘘をついたりごまかしたりすることの不得手な男であった。

「わたしは、さきほど、人を斬ったのです。やむを得ぬ仕儀でした。……ご気分をそこねて、申しわけない。ゆるされい」

正直に白状して、詫びた。

娘は、顔色をさらに青ざめさせて、息をのんだ。

しかし、すぐに心をとりなおすと、しとやかに一礼して、出て行った。

源四郎は、座敷に通った。

客の座に就くと、由緒ありげな飾付けの品々をながめて、

――これは、並の郷士の住いではない。

あらためて、そう感じた。

多くの時間を待たせずに入って来た娘は、手に、黒い小函と白い木綿布を持っていた。

「お手あてをなさいませ」

しずかに、そうすすめられて、源四郎は、感動をもって見かえした。

血におそれた娘は、下婢でも代りに寄越すのではなかろうか、と思っていたのである。

「かたじけない」

受けとって、源四郎は、人を斬ったことの弁解を、もっとくわしく述べなければならない衝動にかられた。

しかし、口に出すと、そらぞらしくなるような気がして、おさえた。

娘が、さがって行くと、源四郎は、裾をめくって、右脚の創を見た。

仆(たお)れた四士のうちの一人からあびせられた唯一の刃風のかすりであった。

手当をおわると、それを待っていたように、娘は、食膳をはこんで来た。酒も添えていた。

源四郎は、威儀をただすと、

「わたしは、小野次郎右衛門忠明の門弟、神子上(みこがみ)源四郎と申す兵法者です」

と、名のった。

娘は、会釈をかえして、

「美音(みね)と申します」

とこたえた。

源四郎は、ちょっと、ためらったのち、

「じつは、わたしが斬った対手は――」

と、述べかけた。

すると、娘は、顔をあげて、かぶりをふった。

「失礼でございますが、わたくしなど、お話をおうかがいいたしましても、なんのおこたえもできませぬ故……、どうぞ、お召上り下さいませ」

「そうですか。では、遠慮なく――」

源四郎は、盃をとった。

料理は、ありあわせの品々であったが、どれも、心のこもった味つけがしてあった。酒も、うまかった。

源四郎は、健啖に平げた。

幾月ぶり――いや、もう永い月日、忘れていた、人のなさけの味わいが、孤独に生きるこの兵法者の心身にしみわたった。

「ご馳走に相成りました」

膝に両手を置いて、源四郎は、心からの感謝をした。

「ごゆるりとご休息なさいませ。……お床をおのべいたしましょう」

美音(みね)は、立ちあがろうとした。

源四郎は、あわててとめて、

「それよりも、あなたは、もしや、加減がわるくて、臥せて居られたのではないか？　そうであったのならわたしは、申しわけのないご迷惑をおかけしたことになるが――」
「いいえ」
美音は、微笑して、かぶりをふった。
しかし、その微笑は、かくしきれぬ淋しい翳のあるものだった。
美音は、いったん部屋を出たが、源四郎が横になって、まぶたをふさぐと、またそっと入って来た。
その手には、夜着が、かかえられていた。
源四郎は、それが、自分の上に掛けられるや、ぷうんと鼻孔をついてくる薫香に、痛みにも似た感動をおぼえた。
若い美しい女性から、このような心づくしを受けたのは、生れてはじめてのことだった。
修羅場から、血の匂いをはこんで来た者を神秘な香をたきこめた夜着で、包んでくれる床しいやさしいふるまいをしめすこの娘は、いったい、どのような人生を、神から与えられているのであろう。
ふと――。
あまりにしとやかに、つつましく、清雅な天性を持ちつづけようとするがために、その未来に幸せは薄いのではあるまいか、と想像されて、源四郎は、あわてて、その不吉な予感を、はらいすてた。
……そうして、横臥していくばくの時刻が移ったろう。

いつか、源四郎は、うとうとと、まどろんでいた。身に迫って来るひとつの気配に、目をさました――というのは、あたらなかった。
夢裡の中にも、源四郎は、常に、周囲に起る変化に対して、直ちに反応する神経を備えている男であった。
意識を働かせる、というのではなかった。事実、そのせつなまで、平然とねむっているのであった。
一瞬、音もなく、宙をつらぬいて来る凶器が、わが身にふれんとする――その間髪の間に、ねむりを知らぬ神経が、五体を躍らせることになるのであった。
この場合も、そうであった。
びゅーっ、と一槍が、襲った。同時に、源四郎は、かるやかに横転した。
襲撃者が、たたみを刺した穂先を抜きとって、第二撃の構えをとった時、すでに、源四郎は、ぴたっと端座していた。
「……ふむ！」
かたわらの刀をとろうともせず、源四郎は、冷たく冴えたまなざしを、対手に送って、
「あなただったのか――」
と、言った。
襲撃者は、装こそ、派手な小袖にきかえていたが、先刻の女猟師にまぎれもなかったのである。

敵意を燃やしている双眸の、妖しいまでの美しさを、ふたたび見出した源四郎は、一種の親しみさえ感じつつ、

「偶然だった。あなたの屋敷とは知らずに、食事を乞うた。他意はないことを、信じて頂こう」

「……」

「美音どの、と申されるのはあなたの妹御か。あなたとはちがって、やさしい娘さんらしい。あとで、叱らないで頂きたい。こちらが図々しく入り込んだのです」

するどい穂先をつきつけられながら、不敵に笑ってみせておいて、源四郎は、刀をとると、悠然と立ちあがった。

自分を殺そうとしたことをすこしもとがめず、理由もきこうとせずに、立去ろうとする源四郎のおちつきはらった態度は、気性激しいこの若い女性にとって、こんどは、決して見のがしにはできなかった。

「行かせませぬぞ！」

すすっと、身を、縁側の方へ移して、その槍構えへ、さらに殺気をこめた。

源四郎は、じっと、見かえして、

「どうしようといわれる？　その腕前では、わたしを突き伏せることはかなわぬ。意地なら、すてられるがいい。わたしは、他人事には一向に興味がない男だ。たとえ、あなたが、天下をくつがえそうというような大きな陰謀を企てているとしても、だ」

そう言った。

揶揄のひびきはふくませなかったつもりだったが、対手の白いおもてに、屈辱のための朱の色

が刷かれるのをみとめて、源四郎は、

——よほど勝気とみえる。

と、思った。

びゅーっ、とくり出されて来た槍のけらくびを、半身にひらいて、むずとつかんだ源四郎は、

「あなたが、何を企てているのか知らぬが、その気性が、妹御をまきぞえにして、不幸にしないように、祈っておく」

言いざま、石火の早業で、あて身をくれた。

崩れ落ちる姿を見かえりもせず、源四郎は、足早に庭の置石を渡って行った。

支配者

ふっくらと下ぶくれた、色白の、どう見ても四十代の若さをたもった顔であった。

細く切れた眸にも、おだやかな光をたたえていて、いつでもやさしく微笑をうかべる用意がなされているようであった。

事実、敵意を抱いて、前に坐る者に対しては、そのふくよかな愛敬をおしまぬ女性であった。

味方に対する場合、別人のように、眸の光は、鋭利な冷たさをおびて、その本性をしめすのであった。

春日局。

この名は江戸城において、磐石の重みをもって、ひびいている。

小肥りの、五尺足らずの姿が、ひとたびあらわれるや、その座は、異様に緊張することになるのであった。

いま——。

うしろにまわって、その肩をもんでいる若い侍女もその役についてから、もう半年にもなるのに、局がからだをうごかすたびに、じぶんのもみかたが気に入らないのではなかろうか、とはらはらしている。

ふしぎなことに、当代比すべき者のない権勢を有ったこの婦人の前半生は、不明なのであった。

自らも、ただ一度も、誰人にも、その前半生を口外したことはなかった。

姓は斎藤、名はお福、明智光秀の麾下にその人ありと知られた斎藤内蔵之介利三の女(むすめ)、母は稲葉通明の家より出ている、といわれていたが、これを証明する者は一人もいなかった。

斎藤利三の子女であることも、あやしかった。斎藤家の系図には男女十人ありとして、長男虎松は父に先立って死し、次男甚平は山崎合戦に討死し、三男利宗を長として末女のお福に至る数人の子女は、逆賊の遺児として落葉の音にも魂を消す哀れな身を、諸処に流寓した、といわれている。しかし、その悲惨な生立ちについては、これを見とどけている者がなかったのである。

世人が疑う余地のない事実は、成長して稲葉重通の養女となり、美濃の豪族林正成に嫁して、正勝、正定、正利の三男を生み、のちに離別して、慶長九年徳川家光の生れるにおよんで、召出されて乳母となった、というところであり、稲葉重通の養女となるまでの事蹟は、茫として詳にし

なかった。

自らを、逆臣の遺胤ということにすれば、生立ちの不明をそのままにしておくことができると、賢明にも思いついたのであろう、とうがった私語をする者もあった。

いずれにしても——。

落魄の苦をつぶさになめた幼少時代に、この賢女の凄じいまでの陰険な人生観はつちかわれたものに相違なかった。

小姓が、忍びやかに入って来て、両手をつかえた。

「大炊(おおい)様、お見えでございます」

春日局は、うなずいて、すぐに立った。

木の香も新しく、最近完成したばかりの宏壮な白書院で、大炊頭土井利勝は、扇子を音たてて開いたり閉めたりしながら、広縁の彼方にひらけた刈込植樹の庭を眺めていた。

乱世武略の時代が去り、治世の智略を必要とする当代となって、幕閣中、その政治の枢機は、この老中一人の手中に帰している観があった。

面貌は、魁偉といえたが態度にどことなく飄乎たる雰囲気があって、これが接する人の心をゆるめた。

春日局が、前に坐ると、いきなり、

「亜相殿、いよいよ御乱行でござるな」

と、言った。

べつに、あたりをはばかるでもない高い声音であった。

亜相とは――。

駿河大納言忠長のことであった。将軍家光の三歳年下の弟であり、母も同じく崇源院浅井氏であった。

家光が竹千代といい、忠長が国松といった少年時代両親の愛情は、弟の方にのみそそがれていた。そして輿論は、いつとなく、竹千代が廃嫡され、国松が三代を継ぐであろうと、きめていたものだった。

秀忠夫妻も、公然と、それを口にしたのであった。

結局、最後の断は、駿府に在った家康によって下されたのであったが、それまでの数年間、竹千代の乳母お福即ちこの春日局がくだいた心胆は、余人の想像以上のものがあった。

その母浅井氏が、竹千代をきらった理由のひとつとして、春日局がその才智をもって、家康から厚遇されていることの不快さがつもっていたこともあげられるのである。

――氏素姓もわからぬ女が、大御所を嵩（かさ）にきて、人もなげなふるまいをしおって！

この憎悪が、浅井氏の胸中に絶えずあった。しぜん、良人の秀忠にも、妻の感情が伝わっていた。

もともと、浅井氏は、淀君の妹で、全くの政略結婚によって、江戸城へ入輿した人であった。秀忠との間は睦じく欠けたことはなかったが、家康には気に入られていなかったし、気に入られるように努めることもしなかった。

理智の長けていない女性の陰湿な感情が、大奥という特殊な世界で、さらに歪められてゆくう

ちに、同じ血をわけた子でありながら一方を疎んじ、一方を溺愛するしまつになったのである。

春日局は、この事件について次のような手記をのこしている。

大権現様（家康）駿河御在世の御恩徳を感じ奉りたまえば、崇源院さま、君（家光）を憎ませられ、悪しく思召すにつき、ともに憎ませられ、すでに庶子総領を継がせられべきていになり申すところに大権現様、駿河にて聞しめしつけられ、二親ともに憎み、悪しきように思し召し候わば、君（家光）を駿河へ呼び御申し候て、権現さま御子に遊ばされ、三代将軍にこれあるべきと、上意御座候。ようやく駿河へ御上り候わんか、といろいろ催し申すうちに、権現さま御遷化あり。されど、上意のひびき、江戸へ聞しめされ、台徳院様も、崇源院様も、右のおん心に変らせられ、君のおん事悪しきように遊ばされず候。その上に、権現さま御遺言として、公方さま、中ほどのお人事に御座候わば（秀忠が逝った場合は）天下を（家光へ）遣わされ候えと、かたく土井大炊頭に仰せおかれ候おん事、これ第一の御高恩、朝夕きもに染みさせられ、御身にあまり、忘れがたく、ありがたく思召し候。

かくて――。

竹千代は、三代将軍家光となり、国松は、権大納言亜相となって、駿・遠・甲三ヵ国五十五万石の大名になって、今日にいたっているのだが……。

土井利勝と春日局の脳中には、いつとなく、

――徳川家のためには、いまここで、三代将軍の権威を、絶対のものにしておかなければならぬ。

という冷厳なる意志がかためられていたのである。

——徳川家のために！

その意志のもとに、すでに、家康は、長男岡崎信康を殺し、松平忠輝を追放し、その孫越前少将忠直を処分しているではないか。

家康亡きいま——。

その両親が、ひとたびは、三代に、と思いきめた慧敏の子を、そのままに生かしておくことは、危険であった。

忠長が、決して、天下を兄と争わんとする程の野望を抱いているとは思えない。しかし、幼少から、その兄と、ほとんどすべての点において同格であり、内実は、兄以上の厚遇を受けた忠長は、いまになっても、将軍家となった兄に対して、従前の態度をすこしもあらためてはいないのであった。

駿・遠・甲三カ国は、もともと徳川頼宣の領国であったのを、秀忠が強制的に頼宣を紀州に移して、これを忠長に与えたにも拘らず、

「弟たる自分ならば、五畿内を領して、大阪城を居城にするのが当然であろう」

と、言いはった、ときこえていた。

天下に、浪人者は、あふれている。

大阪役後、この年までに、諸大名の改易せられたものを、ちょっとかぞえても——。

松平忠輝の四十五万石。

福島正則の四十九万八千石。

田中忠政の三十二万五千石。

最上義俊の五十七万石。

本多上野介の十五万五千石。

松平忠直の六十七万石。

蒲生忠郷の六十万石。

これら取潰された家々の浪人の群が、なお、戦国時代の夢を見ていることは、疑いを入れぬ。

——いまひとたび、戦乱が起れば！

この期待を抱いている武者たちの、刃は、いまだ、すこしもさびてはいない。

忠長の存在が、これらおびただしい浪人の群にとって、魅力あるものに映っていることは、土井利勝と春日局の疑心暗鬼ではないはずであった。

「亜相は、どのような御乱行を遊ばされて居りましょうぞ！」

春日局は、無表情で、たずねた。

「譜代の者たちと、新たに召抱えた輩とを、真剣で試合させたり、隠密詮議の布告を出したり、家司の鳥居淡路守へ江戸へもどれとどなりつけたり——目つき、口ききが、だんだん、狂うたものに、家臣の目に映り出したと申すわい」

「御幼少の頃にもう、狂気のきざしはございましたな」

春日局は、冷たい遠い目を、宙に置いた。

忠長が十二歳の頃のことであった。

鉄砲を習って、非常な上達をみせ、某日、西の丸の濠に鴨があつまってくるときくや、すぐにとび出して行って、橋上から撃ちはなって、二羽をたおした。侍臣にひろいあげさせて、母の許へ携げて行って、献じた。御台所は、大変よろこんで、これを羹にして将軍家の夕食の膳に供した。

秀忠は、国松が撃ち落した鴨だ、ときいて大いに満足して、盃をとったが、ふと気づいて、撃った場所を問うた。

その橋が説明されると、秀忠は、眉宇をひそめて、

「それは、いかぬ。本丸にむけて発砲したことになるぞ。無心の振舞いとして、見のがされぬ」

と、言った。

結局、供をした侍臣三名が、切腹して、責を負うたが、忠長自身は、

「城というものは、矢玉をあびるためにつくられたものではないか」

と、平然としていた、という。

春日局が、幼少から狂気の徴候があった、と言ったのは、そのことを指していた。

「まあ、まず——ゆるゆるとな」

利勝は、とぼけた口調で言った。

「ところで——」

春日局は、ふと思い出したふうに、言った。

「駒場野で、柳生道場の者が四名、何者かに斬られたと申します」

「ほう——」

利勝は、じっと見かえして、

「近く、鶉狩りをされるときいて居ったが、物騒にあいなったものだな」

駒場野は、近年にいたって、将軍家狩猟場に指定され、春の雉狩りと秋の鶉狩りが、行事となっていた。

尤も、ここ二年あまりのあいだは、世相不穏ということで、一度も、とり行われてはいなかったが——。

このたびの鶉狩りは、家光のゆるしを受けて、春日局が、大奥の女中たちを大挙ひきつれて催す予定であった。

その警衛方を命じられた柳生道場の若ざむらいたちが、準備のためにおもむいて、斬り伏せられた、という。

「このたびは、ひかえられては、どうであろうな」

利勝が、忠告すると、春日局は、微笑して、

「女中たちは、愉しみにいたして居ります。行いましょう」

「左様か。曲者の詮議は、但馬守もやるであろうが、わしの方でも、ひとつ考えてみるといたそう」

「但馬殿は、もう、間もなく、ここへ見えることになって居ります」

「ふむふむ——。柳生道場の者たちは、役立つだけに、狙われる危険も多い。但馬守も、要心せねばなるまい」

ひとりごとのように言って、利勝は、
「どりゃ、おいとまいたそう」
と、腰をあげた。
さしたる重要な会談でもないようにみせて、両者は、肝心の事柄はお互いに知らしめておいた。
利勝がもらした駿河大納言忠長の行状は、ただちに、春日局の口から、家光につたえられるであろうし、その処断については、もうすこし時期を待つことになるであろう。また、春日局のつたえた駒場野事件については、利勝の方でも、下手人が、春日局を敵とする側から出たものかどうか、調べることになろう。
それから、また——。
利勝が諸大名にむかって放つ隠密は、柳生道場の腕の冴えた士がえらばれていることも、この会話で判るのであった。
但馬守は、ただに、将軍家の剣道師範の任についているだけではなく、政治上の懐刀として、陰にまわって、諸国の動きをさぐる困難な仕事もひきうけているのであった。
柳生但馬守宗矩(むねのり)は、春日局に会うべく、広敷縁を、ゆくりとした足どりで、奥へ歩み入りながら、昨日の道場でのことを、思いうかべていた。
ひさしぶりに、高弟の一人へ、稽古をつけるつもりで、木太刀をとって構えた瞬間、ふっと、かるいめまいをおぼえたものであった。

曽てないことだった。
——われも老いた！
その場では、対手および周囲のものに気どられまいと、それのみに神経をくばったが、居室に入って、感慨が胸に来て、急に、五体から力がぬけ落ちたのであった。
父石舟斎宗厳(むねよし)のことが想われた。
石舟斎は、慶長十一年に八十歳で没したのであったが、古稀を迎えて、なお、宗矩と立合って、その剣に、壮烈な気魄をみなぎらせていた。
慶長五年、七十なかばになりながら、柳生家を裏切ったもとの家隷の松田なにがしを捕えるや、自ら差料を抜いて、一閃、水もたまらぬ鮮かな手練で、その首を刎ねてみせた石舟斎であった。
平常は、むしろ平々凡々たる白髯の好々爺で、柳生荘の下僕たちをあいてに、むだ話をするのを唯一の愉しみにしているような、すでに、剣をとることも絶えてなく、書物もすててかえり見ない晩年だったのである。
にも拘らず、ひとたび、心身をひき緊(し)めれば、森厳(しんげん)の剣気は、見まもる者のきもを刺したのである。
松田なにがしの首を刎ねたのも、二十年前の憤怒を、決して減じてはいなかった証拠である。
柳生は、大和の一小区であった。だから、時の興廃運気を見て、利のあるところにしたがって、家邑をたもつ要心をしなければならなかった。
宗厳が、このために費した心労は、大変なものだった。

天正七年、織田信長が、将軍足利義昭を擁して、破竹の勢いをもって上洛したみぎりも、はやくも意を通じて、その麾下に加わったし、京に召されて大和戡定（かんてい）の案内者を命じられるや、筒井順慶にしたがって、大いに働いたのであった。

当然、その功労に、多くの恩賞があるものと期していたところ、与えられたのは、柳生領の没収、退隠であった。

家臣の松田なにがしが、柳生には隠し田があって、上を詐り、私欲をほしいままにしている、と筒井順慶へ密訴したためであった。

その咎めを受けた時の父の憤怒の状を、宗矩は、いまでも忘れない。

あとにもさきにも、父があんなに凄じい激情を面容にあふらせたのを見たのはその時だけであった。

その非運を機会に、宗厳（むねよし）は、蟄居して、石舟斎と号し、剃髪してしまったのであったが、以後、その寒素なくらしぶりは、死ぬまでかえることをしなかった。

いま——。

六十の坂を越えて、あらためて但馬守は、父がいかに傑れた兵法者であったか、しみじみと敬慕せずにはいられなかった。

剣禅一如——。

これが、但馬守が、父より継いだ心法であった。

斯道に研鑽（さん）をかさねて、精妙の域に達し、さらに向上の一関を打開せんとするにあたって、心

を埒外にはなって、まことの剣の奥義を悟る——これが、剣禅一如の論となって、公にされたのである。

すなわち——。

但馬守剣法極意「兵法家伝書」の第一義「無刀之巻」が、これをしめす。

父より継いだ心法を、沢庵和尚と知りあうことによって、ますます、正しいものと信じ、これを兵法者の窮極の剣境と説いて、はばからなかった但馬守である。

いまは、これに対する反省もあった。

——はたして、剣は禅と一如となり得るものか？

すでに、世間に滔々たる剣禅一如の論がひろがり、はびこっている時、これを最初に説いた但馬守自身が、疑惑を抱いているのである。

それというのも——。

但馬守は、将軍家師範となって以後の、次第に立身しつつなしたおのが行いを顧て、ひそかに、慙（は）じないではいられなかったからである。

兵法者として、なすべからざる行いを、すすんでなして来た悔いであった。

但馬守は、自らも、わが子らも、そして高弟たちを将軍家を守る名分のもとに、隠密という陰惨な任務に置いて、この二十余年間をすごして来た。

剣禅一如の論は、わが一門が隠密たることを世間に気どらせないために、殊さらにつよく主張したのではなかったか。

そうでない、と断乎として否定しさるには、あまりにも、但馬守は、おのが一門の働きによっ

て、多くの大名を抹殺したのである。

――父が生きて居れば、なんと言うであろう？

時おりに、ふと、それを思って、肌寒ささえおぼえた。

思いがけなくも、立合いの剣をかまえて、めまいに襲われた但馬守が、急に、暗然たる自己嫌悪をおぼえたのも、これはあまりにも当然といえた。

白書院で待ちうけていた春日局は、よもや、但馬守が、そんな気弱い自己不信に陥入っていようとは、夢にも気づかず、味方に見せるきびしい表情で、迎えた。

「但馬殿。貴方とも、もう長いつきあいに相成りまする」

なにげない口調で、しかし、ふかい意味をこめて、春日局は、そう言った。

「左様――、もう二十五年にも相成り申そうか。お手前様は、大層お美しゅう在られた」

但馬守は、その言葉に似つかぬ沈んだ面持で、畳の一点へ、目を落した。

春日局は、じっと見まもりながら、

「貴方も、あの頃は、前にお坐りになっただけで、剣気と申そうか、兵法だましいと申そうか――それが、おそろしいまでにこちらに感じられました。それだけに、わたくしの方からも、口にし難い無理なおたのみも、かえって、ずけずけと申出ることができました」

「いまは、あまりに老いぼれて見える、と申されますか？」

「いえ――。枯れた風格が、大きすぎて、そのお胸のうちが、くみとりにくうなったと申すのです。女は老いるにしたがって、気持がかくしきれなくなりますが、男の方は、反対に、心を窺わせぬみごとな態度をおつくりになる」

かなり皮肉をこめた言いかたであったが、但馬守はむしろ、ほっとした。

こちらの掩いがたい意気萎えた状を、対手は、逆のものに受けとってくれたのである。

さいわいであった。

但馬守は、笑って、

「御用があれば、なんなりとお申しつけ下されい。それにおこたえいたすのが、異心なき証拠でござろう」

と、言った。

「駒場野で、門弟衆が斬られた、とききおよびましたが……」

「もうお耳に入りましたか。申しわけなき仕儀。曲者はいまだ不明でござる」

「鶉狩りは、予定通り催しまする」

「それは……」

「警備の儀は、さらに厳重につかまつろう」

但馬守は、春日局のきついまなざしを受けとめて、

「いいえ――」

老獪な賢女は、かぶりをふった。

「あれは、わたくしを憎む者の挑戦ではありますまいか。もし、そうとすれば、鶉狩り当日は、必ず、わたくしの生命を狙って、出現いたしましょうぞ。むしろ、警備を手薄にして、近寄せては如何であろう？　鶉を狩るよりも、曲者を狩る方が、わたくしには、面白う思われまする。…

…但馬殿が、まちがいなく生捕って下さるならば、じゃ」

但馬守（たじまのかみ）は、大きくうなずいた。

「承知つかまつった」

しかし、この事件については、春日局（かすがのつぼね）の想像が、全く的はずれであることを但馬守は知っていた。

斬られたのは、いずれも、小野道場からやって来た者たちであった。

但馬守は、報告を受けた瞬間、

——そうか。いよいよ、両門の確執は、血を噴くことになったか。

と、思ったのである。

世間に、「御流儀」と称されているのは、いまや、柳生流だけであり、小野一刀流は、いつとなく、将軍家師範役ではなくなった印象を与えていた。

しかし、小野一刀流もまた「御流儀」であることは、厳たる事実であった。

どうして、このような差異がついてしまったのか——識者の間には、その理由として、但馬守と小野次郎右衛門忠明の人格の相違が、挙げられていた。

たしかに、忠明は、天才的兵法者にありがちな、晩年にいたっても、狷介不羈（けんかいふき）の行動をいささかもあらためることをしなかった。

剣をとっては、但馬守よりも忠明の方が、一段上に位するとは、当時の兵法者たちがみとめるところであった。

「明良洪範」にも——。

一日、将軍家で、両者の技倆を試みようとして、侍臣に命じて、廊下に待ち伏せさせておいて、急に二人を召出して、その通過するところを、木刀をもって暗撃せしめた条が出ている。

但馬守は、横あいから撃って来たのを、扇子を以って受け、

「御苦労——」

と、静かに声をかけておいて、行き過ぎたという。

忠明の方は、侍臣が忍ぶ箇所より一間のてまえで、ぴたりと立ちどまり、

「たわけた試みを！」

と、冷たく吐きすてるや、さっと踵（きびす）をまわして、ひきかえしてしまった、という。

殿中の評は、業（わざ）においては、事前に察知した忠明の方が秀れているが、将軍家に目通りせずに退ったのは不遜であり、但馬守の方が、はるかに人格ができている、と結論したものであった。

俸禄および地位において、はじめから、柳生家と小野家は、大きなへだたりがあり——そのことに、忠明が烈しい不満を抱いている、と衆目は見ていたのである。

いずれにせよ——。

忠明が逝った現在、小野道場はますます、かげ薄いものになっていた。

その小野道場を見すてて、柳生道場へ移って来た者たちが、斬られたのである。但馬守の予感は、当然であった。

しばしの沈黙があってから、春日局（かすがのつぼね）は、何気なさそうな口ぶりで、

「駿府へつかわされた門弟衆は、いずれも、秀れた腕ききとは存じますが、亜相には、隠密詮議の布告を出されたと申します……」

と、言い出した。

この瞬間、但馬守は、この福々しい老女に対して、微かな嫌悪を感じた。

「近時、ささいな事柄にも、神経をたてられるとききおよび申した」

「徳川家には、そういう血が流れて居りまする」

臣下としてもらすべからざることを、局は、平気で、口にした。

たしかに、徳川氏の血統には、狂的な要素が混っているのではないか、と疑いたくなる事実がかぞえられるのであった。

まず、第一に家康の長子信康が、そうであった。

その母築山殿が、良人家康を怨んで、復讐を謀って、信康をそそのかしたためでもあるが、信康は、その妻である織田信長の女(むすめ)徳姫をすてて顧ずに、漁色にふけった挙句、徳姫に奉仕する小侍従なる女房を、間者であろうと猜疑して、

「なんじは、われら夫婦の仲をさまたげる曲者だ！」

と、どなりつけざま、髪をつかんで、ずるずるとひきずって行き、その面前で、脇差を抜きはなってのどを刺しつらぬき、顔をふみにじったものだった。

そのほか——。

信康は、庭苑で宴をはった時、京よりまねいていた踊子が、自分を武辺者とあなどる踊りぶりをみせたと激昂して、これを弓で射殺している。また、鷹野に出て、帰途法師に出会うや、今日

の獲物のすくないのは、この坊主めに逢うたせいだ、とうそぶいて、その僧のくびに縄をかけ、力革にむすびつけると、馬を疾駆させて、挽き殺している。

徳姫は、築山殿の指嗾によって信康が、武田勝頼に款を通じているのをさとって、父信長にこれを報せた書翰中に、こうした行状をくわしく述べている。

家康が、最も愛したこの長男を殺さざるを得なかったのも、やむを得ざる仕儀であった。信康は、切腹した時、わずか行年二十一歳であった。

結城秀康も、常軌を逸した行動が多かった。秀康の子忠直も、武芸自慢のあまり、忠義の家臣と立合って、わざと自分に勝をゆずったのであろうと、憤怒して手討ちにしたのをきっかけに、乱行の限りをつくしている。家康の第六男上総介(かずさのすけ)忠輝も、非常識な振舞いが多く、ついに、自らまねいて身をほろぼしている。

現将軍三代家光の行動のはしばしにも、その狂的な血が流れていると、おそれたくなる気配が見受けられるのである。

但馬守は、あまりに露骨にそれを指摘した春日局に対して、こたえる言葉がなかった。

「もし、門弟衆のうち、捕えられるようなことがありましても、心配はありませぬか？」

「口を割るような修業はいたさせて居り申さんが……」

そうこたえて、但馬守は、春日局の視線から、目をはずした。

この老女に対しては、ずうっと以前から嫌悪の情を催すようになっていたような気がした。

「但馬殿が、そう明言なさるなら、心配はいたしませぬ。……ご子息たちのお働きも、期待いた

して居りまする」
　とってくっつけたような言いかたが、ますます、但馬守に、不快の念を与えた。
　長男十兵衛三厳（みつよし）も、次子宗冬も、三男俊矩（としのり）も、それぞれ、武者修業の名のもとに、旅に出しているのであった。
　実は、十兵衛は九州に在って、島津家の動静を探っており、宗冬は四国に、俊矩は奥州に、それぞれ隠密の任務をもって行っているのであった。
「拙者も、ようやく老い申した。上様に稽古をおつけするのが、少々骨が折れ申す。ご上達遊ばされた故でもあろうが……」
　但馬守は、おだやかに笑ってみせてから、一礼すると、座を立った。
　誰にも打明けたことはなかったが、但馬守は、家光に剣をとる才能が皆無であることを知っていた。
　粗暴なばかりであって、術技すらおぼえようとしなかった。適当にあしらうよりほかはなかった。
　小野忠明の方は、そうしなかった。将軍家として、剣術をまなびたもう上からは、何条憚ることがあろう、と公言して、遠慮なく、家光を打ちすえたものだった。そのために、家光は、忠明に声をかけなくなってしまったのである。
　――忠明の方が、兵法者として、節を枉（ま）げず、立派であったのだ。
　但馬守は、ひそかに、それをみとめていた。
　ただ、但馬守には、別の考えがあった。

　――将軍家が、剣の達人になったとて、何になろう。家康公は、つねづね、大将の剣法と士卒の剣法ということを申されていた。大将の剣法は、その身を護るに足るだけの胆力と智略をまなぶことであり、士卒の剣法のごとく敵を殺傷する目的を持たぬ、と申されていた。……将軍家を、師範が打ちすえる必要はない。

剣相

　雲ひとつなく澄みわたった秋空の下に、江戸の市街は、目路のとどくかぎり、屋根の波をひろげていた。
　慶長、元和を経て、徳川氏の天下たる基礎ようやくかたまるにつれて、市街の活況は、ますます増大していた。
　江戸城はすでに、慶長九年夏の第一次大修築から、この年の第四次修築にいたって、ほぼ、その構想を実現させていた。
　周囲七十余町の外濠は、まんまんたる水をたたえていたし、これに洗われる巨岩の石垣は、その上につらなる松のみどりと相映えて、すでに悠久の偉観をしめしていた。
　本丸五重の天守が、森のかなたに、美しく、旭日に、甍（いらか）と白堊をかがやかせている。
　幸橋、虎の門、赤坂喰違い、四谷、牛込、小石川、筋違（か）い、浅草橋の見付も、立派に完成していた。名も目出度く舞鶴城と呼ばれる総面積三十万歩の大城郭を中心にして、宏壮なる大名屋敷

を楔に、八方へのびつづけているのであった。
山手の大半は、武家の邸宅に占められていて、ものしずかであったが、下町に下れば、商いの繁昌ぶりは、田舎者の目をくらます活気を呈していた。
本町通り室町筋には——。
唐綾の錦いろさまざまの織物を積む見世棚が、ずらっと軒をならべていて、江戸の眼目として、町並もひときわ整然としていた。
具足町には——。
小桜縅、卯花縅。紅葉をまごう緋縅、ぬば玉の黒糸縅など、ありとあらゆる鎧をならべて、百花らんまんのあでやかさを誇っていた。
通り町には——。
和漢古今の板本、唐物、紙、巻絵、指物、薬種、檜物などの店が、櫛比していた。
町家ながら、富豪の住居が集って、二階三階の高楼が黒ぬりの串窓などをあしらって、人目を惹きつけていた。
大伝馬町、佐久間町には——。
日本橋を渡れば、騒然たる魚市場であった。相州沖の初がつお、房総の浜九十九里で獲た桜鯛も、はつらつとして鱗をおどらせていた。
中橋には、歌舞伎芝居、操人形などの見世物小屋がならんでいた。堺町は、傾城街として、遊客の足を引き寄せていた。
「松の柱、竹の編み戸、草ぶきの小家——軒のつまに咲きたる夕顔の白き花のみにて、かやり火のふすぶるも憐れなり」
と記された当年の江戸のおもかげは、むかしの夢と消えていた。
この異常なまでに、日々繁昌を盛んにする府城の地へ、神子上源四郎は、三年ぶりに、飄然として、まいもどって来た。

汐香をふくんだ風が、埃をうす白く舞いたたせている大通を、種々雑多な人々が行き過ぎる。
戦国の威風を承けて、革の陣羽織を、その大紋に父祖の高名を誇るがごとくまとっている頬鬚いかめしい武士。戦場を知らずに育ち、高禄の身分にぬくぬくとあたためられているとおぼしい、羽二重の小袖に緞子の上下をつけた若ざむらい。
近頃、流行はじめた異様の風装——猿猴が、水に澄んだ月影をとらえようとしている図を、せなか一杯に描いた地白の衣服を、得意げに見せびらかしている旗本奴。
菖蒲革のたっつけに、鉢巻をしめたのは、武者修行者である。
市女笠をかぶった妻をつれて、きょろきょろと、あたりに目をうばわれている茶筌あたまの武士は、勤番を命じられて、はじめて出府して来た藩士であろう。
大きな荷物をせおって、数人の子供をひきつれた布子姿の男は、このお膝元で何かの商いにありつこうとしている者に相違ない。
雲水が、荷売りが、騎馬の士が、飛脚が、若衆が——ひきもきらずに、行き交う。
この中にまじって、源四郎は、しずかな足どりで、歩いていた。
小野道場にあった頃、いくたびとなく通った往還でありながら、三年間るすにしてみれば、も

う見なれぬ街にかわっていた。

新拓の府のいきおいは、藁や茅や板であった屋根を、半ば瓦に変えていたし、古ぼけた暖簾を、いつの間にか新しいものにとり換えて、店の間口をひろげさせていたし、空地であったところに彫刻をほどこし金銀を飾った三階建ての風呂屋を出現せしめていた。

――あのあたりには、木太刀で受けた生傷にはるために、よく立寄った膏薬屋があったはずだが……。

いまは、京の染物屋の屋号を染めぬいた暖簾が、かけられていた。

――たしか、そこには、煮売の屋台がならんでいたものだが……。

いまは、摂津池田の醸酒をはこび入れた大きな倉が建っていた。

これらでもわかるように、「下りもの」をあきなう大店が、ぞくぞくとひらいていたのである。

「下りもの」とは、京下りの称であった。すなわち、衣服もはきものも酒も菓子も、すべて、優秀な品は、これは京の都から仰いでいたのである。

江戸がつくり出す自慢の品は、まだずうっと、後の時代を待たねばならなかった。

「下りもの」の店を出しさえすれば、繁昌する江戸であった。日々に、街景色がかわるのは、当然であった。

「あいや――待たっしゃい。源四郎と見受けたぞ」

ふいに、途徹もない大声をかけられて、源四郎は、頭をまわした。

檐の傾きかかった、藁葺の家が、そこに在った。これは、源四郎の見おぼえのあるものだった。家康入国以前から、建っていたとおぼしい、おそろしく古ぼけた構えで、周囲がどんなに日進月歩しようとも、かかわり知らぬといった頑固な居すわりをつづけているのであった。

どんな人間が住んでいるのか、源四郎は、曽てついぞ、その顔を見うけたことがなかった。

いま――。

薄暗い土間の中を透して見ると、すすけた大黒柱のわきの框に、猿のように、しなびた小さな男が、うずくまって、底目を光らせて、こちらを見ていた。

声をかけたのは、この男ではなかった。

うしろの炉のむこうに、骨格たくましい老武者が、坐っていたのである。

大久保彦左衛門忠教であった。

「あ――これは！」

源四郎は、なつかしげに、微笑して、土間に入って行った。

天涯の孤児であった源四郎をひろいあげて、その剣の天稟を見ぬいて、小野次郎右衛門にあずけたのが、彦左衛門であった。

「こやつ、横道者めが、このわしにまで無断で、行方をくらまし居って……何処をうろついて居ったぞ？」

大きな地声でどなったが、その目も頬も口もとも、うれしそうだった。

源四郎がひろわれた十余年前から、すこしも風貌も言辞動作も変らない老人であった。そのままの姿で生れて、七十年をすごして来たかとさえ思われる。

源四郎は、鄭重に、無音に過ぎたことを詫びたが、何故に江戸を出奔したか、何処にいたかに

ついては、一言も明さなかった。
　彦左衛門も強いては問い糺さず、ただ、
「兵法修業だけは、忘れなかったであろうな、源四郎？」
　と、たしかめた。
「忘れませぬ」
「それなら、よいわ……。小野の道場へは、もはやもどれまい。もどりたければわしが口をきいてやるが――」
「挨拶には寄る存念ながら、独歩を考えて居ります」
「道場でもひらく所存か？　あらたな流儀を編んだか？」
　気ぜわしく、たたみかけて訊ねた。
「旅が、それがしにはむいているように思われます。また、出たいと存じて居ります」
「それもよかろう。江戸は、だんだん面白うなくなるわい」
　大久保彦左衛門にとって、面白くないのは、江戸だけではなかった。世の中の、目に映るものすべてが、気に食わなかった。
　何もかもが、不平不満だった。
　その一徹強情の性格が生む奇行は、あまりにも有名だった。これは、平常の不平不満があらわれたものだった。
　数年前のことである。

　土井利勝が、彦左衛門を招いて饗応した。四方山の話のすえ、庭に栗毛の太くたくましい駿足を曳かせて、
「この馬は、大阪再度の御陣に働いたが、いまも変らず、奉公いたしてくれる。秘蔵第一である」
　と、言った。
　すると、彦左衛門は、にやりとして、
「貴台が、あの折、真田の手勢に追われて、乗り逃げたのは、こやつでござったか。さてこそ、脚の速そうな駒でござる」
　と、こたえて、ずかずかと庭さきへ立って行って、馬のくびをたたき、
「さても、なんじは主思いの忠義者よのう。よくぞ、主人を乗せて逃げた。毎年、その日が参ったら、利勝殿から、手ずから、秣をくらわしてもらえ」
　と、言いきかせてやった、という。
　家康や秀忠の面前でも、この老人は、すこしも遠慮を知らなかった。機嫌のいい時は、勝ちいくさについて語ったが、機嫌がわるいときは、味方の敗れた惨めさばかりを大声で回顧して、いやがらせた。
　つむじ曲りは、もとより天性に拠るところだが、ひとつには、時代相によって、自らをそうさせてしまったといえる。
　老人は、永禄三年に生れている。天正三年、十六歳で、家康に召し出され、翌四年、遠江乾の戦に従って、敵将の首級を挙げたのを手はじめに、九年には、高天神の城攻めに城将岡部丹波守

長教（ながのり）と槍を合わせ、十一年には、信濃の小諸、十三年には同じく相木、上田などに転戦して、武功があった。そして、さいごの武勲は、元和元年の大阪夏の陣に槍奉行として、先陣をきった時である。

その時――大阪落城の年の五十六歳を界として、彦左衛門の生涯は、得意と失意に岐（わか）れてしまう。

戦雲うずまく時勢から、風も枝を鳴らさぬ江戸泰平の時世まで生きながらえたのが、不幸であった。

かずかずの武勲に対して酬いられるところ、あまりに薄かった。

彦左衛門は、大阪役後、その甥である大久保相模守の所領のうち、二千石を知行したにすぎなかった。幕府から、じかに与えられたのではなく、相模守の任意のかたちで、いわば、陪臣のあつかいだったのである。のち、相模守が改易になると、彦左衛門に与えられたのは、三河額田郡のうちの千石のみであった。

治世が泰平となれば、武勲派は、ようやく遠ざけられ、公儀に長けた文飾の徒が、登用優遇される。

鎗刀は、袋に入れられ、書籍がはばをきかせる。

武骨と大声叱呼よりほかに能のない旗本は、昼行灯と化さざるを得ない。

大久保彦左衛門たる者、ますます強情我慢になって、人にひんしゅくされる皮肉、揚足とりに、わずかに欝を癒やすよりほかはなくなったのである。

源四郎は、微笑して、あいかわらずの老人を見まもっていたが、

「あらためて、お屋敷の方へおたずねいたします」

と言いおいて、一礼すると、出て行こうとした。

すると、大黒柱の蔭で、しなびた小男が、もぞ、とうごいて、

「失礼ながら、お手前の差料を拝見させて頂けまいか」

と、言いかけた。

しゃがれた、陰気な声音であった。

源四郎は、はじめて、小男を正視した。年齢も読みとれぬ奇妙な容貌であった。醜くはないが、陰惨な印象を、ずうっと後までもこちらの目にのこすに相違なかった。はれまぶたが重くたれかかった細目の光が、異様に鋭かった。

「大事はないぞ、源四郎。見せてやれ。兵法者の腰のものを見たがるのが、この親爺の唯一の趣味じゃて」

彦左衛門は、そう言ってから、小男には、

「空斎（くうさい）、この若者は、剣をとっては、天下に比肩をゆるさぬ麒麟児だぞ。師の小野次郎右衛門も、晩年は、およばなかったわい。……しかと、差料の命運を見とどけてやれ」

と、言った。

空斎と呼ばれた小男は、源四郎にむかって、両手をさしのべた。

やむなく、源四郎は、大刀を鞘ごと抜いて、渡した。

無銘の業物で、師からもらった品であった。師は、家康から拝領したということであったが、

何某作であろう、とは教えてくれていなかった。
空斎は、懐紙を口にくわえると、ぎらりと抜きはなって、切っ先を天に立てた。
その眼光が、さらに、凄じい色をくわえるのを見てとって、源四郎は、微かな悪寒さえおぼえた。
それなり、空斎は、彫像と化したごとく、微動もしなくなった。
上作か、下作か——という目利（めきき）をしているのではなかった。
目利には、そのしかたがある。いくども、うちかえして調べねばならぬ。空斎は、それをせず、ただ、食い入るように、凝視しているだけであった。
無銘ながら、それは、誇るに足りる白刃であった。
刀身は、反（そり）すくなく、三尺をこえていた。
地鉄の色が青く澄み、刃は水晶のように白く冴え、丁字みだれ刃文が美しい。鋩子（ぼうし）は締り、匂いは深い。刃堺が麗わしく、砂流しがあった。
「む——」
空斎が、ひくく呻いた。
そして、目にとまらぬくらいの迅い手さばきで、ぴたっと、鞘におさめた。
「何者の作じゃな？」
彦左衛門が、首をつき出して訊ねた。
「村正でござる」

空斎は、なんのためらいもない口調で断定した。
「村正じゃと。……源四郎、それは、次郎右衛門からもろうたのではないか？」
「左様です。……たしか、東照公（家康）が駿府へおひきこもりの際、別離の記念として、拝領された、とうかがいました」
「ほう、村正をのう、次郎右衛門が拝領したか」
彦左衛門は、急に、怪訝（けげん）そうな面持になった。
村正の剣は、徳川家にとっては、忌むべき品になっていた。
——村正は徳川家にたたる。
この流説は、寛永のこの時代には、常識となっていて、村正を所持する大名旗本は、これを厳秘にしていた。
それというのも——。
家康の祖父清康は、天文二年十二月、その臣安倍正豊に殺されたが、その時の正豊の差料が村正であった。
また、家康の父広忠は、天文十五年三月、その臣岩松八弥のために、村正の槍で、股を刺されている。
家康自身も、陣中で、村正の槍で負傷している。
このような偶然が重なったために、家康は、ひどく村正をきらうようになっていた。
ある時、秀忠が、小刀で指先を怪我したのを見て、家康は、笑って、
「徳川家の血を見るからには、それも村正の作ではないか」

と、冗談を言った。

侍臣が、あとで、しらべてみると、疑いもなく村正であった。

これによって、村正の剣は、徳川家に祟るものと決定づけられ、これを差す者は、幕府に対して謀反心があるようにさえ思われるようになっていた。

かかる妖邪の剣を、将軍家師範たる小野次郎右衛門に、なぜ、家康は、くれたか？　村正と知らずに、くれたのなら、問題はないが知っていて、くれたのなら、家康の肚裡には、何かの考えがあったに相違ない。

彦左衛門が、怪しんだのは、そのことであった。

「空斎、しかと、村正に相違ないな？」

彦左衛門は、念を押した。

「わしの目利を疑われるのか」

空斎は、じろっと彦左衛門の方をにらんでおいて、源四郎に視線をもどすと、

「近頃、人を斬られたの」

と、言いあてた。

源四郎は、うなずいた。

彦左衛門が、大きく目を見はって、

「ほう、真剣試合をいたしたか？　対手は何者じゃ？」

と、訊ねた。

「柳生道場の者たちでした」

源四郎は、かくさなかった。

「やりおったか、うむ？　お前が、挑んだか？」

「挑んだわけではありませぬが……やむを得ぬ仕儀でした」

源四郎は、いきさつを説明した。

彦左衛門は、ふむ、ふむとあいづちをうちながら、きき終ると、

「小野道場を見すてて、柳生へ走った卑劣千万の者どもが、数人ならず、ときいて居ったが、天罰を受け居った。小気味よいわい。……源四郎、かまわぬぞ、のこりの奴めらも、一人のこらず、屠ってやれ。剣は利しといえども、研がざれば断たず、じゃ。その村正で、首垂れ尾振りの糞犬どもを、片っぱしから、斬りすててしまえ。庚申塚の三猿をきめこんで、ひたすらおのが身の安からんことに汲々といたして居る腰抜け大名旗本どもの耳目をおどろかせてくれようず！」

往還の人々が、びっくりして、のぞき込むほどの高声で、彦左衛門は、言いはなった。

源四郎は、しずかに、空斎を見て、

「村正ならば、剣相は、いかがであろう？」

と、問うた。

空斎は、びくっと、片眉を痙攣させた。

「鋩子のかえりの深いのはみごとな出来じゃが、乱れが火焰に似て、これは大凶。切っ先より三寸下ったところ、鎬と刃文の間の澄み肌の中に黒星がある。これは横死の疵。刃関より一寸あがったところ、三つの月が浮く。これまた最大の凶。万事をなすに災起り、禄を失い、家族を剋

し、水火の難を免れず、ついに生命を喪う。この三月がある刀は佩びるべからず、とされて居る」

空斎は、自らの観相眼を誇るがごとく、そう言った。

人に人相があるように、剣には剣相があり、天象疵をはじめ草木生物のかたちをした模様によって、吉凶を観ることは、この時代には、かたく信じられていた。

「空斎。ひどうおどかすではないか」

彦左衛門が、あきれて言いかけると、空斎は、ぼそりとこたえた。

「事実でござる。佩びれば、必ずほろぶ」

「源四郎、不吉、不吉。その村正は、この親爺にくれてやれ」

彦左衛門は、大きくかぶりをふって言った。

「いや、そうとうかがえば、それがしは、この刀を生涯の差料にいたそうと思いきめました」

源四郎は、べつに語気をつよめるでもなく、おだやかにこたえた。

「なぜじゃな？　おのれの運勢をためそうとか？」

「兵法者は、剣に生き、剣に死にます。かりに、おのが剣の相に負けて、非運に遭うも、兵法者として、悔いはございますまい」

「ぬかしたの。源四郎、貴様、おのれの腕前をたのんで、剣相ごときをおそれぬと、おごって居るとみえるの」

源四郎は、微笑して、こたえなかった。

空斎が、ひくく呟いた。

「貴者は勢いを負みて人に驕り、才士は能を負みて行いを忘る。危いかな、危いかな」

しかし、源四郎は、きかぬふりをした。

その時であった。

往還に、せわしい馬蹄の音がひびき、あわてて身を避ける通行人の悲鳴があがった。

ちょうど、この店の前を通りかかった老爺が、仰天して、逃げようとしたが間に合わず、もの凄い勢いで疾駆して来た騎馬の前に、あっと四ツ匍いになった。

乗っているのは、目のさめるような乱菊模様の蝙蝠羽織の振袖をひるがえした若衆であった。

「たわけっ！」

逃げおくれた老爺へむかって、するどい驕慢の叱咤をくれたが、その高声は女性のものだった。

炉端から、彦左衛門が、思わず、腰を浮かせて、

「おっ——姫っ！」

と、叫んだ。

騎馬は、そのまま、砂煙りをあげて、駆けすぎた。

つかつかと往還へ出た源四郎は、倒れ伏した老爺をかかえ起して、土間へはこび入れた。

「蹄にかけられて居るか？」

彦左衛門が、首をのばした。

「息絶えて居ります」

源四郎は、こたえた。
彦左衛門は、眉間へ深い皺を立てて、ひくく、うなった。
のっそりと、土間へ降りた空斎が、蹈みかかって、枯木のような両手を、胸で組ませてやりながら、
「この上もない好人物であったが……、六兵衛、成仏せい」
と、ひくく念仏を誦した。

「悍馬が悍馬に乗り居って——、男まさりも程度によるわい！」
彦左衛門が、いまいましげに吐き出した。
「いずれの姫君です？」
源四郎が、訊ねた。
「お上（家光）の御妹君じゃ」
この言葉には、空斎も、おどろいて、彦左衛門をふりかえったくらいであった。
「あれが——」
と、源四郎は、うなずいた。
噂は高かった。
家光の腹ちがいの妹広(こう)姫といえば、女子の遊芸をことごとくきらい、武芸を好んで、十歳の頃より柳生但馬守の教えを受け、上達めざましく、十九歳になる現在、すでに、小太刀の奥儀を伝授されている、ときこえていた。

父秀忠が、あまりの一心不乱ぶりをたしなめたところ、広姫は、きっとなって、威儀をただし、
「男子に武士道があって、女子に武士道がない、とはおぼえませぬ。神代記には、天照大御神が、そびらに千箭(ちのり)の靫(ゆき)をせおい、弓(い)はずふりたて、剣柄をとりしぼり、稜威(みいず)の男たけびして、踏み建びてつまりたまえり、と記されて居ります。神代にあっては、黄泉(よみじ)女軍が編成され、くだって景行天皇の御世、西征のみぎりにも、いくたの女酋長が加わっているではありませぬか。蝦夷征討の上毛野形名(かみつけぬのかたな)の妻は、かいがいしく、自らの良人の剣を佩き、十弓をはり、輩下の女軍をして弦を鳴らさしめて居ります。巴御前、板額のことは、申上げるまでもございませぬ。……当代にいたって、女子は、弱いもの、男子の蔭にかくれるもの、と勝手にきめて、薙刀のみを、真似事に習わせるなど、まことに笑止の沙汰と申さなければなりませぬ。……近く、天正の頃、越後の長尾為景の妾松江は、為景が越中に討死する際、わずか二十歳の身で、緋縅のよろいに、半月うった冑の緒をしめ、片鎌の槍をひっさげて、戦場を馳駆しているのをご存じありませぬか。わたくしも、ひとたび、いくさが起れば、太刀をおび、槍をかざして、駒をすすめ、徳川家の楯とならん所存で居るものを——その修業に精魂をかたむけるわが子を、将軍としておとがめあるとは、まことに、なげかわしゅう存じまする」
と、きめつけた、という。
男装をして、悍馬を責めることなど、なんのためらいもなく行う姫なのであった。
「源四郎——！」
彦左衛門が、急に、にやっとして、呼んだ。

「どうじゃ、悍馬め、駆けもどって参るであろうから、待ちうけて、こらしめてやらぬか？」

源四郎は、すぐには、なんともこたえなかった。

ふたたび——。

遠く、馬蹄の音が、つたわって来た。

彦左衛門が、どなった。

「源四郎、やれい！」

「児戯にひとしい、無益のわざと存じますが——」

源四郎は、しずかな声音で、こたえながらも、框（かまち）から、腰をあげた。

騎馬が、この家の前に達するのと、源四郎が、戸口を出るのが、同時だった。

とみたせつな——。

源四郎の五体が、疾風を起して、騎馬の走路を、横切った。

それは、黒い鳥影が、路上をかすめるに似ていた。

瞬間——なんとも、名状しがたい異常ないななきを虚空にほとばしらせて、悍馬は、高く棹立った。

その両脚は、二本とも、すでに無かった。

ふたつの切口から、噴く鮮血が、虹となって、散った。

どおっ、と地ひびきをたてて横倒しになった時、乗手は、あざやかな身ごなしですっくと、大地に立った。

「痴（し）れ者っ！」

朱をそそいだ憤怒の白面は、凄いばかりの美しさであった。

小太刀を抜きはなつや、陽にさらされた馬腹をおどり越えて、源四郎に、肉薄した。

「ふむっ！　面白くなって来たぞ！」

家の中から、彦左衛門は、らんらんと目を光らせた。

空斎の方は、大黒柱の蔭に、依然たる猫背のうずくまりかたをしていたが、

「剣相の大凶が、いよいよ、きざしを見せおる」

と、冷たく吐きすてた。

一間まで、距離をつめた広姫（こう）は、ふっと、けげんの色を、美しい眉根にうかべた。

源四郎が、両手を空けて、ダラリと垂れていたからである。刀が、鞘走ったのを、広姫も、見てとってはいなかった。

走り抜けつつ、抜討ちに、馬脚二本を両断しておいて立ちどまった時には、もう腰に納めた——そのあまりの迅業（はやわざ）を、嘘ではないかと、広姫が、一瞬うたがったのも、むりではなかった。

魔力をそなえた神技というべきであった。

「なんじのしわざであろう」

と、広姫がさけんだのは、源四郎に微笑させることとなった。

「左様です」

「意趣ばらしか、おのれ！　豊臣の残党か？」

じりじりと間合をつめて来る小太刀の切尖（きっさき）を、源四郎は、

——これは、できる！

と、見た。

野駆けをおわっての戻りとおぼしい立派ないでたちの数十騎が、半町ばかりかなたの辻にあらわれたのは、このおりであった。

先頭の者が、こちらを見やって、

「おおっ、あれは広姫様ではありませぬか」

と、うしろの大将羽織の人物へ言った。

「うむ。……止めい」

「はっ——」

馬をあおって、駆けつけると、その名を呼んで、ひらっと降り立って、広姫の前をふさぎ、源四郎を睨みつけた。

「何故の無礼か？　大御所様御息女と知って、働いた無礼ならば、ゆるせぬぞ！」

と、叱咤した。

これにこたえたのは、源四郎ではなく、広姫であった。

「ええい、邪魔だていたすな！　退けい！　この痩牢人めを、わたしが、仕とめてくれる！」

「姫っ！」

と、たしなめたのは、駒を進めて来た人物であった。

ちらと、馬上を仰いで、広姫は、不機嫌に、そっぽを向いた。

老中酒井讃岐守忠勝が、この人物であった。

城中において、土井利勝や春日局が、一目置く唯一の重臣であった。

後年、大老職に就き、四位の少将に進み、入道して空印と号して、家光が薨ずる際、幼子家綱補佐の遺命を奉じて、一世の賢相と仰がれた忠勝も、いまは、まだ三十を出たばかりの壮年であった。

忠勝は、馬から降りると、

「姫、さ、お乗りなされい」

と、うながした。

広姫は、源四郎を睨みすえて動かず、

「痩牢人、名をきいておこう」

と、問うた。

「神子上源四郎と申します」

「この屈辱を、このままに忘れはせぬぞ！」

すると、背後から、大声で、

「いかがでござる、日をあらためて、雌雄を決しられては——。高札を立て申そうか」

と言いはなったのは、彦左衛門であった。

広姫は、ふりかえって、

「死にぞこないの爺めが——」

と、ののしったが、忠勝のみならず、彦左衛門まで出現しては、この場のじぶんの立場が不利

になるばかりとさとって、忠勝の馬へ、ひらりと、うちまたがった。
「神子上源四郎、他日、必ず、そのそっ首を刎ねてくれるぞ！」
言いのこして、いっさんに駆け去った。
忠勝は、仆れた馬を眺め、それから、彦左衛門を見やって、
「老人、おぬしが、この若者にやらせたしわざか？」

彦左衛門は、しゃあしゃあとして、斃れた馬を指さした。
「讃岐殿、どうでござる。みごとな迅業でござろうがな。疾駆して参ったのを、前を走り抜けざまに、さあーっ、とな、ひと薙ぎで、この手練ぶりは、まさに、天狗も顔色なしの神技と申すべきでござるわい。まず、当代に、これだけの腕の冴えをみせる者は二人と居り申さぬて——」
忠勝は、じっと、源四郎の貌へ、目を置いた。
「神子上源四郎——と申したな？　小野次郎右衛門の縁者か？」
「左様、次郎右衛門が、伜どもよりも目をかけた愛弟子でござる」
と、彦左衛門が、代ってこたえた。
忠勝は、つと、源四郎へ近づくと、まわりの者へきこえぬように、声を落して、
「駒場野で、柳生道場の者たちを斬り伏せたのは、その方か？」
と訊ねた。
「御意——」
わるびれず、源四郎は、こたえた。

駒場野一帯は、酒井家支配であり、その四つの屍骸を発見したのは、見廻り藩士の一人だったので、直ちに、忠勝の耳に入っていたのである。
いずれも、ただ一刀をあびて絶命していた。その水際立った腕前は、兵法者としても一流中の一流と、思われたことである。
斬られた者たちが、四名とも小野道場から柳生道場へ趨った連中であることを知っている藩士がいて、これも、忠勝の耳に入っていた。
直感的に、
——この男ではないか？
と推察して、それは当っていた。
源四郎が、すこしもわるびれない態度を持しているのは、気持がいいくらいであった。
「すみやかに、江戸を去るがよい」
忠勝は、鋭く、みじかく言いおいて、侍臣に馬をひかせると、うちまたがった。
彦左衛門へ、頭をめぐらすと、
「老人、もうそろそろ、枯れてもいい頃ではないか」
その言葉をのこした。
彦左衛門は、駆け去って行く一行を見おくって、
「幕閣中、信用のおけるのは、あの人物ぐらいのものだとは、なさけないではないか。世も三代になると、いやはや、そぞろわびしくなるわい」
と、つぶやきすてた。

この時、源四郎は、もう、むこうを歩いていた。
歩きながら、背中を刺して来る空斎の視線を、微かに不快なものに、感じていた。

仇討小僧

「……ここに河津の三郎が子に、一万（いちまん）、箱王（はこおう）とて、兄弟の人のありけるが、五つや三つの頃かとよ、父を従弟に討たせつつ、既に年ふり日を重ね、七つ五つになりしかば、いとけなかりし心にも、父の敵を討たばやと、思いの色に出ずるこそ……持仏堂に参りて、兄の一万、香を焚き、花を仏に供ずれば、弟の箱王は、本尊をつくづくと見守りて、いかに兄御前（ごぜ）きこしめせ、本尊の名をば、わが敵、工藤と申し奉り、剣をひっさげ縄を持ち、われらを睨みて、立たせ給うが憎ければ、走りかかりて御首を、打ち落さんと――」
声いっぱいにはりあげて、謡曲「望月（もちづき）」をうたいながら街道を歩いて行くのは、まだ十二三歳の少年であった。
旅の塵をつもらせた頭の髪毛は、蓬々として、むぐらそのままである。顔や手足は、もうこれ以上日焼けすまい。垢で光った筒袖の腰切りをまとっているが、楮（こうぞ）の細帯には、ちゃんとした小刀をひとふり差していた。そして、右手には、杖がわりに、木刀をたずさえていた。
木刀で、道ばたの木枝を、ぱっぱっと薙ぎはらいつつ「望月」をうたって行くのだが、これは、門前の小僧にしては、ちゃんとした節まわしであった。

すれちがった通行人のうち、心得ある者が、びっくりして、
「ほう、うまいの！」
と、感嘆の声を出したくらいである。
人がきこうが、きくまいが、いっさい、まわりのことは無関心な態度も、小気味がいいくらいで、眺めて思わず微笑を投げたくなる――。
やがて、街道が、深い老松の木立の中に入った時、少年は、左方に、大鳥居をみとめて、ひょいと、首をのばした。
「武蔵国総社、鈴森八幡宮」
と、古びた額が、読めた。
「うん――もうすぐ、江戸だぞ」
鈴ケ森を越えれば、科川（しながわ）に入る、と誰かに教えられていたものであろう。
「ひとつ、おがんでいってやろ」
鳥居をくぐって、ひっそりした境内に入った少年は社殿へすすむ途中、自分の頭ほどの石を見つけて、
「よいしょ」
と、ころがしてみた。
「なんだ、鳴らないじゃないか」
不服そうに、つぶやいた。
鈴森八幡宮境内にある石は、ころがせば、鈴のように鳴る、という話は、遠い国にまできこえ

ていた。

　鈴ヶ森の地名は、この伝説によって起っている。

　少年は、境内にある石は、どれでも、ころがせば、鳴るものと思っていたらしい。

　べつの石を見つけて、ごろんところがしてみて、

「ちぇっ！」

　舌打ちした少年は、

「嘘つきだなあ、むかしの奴らは——」

　と、言いすてておいて、社殿へ近づいた。

　それでも、神妙に、まぶたをふさぐと柏手を打って、

「神さま！　室伏修太郎、これより江戸へ入ります。首尾よく、柳生但馬守（たじまのかみ）が討ち果せますように、お力をお貸し下さい！」

　と、声たからかに、願った。

　天下の名人を、その小さな身で討とうというのである。決意がいいかげんなものではない証拠に、そのまっ黒な顔には、おそろしく不敵な、真剣な色がみなぎった。

「神さま！　柳生但馬守も人間です。この修太郎も人間です。討てないはずはないでしょう？　きっと、討ちます。わたくしが、但馬守に及ばない腕まえを、神さまのお力で、かばって下さい。お願いします」

　柏手が多ければご利益も大きいとでも思い込んでいるように、やたらに、ぱんぱん……と打ち

鳴らしておいて、木刀をひろって、くるっと向きかわった。

　とたんに、修太郎は、ぱちぱちとまばたきした。

　参詣者が一人、いつの間にか、すぐうしろに、たたずんでいたのであった。市女笠（いちめがさ）の、若い女性であった。

「びっくりさせるない。狐かと思ったじゃないか」

　足音をきかなかったことだし、天を掩う老樹にかこまれた仄（ほの）暗い静寂の世界に、忽然と出現した印象を与えられれば、そう思うのもむりはなかった。

　笠の下の白い細おもてが、やさしく微笑した。

「すみませぬ。悪気はなかったのです」

「あたりまえじゃないか。おいらと、おまえは、縁もゆかりもないや」

「そうですね。……でも、そなたが、いま、お祈りしていたことは、だれがきいても、おどろきますよ」

「わらうだろ。勝手にわらえ！」

「いえ、わらいはしませぬ。いまからその覚悟なら、十年でも二十年でも、どんな苦しい修業にも堪えることができるでしょう」

「ばか言ってら。柳生但馬守は、もうお爺さんなんだぜ。おいらが大人になった時は、死んじまってら——」

「では、そなたは、いま、討とうというのですか？」

　唖然として、見まもった。

「あたりまえじゃないか」
修太郎は、あかるく眉をあげてみせた。
「そのような無暴なまねを——」
つぶやくように言った娘のおもてが、ひとごとではないように、哀しげにくもった。
駒場野はずれの豪族館（やかた）で、一飯を乞うた神子上（みこがみ）源四郎を、心よくもてなした美音（みね）であった。
「なにが、無暴なものかい。おいらが子供だから、但馬守は油断するだろ。その隙をねらって、討ちとってやるんだ！」
「父御が、柳生殿に、試合で敗れたのですか？」
「ちがわい。おいら、父も母も知らねえや。……お主（しゅう）様の仇を討つんだ！」
「まあ！」
美音は、あらためて、このきかぬ気の少年の顔を、まじまじと見まもらずにはいられなかった。
「お主様というのは、兵法者なのですか？」
「いいや。りっぱなお大名だったよ。但馬守のために、とりつぶされちまったんだ。……お主様は、腹をお切りになる時に、おいら一人だけを呼んで、修業して天下一になって、柳生流を負かせ、と仰言ったんだ」
そのおりの光景がよみがえって来て、修太郎は、みるみる、泪をいっぱいあふらせて、くちびるを一文字にひきしめると、絶句した。

「それ、ごらんなさい。お殿様は、そなたに、いま仇討をしてほしい、とは仰せられなかったではありませぬか」
「う、うんにゃ！」
修太郎は、ぶるんと、はげしく、かぶりをふった。
「お主様は、腹をお切りになって、お果てなされたのに……家来のなかで、だれも、仇を討とうと言い出す者は、なかったんだ。おいらくやしくって——畜生っ、それなら、おいらが一人で討ってやる、と決心したんだ」
「でも、そんな小さくては、とても……」
美音が、いたましげに、言うと、修太郎は、まるで美音が敵ででもあるかのように、にらみつけて、
「討ってやるぞ！　討ってみせてやらアい！」
と、声をはりあげた。
そして、ぱっと走り出した。
「あ——もし！」
美音は、あわてて、呼びとめた。
修太郎が立ちどまって、首だけまわした。
「ここから北へ三里ばかり行くと駒場野というところがあります。秩父屋敷ときけば、すぐわかります。わたくしは、美音と申しますゆえ、きっとたずねて来てほしいのです」
まごころをこめて、そう言った。

「うん。気がむいたら、たずねるよ」
修太郎は、にこっ、と笑顔をのこした。
「……この年月の恨の末、いまこそ晴るれ、望月(もちづき)よとて、思う敵を討ったりけり」
ふたたび、大声あげて、青空に謡いあげつつ、修太郎は、街道を、濶歩して行く——。
海から渡って来た爽やかな朝風が、光と影をまだらに織る松並木を吹きぬけて、路上のほこりを舞いたたせる。
「おんや？」
修太郎を、立ちどまらせたのは、その路上に、一羽の白い海鳥が、降り着いて、きょとんと、青い目を見ひらいて、動かずにいたことである。
「よおし！」
修太郎は、木刀を青眼にかまえた。
海鳥は、すると、まるでこの小さな人間を小ばかにしたように、ぷいと、そっぽを向いてしまった。
——こいつ！
らんらんと目を光らせて、修太郎は、すうっと、一足すべり出した。
ぱっと木刀を頭上へふりかぶって、なお、海鳥が小面にくくも動かずにいるのを、しめたと見つつ、
「えいっ！」

と、みじんになれと振りおろした。
かつん！
鳴ったのは、地面であった。
修太郎は、両手がしびれて、ぽろっと木刀をとりおとした。
「小わっぱ！　なにをしやがるっ！」
かみつくような怒号が、前方からあびせられて、目をやると、駕籠の先棒が、額をおさえて、悪鬼のような形相で、睨みつけていた。
地面を打ったとたん、小石にあたって、それが、はねとんだものに相違ない。
すなおにあやまればすむものを、修太郎は、——ふん、とわらった。
「あてようと思ってあてたわけじゃないぜ」
「なにっ！　この餓鬼っ！」
人足は、空駕籠をそこへすてると、だだっと襲いかかって来た。
すばやく木刀をひろいとった修太郎は、
——人足ふぜいを打ち据えることが、かなわずに、どうして柳生但馬守が討ちとれようか！
と、少年ともみえぬ不敵な気合を、顔に肩に手に足に、みなぎらせて、
「来いっ！　裸虫め！」
と、さけんだ。
「おやっ——小ざかしゅう歯むかいおって！」
木刀をもぎとることのたやすさを疑わずに、人足は、両手をひろげて、つかみかかった。

修太郎は、にっと皓い歯をほころばせた。
——髭むくじゃらの大男が、こんなものか。
修太郎は、そう見て、あざけったのであった。
木の根瘤のような拳が、頭へ見舞って来ながらの、余裕であった。
ひょいと、頭を沈めて、拳をかわしつつ、
「やあぁっ！」
思いきり派手な掛声かけて、びゅんと、木刀で、毛むくじゃらの向う臑を、払った。
「うっーち、ちっ！」
顔中を皺にして、他愛もなく、六尺にちかい巨軀を地べたにひっくりかえしたざまは、遠くにいた旅人までも、笑わせた。
「わりゃっ！」
後棒の方が駕籠の屋根から、息つき杖を抜きとるや、味噌っ歯をひき剝き、両肩に瘤を盛りあげて、躍りかかって来た。
修太郎は、一歩もさがらなかった。
「一刀流必殺っ！　いざっ！」
眉目をつりあげて、のどいっぱいに、堂々と声をはりあげた。
「吠えるなっ！」
力まかせに、まっ向から杖を唸りおろして来た。

「む——」
歯をくいしばって、この一撃を受けとめようとして——修太郎の木刀は、かつんと高い音をひびかせて、空へ吹き飛ばされていた。
「ちきしょう！」
急に、敵のからだの大きさに、圧迫される意識が来るや、修太郎は、小軀の全神経を、それへの反撥に動員して、腰の小刀をきらっと鞘走らせた。
「くたばれっ！」
人足は、第二撃をふり下そうとしかけて、よろよろと立ちあがった仲間がじゃまになって、一歩横へ身を移した。
その隙を、修太郎は、のがさなかった。
「いかにっ！」
さけびざま、敵の手もとへ、火の玉のように、とび込んだ。
「う、あっ！」
腰に走る痛みよりも、小僧と侮った不覚に、逆上して、人足は、杖をむなしく空に、ぶんまわした。
「おぼえたかっ！」
勝利の一言をのこして、修太郎は、小鹿のように走り出した。
「餓鬼っ！　にがすかっ……」
一人は鮮血にぬられた腰を曲げつつ、もう一人は跛をひきつつ、追いかけはじめた光景は、ふ

たたび、見物人の嘲笑をまねくに充分だった。
　だが、それも、すぐに、人々の顔から消されなければならない事態が、修太郎の行手に、待ちかまえていた。
　二梃の空駕籠が、むこうからやって来たのである。
「おーいっ！　その小わっぱを、とっ捕えろ！」
　跛が、わめいた。
　――なんだ？
　と、不審げに立ちどまった四人の人足は、修太郎の右手にひらめく白刃と、追いかける仲間の血まみれ腰をみとめるや、
「やっ、くそっ！」
「小僧め、この街道を荒しゃがって――」
　口々に罵りつつ、一斉に杖をつかみとって、殺到して来た。
　修太郎は、右方へ――浜辺へ、ツッツ……と奔った。
　だが、所詮、脚力がおよぶはずもない。追跡者どもは、駕籠に人を乗せて、一っ時（二時間）で二里余を駆けて汗もかかぬ手輩であった。
　磯馴れ松の林をくぐり抜けて、砂地へ出ようとしたところで、追いつかれた。
　――これまでだ！
　けなげにも、悲壮な覚悟を、脳裡に走らせた修太郎は、一本の松の幹をうしろ楯にとると、

「来いっ！」
　と、小刀をかまえた。
　子供ながらも、必死の殺気は、荒くれ男どもに、息を詰めさせ、一瞬の沈黙を置かせた。
　四方をふさいで、逃路を断っておいて、
「小わっぱ！　生命が惜しくないのかっ！」
　正面から、その怒号をあびせた。
「おのれら、裸虫どもに、屈服するかいっ！」
　修太郎は、みじんも臆せず、対手の眼光をはじきかえした。
「ふん――屍は、海へほうり込んで、魚のえさにしてくれるわ！」
　そのうそぶきを合図に、四人は、一歩、包囲の輪をちぢめた。
　しかし、そこでまた、彼らは、幾呼吸かの静止をえらんだ。
　腰を斬られたのは、仲間うちでも、喧嘩にかけては一目置かれた男であった。子供と侮ったにしても、これは、思いがけない不覚というべきであった。
　で――彼らは、その腰の血を塗った小刀に対して、充分の要心をもってかからなければならなかったのである。
　小さなからだからほとばしる殺気も、なみなみでないと、受けとれたことだった。
　追いつめた小鹿の息の根をとめるには、四方から一挙に襲う呼吸の一致が必要だった。
　修太郎にとって、むざんに血反吐を吐いて仆れるせつなが、幾秒かの後に来ようとした。

ついに――。
「おう、りゃっ！」
正面の敵が、杖をふりかぶった。
他の三名が、その一撃に合せる構えをとった。
瞬間――。
「南無っ！　大慈大悲！」
とてつもない大きな、その叫び声が、松林の中から、噴いて出た。
人足たちが、不意を衝かれて、気を抜かれた――そのわずかな隙が、次の光景を現出させた。
通り魔にも似た迅さで、まっしぐらにとび込んで来た黒衣の男が、ひょいと、修太郎のからだをひっかかえるや、
「ごめん――」
余裕たっぷりな一句をのこして、そのまま、砂地を矢のように疾駆して行った。
「おおっ、野郎っ！」
「待てっ！」
狂い吼えて、躍起に足をおどらせてはみたものの、人間業とも思われぬその疾駆ぶりを眺めては、半町と追わずにあきらめが来た。
まずしんがりの一人が、
「乱波（らっぱ）だ、ありゃあ――」
と、どなって、足をとめた。

乱波――忍者ならば、しかたがねえ、と次々と、立ちどまってしまった。
みるみる、はるか遠く、豆つぶと化して、それは、眩しい陽かげの中へ溶け去った。
人足たちが、仏頂面で、街道へひきかえして、ふたたび、空駕籠をかついだ頃、修太郎を救った人物は、街道からすこしそれた、とある一宇の阿弥陀堂の縁に腰かけて、自分が与えたにぎり飯をたべる修太郎を、にこにこしながら、見まもっていた。
ひどいおでこで、眇眼（すがめ）で反歯（そっぱ）で、無類の醜男であったが、どことなしに飄々乎たる明るいものを感じさせる。生来の人柄なのであろう。年齢は三十とも、四十とも、受けとれた。
鼠色の筒袖に、同じく鼠色のたっつけをはいていた。役（えん）の行者の法流がかぶるような黒い兜巾（ときん）を頭にいただいて、腰に長い刀を一本おびているいでたちは、その素姓をえたいの知れないものにしていた。
「ああ、うまかった」
修太郎が、指さきについた飯粒をしゃぶって、そう言うと、男は、二、三度うなずいてみせて、
「腹がへっていなければ、もう一人ぐらい、斬っていたであろうかな」
と、からかった。
修太郎は、ちょっと照れた表情になって、
「小父さんは、はじめから見ていたんだな」
と、言った。
「見ていたとも。いや、見あげた度胸じゃった。感服した」

「小父さんこそ、ものすごい足だったじゃないか」
修太郎は心からの感嘆で、目をかがやかせた。
「うっふん――」
男は、あご髯を、ぷつんとひきぬいた。
「小父さんは、伊賀か甲賀の忍び者じゃろう」
「いや――」
男は、かぶりをふった。
「忍び者でのうても、足の迅い者はいくらも居るて」
「だけど、小父さんくらい早く走れる者は、めったにいないや。おいらも、あんなに早く走れるようになりたいや。……どんな修業をすればいいんだい？」
「わしのは、馴れでな。餓鬼の頃から、めくら滅法に走りまわる仕事でこきつかわれているうちに、なんとなく韋駄天になってしもうた」
その頃を思い出す遠い目つきになったが、すぐに、
「お前は、親もきょうだいもないのかね？」
と、訊ねた。
「ああ――一人ぼっちだ。どっちの親の顔も知らない」
「わしと同じだな。国は、どこだな？」
「若狭だよ」

「若狭――か」
男は、その国について何かの記憶があるらしく、
「いいところだ。……いまは、酒井忠勝殿が、小浜の御城主だったな」
「小父さん、若狭に行ったことがあるのかい？」
「ああ、あるとも――。お前は、若狭のどこだな？」
「小浜湾のうちにある赤礁崎（あかくり）という岬に、おいら、すてられていたそうだよ」
「すてられていた？」
男は、眉宇をひそめた。
「生れてまだ、半年もたっていなかったそうだよ。……だけど、さむらいの子らしかったぜ、この刀が添えてあったのだけど、立派なものだぜ。三条宗近（むねちか）だぜ」
「ほう、宗近をのう――。ひろってくれたのは、何者だったな？」
「敦賀の大谷吉政様さ。ほら、関ヶ原の合戦で徳川の軍勢にあわをくわせたお方の弟様だぜ」
修太郎は、ちょっと得意げに、小鼻をふくらませたが、すぐ、暗い色を目に刷（は）くと、
「死んじまったんだ、吉政様もそのお子様の吉邦様も――。しようがねえや！」
いまいましげに、小石をひろって、むこうの松の幹へ、ぶちつけた。
「大谷吉政殿が、お前をひろって下さったのかい」
男は、感慨深げに、修太郎の横顔を見まもった。
偶然であった。

黒兵衛(くろべえ)、と名のるこの男は、むかし、大谷吉政からなみなみならぬ恩顧を蒙ったことがあった。
そのことは、いずれ述べる機会があるとしよう。

大谷吉政は、兄吉隆とならび称される智謀の将であった。ただ、兄とちがって石田三成と仲がわるく、そのために、関ヶ原の合戦には参加せず、おかげで、亡びるのをまぬがれたのであった。

吉隆の領土五万石が、没収されて、松平秀康の手に移されてからも、吉政の領土一万五千石は、安泰であった。

吉政が逝ったのは、十年前であったが、同時に、大谷家は亡びるべき運命と決定したのであった。むしろ、去年まで、そのまま無事にすごして来られたのが、ふしぎなくらいであった。

吉政の嗣子吉邦(よしくに)は、十二歳で、当主となり、累卵の十年を育って、ついに、おぼえのない罪を、幕府から被せられて、切腹して果てたのであった。

その非命を幼い頃からさとって、おのが人生をあきらめきったような、ものしずかな言辞振舞いをもった青年であった。切腹する時の従容(しょうよう)たる態度も、わざわざ将軍家へ報告されたくらいであった。

いま——。

修太郎は、物心ついた頃から、この若い城主につかえ、父とも兄とも思って慕って来たのであった。

その秀麗なおもかげを、思い泛べるだけで、修太郎は、胸がいっぱいになり、泪があふれそうになる。

「……それで、お前は、江戸へ行くのかな?」

「うん——」

「何をしに行く?」

修太郎は、正直にこたえかけて、あわてて、口をつぐんだ。

柳生但馬守を討ちに行く、と打明けたら、この小父さんは、腹をかかえて笑い出すだろ、と思ったのである。

鈴森八幡で出会ったきれいなお姉さんさえ、信じられぬ顔をしたではないか。まして、どうやら忍者にも劣らぬおどろくべき術を身につけた小父さんが、あきれかえるのは、きまっている。

「どうしたな? なにか目的があってのことかな?」

黒兵衛は、修太郎の顔をのぞき込んだ。

「おいら——一流の兵法者になりたいんだ」

修太郎は、こたえた。

「なるほど——」

黒兵衛は、大きくうなずいた。

「ひとつ、わしが、力になってやろうかな。天下一の名人になってもらうためにな——」

「ほんとかい? 小父さんは、江戸にいる有名な兵法者のうちでだれかと知合いがあるのかい?」

修太郎が、真剣な顔つきで訊くと、黒兵衛は、ちょっと、とまどった様子で、あご髯を、つづけて三本ばかり、ひき抜いた。

「うーい、いや、特に親しくしている御仁は居らんがな……」

「だめじゃないか。お師匠様は、一流中の一流でなけりゃ、持たないほうがましなんだ。おいら、そう思うぜ」
「そりゃ、そうだ。……どうだ、いっそ、柳生道場へのりこんで、但馬守様に会ってな――」
「いやだっ！」
憤然として、修太郎は、かぶりをふった。
その勢いが、あまり烈しかったので、黒兵衛は、ぽかんとなった。
「はあーん？　柳生様は、いやかな？」
「柳生様だなんて――様なんか、つけるない！」
修太郎は、ぷんぷんして歩き出した。
黒兵衛は、あわてて、縁からとびおりると、
「待て待て――。そんなに慍(おこ)るものじゃない」
なだめつつ、追ったが、意外にも、その上半身は、一歩毎に、大きく揺れて、右へ傾斜した。
黒兵衛は、跛だったのである。
それに気がついて、修太郎は、目を瞠(みは)った。
「小父さん！」
「あ――これか。五年ばかり前に、流れ弾玉(だま)にあたってな、生れもつかぬ片端(かたわ)じゃ」
「小父さん！　だって、小父さんは――」
「走ることかな。走ることは、忘れていなかったのが、幸いだったな」
――そんなことがあるものだろうか？　こんなひどい跛になっても、むかしと変らぬ速力を出

せるものだろうか？
子供ながらも、この疑惑を抱いた。
黒兵衛は、けろりとした面持で、
「お前は、よほど、柳生――但馬守がきらいだとみえるな？」
「ああきらいだ。大きらいだ！」
「どうして、きらいだな！」
「どうしてでも、きらいだ。死んでもきらいだ！」
「やれやれ……これは、手きびしいわい。いや、よかろうて。きらいなものはきらい、好きなものは好き――はっきりしていて、結構。ところで、わしも江戸へ行くのだが、一緒に行ってよろしいかな」
「ああいいよ」
「ふむ。わしはきらわれては居らんらしい」
黒兵衛は、満足そうに、首をたてに二三度ふった。

姉妹

その日――黄昏がせまった時刻、鈴森八幡宮から帰って来た美音(みね)は、離れに入って、しばらく、じっと坐っていた。

幼い頃から、からだが弱く、昨年の春、突然、なんの前ぶれもなく血を喀いてから、いっそう、身も心も弱ったようであった。

今日のような遠出をして来ると、全身が熱で浮いたようになり、じぶんの生命も、もうあまり長くないような心細さに、ひとり、そっと泪ぐんでいるのだった。

——希望を持たなければ……。

じぶんに、いいきかせてみる。

——希望を……。

潤んだ眸をあげて、宙の一点を見つめた美音は、この瞬間、ふっと、ひとつの俤を思い泛べた。

それは、先日、この離れへ来た一人の浪人者の俤だった。

神子上源四郎、と名のった——。

いささかも悪びれるところなく、余儀ないいきさつによって人を斬って来た、と告げたが、その態度のおちつきはらった男らしさは、美音にとって、印象深いものだった。

午睡をとらせておいて、母屋へもどってみると、姉の糸耶が帰って来ていたので、このことを告げると、人相風態を問いただし、急に、顔色を険しいものにして、手槍をつかんで、離れへ忍んで行ったのであった。

美音が、そこへ、おそるおそる行ってみた時、浪人者の姿はすでになく、姉だけが、茫然と自失したごとく、立っていた。

美音は、ほっとして、姉には、なにも言いかけず、踵をかえしていた。姉もまた、なぜ神子上

源四郎を殺そうとしたか、語ろうとはしなかった。

姉妹仲が冷たいというのではなかった。

姉妹は、幼い頃から、あまりにも対蹠的だったのである。

姉は、勝気で、武芸を好み、またそれに堪える健康なからだを持っていた。妹は、それと全く反対だった。

そして——。

五年前に、姉妹の家を襲った不幸が、ますます、ふたつの性格を、相反せしめたのであった。

姉妹の父は、幕府御目付役豊島刑部少輔明重であった。武蔵国久良岐郡富岡郷（現在の横浜市金沢区富岡町）の領主であった。

豊島家は、遠く桓武平氏の一族たる秩父武常から興っている名門であった。

秩父武常は、天喜二年、源頼義・義家父子にしたがって、安倍貞任・宗任を征討するために奥州に転戦して、大いに軍功があり、源氏の姓を賜っている。

その曽孫清光にいたって、武蔵権守に任じ、南武蔵の地に、不抜の勢力を張った。

「吾妻鑑」にも——。

秩父清光が、その子清重とともに、源頼朝の平家追討の軍に馳せ参じて、武勲をたてたことが記されている。

鎌倉時代に入って、豊島氏は、豊島城（平塚城）に拠って、河越・畠山・江戸氏らとともに、関東武士として、その武名を誇って来た。石神井城・練馬城を築いたのも、豊島氏であった。

室町時代に入って、豊島氏に、第一の不運が来た。

文明九年、豊島勘解由左衛門尉泰経は、太田道灌とたたかって、敗北し、四百年の長きに渉って支配して来た所領ことごとくを失ったのであった。

それから約四十年後に、豊島頼継は、下総国府川城（現在の茨城県利根町布川）に拠って、先祖の武威を常総の野にあらたにせんと努めた。

その子兵衛尉頼重は、二代目府川城主となるや、天正十八年、豊臣秀吉が小田原北条氏を討つにあたって、浅野長政の麾下に属して、小田原・箱根・忍と転戦して、功名をあげたが、不幸にして忍城攻略に際して傷ついて、果てた。

頼重の嫡子が、姉妹の父明重であった。

明重は、頼重討死の時、十二歳であったが、おのが双肩に、豊島家の武名がかけられたと自覚するや、その日から、寝食を忘れる刻苦の修業をはじめたのであった。

明重が、徳川家康に召出されたのは、文禄三年十六歳の正月であったが、その風姿といい態度といい、すでに立派な武将の貫禄をそなえていた、という。

ただちに、久良岐郡富岡郷に采地千七百石を賜ったのも、父頼重の戦功のためばかりではなかった。

家康の下問に対する明重の応答のみごとさが、領主たる資格をしめした、といえる。

慶長十九年十二月の大阪の冬の陣、ならびに翌元和元年の夏の陣にあたっては、明重は、御使番（戦場において、本陣よりの号令を、諸侯の陣地に伝える役）を勤めた。御目付役には、すでに先年から任じていたのである。

家康が駿府に移るや、明重もそれにしたがった。家康の逝去に遭うや、秀忠に江戸へ呼びもどされて、あらためて、御目付役を命じられているが、これは、人材を高く買われた証拠にほかならぬ。

明重は、たしかに、武士道の吟味を、至誠をもって為した戦国末期の秀れた一人にかぞえられる人物であった。

主君に忠節で、祖先を敬い、信仰に厚く、領地に仁政を行って領民の師表たることに努めた。

その明重が、突如、江戸城西の丸殿中において、老中井上主計頭正就に刃傷におよんだのであった。

美音は、五年前の、あの日の朝の光景を、いつでも鮮やかに思い出すことができる。

屋敷は、芝田村町にあった。

父の登城を見送るために、いつものごとく、美音は、姉糸耶と弟継重とならんで玄関に坐っていた。

糸耶は十八、美音は十六、継重は十四――二つずつはなれた姉弟であった。

父明重は、ちょうど五十歳であった。

母をしたがえて、袴を鳴らして奥から出て来た父は、常と変らぬ穏かな面持であった。

ただ、この朝は、姉弟の前を通りすぎないで、足をとめて、ひとつひとつの顔へ、ゆっくりと目をあてた。

優しい、慈愛のこもったまなざしであった。

美音は、ふと俯向いた母が、悲しみに堪えきれぬ気色をしめしているのに気づいて、にわかに、胸さわぎをおぼえた。

糸耶は、父の顔だけをじっと仰いでいたし、継重は、膝へ目を落していた。

「あらたまって、申し置くまでもないことだが……」

父は、しずかな声音で、言った。

「さむらいは、わが家を一歩出る時は、常に、屍を路上にさらす覚悟で居る……武士道とは、節義を重んずるために、あえて、身命を抛たねばならぬ宿運を負うて居る。……士たる者時に生くべくは生き、時に死すべくは死す。わしが、ふたたび、帰らなかったならば、その志に殉じたものと思うてくれい。よいな」

その面上には、微笑があった。

――なんのことであろう？　父上のお身の上に、何事がおこったのであろう？

美音は、全身が凍るような不安におそわれた。

父が、式台に降りた時、ふいに、その後姿へむかって、糸耶がさけぶように声をかけた。

「お父上、御首尾よろしゅう――」

糸耶だけは、父がいかなる覚悟をさだめて、家を出て行くか、ほぼ想像がついていたのである。

「………」

父は、無言で、頭をまわして、長女を見やった。その表情は、別人のごとく、ひき緊ったものに変っていた。

ふかく、うなずいてみせてから、父は出て行った。

父をのせた駕籠が、門外へ消えてからも母は、その場へ、じっと坐りつづけていた。

継重が、そのそばへ寄って、

「お父上は、どうなさるというのですか？」

と、問いかけたが、母は、こたえず、微かに、かぶりをふっただけであった。

その日未の刻（午後二時）、豊島刑部少輔明重は、江戸城西の丸において老中井上主計頭正就が、帝鑑の間から出て来たところを、松の廊下で待ちうけていて、

「いかに、主計頭っ！」

と叫びざま、抜き討ちに、その左肩から、袈裟に、割りつけた。

「な、なにをするっ！」

正就は、脇差を二寸ばかり抜きかけて、力が失せて、膝を折った。

「武士に二言はあらず！　おぼえたかっ！」

明重は、二の太刀を、正就の頸根へ斬り込んだ。

当番衆十人組の青木某が、あわてて、明重を、うしろから抱きとめて、

「殿中でござるぞ！　おしずまりめされい！」

と、絶叫した時には、もう、正就は、血海の廊下へ、がっくりと俯つ伏していた。

明重は、しずかに、白刃を逆持つと、おのれの腹から、青木の腹まで、一気に刺しつらぬいて、倶仆れに、絶命した。

田村町屋敷へ、この刃傷の件が知らされたのは、日が暮れてからであった。

知らせに来たのは、警吏であって、一隊を率いていた。

屋敷には、厳重な警戒が敷かれ、家族と郎党は一歩の動きも監視の下に置かれた。

三日後に、上使が来て、嫡子主膳正継重は、切腹を仰付けられた。

これは、思いもおよばなかった厳罰であった。

十四歳の継重は、一瞬、畳に両手をついたまま、紙のように顔から血の色を引いて、喪神状態におち入った。

上使が、それなりにうごかぬ継重の前へ近づいて、

「お父上は、見事な御最期であった。……お許も、豊島家最後の男子として、立派に、作法せられい」

言いきかせて、優しく、両肩へ手をかけておこしてやると、継重は、閉した双の目蓋のかげから、みるみる泪を湧きあがらせて、唇をわななかせた。

翌朝——。

澄みきった秋空の下で、継重は、白砂の庭上に白装束姿で正坐し、いささかの乱れもみせずに、腹を切った。

介錯をしたのは、柳生道場の戸沢新八郎という高弟であったが、あまりにもけなげな、いじらしい継重の最期ぶりに胸がふさがれて、葬った芝万年山青松寺に、七日間参籠して、その冥福を祈った。

残った母と姉妹が、田村町屋敷をひきはらって、駒場野はずれの古館へ移ったのは、それから

七日後であった。

そして、その夜、母は、良人とわが子のあとを追うて、自害して、果てたのであった。

美音は、父が、いかなる理由によって、井上主計頭に刃傷におよんだか——いまだに、知らされていない。

姉の糸耶は、知っているに相違なかったが、美音は、いちども、問うてみたことがなかった。

ただ——。

母のなきがらを、牀に横たえて、枕もとに坐った時、糸耶が、突然、はらわたをしぼるような悲憤の声をもらすのを、美音は、息をのんで、きいたのであった。

「春日局め！　奸婦！　必ず、この讐を復してくれる！」

それから、糸耶は、美音へ向きなおって、

「よいか、美音、このことだけは、おぼえておくがよい。幕府の中で、酒井讃岐守忠勝殿を除いては、いかなる人間も、みな、われら姉妹の敵なのじゃ」

と、言いきかせた。

糸耶は、何人からきかされたのか、この刃傷に対する重臣会議の模様を、知っていたのである。

殿中において、老中にむかって、斯くのごとく振舞った罪は、豊島一族をことごとく誅しても、まだ足らぬ、後世へのみせしめにもなる。と、意見が一致した時、酒井忠勝が一人、これを肯ぜず、声を高くして、大名たる者が、遺恨をはらさんには、殿中こそ良き勝負どころであり、

一太刀もかえし得ずに斬り伏せられた主計頭の方こそみぐるしいと申さねばならぬ、喧嘩両成敗ならば、豊島家のみを絶やして、井上家を咎めないのは片手落ちである、ましてや、豊島家一族をことごとく誅するなどとは言語道断、もしこの処罰を為さんか、武士の意地はこれより廃れて、農商の婦人と同じくなるべし、と主張して、ゆずらなかった。

武士道の吟味をつらぬくためには、殿中の刃傷もはばからず――と、忠勝が、大胆にも喝破したことは、泰平に徒然を喞つ旗本の面々を、ひどくよろこばせたものだった。これをきっかけとして、施政に対する不満の燻りが、火をはじくかとさえ、不穏な気配をしめしたくらいであった。

結局、嫡子継重に切腹仰付け、家名断絶、領地没収の裁決となったのであるが、酒井忠勝だけは、これに署名をしなかった、という。

忠勝がいなかったならば、姉妹もこの世に生きのびることは、ゆるされなかったのである。

糸耶は、美音に、それだけを伝えて、あとは、口をつぐんだが、それは、姉としての配慮であった。

糸耶は、ただ一人で、父母をじぶんたちから奪い去った元凶と思いなされる春日局を討とうと、かたくほぞをかためていた。病弱の妹をまきぞえにすまい、と考えたのである。

「美音」

庭で、姉の声がして、美音は、はっと、われにかえった。

あわてて立って、障子を開けて、

「ここにおりますが……」

と、こたえた。

糸耶は、入って来ると、冷たい横顔を妹にみせて、ほんのしばし無言でいたがその姿勢のままで、

「そなた、豊島の清光寺へお行き――」

と、言った。

「え？」

美音は、息をひいて、姉を見つめた。

王子十条野――茫々たる葭原・萱野が、姉妹の先祖の興った地であった。

秩父武蔵権守清光が居住した館址が、いまも、そこに残っていた。そのはずれに寺があり、清光寺という。

また、その豊島の地には、江戸近郊六阿弥陀の一である西福寺という寺があり、これも、秩父清光の建てたものといわれていた。

美音は、幼い頃、西福寺建立にまつわる哀話を、乳母からきかされたことがあった。

秩父清光には、一人の美しい娘があった。足立郡の地頭足立少輔なにがしのところへ嫁がせたが、後に、両家に確執の事があって、娘は離縁せられた。これを悲しんだ娘は、其夜、館をぬけ出して、近くの浅間ヶ淵に身を投げた。

翌朝、騒ぎになると、娘が手馴らしていた猿が、哀しげに啼きながら、同じ場所へ走って行って入水したので、その遺骸を発見することが出来た。

父清光は、那智権現におもむいて、娘の菩提を願うたが、その際、一本の霊木を得て、これを海に入れ、ねがわくば那智権現のみちびきによって、わが本国武蔵豊島郡へ流れつけと祈った。この祈りは空しからず、霊木は、幾月かの後、豊島熊野木というところへ流れついた。折しも、行基菩薩が当国へ巡礼して来たので、清光は、霊木をもって六体の阿弥陀如来を造ってもらい、これを、武蔵六ヵ所の寺にわかって、まつった、という。

太田道灌に亡されるまで、その地は、こうした由緒を、それぞれの字の其処彼処につくりつつ、豊島家に治められて来たのである。

糸耶は、妹に、そこへ行け、と命じた。

清光寺の住職は、亡父明重と親交があったのである。

「……この館を、ひきはらうのでしょうか？」

「そうじゃ」

「お姉さまは、いずこへ——？」

と、問いかけて、美音ははっとして、口をつぐんだ。

美音は、姉の決意を知っていた。

「美音、清光寺へ行くのは、いやか？」

視線をまわした糸耶の表情は、きびしかった。

「この館にとどまっていては、いけませぬか？」

「ならぬ」

糸耶は、冷たく、かぶりをふった。

美音は、うつ向いた。

わずかな沈黙があってから、美音は、うつ向いたまま、つぶやくように言った。

「どうしても、春日局をお討ちなさるおつもりでしょうか」

瞬間、糸耶は、きらっと双眸を光らせたが、それにはこたえず、

「清光寺で、父上と母上の供養をたのみましたぞ」

と、言いおいて、立ちあがった。

庭に降りた姉に、美音は、

「いつ参るのでしょうか？」

と訊ねた。

「明日——」

みじかくこたえて、糸耶は、さっさと母屋へ去って行った。

——明日！

美音は、茫然と、まなざしを宙に置いた。

姉をして翻意させることのかなわぬ悲しみが、痛みとなって、からだにひろがる——。

春日局を討ちとることを、はたして泉下の父が、のぞんでいるであろうか、と思う。

美音には、わからなかった。

宵闇が、部屋をつつみはじめるにまかせて美音は、ひっそりとその座をうごかずに、痛みに堪えた。

父が若い頃からつかえている忠僕の加平が、影のように、離れに寄って来た時には、もう、美音の姿は、闇の中に没していた。
「灯をおつけなされずに……夜気は毒でございますぞ」
言いながら、入って来て燭台に燧を打ち、雨戸を閉めておいて、
「糸耶様から、明日、お供をして清光寺へ参るように、と申しつけられてございまする」
と告げた。
美音は、うなずいた。
「糸耶様には、どう遊ばされるご所存でございましょうか？」
「うかがって居りませぬ」
こたえてから、美音は、ふと思いついて、
「加平は、大久保彦左衛門殿の屋敷を知っていますか？」
「存じあげて居りまする」
「清光寺へ参る途中、お会いしたいと思います。案内してほしい」
美音は、たのんだ。

深夜の客

もうそろそろ、亥の刻を過ぎようとした頃であった。

松平伊豆守信綱は、疲れを知らぬ熱心さで、夕餉後からはじめた武家諸法度の改正の仕事を、つづけていた。
家康が制定した武家諸法度を、現代の時務に適応すべく、改正する必要が生じ、この仕事が、伊豆守に命じられたのは、今夏であった。
爾来——。
伊豆守は、この仕事に、日夜をついやしているのであった。
武家諸法度というのは——。
徳川中心主義が立法の精神であり、これを徹底させることであった。外様、親藩、譜代の諸大名を、挙げて、ことごとく徳川幕府の恩恵の下に置く——というよりも、桎梏の下に措く、ということであった。
これは、家康が、貞永、建武等の諸式目を参考にして制定した法律であったが、それらより、さらに苛酷なものであった。
文武弓馬の道をはげむこと、好色をいましめ、博奕を禁じ、礼節を尚ぶことなどの条は、これは立派なものであった。
だが、築城の禁止、諸大名の参覲交替、私の婚姻の禁止、衣服と乗輿の別の厳重などは、幕府に対する絶対服従を意味した。
また——。
倹約の奨励とか、群飲佚遊の制止とか、これらは、平時においては空文にひとしい、月並の条目であったが、ひとたび、諸大名を制裁せんとする場合、たちまち、凄じい活力を発揮したので

ある。

すべて、法律というものは、その文句は、まことに常識的で立派である。しかし、これを実際に行使する場合、たちまち、非常識な悪魔的な暴力と化すことは古も今も、変りはない。

一人の大名が、もしかりに善意をもって、村々に、祭礼をはなやかなものにさせたとする。これは、法度のうちの「諸国諸侍倹約を用う可き事」という条目に反する、とされて、身持よろしからずの名目となり、その大名は隠居を命じられるか、蟄居させられるか、ということになる。

国替、減封、断絶された殆どの諸大名は、この諸法度の魔力をあびた、といえる。

いま――。

伊豆守は、その改正にあたって、その苛酷を大幅に修補しなければならぬと感じていた。

たとえば――。

大名小名が、江戸と国許を往復する参覲交替については、その引率人数を、もっと減少させなければ、国費と人民労務は、それに堪え得ないのであった。

築城禁止の件についても――。

これまでの条目では、石壁や塀門をすこしばかり改築しても、これにふれて、罪となるのであった。げんに、崩れた城壁を直したために、とりつぶされた大名があった。これも、正しく、城郭修理はさしつかえない、と加えなければならなかった。

とはいえ――。

どの様に、改正しようが所詮、武家諸法度の立法精神は、みじんもゆらぐものではなかった。実際に社会に行われている慣習を基礎として、全体から帰納した法律ではない以上、人民の幸せとは、遠いへだたりのあるものだった。

――ちがう！　この法度は、根本からやりなおさなくてはならね！

伊豆守は、幾度、わが胸に叫んだことだろう。

だが、伊豆守は、幕府のために働く地位にあった。徳川家を守るために、その身分を与えられた運命を持っていた。

伊豆守は、おのれ個人を殺して、その職責に忠実であらねばならなかった。

伊豆守は、今年、ようやく宿老に準じて勤仕するように命じられ、一万五千石を加増せられ、三万石の大名となり、忍城を賜ったばかりであった。

智恵伊豆の名は、高かったが、幕閣における実力は、いまだ与えられてはいなかった。

智恵伊豆――。

幼少にして、はやくも、その片鱗をしめしていた。

家光が生れたのは慶長九年七月であり、この時、幼名長四郎といった伊豆守は九歳であったが、召出されて、小姓（後の御伽）の列に加った。

はじめ三人扶持をたまわり、後に二人扶持の加増があって、あわせて、五人扶持の小姓となった。

かた苦しい役目なので、他の小姓たちは、隙あらば詰所へぬけ出て遊びがちであったが、長四郎だけは、他人の代りまで勤めてやったり、御次の間に寝るときは、足の指で、出入の戸をふま

えて臥したりして、その才気と忠誠をあらわしていた。

ある時、幼い家光が命ずるままに、雀をとらえようとして、夜中、庭の池へ落ちた。秀忠の詰問を受けても、口をふさいで、幼君の名を告げず、罪を一身に荷おうとした。嚢（ふくろ）に入れられて食を絶たれても、口をひらかなかった。

他日、秀忠は、

「わが子を補佐するものは、長四郎を措いてほかにはない」

と、御台所に語った、という。

領地を賜ったのは、二十五歳の時であった。五百石であった。

智恵伊豆としてのエピソードは、かずかずあった。

伊豆守が、扇の紋を用いている由来については、次のような話があった。

小姓の頃、家光が、庭の橋の反（そり）かげんがよろしくない、とだだをこねはじめた。渡りをよくすれば眺めがよくない。眺めをよくすれば渡りにくい。いかほどの勾配にしようかと、設計に埒（らち）があかなかった。

すると、長四郎が、すすみ出て、ぱっと扇をひらいてみせて、

「これほどの反かげんは如何？」

と言った。

この進言は、秀忠の耳にもきこえて、日光造営中のことであったので、神橋の反（そり）橋を、扇の曲線で設計することになった、という。

さる夏、蚊のひとしお多くあつまる夕、家光が、はやく榧（かや）の木を焚け、と命じた。

近侍が当惑していると、伊豆守はこれをきいて、納戸にしまってある碁盤を割って焚くがよい、と教えた。

秀忠が、病気のおり、灸をしてみたいから、藁こみを持参せよ、と命じた。城中のこととて、にわかに、ととのえにくかった。相談うけた伊豆守は、即座に、新畳を切りとるがよかろう、とすすめた。

禁裏御普請（ふしん）の際であった。

御座の間の天井縁（ぶち）を白木にせず塗木にすれば、その費用が半分で足りるので、その命令が下った。奉行がこれにさからって、天子の御頭の上に、漆は用いないものである、と言上した。伊豆守は、笑って言った。

「されば、御冠の漆は如何？」

伊豆守が、忍城を賜った今春、領内の名主たちが、城内へ伺候して来た。

伊豆守は、一同にむかって、

「むかしから、隠れ簑、隠れ笠、打出の小槌、延命嚢（ぶくろ）というものがあるが、そちたちは存じて居るか？」

と、問うた。

お伽話にはきいたことがあるが見たことはございませぬ、というこたえに、伊豆守は、微笑しながら、

「ではきかせよう。たとえば雨降って、諸人が田畑に出ないで遊びに耽る時、近隣に隠れて簑笠

をつけて、田畑に出る。打出の小槌とは鋤や鍬にほかならぬ。このように、怠ける諸人にかくれて勤めはげむなら、自然富貴になり、宝は心にまかせて湧くであろうし、有徳にて渡世すれば、寿命も永くなると申すものだ。延命嚢は、すなわち、心の中にある」

と、教えた。

ただ――。

才華が、世の耳目にひろまればひろまるだけ、勢いこれをねたみ、そしる敵もあらわれる。伊豆守の城中における地位は、決して安泰ではなかった。

廊下に足音がして、伊豆守は、ようやく、書類から目をあげて、黒棚の上の水時計を見やった。

子の下刻が来ようとしていた。

「申しあげます」

当番の侍臣の声が、障子をへだてて、かけられた。

「うむ――」

「神子上源四郎と申す牢人ていの者、夜中ながら御意を得たき儀ありと申し、門前に在りまするが、いかがとりはからいましょうか?」

こんな深夜に、牢人ていの者、謁見をねがい出れば、よその大名屋敷では、狂人あつかいにするに相違なかった。

この屋敷においては、主人の趣意は、末端の士にまで、よくゆきわたっていたのである。

「通せ」

伊豆守は、こともなげにゆるした。

「こちらへでございましょうか?」

「かまわぬ」

侍臣が、遠ざかると、伊豆守は、宙に置いたまなざしに、強い光をくわえた。

三年前、同じく深夜、小野次郎右衛門忠明の遺書を携えて来た若者の顔を、伊豆守は、すぐに思い出すことができたのである。

――よくぞ、生きて戻って来た！

感慨の中におどろきがまじっていた。

次郎右衛門の遺書を読んだ時、この若者は生きては江戸へ戻れまい、と考えたことだし、今日では、すでにこの世に在るまいと思っていたのである。

次郎右衛門の遺書には――。

自分は、こころざし中道にして果てるが、信頼すべき唯一の弟子であるこの遺書持参の若者が、こころざしを継いで、駿府へ参る故、さいわいにして、生きて帰ることが、かなったならば、何卒庇護を賜るようお願いつかまつる。

という意味のことばが記されてあったのである。

では、次郎右衛門のこころざしとは――。

すなわち、春日局と土井利勝の指令によって駿河大納言忠長の行状をさぐるために駿府に潜入した柳生道場の手練者たちを、一人のこらず仆すことであった。

これは、伊豆守が、次郎右衛門にたのんだ仕事であった。
伊豆守は、家光の補佐役であり、弟の忠長とは、これまで親しく言葉を交したこともなかった。したがって、忠長をほろぼそうと企てる春日局や土井利勝に、意を添えてふしぎはなく、これにさからう立場ではなかった。にも拘らず、伊豆守は、忠長の非運を未然にくいとめようと、決意したのであった。
伊豆守は、ただ、この国土に、再び戦火を燃え上らすまいと、思慮したのである。
大御所秀忠のからだが、急におとろえたのは、後水尾天皇が譲位せられ、百九代の女帝の即位式がとりおこなわせられるにあたって、入洛した――三年前からであった。
江戸に帰って来て、御台所が逝くのに遭うて、秀忠の心身の弱りかたは、さらにひどくなったのである。
誰の目にも、もはや寿命がきわまったと見てとれた。
そこで、春日局と土井利勝は、秀忠没後の新しい威権のために、忠長の存在を許せぬと断定して、柳生但馬守に、その内旨をつたえたのであった。
忠長は、父秀忠の死とともに、ほろぶべき必然的な運命を与えられていたのである。
秀忠を迎える死神は、すぐそこに来ていた。
春日局と土井利勝は、急がねばならなかった。
好都合なことに、忠長は、おのが運命の危殆をまぬがれるために、自ら恭謙にして、将軍家に対する名分をまもるべきにも拘らず、逆に、暴慢、放恣の行状を積んでいると、きこえていた。

柳生道場からえらんだ隠密を、そこへ趨らせて、その行状をことごとく調べあげさせるのは、これをほろぼすために、絶対必要であった。
この企図を、看破した伊豆守は、忠長が改易を命じられた時、窮鼠の奮起をなすのではないか、とおそれたのであった。
忠長が一挙したときけば、天下にあふれた浪人の群は、好機ござんなれ、と駿府へ馳せ集うに相違なかった。
所詮は、ほろびゆく者の儚ないあがきでしかないとしても、このために、全土に兵が動き、おびただしい人馬が斃れるであろう。
――亜相をして、謀反人たらしめてはならぬ！
伊豆守は、決意した。
しかし、伊豆守は、まだ、幕閣の中で、なんの力も持たなかった。
幕閣中で、春日局と土井利勝の陰謀を阻止し得る者があるとすれば、それは、酒井讃岐守忠勝であった。
ところが、忠勝は、ある事によって、忠長という人物を見すてていたのである。
伊豆守は、ただ一人で、決意し、実行せざるを得なかった。
――駿府へ潜入した隠密を一人のこらず殺して、江戸へ帰してはならぬ。
まず、これが、伊豆守のとるべき非常手段であった。
伊豆守が、えらんだのは小野次郎右衛門忠明であった。
忠明が、即座に承知したのも、伊豆守の推測通り、柳生但馬守に対して含むところがあったか

らである。
忠明は、致仕して、諸国武者修業へ出ると称して、これを行うと約束したのであったが……。
次の間との仕切襖がひらかれ、三の間とをへだてる襖も、左右にあけられた。
源四郎は、そこに、刀をうしろに置いて、坐っていた。
「ここへ――」
伊豆守は、声をかけて、侍臣には、下がるように、目で命じた。
源四郎は、しずかに、入って来ると、片手を畳に置いて挨拶した。
伊豆守は、じっと見据えて、
――わずか三年のあいだに、こうも、深いものを身にそなえることができるものか！
と、心うたれた。
伊豆守は、べつに、剣技に長けてはいなかった。したがって、源四郎の姿に、奥義に達した者の神気を見たのではなかった。
ただ――。
師の忠明さえも備え得なかったものしずかな雰囲気を、この若者がもっており、それが、死地を脱して戻って来た者がしめすのであってみれば、これは、伊豆守として、感動せざるを得なかった。
「そちは、もはや、この世に亡い、と思うておった」
伊豆守は、正直に、言った。

「よく、生きて、還ってまいった」
「亡き師の霊に加護されたものと存じます」
「幾名を仆した？」
「七人まで斬り――一人をのがしました」
もとより、こちらが、何者かさとられずに、次々と仆してゆくように、命じておいたのであったが、一人をのがして、江戸へ帰って来たのは、対手に看破されたことを意味した。看破されていなければ、いま、なお、駿府にふみとどまって、あらたな隠密をさぐりあてて、これを襲撃しているのであろう。
「江戸へは、今夜帰りついたのか？」
「いえ、三日前でございます」
「柳生の者たちに、見られてはおらぬのか？」
「おそらく、見られておりましょう。べつに、忍びかくれてはおりませぬ。通りを、顔をさらして歩きました故――」
それればかりか、将軍家の妹がはしらせた馬を斬っているのである。噂は、ひろまっているはずであった。
「要心をいたすがよい」
伊豆守は、声音にいたわりのひびきをふくませた。
「殿――」
源四郎は、それまで、伏目勝ちにしていた姿勢を、まっすぐに、立てた。

「てまえが、帰って参りましたのは、一言申上げたき儀がある故でございます」
その双眸には、暗く沈んだ色があった。
「申してみるがよい」
伊豆守は、促した。
源四郎は、ひと呼吸置いてから、ずばりと言った。
「亜相様には、すでに、ご乱心かとお見受けつかまつりました」
「……………」
伊豆守は、むっと口を一文字にひきむすんで、鋭く、源四郎を見かえした。
源四郎の表情は、あくまでなんの感情をもしめさなかった。
「城内にあっては、落度なき家臣たちに真剣試合を所望あそばされて、これを酒宴の添えものにし、野に出ては、狩猟の代りに、農夫の妻を捕えて、手ごめになさる。正気の沙汰ではございませぬ」
「……………」
「はばかりある臆測ながら、亜相様は、生来、尋常にあらざる御気質ではございますまいか」
「うむ——」
伊豆守は、肯定せざるを得なかった。
酒井忠勝が、忠長の人となりを見はなしたのも、その狂暴の振舞いゆえであったのだ。
家光が竹千代、忠長が国千代といった頃のことである。

国千代は、たしかに、両親の偏愛を受けて、その過激な気質をさらに驕らせていた。
ある年、竹千代が、疱瘡をわずらった。これをきいて、国千代は、
「兄君は、もはや、ふた目と見られぬ面相におなりであろう。あばた公方のあだ名をつけられるぞ」
と、高言した、ときこえた。
食膳が、はこばれて来ると、兄と同じ料理かとききき、そうだと返答があるや、いきなり、足蹴にして、
「わしは、あばたになるのはいやじゃ！」
と、叫んだ。
この由が、大奥にきこえると、御台所は、あわてて竹千代とは全くちがった料理をつくってやるように、命じたのであった。
酒井忠勝が、憤激したのは、これをきいたからであった。
「徳川家の悪い血を、一身にあつめられた。将来の御不運もやむを得ぬ仕儀であろう」
はっきりと、忠勝は、親しい人へ、そう言った、という。
「亜相殿は、附家老たちの諫言など、耳を仮されぬのだな？」
伊豆守は、きくだけむだと知りつつ、たしかめた。
忠長には、甲府城主、鳥居土佐守成次、掛川城主、朝倉筑後守宣正、家司となっている鳥居淡路守忠彦の三人が、附いていたのである。

「附家老の面々は、いずれも、身命を賭して、亜相様をおいさめ申す気概を持たず、とみえました」
伊豆守は、ちょっと、沈思していたが、
「亜相殿に叛意は？」
と、問うた。
「それは、てまえごとき、城外に在った者には、わかりませぬ。しかし、新規召抱えの士のうちには、不隠の思念を抱く者も交って居るか、と存じられました」
源四郎は、駿府城内へ、いくたびとなく、忍び入っていた。
某夜、忠長の面前で、軍法を講義している気骨ありげな年配の士があったのを、見とどけている。
それは、江戸城攻略策の講義であった。
軍法の講義であるから、あらゆる例をとり挙げるのは自由であろうし、また、忠長が、徳川家のためを思って、江戸城が万一攻められた場合、防禦を完璧なものにしようとする配慮の上での所望であったのなら、ゆるされていいことであったろう。
そうでない証拠は、講義をききつつ、忠長が、冷やかな微笑をうかべていることであった。
その士は、西北より風に乗じて焼討つよりほかに、難攻不落の名城は、水攻めに道無く、力攻めにして全く見込みが無いことを、微に入り、細をうがって、述べていたが、その態度には、鬼気ともいえる真剣な気色がみなぎっていたのである。
後日、源四郎は、その士が、楠流の軍法学者・牟礼郷左衛門という人物で、先年改易となった

福島正則の家臣であったことを、調べておいた。
伊豆守は、源四郎から、この江戸城攻略策の講義をきかされると、目蓋をとざした。
——やんぬるかな！
絶望であった。
すでに、秀忠の病状は重いのであった。
伊豆守は、もはや、その生命は半年も保つまい、と大奥医師からきかされていたのである。
——あるいは、戦火が燃えあがるかも知れぬ！
胸中で、そう呟いた瞬間、伊豆守は、全身に、戦慄をおぼえた。
ぱっと大きく双眼をひらいた伊豆守は、
「源四郎！」
語気を張って、呼んだ。
「は——」
「あらためて、そちにたのみがある」
「いか様なことを——？」
「生命を、わしに、くれ」
「…………」
「春日局を斬ってくれぬか！」
きっぱりと、言いはなった。

さすがに――。

源四郎は、凝然と、伊豆守を黙視して、まばたきもしなかった。

「かまわぬ！　わしは、そう決意した。……春日局をこの世から消さねばならぬ！」

決意を不動のものにするために、声を出して、伊豆守は、おのれに、そう言いきかせなければならなかった、とみえた。

「源四郎！　返答をきこう」

伊豆守にうながされて、源四郎は、畳の一点へ、視線を落して、

「承知つかまつりました」

と、こたえた。

あくまで、ものしずかな態度が、伊豆守を満足させるとともに、かすかな不気味さをおぼえさせた。

「かたじけない。礼を申す」

伊豆守は、頭を下げた。

源四郎は、両手をつかえて、これにこたえてから、

「しかし、春日局には、城外へお出になる折がございますすまい」

と、言った。

「いや、ある。それも、明後日のはずじゃ」

伊豆守は、微笑して、教えた。

「荏原郡目黒に駒場野がある。ここで、春日局が、上様のおゆるしを得て、大奥の女中たちをひきつれて、鶉狩りを催すときいた」

「…………」

源四郎は、これをきいて、はじめて、

――そうか。

と、合点した。

先日――彼処を過ぎようとして、胡乱の者と見とがめられて、追いはらわれようとしたのは、そのためであったのだ。遊猟の催しが決定すると、一月前から、駒場野は、厳重に警戒されて、立入禁止となるのであった。

「伊豆守様」

「なにか？」

「先日、駒場野において、柳生道場よりつかわされた警衛の者四名が、斬り仆されたこと、すでにおききおよびかと存じます」

「そちのしわざか？」

「やむを得ず――」

「ふむ」

伊豆守は、源四郎と眸を合せて、ちょっと、思案していたが、

「大久保彦左衛門に、意を含めて、供をさせよう。……たぶん、但馬守は、あの一件によって、殊更に警備をものものしくすることはあるまいとは思うが、そちの行動をたすける手段は講じておかねばなるまい。大久保の老人が適任であろう」

と、言った。

この時であった。

源四郎が、急に、眼光鋭く、天井を仰いだのは――。

伊豆守は、はっとなって、源四郎の視線を追って、天井を見あげた。

しかし、なんの気配も、感ずることはできなかった。

源四郎を見やると、その視線は、すこしずつ、天井を移動していた。

天井裏を音もなく忍んで行く者を、的確に、目で追うているのであった。

伊豆守は、自分の脇差の鯉口を、音のせぬように切って、抜きざま、柄を先にして、ぽんと、源四郎へ投げた。

源四郎は、受けとるがはやいか、無言の気合こめて、それを、天井の一点めがけて、びゅっ、と奔らせた。

ぶす……と突き立ちかたに、あやまたなかったと知っておいて、源四郎は、

「ごめん――」

と、伊豆守にことわると、三の間へ馳せもどって、おのが差料を手づかむや、ツツツ……と、廊下へ走り出ていた。

伊豆守の方は、脇差の刃を、すうっとつたい落ちる血汐に、

「おお……」

と、ひくく、うなった。

そして、脇差が、わずかに、ぴくと動くのをみとめて、

――抜きとったな！

と、さとって、源四郎に声をかけようと、頭をまわした。

その時、源四郎は、すでに、雨戸をはずして、庭さきへ降り立っていた。

伊豆守は、家臣たちを呼ぼうと、かたわらの銀の鈴へ手をのばしたが、――いや、と思いかえした。

――源四郎なら、遁しはせぬであろう。

源四郎が、追跡のしかたを充分心得ている安心感であった。

大名屋敷の構造というものは、家柄、地位に応じ格式に随う厳重な規定に律せられていた。たとえば、正門の両側にある両番所の屋根を破風造りにするか、庇作りにするか、石垣の畳出し出格子の構えをどうするか、――それぞれ、外様、譜代、石高などで、ちがっていて、自儘勝手はゆるされていなかった。霞ヶ関井伊屋敷の赤門、外桜田黒田屋敷の黒門、本郷加賀屋敷の百間につらなるなまこ壁の長屋に一個の窓も設けぬ所謂めくら長屋など、例外はいくつかあったが、まず、建物の構造は、どんなに大きくても、完全に幕府の引いた設計図に則っていたのである。

したがって、これを悉知している上に、駿府において、いくたびとなく、大きな屋敷に忍び入った経験をもっている源四郎には、曲者が、どこから姿をあらわして、どんな逃走路をえらぶか、あらかじめ、わかっていたのである。

はたして――。

源四郎は、月下に、くろぐろと甍を光らせている大屋根の一端——稚児棟に、一個の影が、忽然とあらわれるのを見た。

と——、なにを考えたか、源四郎は、すばやく、つくばいのうしろの植込の蔭へ、身をひそめた。

曲者は、その稚児棟から、一本の綱をたらすと、すべるというよりも、落下といった迅さで、地上へ降り立った。

——はて？

源四郎は、月光を透かして、曲者の小わきにかかえられている物を見た。

——千両箱らしい。

——盗賊であったのか。

傷は、決して浅くないはずであった。

にも拘らず、盗んだ金に対する執念をすてきれないでいる、とみえた。

——いい度胸だ。

源四郎は、植込の暗闇の中で、苦笑した。

通り魔にも似て、庭園をかすめて行く速影を、目で追いながら、

——奇妙な走りかただな。

と、感じた。

忍者のそれともちがっていた。傷ついた脚で駆けるのなら、そうと見てとれるはずである。片手を懐中にしているので、傷はそこに受けていると判る。

重い千両箱をかかえての、その素晴らしい迅さであった。

もし、千両箱をかかえていなければ、とうてい、源四郎の脚力をもってしても、追うことは不可能に相違ない。

千両箱をすてないでいてくれたのを、幸いとしなければならなかった。

曲者が、大きな池にひき込んである可成りな水幅の流れに沿って、常磐木の繁みの中へ姿を消すのを見さだめておいて、源四郎は、矢のように、母屋の前を延びている寄敷石を疾駆した。方向は、ちがっていたが、これは、さきまわりするためであった。

源四通の推測たがわず、曲者が、屋根から抜け出たのは、水門からであった。

水門は、勿論閉めてあり、流れはそこで溢れて、小さな滝となって、外の広い溝渠へ落ちているのであった。

曲者は、滝に乗って、大きな魚のように、はね出て来た。

溝渠から、森（しん）としずまった路上へはいあがって、ぶるっと、身ぶるいすると、

「やられたわい！　卍（まんじ）の黒兵衛、一生の不覚！」

と、つぶやいた。

いっそ、あかるい調子だった。

それから、小走りに、向いの老杉の林へ入って行った。そこに、自慢するに足りる逞しい馬を、待たせてあったのである。

愕然としたことであった。

もうこちらのものだ、と緊張を解いて、そこへ近づいた黒兵衛は、二間のてまえで、棒立ちになった。

　おのれの馬には、すでに、人がまたがっていたのである。

　黒兵衛は、思わず口からほとばしろうとしかけた吶号をぐっと嚙むと、じりじりとあとずさった。

　ぱっと身をひるがえそうとした瞬間、馬上から、

「待て――」

　と、声が飛んだ。

　間髪を入れぬ鮮やかな呼吸による制止は、黒兵衛が敵の強弱を知るに機敏なだけに、効果があった。

　――敵わねえ！

　黒兵衛は、さとった。

　源四郎は、木漏れの月光に、微笑をみせた。

「この馬は、お前がえらんだからには、駿足ぶりは先刻承知だろう。手傷を負うて、千両箱をかかえておっては、いかに神速の脚をもっていても、逃げ終せはすまい」

「へい――」

「あきらめるがよい」

「降参つかまつります。これは、そちら様へお返しいたします」

　黒兵衛は、千両箱をさし出した。

　源四郎は、受けとらず、

「貴様、跛だな」

「左様で――」

「生来のものでなければ、あのように迅くは走れまい。何処で修業をした？」

「猿同然の育ちかたをいたしましたので……」

「ただの盗賊か？」

「てまえが、何かほかに目的があって、忍び込んだと仰言いますのか？」

　これは、憤然とした様子で、反問されたことだった。

　盗賊は立派な職業で、他人の秘密をぬすんだり、女や殺人を目的とする者と同一視されてはたまらぬ、というわけであったろう。

　源四郎は、肚のうちで、苦笑したが、態度はきびしく、

「伊豆守殿とわたしの会談をぬすみきいた上からは、ゆるせぬ」

　と、きめつけた。

「耳があるからにはきこえました。したれど、それは、てまえのかかわり知った事柄ではありませぬわい」

「盗賊を信用するわけにはいかぬ」

「お武家！」

　黒兵衛が、仰がせた面相には、ひどく真剣な色があふれていた。

「されば、おうかがいつかまつる！」

「むかし、荘子とか申すえらい御仁が言うた言葉を、貴方様はご存じでありましょうかな。鉤を竊む者は誅せられ、国をぬすむ者は侯たり、とな。金を奪う者は殺されて、国をうばう者は王となるとは、これは、いかがなものでございましょうかな。……山猿の家に生れた者と、弓馬の家に生れた者とのちがいで、一方は金をぬすみ、片方は国をぬすむことに相成りますが、ぬすむことにおいては、かわりはございますまい。しかるに、武士の一言を金鉄とし、盗人の一言を嘘のかたまりと、思い召さる。いやはや、虫のよい考えかたではありますまいか。……この卍の黒兵衛は、おのれの利欲のために、金を盗みはいたしまするが、人を殺したおぼえなどありませぬぞ！」

「賢君は、国を収めて、仁政を敷き、人民をうるおすぞ。お前は、金を奪って、貧者にわかち与えたことがあるか？」

「………」

黒兵衛は、ちょっと、とまどった。

「どうだ、黒兵衛？」

「それはな、時には……」

「気まぐれにか？」

「まあ、そんなわけでありましょうな」

「国を収めて、政を為すのは、気まぐれでは出来ぬぞ。成程、盗賊にも三分の理はある。しかし、七分の非を、理屈でごまかすことはゆるされぬ」

「わかりましたわい。……首を刎ねようと申されるのじゃな。ここらあたりが、年貢の納め時かも知れませぬて。おやりなされ」

黒兵衛は、いさぎよく、地べたへ坐ると、目蓋をとじた。

幾秒間かが、過ぎた。

黒兵衛は、目をあけて、ふり仰いだ。

「おやりなさらぬのか？」

不審げにうながされて、源四郎は、しずかな口調で言った。

「お前は、信用できる男とみた」

「対手次第でございましょうて――」

黒兵衛は、ちょっと、皮肉に、やりかえした。

「わたしでは、不服か？」

「なんの……」

のこのこと立ちあがった黒兵衛は、ことわりもせずに、千両箱を、源四郎の前へ――鞍へのせると、馬の口を取った。

「まず、てまえの天井裏の忍び歩きを、看破した御仁は、これまで、ただの一人もございませなんだ。貴方様が、はじめてでございますわい。おまけに、みごとに、小刀を、投げ刺されましたて。いや、それのみならず、こうして、馬までお占めなさいました。……家来にならないわけに参らぬではございませぬか」

そう言って、いかにも、うれしそうに、笑い声をたててみせたものだった。

乱れ萩

おそろしくだだっ広い道場であった。太い丸柱が二本、大床から天井をつらぬいているのは、そのためであった。

簡素な構えであり、天井板には雨漏れの汚染がひろがり、羽目板は、いたるところ破れて、凄じい稽古ぶりを物語っていた。

同じ、将軍家師範でも、柳生道場にくらべて、あまりの貧しい眺めに、訪客は、おどろかされる。

正面の一段高い畳敷きの壁には、

「水月之本心」

と筆太く記された軸がかけてあった。これは、伊藤一刀斎の剣法書中にある一句で、次郎右衛門忠明がしたためたものであった。

これをかかげた頃は、さしも広い道場も、びっしりと、門弟たちによって、うずめられていたのだが、その師が逝くとともに、櫛の歯を挽くように、その頭数は急速に減っていて、いたずらに道場の広さばかりが目立つようになっていた。

いま——。

道場の片側にならんでいる者は、わずか二十名にも足らない。

反対側に座を占めているのは、叩門の武者修業者で、七八名をかぞえる。これは、柳生道場では見受けられない風景であった。但馬守は、他流との試合を厳禁していたのである。

次郎右衛門は、望みの者には、真剣試合もゆるしたのであった。

いっさいが、両派は、対蹠的であった。

ともに、始祖の人となりが反映したといえる。

その家柄にして、すでに格段の差があった。柳生家が、小柳生城の城主であったのに比べて、神子上（みこがみ）家は、伊勢神宮の神職荒木田家に属する神苑衛士（えじ）にすぎなかった。のみならず、次郎右衛門が物心ついた頃は、その職からも追われて、松坂在にあって、貧窮の生活であった。

十六歳で、故郷を出奔して、二十二歳で、伊藤一刀斎の門に入ることを許されるまでの時代、次郎右衛門は、野盗の群にも交った、という。

次郎右衛門が、その姓神子上氏を変えて、小野姓を名のったのは、北条安房守の周旋によって、幕府へ禄仕することになったからであるが、安房守が周旋したについては、次のような、世に知られぬ一事があった、とつたえられている。

師一刀斎にわかれて、飄然と江戸へ出た次郎右衛門は、知人の宅に寄って、柳生邸の所在を問うた。

知人が、訪問の理由を訊ねると、但馬守と勝負を決せんと志している、とこたえた。

知人は、驚いて、但馬守に真剣で挑んで生還した者は未だ一人もない、といさめた。

次郎右衛門は、聴き入れずに、柳生邸におもむいて、伊藤一刀斎の嫡伝二祖の身として、但馬

守に真剣試合を申入れたい、と口上した。
　しばらく、玄関に待たされた次郎右衛門は、やがて、取次の者から、控えの間に大小を置いて、道場へ通るように、と告げられた。
　道場において、次郎右衛門は、さらに、半刻、坐らされた。
　あらわれた但馬守は、肩衣袴のいでたちで、正面の主座に立つと、冷やかな眼眸を、次郎右衛門にくれて、
「わが道場の掟として、真剣試合を求めて来た者に対しては、手討の作法をもって致すが、左様心得て、防ぐがよろしかろう」
　と、あびせた。
　すなわち、刀を与えぬ、というのであった。
　次郎右衛門は、平然として会釈して、立ちあがると、武者窓に寄って、庭をのぞき、そこで焚火している小者に、声をかけて、燃えさしの薪を所望した。
　窓から、それを受けとった次郎右衛門は、微笑しながら、
「これで、お対手つかまつる」
　と、言いはなった。
　恰度、書院に客となっていた北条安房守が、この奇妙な試合を、覗いたのである。
　但馬守は、一合も交えぬうちに、こらしめの太刀をくわえる余裕をふりすてて、全身に猛気をみなぎらせることを余儀なくされた。薪ぎれを構えた次郎右衛門のすがたは、陽炎のように、とらえどころのない玄妙不可思議な神気を放っていたのである。

　対峙半刻ののち、次郎右衛門のわずかな動きに隙を見て、但馬守が、白刃をふりかぶった——
　その刹那、次郎右衛門は、するすると、進み寄った。
　不動縛りに遭ったように、但馬守が、ふりおろせぬままに、かっと双眼をひき剝いていると、次郎右衛門は、
「ご免！」
　と、ひくくことわって、薪ぎれの先の炭を、つと、但馬守の胸につけておいて、軽やかに、一間余、跳び退った、という。
　後日、但馬守は、安房守に、なぜふりおろさなかったか、と問われて、
「挙げたおのが太刀に、虚しさをおぼえたと、申すよりほかはない。忠明の眼光は、人間の放つものではなかった、といまも感じて居る」
　と、こたえた、とつたえられている。
　あるいは、この試合は、巷説にすぎぬかも知れないが、両者の技倆の差を、世間で、みとめていたのは、疑いない。
　ただ——。
　神技を有つだけに、次郎右衛門の性格もまた、尋常ではなかったのである。
　次郎右衛門は、将軍家師範たるの品格を保つよりも、まず、兵法者の節義を守ったのである。
　さる大名が、一日、次郎右衛門に、わが藩中に、貴所の手筋を見たい、と願う者があるが、と所望した。

次郎右衛門は、それは立合をのぞむことであろうから、御遠慮なくお出し下されたい、とこたえた。

藩士が木太刀を構えるや、次郎右衛門は、一瞥して、

「その未熟で、この忠明の手筋を見たいとは、僭上であろう！」

と、きめつけた。

かっとなった藩士は、蒼白になって、じりじりと間合をつめた。

次郎右衛門は、木太刀を携げたなりで、無造作にすすむや、気合もろとも、藩士の木太刀を打ち落し、さらに、その双の腕をも打ち据えた。

藩士は、昏倒して、小姓たちにかかえられて、引取られたが、生涯腕の自由を失ってしまった。

その座の空気は、まことに、興ざめたものであった、という。

ある時――。

次郎右衛門は、将軍家に対しても、みじんの阿諛もしめさなかった。

秀忠が、側臣たちを相手に、剣道上の自説を述べたときいた次郎右衛門は、あとで、面前に坐るや、

「とかく、兵法と申すものは、中程の技を知ると、理論に賢くなって、腰の刀を抜く前に、それを述べたてるきらいがございます。剣の理は、生死の境に立たぬかぎり、これを悟るを得ず、座上の兵法は、畠の水練と同様、これを避けて、つつしまねばなりませぬ」

と、直言したことだった。

あるいは、両国橋畔に小屋掛けた剣術興行者の脳天を、容赦なく、鉄扇でひと挫きに打ち割って、血反吐を噴かせたり、あるいは、殿中、諸侯のつらなる座で、但馬守に向って、刃びきの刀を持って稽古をせぬ柳生流は、信ずることができぬ、と高言したりした次郎右衛門であった。

兵法の烈しい一面のみに拠って、己が節義を守ることのみに頑なで、秋霜の剣身をもって生涯をつらぬいた次郎右衛門が、自然、将軍家の前から遠ざけられたのは、またやむを得なかった。

それでもまだ、次郎右衛門が在世である時代は、小野一刀流は、その神技の魅力をもって、多勢の門弟をまねき寄せることができたのである。

次郎右衛門が逝って三年――。

小野道場は昔日の隆盛は遠い夢となり終せていた。

それだけに――。

現在、道場をまもる面々は、いずれも、血を吐かんばかりの苛烈な稽古に堪え残った、剣気を満身にたくわえた兵法者ぞろいであった。

そして、門弟の頭数は、日々にまばらになりつづけてはいるが、一剣をもって世間に名を揚げようと志す修業者の来訪は、ひきもきらない皮肉な現象を呈していたのである。

いま――。

道場の中央に仁王立ちになって、向って来た修業者を、一合のもとに、打ち据えて、

「次っ――」

と、叫んだのは、高足筆頭の高垣弥九郎であった。

「それがしが……」
　こたえて立ちあがったのは、六尺余も上背のある、見るからに剽悍な身ごなしの若い牢人者であった。
「うむ！」
　弥九郎は、対手が一礼して、刃びきの大刀を構えるや、にやりとした。
　かなりの修業を積んだな、と見たのである。
「おうっ！」
「む、む、むっ！」
　切尖と切尖が、ふれあった、とみた瞬間——。
　弥九郎が、大床を蹴って、びゅっと、袈裟がけに、唸り下ろし、これを、牢人者は、がっきと、切羽で受けとめた。
　弥九郎の顔面も、牢人者の顔面も、みるみる朱を刷いた。
「すげえぞ！　すげえぞ！……そこだぞおっ」
　力と力の凄じい嚙みあいに対して、往還に面した武者窓から、われを忘れた声援がとび込んで来た。
　小さな手で、格子をつかみしめて、自分もまた、まっ赤に力んだのは、仇討小僧の修太郎にまぎれもなかった。
　人の好さそうな町人が、肩馬をしてやっていたが、
「ひゃっ——お、おい、坊、お前、漏らしたぞ！」

　と、あわてて、首をちぢめて、修太郎の股をつねった。
「うるさいっ！　じっとしていろ！」
　修太郎は、家来を叱りつけるように叫んで、試合に目を食いつけている。
　町人は、腹をたてるよりも、あきれて、
「なんちゅう小僧じゃ」
　背筋をつたい落ちる冷たいものに、しかめ面をしながら、修太郎の両脚を、肩からふりはずした。
「こん畜生っ！　ばかやろ！」
　修太郎は、ぶらんと宙へつりさがった。
　それでも、弥九郎が、牢人者を、大床へ転倒させるまでを見とどけておいて、どすんと地べたへ落ちた修太郎は、はね起きざま、
「よおし！」
　と、叫んで、きらきらと目をかがやかせつつ、いっさんに、正門へむかって、駆け出した。
　大きな冠木門から、玄関まで、白砂を敷いた道が、一町もつづいていて、秋の陽ざしを受けて、人影もなく、森とひそまりかえっていた。
　修太郎は、門をくぐると、胸をはり、大手をふって、歩いた。
　玄関は、杉戸でぴったりと閉ざされてあった。
「たのもう！」

思いきり声をはりあげて案内を乞うた。
しかし、待っていても、なんの応答もなく、遠く、道場からの掛声と大床をふみ鳴らす音が、微かにきこえるばかりであった。
「たのもう！」
修太郎は、のどが裂けるばかりに、どなった。
五度もくりかえしたろうか、やっと、足音がして、杉戸が開かれた。
若い門弟が、顔をのぞけて怪訝そうに修太郎を見おろした。
「なんだ？」
「卒爾ながら――」
修太郎は、一人前の兵法者として振舞う心構えよろしく、
「若狭国大谷吉邦の家臣室伏修太郎と申す。小野先生に折入ってお願い申したき儀があって、まかり越しました。お取次ぎ下さい」
「…………」
若い門弟は、うすぎたない少年が、怯じず臆せず、堂々と名のりあげたので、呆気にとられて、ちょっと言葉もなかった。
「お取次ぎ下さい」
修太郎が、かさねて促すや、
「何の用だ？」
と、つっけんどんに問うた。

「お会いした上で申上げる」
「先生はご他在だ」
「では、いま、道場で、武者修業者たちをあいてにしておられる御仁でよろしい」
「お前は、弟子入り志願か？」
「いいや。おいら――拙者は、当道場のかたがたのご援助をお願いに参ったのです」
「何の援助だ？」
「おてまえは、取次いで下されば、よろしいのです」
「たわけ！」
若い門弟は、吐きすてると、ぴしゃっと杉戸を閉めて、ひっ込んでしまった。
「ちぇっ！　なんだ、おいら、ちゃんと作法をまもったんだぞ！　無礼な――」
修太郎は、ぷんぷんしながら、しばらくそこに佇んでいたが、
「よおし！」
決心すると、すりきれ草履をぬいで、式台に足跡をぺたぺたと捺しながら、杉戸へ寄って、ひき開けた。
畳敷きの中廊下が、まっすぐに、はるか奥まで通じていた。
修太郎は、いささかもためらわずに、どんどん入って行った。
広い母屋は、空家のように、人の気配がなかった。
つきあたりを鉤手にまがって、中庭に面した廊下をつたって行くと、そこが道場だった。

「他流者控え」

そう記された杉戸を開くと、その板敷きの部屋には、三人ばかりの修業者が、だらしなく、身を横たえていた。いま、弥九郎に打ち倒された連中であった。苦痛に堪えられなくて、ひくい呻き声をもらしている者もあった。

修太郎は、彼らに一瞥をくれただけで、さっさと、通り過ぎて、道場へ出た。

弥九郎は、第何番目かの修業者と、向い立ったところだった。

修太郎は、修業者たちの末座に坐って、目を光らせた。

その勝負は、あっけなかった。

修業者は、木太刀を天井へはねとばされて、おのれは二間をだだっとよろめいて、羽目板へ突き当り、崩れ込むとそのまま、起きあがれなかった。

「剣の道は、刻苦の修業を第一とするが、その前に、まず、おのが五体に、はたして兵法者たり得る力があるやいなやを思うべきだ」

弥九郎が、きめつけるように、言った。

修太郎は、そうだ、とばかり、うなずいた。

——おいらには、あるんだ！　天下一流の兵法者になる天分が……。

修太郎は、心で、さけんだ。

「次——」

弥九郎が、命じ、自分の番を待っていた修業者は、極度に緊張した面持で、

「おねがいつかまつる」

と、一礼して立ちあがった。

この時——。

一人の門弟が、急ぎ足に入って来て、弥九郎に近づくと、

「源四郎の宿舎をつきとめましたぞ！」

と、告げた。

弥九郎は、「よし！」とみじかくこたえて、

「勝負は、本日はこれまで——」

と、言いわたし、門弟へ木太刀を渡すと、奥へ入って行った。

神子上（みこがみ）源四郎は、帰府以来、まだ一度もこの古巣へ姿を見せていなかったのである。

いつの間にか——。

修太郎は、道場からぬけ出して、正門の外に立っていた。

高垣弥九郎は、なかなか出て来なかった。

——はやく、出て来ないかなあ。

待ちくたびれて、修太郎は、陽だまり塀へよりかかると、大きなあくびをした。

修太郎は、弥九郎が奥へ入ったあとで、門弟たちの私語を、耳ざとくきいたのであった。

「高垣殿は、源四郎を斬る存念だろうか？」

「決っている。きっと斬るに相違ない」

「しかし、先生（当主忠常のこと）のおゆるしがなければ、軽々しくは勝負できまい」

「いや、先生ご自身が、源四郎が戻れば、ゆるさぬ胆（はら）でおられるのだ」
「やるとすれば――これは、観ものだの」
「源四郎が、この三年間に修業を怠っていなければ、高垣殿も、危いぞ」
修太郎は、私語を交す門弟たちの緊張しきった顔つきを見やって、
――そうか！　あの強いさむらいが、なにか悪いことをして、かくれていた奴をつかまえて、やっつけるんだな。おもしろいぞ！
と、心でさけび、弥九郎のあとについて行こうと、思いきめたのであった。
――どうしたんだろ？　やっつけに行くのをやめたんじゃあるまいな。やめたのなら、つまんねえや。おいら、まだいっぺんも、兵法者の真剣勝負を見たことがないんだもの。見せてくれないかなあ！
じっとしていられず、修太郎は、いきなり、小刀を抜きはなつと、明るい宙を、すいっ、すいっ、と飛んでいる赤とんぼを狙って、
「えいっ！」
と、小軀をおどりあがらせた。
「あら――修太郎さん」
そこへさしかかった市女笠（いちめ）の娘が、おどろきの声をあげて、立ちどまった。うしろに、荷をせおった老僕をともなっていた。
ひょいとふりかえった修太郎は、
「やあ、おねえちゃんか」

にこっとした。
鈴森八幡の境内で会ったふたりであった。
美音（みね）は、家出した弟にぶっつかったように、白い顔によろこびの色をうかべて、近づいて来ると、
「よかった。ぶじでしたね」
「あたりまえじゃないか。いくら、おいらに、八幡さまのお加護があったって、いきなり、柳生但馬守が討てるもんじゃないや」
「そ、そんな、大きな声を出して……人にきこえますよ」
美音は、はらはらして、あたりを見まわした。
修太郎の方は、けろっとした面持で、
「おねえちゃん、どこかへ旅へ出るのかい？」
と、訊ねた。
「豊島の清光寺というお寺へ行くのです」
「へええ――おねえちゃん、尼さんになるのかい？」
「いいえ、とんでもない」
「じゃ、どうして、お寺へなんか行くんだい？」
「わたくしは、ひとりでくらさなければならなくなったのです」
「おいらと、同じか」

「そうですね」
美音（みね）は、さみしく、微笑した。
「修太郎さん、一緒に来ませんか？」
「よせやい」
修太郎は、つよく、かぶりをふった。
「だれが、お寺へなんか！　おいらは、ひとりぼっちでも、大きな志があるから、さびしくなんかないぜ。おねえちゃんは、生きて行くめあてがないから、そんなに、しょんぼりした顔をしているんだろ。お寺へなんか行ったら、いよいよ、さびしくて、死にたくなるぜ」
美音は、少年の鋭い観察力にうたれて、
「ほんとにそうですね。わたくしには、いま、生きて行くめあてがありませんものね」
と、声音をしめらせた。
「だめじゃないか、しっかりしなくちゃ。……おいら、見るものも聞くものも、みんなおもしろいぜ。これから、おいら、兵法者同士が真剣で勝負するのを見に行くんだ」
「まあ！」
美音は、この時はじめて、この屋敷が、小野道場であることに気がついた。
「この道場の方々が、果し合いをなさるのですか？」
「そうだよ。この道場で一番強いさむらいが、なにか卑怯なことをして身をかくした奴を――源四郎とかいう奴を、やっつけるんだ」
源四郎――ときいて、美音の顔色が、変った。

「源四郎というと、神子上（みこがみ）源四郎様のことですか？」
「知っているのかい、おねえちゃん、そいつを？」
「神子上源四郎様なら、悪い方ではありません！」
美音は、じぶんに言いきかせるように、きっぱりと言った。
「ふうん、そうなら、いよいよ、おもしろいや。……強いんだろう？」
「ええ、お強いのです！」
この時、ようやく、高垣弥九郎が、大股に、門から出て来た。

小野道場は、溜池ぎわにあった。
弥九郎は、そこから、まっすぐに外濠に沿うて、芝口へむかって、歩いて行った。このあたりは、武家地の中でも、大きな大名屋敷ばかりが、宏壮な構えをつらねていた。
江戸区劃は、いまや、整然として、成っていた。
江戸の街衢（がいく）は、江戸城を中心に、外濠を境界として、御曲輪内と御曲輪外にわかれ、さらに、外濠の外周において、府内と場末とに区分されていた。
府内と場末の区分は、下馬定杭というもので標示されていた。
すなわち、
「この杭より内、小荷駄賃馬口附之もの不可乗者也」
と記された下馬定杭が立てられて、小者、中間、百姓、馬子らは、それから内へは馬を乗入れることを禁じられていたのである。

そして――。
府内のうちでも、御曲輪内に接する地域は、大名の上屋敷が多く、武家地の一等地であった。
この芝においては増上寺以北一帯が、それであった。
ちなみに、武家地というのは――。
上屋敷、中屋敷、下屋敷、添屋敷、蔵屋敷、抱屋敷、大縄地、町並屋敷などの名称区分があった。
上屋敷は、主人の住居であり、下屋敷は、邸第の修理、火災などの際一時移転するところ、または致仕後の隠居所で、中屋敷は、大諸侯のみがこれを所有していた。これらの屋敷地は、いずれも幕府から下賜されたものであった。
添屋敷は、屋敷に添地のあるもの、蔵屋敷は、倉庫のあるもの、抱屋敷は、地代屋敷とも称して、以前有税地であった百姓地を買収したもの、大縄地は、大番以下の旗本組屋敷、そして、町並屋敷は、医師、絵師、坊主、能役者、女官などに賜ったものであった。
この武家地が、江戸の大半を占め、町人の住む町屋が、残された狭小な地域にひしめきつつ、江戸の市街は、日々めざましく拡がりつつあったのである。
弥九郎が歩いて行くのは武家地中の一等地であったから、広い往還には、ほとんど人影も見あたらず、西に傾きかかった秋の陽をあびて、片側がかげり、一方の高塀だけが、その白壁を浮きあげて、もの静かな、美しい眺めであった。
弥九郎より、二十間もおくれて、修太郎と美音が、かげった側をひろって行く――。
美音は、修太郎にさそわれたわけではなかった。修太郎が、弥九郎のあとを尾けはじめるや、

じぶんも、思わず歩き出していたのであった。
やがて――。
桜川の大通りを抜けて、弥九郎がくぐったのは、曹洞宗の巨刹――万年山青松寺の総門であった。
文明年間、太田持資が、僧雲岡に命じて起さしめた寺院であった。大永四年、兵燹に罹ったが、天文年間に、僧徳陽が再建した。後方に、含海山が峙立し、前を桜川の清流がながれ、眺望においては、江戸随一を誇っていた。
寺内に、吟窓院、清岸院、伝叟院、考寿院の子院があった。
弥九郎は、そのうちの考寿院にむかって、歩いて行った。
境内の落葉を掃き集めている納所をとらえると、
「神子上源四郎と申す者が、逗留いたしている由、きいて参ったが……」
と、問うた。
「離れに居られまするが――」
うなずいた弥九郎は、ちょっと、空を仰いで、時刻をはかってから、
「おつたえ願おう。このとなりの愛宕権現の北にある祇園社の前で、高垣弥九郎が、待って居ると」
「すぐでございまするか？」
「左様、急ぐ」

黄昏が、すぐにやって来ることを知らせるように、空には、薄けむりのような昼月が、かかっていたのである。

立去って行く弥九郎の巨軀を見送った納所は、

「ひどう目つきの鋭い御仁であったが……同じ兵法者でも源四郎殿とは、ちごうて、ああ剣気がむき出しではのう」

達識の能化めいた口ぶりで、つぶやきながら、裏手へまわって行った。

羅漢堂と経蔵にはさまれて、一宇の藁葺きの庵室が建っていた。当寺の英傑としてうたわれた俊徳和尚が、三年間、ここで黙照枯坐し、開祖道元禅師の著した「正法眼蔵」九十五巻を、暗誦しつづけたところであった。

源四郎は、ここを借りて、起臥していた。

師の次郎右衛門が、住職と親しかったのである。

源四郎は、端座して、差料を抜きはなち、じっと見入っているところであった。

先日、空斎という奇妙な人物から指摘された不吉な剣相を、ふと思い出して、あらためて、しらべてみたのである。

もとより、源四郎も、剣に生きる人間であるからには、刀には剣相というものがあり、これによって吉凶を観ることを、一応は心得ていた。

ただ、源四郎としては、そういうものをあまり信じてはいなかったのである。

空斎は、この無銘の大刀を黙視したのち、村正作と断定して、剣相を大凶と視たのであった。

村正の刀は、一般の通念として、象、鍛ともに相州の風情があって、中心の形は本が太く、先が細く、七八分目のところから、入ってたわんでいるのは、武藤正宗と似かよい、刃は沈んで、錵が多く、匂いが深く、鋩子の中もみだれて、かえりが深い、とされている。

しかるに――。

源四郎が、いま立てている白刃の、反のすくなさ、丁字みだれ、砂流し、水晶のように白く冴えた刃色など、まったく、村正の特徴とは正反対のものであった。

――空斎は、何故に、最も村正らしからぬこの刀を村正作と断定したのか？

源四郎には、誤認とは思われなかった。

――なにかの、こんたんがあってのことであろうか？ それとも、まことの村正こそ、これであろうか？

いずれは、あの薄気味のわるい人物をとらえて、疑惑を明らかにしなければならぬ、と思う……。

――はたして、この火焔に似た乱れや、黒星や、三つの月が大凶か？ もしかすれば、大吉ではないのか？

白刃を凝視しているうちに、源四郎のからだのうちには、むしろ、油然として、澄んだ力が涌いて来ているのであった。

「神子上殿」

庭さきに、納所の声があった。

こたえて、白刃を鞘におさめた源四郎は、障子を開いた。

「ご用か――?」
「高垣弥九郎と申されるおさむらいが、このとなりの山の祇園社の前で待っている、と告げて行かれましたが」
「それは、どうも――」
源四郎は、べつに眉宇も動かさずに、合点してみせた。
納所が行ってしまうと、源四郎の孤独の顔は、急にきびしいものに変った。
――やはり、弥九郎が来たか。
予測していたことであった。
十年間、相弟子として、道場ですごした間柄でありながら、ついに、性格の相違から、心をゆるし合うにいたらなかった両者であった。
江戸へ帰れば、柳生道場の面々を敵としてたたかわねばならぬことは当然の覚悟として、小野道場にのこる者のうちで、無断出奔した自分をゆるさずに、討ちに来るのは、おそらく弥九郎であろうかと――これも覚悟のうちに加えておいた源四郎であった。
――弥九郎のことだ。三年のあいだに、業前を、いちだんと冴えさせて居ろう。
曽て、道場にあっては、源四郎の迅業（はやわざ）は、弥九郎をしてしばしば、大床上に立往生せしめたものであった。
源四郎は、兄弟子に対する礼儀から、その瞬間に、太刀を納めて、決して、撃ち込むことをしなかった。

その記憶のかぎりでは、弥九郎と立合って、敗れるとは思えなかった。
しかし、三年の月日は、若い兵法者にとって、剣理を極める上から、決定的な期間といえる。
弥九郎は、その間、常日道場にあって、練磨を怠ってはいないはずであった。
それにひきかえ、源四郎は、師の遺志を継いで、駿府におもむき、陽を避け闇に乗ずる隠れぐらしをつづけ、正しい剣の修業とは全く無縁であった。柳生道場から遣られた隠密を七名まで仆したとはいえ、これらは、ことごとく、暗夜中の一撃によるものであり、正々堂々たる勝負ではなかったのである。仆して、血顫（ぶる）いするたびに、名状しがたい自己嫌悪におそわれたのであった。
事（わざ）においては、すでに、弥九郎に敵わぬ、とさとる源四郎であった。
ただ、弥九郎とたたかって、おのれの剣に互角の冴えをしめし得るかも知れぬと、源四郎に考えられるのは、それは、三年の暗黒生活が、いつか、一心活殺からはなれる無形の構えをおのれに与えている――その静かな心境でいられるからであった。
師の師たる伊藤一刀斎景久は、その「剣法書」に記している。
「構えは、天中地陰陽の五形なり。古伝に、構えを、陰陽の二つに定む。体中の剣、剣中の体というは是なり。陰の構えに陽の変あり、……陽の構えに陰の変あり。……構えを以て利せんと欲する者は、外、実にして、内、必ず虚す。足を構えに心をとらるるというなり。内外虚実の差別なきを、当流は無形の構えという。誤って、心を構えにとらるる者は、合う時は、即ち勝つといえども、合わざる時は、忽ち負く。必勝は構えにあらず、事理（わざことわり）の正しきにあり」
すなわち――。

この無形の構えを、一刀斎より承けたのが、師次郎右衛門忠明であったのだ。

源四郎は、師とともに、数日の旅をした際、その無形の構えを会得した瞬間のことを、きかされたことがあった。

それは——。

一刀斎の命令によって、兄弟子小野善鬼と立合って、これに勝った瞬間であった、という。

「わしは、その時、自分が勝った、とは思わなかった。喪神していた、といえる。善鬼の屍に気づいたのは、師の声でわれにかえってからであった」

次郎右衛門は、そう言ったものだった。

その立合いは、盛夏、天も地も暑熱に灼かれて、ものみなが息をひそめている真昼、ぼうぼうたる相州小金ヶ原の原頭において、おこなわれたのであった。

その前後、小野善鬼は、師一刀斎と諍っていた。徳川家康より使者があって、高弟の一人を召抱えたい、と慫慂せられて、一刀斎は、二人つれているうち、弟弟子の方の神子上典膳を推挙したのであった。これが、善鬼を逆上させたのである。善鬼と典膳の腕前は、あきらかに差があった。典膳は、いまだ一度も、善鬼を圧したことがなかった。当然、善鬼は、師が自分を、幕府へ推挙してくれるものとばかり信じていたのである。

淀の夜舟を漕ぐ船頭であった善鬼は、無学文盲であり、下賤根性をすて得ないままに、そのおそるべき天禀だけをきたえあげていたのである。

一刀斎は、両者に、この原頭に立ち残った者に、伝家の宝刀瓶割と極意の印可書を与える、と

告げた。

瓶割と名づけられた宝刀は、菊一文字であった。菊一文字は、備前福岡の住人、刑部尉則宗で、名匠のために中心に菊の御紋章を鐫ることを許されていたので、この称を得ていた。

革だすきを綾なした善鬼と典膳は、間合一間半をとって、ともに青眼に構えて、相対した。

のちに、典膳は、師から、その石と化したがごとき沈黙のにらみあいが、半刻を移した、と教えられたが、無限の長さともほんの一瞬間とも思いかえされた。

じりじりと間合を詰めはじめたのは、両者とも、全く同時であった。

切尖と切尖が、ふれあう——凄愴たる刃圏内に、二体が容った時、傍らの大石に腰かけていた一刀斎の口から、突如、次の大声が噴いた。

「典膳勝ったり！　なんじの手に、瓶割有りっ！」

その言葉のうちに、典膳は、胸を空けて、ぱっと大上段にふりかぶった。

「うぬっ！」

血噴かんばかりに、双眸のまなじりを裂いたのは、善鬼であった。

師はすでに、典膳に、宝刀を与えていたのである。

善鬼が憤怒をこめて、胴へ送り込む一閃と、典膳が無想のままに振り下す一颯と——いずれが、迅かったか、師の目にも、とまらなかった、という。

血飛沫を、脳天からほとばしらせたのは、善鬼であった。

「南無！」

一刀斎は、屍へ合掌してから、

「行こうか、典膳」
と、喪神している愛弟子を、われにかえらせたのであった。
一剣一理を主として、一心不変の極にいたるのが、この流の主旨であり、一刀流の名もそこから起っている。
一刀斎は、業と理を一体とする剣法によって、勝ちを占めるのを教えたのである。自分が勝たなければ、敵は負けぬ。敵が勝たなければ、自分は負けぬ。自分が勝たないのは、敵が能く守るところを撃つからである。
その逆もまた同じである。故に、自分の負けるところを知ることによって、敵の負けるところを知らねばならぬ。そのために、一刀流は、次の三つの位を編む。
威（不転の位）
移（捧心の位）
写（水月の位）
威とは、静にして、千変を具え、動ぜずして敵を制する。移とは、動じて万化に応じ、左右に同じ勢いをもって移る。写とは、残心の位をいい、水の月を写すがごとく、生死をはなれて、敵の心を写す。
もとより、これを会得するには、秀抜の才能と、異常の刻苦を必要とする。
この教えを承け継いで、いま、弥九郎と源四郎は、たたかおうとしている。
弥九郎には業があり、源四郎には、理がある。

——いかんせん、おれには、瓶割のかわりに、村正が与えられている。
源四郎は、水のように澄んだ心中に、そうつぶやいて、それを携げると、庵室を立ち出た。
方丈にまわって、住職に会い、もしかすれば、このまま戻らぬかも知れぬ、とことわっておいて、足早に、境内を過ぎて、総門を出た。
「あ——この人だな」
かん高い少年の声に、視線をそちらへ向けた源四郎は、
「お——」
と、眉をあげた。
視線がぶっつかると、美音は、羞恥が頬へのぼって、目を伏せると、一礼した。胸に、ときめきが起った。
源四郎は、近づくと、
「わたしに、会いに来られたのか！」
「は、はい」
美音は、うなずいた。
源四郎は、忘れていた美しいものを、思いがけず見出して、かすかな当惑をおぼえた。
「あいにくであった。わたしは、少々いそぎの用を持っている」
「い、いえ……あの——」
あわてて、こたえようとして、とまどう美音にかわって、修太郎が、前に出た。
「ちがうんだ。小父さんの真剣勝負を見とどけに来たんだ。おいらが、ねえちゃんを、つれて来

たんだ」
源四郎は、少年に目をあてた。
とたんに、
「おっ！」
と、おどろきの声を発した。
まじまじと修太郎を見すえた源四郎は、
「……似ている！」
と、ひくいが、断定的に独語した。
「なんだい？　おいらが、誰に似ているんだい？」
修太郎は、不審そうに、くりくりと目玉をうごかした。
「わたしの知りびとに――美しいひとであったが……」
「女かい？」
「うむ――」
源四郎は、うなずいた。
「その女のひとは、若狭かい？」
「いや、若狭ではない」
「それじゃ、ちがわい。おいらのおっ母さんじゃないや。他人の空似だい」
「お前は、若狭か？」

「そうだ。ただし、おいら捨児だ。小浜湾のうちにある赤礁崎という岬の突端に――」
それをきくと、源四郎はいたましげに眉をひそめた。
「お前の名まえは？」
「室伏修太郎」
「室伏？」
この姓には、源四郎は、思いあたるふしはなかった。
しかし、少年の貌を一瞥したとたんに、はっとなった衝撃を、そのままに、ふりすてず、霊感に似たものとして、源四郎は心にとどめておく気持になった。
十余年前――。
源四郎は、志津女というその女性から、ことばにつくせぬ恩顧を受けていた。その女性の必死の庇護がなければ、その時、源四郎は、生命をおとしていたであろう。
わが身の上が、不幸をきわめながらも、志津女は、縁もゆかりもない少年源四郎を、生命にかえてもまもりぬいてくれたのである。
物心ついて以来、母の愛情を享けたおぼえのない源四郎にとって、志津女は、母にまさる婦人として、心に刻まれ、そして、今日まで、一日も忘れたことはない。
――志津女は、どこかに生きている！
そう信じ、いつの日にかめぐり会えると思いきめて来た源四郎であった。その日のためにも、立派な兵法者たらんと、刻苦練磨して来たのである。
志津女と源四郎の別れは、無慚な兵火の渦中においてであり、互いに、その名を呼びあいつ

つ、遠ざかったのであった。

——志津女が、あの後、無事に生命をまもり得て、夫をえらび、この少年を生んだのだとしたら……？

もし、そうであったとしても、この少年を、若狭の海辺へすてているのであれば、志津女は、やはり不幸な宿運からのがれ得なかったことになる。

そう思い至ると、源四郎は、胸の底に微かな疼痛をおぼえた。

修太郎の方は——。

この兵法者が、自分の生みの母を知っているのかも知れぬ、と思ったのは、ほんの一瞬のことで、そんなことよりも、少年の純粋な直感力で、自分が味方すべき立合者はこっちの方だと決めて、勝利を祈る心で、胸をいっぱいにしていた。

——おねえちゃんの言う通り、悪い人じゃなかったんだ。おいら、この人の方が、好きだ！

「小父さん、試合に勝つね？　きっと勝つね？」

「それは、わからぬ」

源四郎は、微笑して、こたえた。

「勝敗は、天のみが知っておろう」

「いいや！　小父さんが勝つよ！　おいら、小父さんの方が、好きだもの——」

その率直な言葉を、かたわらできいて、美音は、心から修太郎をうらやましいと思った。

初対面で、ほんの二言三言交しただけで、修太郎はちゃんと心を決めて、それを、口にすることができるのだ。

とうてい、美音には、そんな勇気は出なかった。

「わたくしも、貴方様が好きでございます。どうぞ、試合に勝って下さいませ」

美音は、言いたかった。いや、胸のうちでは、はっきりと、そう言っていた。ただ、声にして出す勇気がなかったのである。

「では——」

源四郎は、かるく一揖してから、歩き出した。

「おねえちゃん、行こう」

修太郎は、勇んで、ついて歩き出そうとした。

源四郎は、ふりかえってしずかな声音で、

「ついて来ないがよい」

と、こばんだ。

「おいら、真剣勝負が見たいんだ」

「女子や子供の見るものではない」

「ばかにすんない！　おいらただの子供ではないんだぞ！」

憤然と、目を、肩を、いからせて、修太郎は叫んだ。

「修太郎さん、試合まえの神子上様のお心を乱してはなりませぬ。……神子上様は、必ず勝って、ここへお戻りになります。わたくしたちは、ここで、お待ち申しておりましょう」

美音は、修太郎を、やさしく、なだめた。

「いやだ！　いやだっ！　おいら、見に行くんだ！」

修太郎は、狂ったように、だだをこねた。

源四郎は、美音の止める手をふりきって、走り寄って来た修太郎へ、冷たい目をあてて、

「お前は、兵法者になりたいのか？」

「そうだよ、おいら、大望があるんだ！　おいらは、おいらの御主君を殺した柳生但馬守を討つんだ！　おいら、強くならなければならないんだ！」

源四郎は、うなずいた。

「お前の主人は、大谷吉邦殿だったのだな」

「そうだよ！　柳生但馬守が、隠密を若狭へ忍び込ませて、お主様の無実の罪をつくりあげたんだ。そのために、お主様は切腹なされたんだ！　このうらみをはらすのは、おいらしかないんだ！　おいらは、但馬守を、討ってやるぞ！　きっと、きっと、討ってやるんだ！」

「よし、わかった。その気魄は、万人にまれだぞ。……わたしが、助太刀をしてやろう」

「ほ、ほんとかい」

修太郎は、目をかがやかせ、声をはずませた。

「この試合に勝って、もどって来ることができたならば、だ」

「うん――」

「ならば、ここで、待っているがよい」

「だって……」

不服そうに、口をとがらせるのへ、きっぱりと、

「ききわけることができなければ、わたしと、お前は縁なき他人だ！」

と、言った。

修太郎は、しぶしぶと、承知した。

源四郎は、美音へ、

――たのむ！

と、目で告げておいて、足をはやめて行った。

――ご無事で！

美音は、声のない叫びを、その後姿へ投げた。

胸が、息苦しく、締めつけられるような痛みを生んでいた。

人を恋する歓喜と不安をいまこそ、美音は、はっきりと知ったのである。

源四郎の遠い姿が、大通りから、つと、それて、愛宕山上への近道へ入るや、美音は、はじめて、

「ああ！」

と、慕情のせつなさを、小さな喘ぎにもらした。

源四郎の姿は、たちまち一面に咲きみだれる萩の野の中へ、消えて行った。

あとを追うように一陣の秋風が吹きわたって、萩の葉裏をかえして、白く光らせつつ、紅紫色の花びらを宙に舞いたたせた。

美音は、修太郎の肩を、しっかりとつかんで、泪ぐんだ。

——わたくしのためにも生きて戻って下さいませ！

去来坂

愛宕山は、平地から、急に突兀（とっこつ）として、懸崖壁立（けんがいへきりつ）した山である。

山頂の権現社は、慶長八年、石川六郎左衛門尉が、台命によって、建立した。本地仏は、勝軍地蔵尊で、行基大士の作である。永く火災を退ける守護神である。

これを登るには、二道があった。男坂と女坂である。

男坂は、正面にあって、きわめて峻直で、石段は八十六段をかぞえる。この急傾斜におそれをなして、登らずにしてひきかえす者があるので、石段の下に、賽銭箱が備えてあった。女坂は、男坂の右にあり、山腹をうねって、ややゆるやかで、百七段あった。

毎月二十四日の縁日には、参詣人も多く、山下に、商人が集うて店を出すにぎわいをみせるが、平日は、ひっそりとして、ほとんど人影は、まれであった。

源四郎が、麓を流れる桜川に沿うて歩んで来た往還で、出会うたのは、一列になった普化僧たちだけであった。

この桜川沿いに、武家屋敷がつらなったのは、ずっと後のことで、この頃は、松柏がしげり、竹叢（やぶ）がつづき、もの淋しい場所であった。

片側は、田畑がひろがって、これは、宇田川町まで見通せるのであった。

畔（くろ）に、ところどころ、桜樹があって、春には人の足をはこばせるのだが、秋長（た）けたこの黄昏（たそがれ）どき、蕭々として、風が鳴って吹きすぎるばかりであった。

風にさからって進んでいたことだし、山頂で待ち受ける弥九郎との出会いに心をとられていたので、源四郎は、行き交うた普化僧たちが、数間遠ざかって、急に、一斉に天蓋をまわしてこちらを見た気配に、すこしも気がつかなかった。

源四郎の姿がつと、左へ折れて、愛宕山へ向うのを見送って、普化僧たちは、先達をとり巻くようにして、寄った。

「絶好の場所で出会うた」

先達が、おもおもしい口調で言った。

「降りて来たところを、斬る！」

「しかし——」

一人が、口をはさんだ。

「陽が落ちれば、あの男は闇にまぎれる迅い足を持っているが……」

「そうは、させぬ！」

先達は、きっぱりと言いはなった。

「断じてのがしはせぬ！　なんの祈願か——待っていてやるのが、宿敵としての誼（よし）みだろう」

他の者たちは、黙ってこたえなかったが、それは、指揮者のことばに不服なのではなく、源四郎の冴えた腕前のおそろしさを、あまりにもよく知っている緊張のためであった。

役行者堂のある上り口から、八十六段の石階をのぼって、山頂に至る——。

運慶作の金剛力士の佇立した二王門をくぐれば、拝殿が、老松にかこまれて、森厳のたたずまいを見せる。

白装の禰宜が、音もなく、源四郎の前を横切って行った。

右に折れて、しずかに歩んで行くと、太郎坊権現社があり、そこから、奥へ、茶屋が檐をつらねているが、葭簀で囲われた中は、ひっそりとして、人の気配もなかった。

北方山嶺に沿うて、額堂、弁天堂、八幡社、大神宮社、春日社、荒神社、祇園社と、祠がならぶ。

その右端の祇園祠にむかって、まっすぐに足を運び出そうとした時、二王門左脇の鐘楼から、

ぐわああん！

と、凄じい音が、鳴りひびいた。

ちょうど申の刻——七つの鐘音が、下界にむかって、ひろがって行く——。

——これを地獄の修羅を報らせるひびきときかねばならぬのは、弥九郎か、このおれか？

源四郎は、祇園祠前に待つ対手もまた、同じ思いに相違ないと、余韻冴えて、次の音を呼ぶままに、七つの鐘をききおわるまで、そこに立っていた。

松樹が深く、祇園祠は、そのむこうにかくれて見えなかった。

西の太陽は、もう覆輪をとりはらって、真紅のすがたをあらわしていた。

源四郎の足もとからのびた影法師は、長く延びて、木立の中へ消えていた。

やおら、一歩ふみ出した瞬間、源四郎は、樹間をくぐって放射される殺気を感じたように思った。

もはや、足を停めることはゆるされなかった。たたかいは、この刹那から開始されたといってよい。

死地への一歩一歩を、源四郎は、正しく、しっかりとふみしめた。

暗い木立をくぐりぬけるあいだに、源四郎が、虚心の中にかすめさせた意識は、革襷を忘れて来た悔いだけであった。

だが、その悔いも、すぐに、ふりすてられた。

源四郎の足を停めさせたのは、ひろびろとした空地へ出るやいなや、

「来たな、源四郎！」

そう呼ぶ大きな声であった。

祇園祠の高い縁の上に、弥九郎は、立っていた。

鉢巻の白さが、斜陽をあびて、鮮やかに浮きあがっていた。決闘の身支度は、その姿を、凛然たるものにみせていた。

距離は、七間ばかりあった。

両者は、それなり、石と化したごとく不動となった。

疑う余地のない地歩の利不利が、ここにはあった。源四郎は、落葉が微かに鳴ってころげている地面に立っている。

弥九郎は、源四郎の胸までの高さの祠の縁上に在る。

待ちうけていたのは、弥九郎であり、当然、源四郎の方から、そこへ進まねばならなかった。

進まずに、降りることをもとめるのは、兵法者として、自分の未熟を曝す恥辱となる。
源四郎が、その恥辱に耐え得ぬ男であると知って、弥九郎は、地歩をそこにとったのである。
源四郎は、しずかに、落葉をふんで、歩み寄って行った。
もとより、弥九郎の跳躍して襲う刃圏内へ、おのれを容れる愚かさはさけて、ぴたり立ち停まると、
「弥九郎、この勝負は、若先生の認めるところか?」
と、問うた。澄んだ語気であった。
「おこがましいぞ、逃竄者！　おめおめと帰って参って、いまなお、小野一門面が笑止だぞ！　試合ではないっ！　この弥九郎が、逃竄者を討ち果すのだ！」
怒号をあびて、しかし、源四郎は、にことした。
柳生道場へそむき去った者たちは、そのままに見逃しておいて、黙って出て行った者だけを許さぬ。その矛盾を、弥九郎が、気づいていないはずはない。
すなわち――。
弥九郎は、この源四郎個人に対して、敵愾心をみなぎらせているのだ。出奔したのが他の者であれば、帰って来ても、あるいはすてておくであろう。
源四郎を討ち果した――となれば、弥九郎の小野道場における地位は不動のものになるのであった。
その心胆は、兵法者として慙じなければならぬ疚しさを含んでいるといえる。
きおい立った闘魂に、不純な思念を混えていることが、一閃一撃に、目に見えぬ破綻を生じな

ければ、さいわいである。
三年間の精進で得た満々たる自信が、弥九郎をして、おのれの疚しさなど、白刃場裡において、なんの妨げになるものでないと、思わせている。
源四郎が、ふっと、あわれと感じたのは、そのことだった。
「出いっ！」
弥九郎が、殺気凄じく、一喝した。
源四郎は、なお、動かず、
「弥九郎、先師が、私闘をかたく禁じられていたことを、忘れるな」
冷静な言葉を、投げた。

「言うなっ！」
叫びかえす弥九郎の、あかあかと横面へ斜陽を受けた形相は、源四郎がくぐって来た仁王門の金剛力士のそれに似ていた。
「恩師の野辺の送りにも加わらずに、行方をくらましおって、よくぞ、舌も裂けずに、その言葉が吐けたぞ！　私闘と思いなそうとする貴様の性根を、悪むのだ！　……問答の間に、陽が落ちるぞ！　抜けいっ、源四郎っ！」
こたえるかわりに、源四郎のからだが、滑るがごとく、右方へ――すすすっと、移った。
それにむかって、弥九郎は、五体をまわした。
源四郎が、えらんだのは、まことに、機を観た瞬間的な有利の位置であった。

源四郎は、まうしろに、沈み行く真紅の太陽を背負うたのである。

「……………」

弥九郎は、呻きを口腔内に嚙んで、まっこうから一直線に射して来る斜光に、目をほそめた。

源四郎の姿は、弥九郎の眸の中で、完全に影になった。

ここに――。

弥九郎の絶対的な有利の地歩は、うしなわれた。

一歩――源四郎は、敵の跳躍する刃圏内へ、ふみ入った。

「……………」

無言が、「来れ！」の叫びにまさった。

「ええいっ！」

弥九郎は、総身に充満させていた闘魂を、その号嘯(ごうしょう)に噴かせて、長軀を、翼あるもののごとく宙のものにして、抜き討ちに、源四郎の頭上めがけて、きえーっ、と唸り下ろした。

一秒の何十分の一かの、白刃の描く正確な弧線は、しかし、必ずしも、飛んだ位置から刃尖(はさき)までの半径において、敵影をのがさぬ必殺の確率をもっていなかった。弥九郎の目は、陽光に染められて、視力を半減していたからである。

源四郎は、充分の余裕をのこして、横へ躱(かわ)して、鞘走らせた一刀を、ぴたっと、陰の構えにとった。

「うーむっ！」

搏(う)った空間のむなしさで、四肢に力あまった弥九郎が、大地に両足をふまえざま、本能的に、

ぱっと、大上段にふりかぶったのは、相討ちの捨身であった。

源四郎の陰の構えに気づいたのは、次の瞬間であった。

弥九郎は、脳天からつまさきまで、矢を射込まれたような戦慄をおぼえた。

第一撃に失敗したこちらの無我夢中の動きを、源四郎は、水のような冷静な目で、見とどけたのである。弥九郎にとって、この上の屈辱はなかった。

この時――。

麓の総門の下には、修太郎と美音(みね)の姿があった。

修太郎が、青松寺の門前で、待っていることに我慢しきれなくなって、

「ね、いいだろ。登ってなんか行かないから――下で、待っているだけさ」

と、言い出し、美音が、いくら制しても、きかなかったのである。

しかたなく、

「では、石段の下で、待っているんですよ」

と、かたく念を押して、つれて来たのであったが……。

さて、総門の下に立つと、どうやら、修太郎は、そこで待つことにも、我慢できなくなって来た様子である。

しきりに、険しい勾配の石段をちらちらと見やって鼻の下を人差指でこすりはじめた。

美音は、うっかりしていると、修太郎が、ものも言わずに、脱兎のごとく、石段をかけのぼって行くおそれがあるので、そっと、その肩へ手を置いた。

「高いなあ、あの石段は——。何段あるんだろう？」
「八十六段あります」
「ふうん。……でも、おいら、一気にかけのぼってみろ、と言われたら、やってみせてやらあ」
「修太郎さん！　約束ですよ」
「そうさ、約束しているよ。ただ、おいら、息もつかずに、かけのぼることができる、と言っているだけじゃないか」
　美音は、はらはらしつつも、だだっ子の姉の気持を、愉しいとも、思った。
「あの鳥居のむこうまで、行ってみようか？」
「いいえ、ここでお待ちしていましょう」
「鳥居のむこうで待つのだって、おんなじじゃないか」
「同じじゃありません。修太郎さんの気持は、まるで鏡に映るように、よくわかりますよ。……さむらいは、約束したことは、決して破らないものです」
「わかってら——」
　修太郎は、やれやれ、といった態度で、太い丸柱へよりかかると、
「大丈夫かなあ。道場からやって来たさむらいは、すばらしい使い手なんだぜ」
「神子上（みこがみ）様は、もっとすばらしい使い手です」
　言いかえしながら、美音は、ふたたび、胸が締めつけられるような痛みをおぼえた。
　源四郎と弥九郎の、凄絶の対峙の光景が想像され、思わず、美音は、目をとじた。
　祈りをこめようとしていると、街道を疾駆して来る騎馬の蹄の音が、耳にひびいた。数騎のよ

うであった。
　みるみるうちに、近づいて来る騎馬の群の迅さに、美音（みね）と修太郎が、なんとなく、気をとられて、視線を、往還へ投げていると——。
　先頭をきって来た、花模様の蝙蝠（こうもり）羽織の振袖すがたの若衆が、いきなり、馬首を、さっと、この総門へ向けかえたのには、おどろかされたことだった。
　馬脚のあがきをゆるめずに、一気に、小橋を渡って、総門の内へ、躍り込んで来たのを、あわてて、さけた美音と修太郎は、後から追って来た武士たちが、
「姫っ！」
「おとどまりあれ！」
「なにとぞっ！」
　と、血相かえて、口々に叫びつつ、馬からとび降りるのを見た。
　しかし、若衆は、柳眉を張って、朱唇を一文字にひきむすび、ぴしりっとひと鞭くれて、まっしぐらに甃石（いしだたみ）に高い蹄の音をひびかせると、鳥居の下をつききって行った。
「女子（おなご）じゃ、あいつ！」
　と、修太郎が、口走った。
　大きく目を見ひらいて見送った美音は、小声で、
「広姫（こうひめ）さま！」
　と、つぶやいた。

顔を見るのは、はじめてであったが、男装の噂はかねて耳にしていたことだし、立派な武士たちが、姫と呼ぶのをきいて、すぐに、わかったのである。

「姫っ！」

「待たれいっ！」

武士たちが、美音たちの前を走り過ぎた時には、もう広姫は、石段下に達していた。

「やっ——あいつ、馬でかけのぼる気じゃ！」

修太郎が、大声で、叫んだ。

野を駆けるだけの責め馬にあきたらず、この愛宕山の石段を蹄にかける冒険を思いたったのは、いかにも驕慢な武芸好みの姫君らしかった。

附人たちにとっては、もし万一、姫が落馬して、負傷でもしたら、切腹しなければならぬので、必死になって、この冒険を思いとどまらせようとしたのであったが、どうやら、姫は、彼らよりも、馬をとばすことにまさっていたようである。

三間の距離をひらいて、追いすがるのをふりきるや、

「えいおーっ！」

高らかに、一声を発し、馬腹を蹴った。

馬は、命令のきびしさに、いったんは、前脚を刎ねたが、よく馴らされた従順さで、たてがみをひとふりするや、たっ、たっ、たっ、と駆けのぼりはじめた。

附人たちが、石段下に達した時、広姫を乗せた馬は、二十段もの高みに在った。

もはや、叫びをあげたり、石段をふみ鳴らしたりするのは、ひかえなければならなかった。必死の冒険をこころみている広姫の、集中した神経がそのために乱れては、かゝって、悔いを後にのこすことになるからであった。こうなったら、無事に登りきるのを祈るよりほかはなかった。

附人たちは、かたずをのんだ。

すると——。

思いもかけず、その冒険をさえぎる者が、二十数段めあたりの樹陰にひそんでいたのである。

すっと、立ちあらわれたのは、天蓋で顔をかくした普化僧であった。

いかにも無造作に、猿臂をのばして、むずと、馬の口をとった。

「無礼者っ！」

かっとなった広姫は、いきなり、それへ、鞭をふり下ろした。

これは、かるくかわされたのみか、ひったくられてしまった。

「おのれがっ！」

広姫は、刀の柄へ手をかけた。

しかし、抜く手をおさえる普化僧の手の方が早かった。

すでに、この時、前方の石段は、左右の木立の中から走り出た七八名の普化僧たちで、ふさがれていた。

「痴れ者っ、はなせ！」

広姫は、つかまれた肱をふりはなそうとして、躍起になった。

そこへ、附人たちが、かけよって来た。

「これは、将軍家のお妹君——広姫様だぞ！　非礼の振舞いは、ゆるされぬぞ！」

叱咤を受けたが、普化僧たちは、すこしも動ずる気色はなかった。

ただ、広姫の肱をおさえていた先達が、一歩さがっただけであった。

それへむかって、広姫は、憤怒を制しきれずに、びゅっと、抜き討ちをくれたが、むなしく宙を切っただけであった。

対手は、かわすともみえぬおちついた動作で、天蓋すれすれに、流したのであった。

底知れぬ力が、その僧形にたくわえられているのを、広姫は思い知らされて、微かな戦慄をおぼえた。

先達は、天蓋をとらずに、鄭重に、広姫へ一礼すると、

「御公儀の秘命をおびる者どもでござれば、はばかりあって、かぶりものの御無礼、御容赦賜りまするよう——。姫様の騎法御修練をさまたげましたるは、いまより、この石道が、修羅場と相成りますれば、なにとぞ、他日にかえて、お引きとり賜りたいためでございます」

「修羅場とは——そちたちが、何者かを討とうとか？」

広姫が、好奇の眸をかがやかせて、問うた。

「左様でございます」

「対手は、何者じゃ？」

先達は、ちょっと、ためらっていたが、

「神子上源四郎と申す牢人者にございます」

「なに、神子上源四郎！」

広姫にとって、それは、一日も忘れられない名であった。

「神子上源四郎を討つのか！」

「姫様には、源四郎をご存じでございますか！」

「知っている！」

激しい言葉を、次につづけようとして、なぜか、広姫は、ふっと、口をつぐんだ。

——憎いやつ！

今日まで、意識としては、それ以外にはなかった。

にも拘らず、いま、おそらくは柳生道場から送り出された隠密と察しられる面々によって、討たれようとしていることに、当然、快哉を叫んでいいはずなのに、それとは反対に、広姫は、胸の中に、当惑とも狼狽ともつかぬ感情の乱れをおぼえたのであった。

だが、次の瞬間、広姫は、その自分に、つよく反撥した。

「神子上源四郎を討ち果すのは、この広姫も、のぞみじゃ！」

と、高く、言いきった。

この声は、石段下の、鳥居の陰にいた美音と修太郎の耳にも、とどいた。

「ちきしょうっ！　あいつら、なにをぬかしやがるんだい！」

修太郎は、目をむき、肩やこぶしをふるわせた。

美音も、腹のそこから青ざめた。

――どうしよう？

こうしているあいだにも行われているのであろう凄絶の試合に、源四郎が、傷つかずに勝ちを得るとはかぎらないのに、あらたにおそろしい敵が、待ちうけることとなったのである。しかも、一人ではないばかりか、あの普化僧たちは、ただ者とは思われなかった。

美音は、けしかける広姫に、憎しみをおぼえた。美音が、人を憎んだのは、生れてはじめてのことだった。

とっさに――。

修太郎が、息をはずませて、相談した。

「お姉ちゃん、どうしたらいいだろう？」

「修太郎さん、女坂の方から、走って行きましょう！　間にあうかも知れない！」

「よおし！」

「あの人たちに、気づかれないようにね」

二人は、息をつめ、足音を消して、鳥居の陰から出ると、右方へむかって、走り出した。

一方は、上段から――。

一方は、陰の構えから――。

斜陽を截って、宙に閃き、刃金の匂いをまいて、がっきと噛みあった二刀であった。

それなり、殺気と殺気は、力点に罩められて、むしろ、両者の姿を、もの静かにさえ見せていた。

この永い固着状態こそ、兵法者の全生命が、心とからだに、すき間なく、くばられ、充ち満ちて、次の一撃をもって勝負を決定させるために、どれだけの無心無想を保ち得るものか――その鍛練を証すものであった。

刀と刀とがひらいて、対峙をつづける間は、敵の破綻を祈り、隙をねらう意識は、脳裡にあろう。

こうして、咫尺に眼光を迫らせて、引きも押しもならぬ完全なる均衡裡に、いっそ力も利かぬ真空ともいえる空間をえらぶや、思考力もまた、体内から去っている。

のこるのは――。

左様、目だけであった。

まばたかず、かっと瞠いた双眸に、いっさいの気力が聚められて、待つ。

このままに、過ぎれば、やがて闇につつまれ、もしも、人間の体力と精神力が、つづくとすれば、夜明けまでの可能も考えられることだった。

しかし――。

たたかいというものは、限りある能力にたよるかぎり、自然の微妙な変化に、ふと乱されることがある。

凄絶の均衡をやぶったのは、ひらひらと、頭上から舞い落ちて来た一枚の枯葉であった。

てのひら大の枯葉は、一刀の切尖にふれるや、刃をすうっと滑り落ちて来たのである。そして、それは、ちょうど弥九郎の眼光の直前に来た。それが、運命の岐れ路であった。

一瞬、弥九郎の眼界は、枯葉で掩われた。

その咄嗟の間を、源四郎がのがすはずがなかった。
「むっ！」
満身の気合を、噴かず、口腔内に嚙むや、ぱっと、身を沈めた。
「う——おっ！」
猛獣の吼えるに似た唸りを発して、弥九郎は、片脚にくらった衝撃を支える本能の一颯を、虚空に送った。
すでに——。
源四郎の五体は、地を滑って、一間のむこうにあった。
弥九郎が、隻脚になりながら、なお数秒、立ちつづけていたのは、奇蹟とも称されてよかった。
巨軀を、大地にひびかせた弥九郎が、おのれに破綻を生じせしめた落葉はこれかと、片手づかみの太刀で、無念そうに、地面を払いつつ、
「ま、まていっ、源四郎！」
と、呻くように声をしぼった時には、もう、源四郎は、二間余はなれていた。
しかし——。
石段の降り口まで来た源四郎は、
「……………」
ぴたっと足を停めて、あらたなる決死の覚悟を、その肚裡に置かなければならなかった。

足音もなく、すすすっ、と段を刻んで登って来る普化僧の群を見て、
——来たぞ！
と、本能が教えてくれたのである。
——柳生の者たちだな！
これは、自分へはっきりと言いきかせていた。
源四郎は、三間を退いた。
普化僧たちは、境内に立つや、緩慢な足のはこびで、半円の陣形をとった。
正面に対した先達が、しずかに天蓋をはらった。
眉の迫った大きな双眼の瞳孔は、この国では稀な鮮やかな茶褐色であった。異常なまでに、鼻梁と顴骨が突出しているのも、一度会ったら忘れられぬ特徴であった。
「神子上源四郎！　去年、駿府で出会うたぞ！」
炳乎たる光に射られて、源四郎は、かえって、表情を無色におさめて、
「お手前を討ち損じたのを、いまだ、無念といたします」
そう、こたえた。
柳生左馬介憲厳——但馬守の妾腹の子、長子十兵衛三厳と同年であった。柳生流中、ひとり二刀の豪快な術を揮って、達人十兵衛と立合い、これをたじろがせる卓抜した兵法者であった。
源四郎は、駿府に忍び入って、柳生側の隠密の頭領が、左馬介憲厳と知って、これを討つ機会をねらい、ついに、はたさなかったのである。左馬介は、今春、江戸へ戻っていた。
——やはり、この境内が、おれの死場所であったか。

そうとさとった者のおちつきはらったまなざしで、源四郎は、つぎつぎと天蓋を地べたへすてる面々のうち、三人まで見おぼえがあるのをたしかめた。

左馬介は、彼方に倒れた弥九郎の姿へ、ちらと目をくれたが、それについては何もふれず、

「一騎討ちを所望であろうな、神子上！」

と、言った。

源四郎は、平然として、ことわった。

「その配慮には、およばぬ」

「よし！　みごと、われらが八剣を受けてみよ！」

あびせかけるような左馬介の語気に、嘲罵のひびきが含められたとしても、それをもって、彼の性格を、驕慢ときめるわけにはいかぬであろう。

左馬介がしたがえた七名の術者は、いずれを一人、源四郎に当らせても、互角にたたかう秀れた使い手だったのである。

一騎討ちをしりぞけた源四郎が、乱闘場裡に、遁れる隙をつかむこんたんを抱くとすれば、これは笑止の沙汰、と左馬介は、思ったにすぎない。

「いざ――」

その一声を下知として、七本の杖に仕込まれた白刃が、一呼吸もたがえずに、さっと、抜きはなたれた。

左馬介だけが、抜かず、一歩退った。

源四郎は、なお、両手を空けて、薄の穂のように、やや高低に各自の好みはあるにせよ、いずれも青眼につけられた切尖が描く弧線に対して、孤影を佇立させ、眼光も据えたままであった。

じりっ――と、刃並は、一歩ちぢまった。

さらに、一歩、七士の足が、大地をふみ出した。

せつな、源四郎は、羽毛の軽やかさで、半間を跳び退った。

両足が土についた時には鞘をはらったとも見せず、一剣を、右肩から直立させていた。

「来いっ！」

五体の真っ芯から、その一語を、ほとばしらせた。

それに応じて、七刀は、すすっと、間隔をひらいた。

そして、両端の者が、まず、じりじりと間合を詰めはじめた。

源四郎には、その肉薄に備える体位の移動はなかった。

石と化したように、不動で、待つ――。

心機をつかむのは、第一撃が襲って来てからの間髪の動きをしめすせつなであろう。

生死の境目――というよりも、全き死地に追いつめられた者の、おのが生命をまもる本能は、決して、意識の後から働くものではない。

源四郎は、真空の中に、おのが身を溶いて、魂を無にかえしている。

敵の動きや、刃の閃きは、枯葉が落ちて来るのや、陽かげが移るのと、なんの変りもないものとして、瞳孔に映っているだけである。

天地が、かくまでに、人間にとって、静かである瞬間は、ほかにまたとないであろう。

「ええいっ！」

鋭くはりつめた寂寞の山気をつんざいて、右端の者が、大地を蹴って、斬り込んだのは、必ずしも殺気の頂点へ猛気をせりあげ、爆発させたのではなかった。

たぶんの威嚇をふくめて――多勢で討つ場合に、おのれを犠牲にする悲壮な覚悟で、五体を疾風にして、ぶちつけたのである。

当然、源四郎の陰の剣は、この猛撃をはねかえすはずだった。

それをしなかったのは、脳裡がそれを命じたのではなく、おのが生命をまもる本能が、えらんだのである。

対手が搏った位置から、忽然と形容するに足りる迅さで、源四郎は、身を消していた。

「うむっ！」

空間を裂いたおのが一刀の虚しさに、攻撃者が、歯をくいしばって、逃げた走路へ、摺りあげに、びゅっと薙いだ時には――。

源四郎の速影は、一間余を翔けて、左端の敵を襲っていたのである。

もとより、左端の者に、油断があった次第ではない。

ただ、右端の味方が、一身をすてたと見ての、第二の攻撃者たる自身には、この業で、という意識があったし、そして、それは、他の者がその場に置かれたとしても、意識してえらんだはずの業であった。

第一の攻撃者は、第二の攻撃者の必殺を期して、斬り込んだのである。第二の攻撃者が、これに応える構えをとり、撃って出ようとしたのは、当然すぎることであった。

ところが――。

源四郎は、第一の攻撃者に、おのが幻影を搏たせておいて、突如として、第二の攻撃者めがけて驀進したのである。

虚を衝かれた――とは言えぬまでも、左端の者が、咄嗟に、これに合せる構えを直すには、脳裡にその意識を掠めさせなければならなかった。

いわば、彼が、意識を掠めさせるのと、源四郎の本能が飛びかかるのと――その、ほんのわずかな差が、勝負を決定した。

「あ――ああっ！」

断末魔の、ひび割れた声が、虚空へ送られた。

そのかたわらを――血汐の虹の下をくぐって、源四郎は、なお、二間のむこうへ奔った。

そこは、断崖の縁であった。

ぴたっと立ちどまって、再び、陰の構えをとり――。

「来いっ！」

叫んだ声も、らんと双眸を張った面貌も、凛乎たるものであった。

残りの六刀が、味方の噴かせた血汐に、みじんの狂気を見せなかったのは、流石であった。

後方に立つ左馬介の面上には、源四郎がわがものにした鮮やかな勝利を、むしろ称讃する率直な色さえ滲んでいた。

ふたたび――。

静寂が、境内に来た。

源四郎はもとより、これをおし包む六個の僧影に、なんの動きもなかった。

殺気におびえて、高い樹枝の蔭で、身をちぢめていたらしい鳥が、ようやく、はばたく機会をとらえたように、空へ翔け走る羽音が静寂をみだしてから、なお数分間、この凄然たる対峙はつづいた。

叫びがあがったのは、その対峙の中からではなかった。

石段口から、

「神子上源四郎、見たか！」

かん高い声が、修羅場へ送られたのである。

じろりと、視線をまわした左馬介は、男装の驕姫が、いきなり、抜刀するのを見て、

「姫様？　なりませぬぞ！」

と、叱咤した。

しかし、広姫は、自身の剣気に心身をおどらせた迅さで、いっさんに、そこへ、つッ走った。

「源四郎！　この太刀、受けて見よ！」

生兵法の無暴な大胆さで、刃圏のまっただ中へとび込むや、じりじりと源四郎へ、つめ寄って行った。

「姫様っ！　引かれい！　引かれぬかっ！」

左馬介が、ずかずかと進んで来て、怒号した。

広姫は、前進を止めなかった。

源四郎は、すっと、剣を下段に下げた。

――どういうのだ？

眼光も表情も変えはしなかったが、胸中に、不審が湧いていた。

広姫は、無暴な攻撃と見せかけて、実は、別の目的をもって、そうしているのであった。

源四郎を凝視する眸が、それを語っていた。そして、唇をうごかして、声を出さずに、言いかけたではないか。

「にげるのです！　……にげるのです！」

――おれを憎んでいるはずだが？

源四郎は、その心が、わからなかった。

「えいっ！」

広姫は、まっ向から、打ち下した。

それを、切羽台で、がっきと受けとめた源四郎は、広姫の唇が、

「にげるのです！」

と、くりかえすのを読んだ。

……ずるっ、と源四郎が片足をすべらせて、崖縁からはずすや、広姫は、ここぞと、満身の力で押して来た。

次の瞬間、源四郎と広姫の姿は、そこから消えていた。

のちの江戸名所図会にも、「当山に懸崖壁立して、空を凌ぎ……雲を挿むがごとく聳然」と記されたごとく、この境内から殺がれて落ちた断崖は、とうてい、人の足が架かるのをゆるさなかった。

殊に、武蔵野の太古のままのたたずまいをとどめている当時のことであった。

はるかな下方は、松柏が欝茂して、陽ざしもとどいていなかった。

「しまった！」

呻いて、縁へ走り寄った左馬介とその一党は、首をのばして、臨み見たが、すでに、夕闇は、くろぐろとそこを掩っていた。

木の枝の折れる音が、地底からつたわって来たきり二個のからだを呑んだ断崖は、ひっそりと、しずまりかえった。

「野から、まわって――」

と、一人が、叫んで駆け出そうとするのを、左馬介は「無用だ！」と止めた。

――源四郎は、あるいは片端になって生きのびるかも知れぬ。しかし、姫は……。

と、考えると、これは、こちらは知らなかったことにするのが賢明だ、と左馬介はとっさに考えたのである。

「参ろう」

冷たく言って、もうさっさと歩き出していた。石段下に待っている附人たちへは、「姫様は女坂の方へまわられたようだ」と言いつくろうことにして……。

境内がもとの寂寞をとりもどして、幾分かが過ぎた。

「おんや、いないぞ！」

女坂の石段口へ、ぴょんととびあがった小さな影が、昏れなずむ空地を透し見て、どなった。

喘ぎ喘ぎのぼりついた美音は、息つく間もなく、

「ど、どうしたのでしょう？」

と、声をふるわせた。

「あ――そこに！」

修太郎の指さす箇処に、横たわった黒影を発見して、美音は、どきっと息をとめた。

いっさんに、それへ走り寄った修太郎は、覗き込んでみて、

「こりゃ、道場から来たさむらいだぞ。あの小父さんの方が、勝ったぞ！」

「ああ――」

美音は、大きく肩でひと呼吸すると、

「おにげになったのです、神子上様は――。きっと、きっと、そうにちがいありません！」

そう言いきった。そう言いきることで信じようとした。

その時、地に伏した屍骸が、突如として、ひくく、呻いた。

「うあっ、生きてら！」

修太郎が、あわをくって、とび退った。

花容

……風が鳴っている。

まず、よみがえった意識がつぶやいたのは、その言葉だった。

風の音を、耳にしているのではなかった。自分の体内で、吹き荒れているものを、風だと考えたのである。

事実、高い中空で、風は鳴っていたのだが、それがとどかぬくらい、源四郎の横たわっている渓(たに)の底は、深かったといえる。

風だと思いこんでいるものに、からだをゆさぶられているうちに、源四郎は、うすく、目蓋をひらいた。

樹々のあわいに、ほの白く冴えた明け空があった。

あたりは、ひっそりとしずまりかえり、これは嘘のように思われる世界であった。

源四郎は、目蓋をひらくまで、自分が、山上でたたかった力を継続していたのをさとった。それを、風の音だと、意識が錯覚したのである。

剣はなお、右手にあった。

それを動かすのをきっかけにして、感覚は、一挙にめざめて、四肢や胸部の疼痛(とうつう)を、源四郎に告げた。

歯を噛んで、それに堪えて、身を起し、剣を杖にした。

絶壁の下の、湿った苔地に落ちていたのが、さいわいであった。すぐかたわらには、岩が重なりあっていて、もしこれに当っていたならば、骨は砕けていたに相違ない。歩き出そうとして、激しい疼痛に、うっと呻(うめ)いて、岩壁へよりかかった源四郎は、

——姫は？

と思い出して、視線をまわした。

蒼々たる老松の枝葉の厚い層が、まだ渓底に闇を張っていて、見透しがきかなかった。

それにしても、あたりの地面に、あの華やかな衣裳の色彩がみとめられないのは、ふしぎであった。

抱き合って、落下して来たのである。当然、広姫(こうひめ)は、かたわらに横たわっているべきなのだ。

——どうしたのだろう？

不審のままに、しばらく、じっとしていた源四郎は、朝の光がひとすじの箭(や)になってさし込んで来たのへ、なにげなく目をあげて、

「お——」

と、小さく、声をたてた。

二間あまり頭上の、絶壁を、巨樹の太枝が匍(は)っていたが、それに、そのひとは俯伏(うつぶ)せに、ひっかかって、二本の腕と長い黒髪をだらりと、垂らしていた。

朝の光は、その腕にもあたっていて、白い肌膚を、ふしぎななまめかしいものに、くっきりと浮きあげていた。

源四郎が、ぐったりとなった広姫のからだを、その高処から抱きおろすには、必死の努力の四半刻を必要とした。

苔地に横たえて、手ばやく、からだをしらべてみると、奇蹟的に、無傷であった。

背活を入れようとして、思いなおすと、意識のない柔身を、抱きあげて、密林の中へふみ入った。

重みに耐える双腕は、疼痛すらも感じなくなる麻痺に、なお、しっかと広姫をかかえていた。

麻痺は、肩に、腰に、脚にひろがったが、源四郎は、暗くひき緊った表情を変えようとしなかった。

鍛えあげた五体は、意志がくじけぬかぎり、動くことをいとわなかった、といえる。

朝陽の斜光で、方角を見て、一歩一歩を、しっかとふみしめた。

「……む、む、むっ……」

微かな呻きをもらす寝顔へは、目をあてず、源四郎の心は、ほとんど没我であった。

ものの一町も、たどったろうか――。

樹林は、まだつづいていたが、暁闇は去り、小鳥のさえずりも、高処からつたわっていた。

とある地点で、源四郎は立ちどまって、右すべきか、左すべきか、ちょっとまよった。

この時、広姫は、薄目を開けて、源四郎の汗と土にまみれた逞しい眉目を、そっと仰いでいた。

意識は、幾分か前に、よみがえり、じぶんが抱きあげられて運ばれているのをさとるや、痛み

にまさる強い陶酔感が、からだの中を走るのをおぼえた広姫であった。

なお、意識をうしなったふりをしていたのは、その陶酔感を、すこしでもながくあじわっていたいためであった。

源四郎が立ちどまったので、はっとして、まぶたをあげたのであったが、眸に、その逞しい眉目が映るや、にわかに急しい動悸をおぼえた広姫は、この瞬間から、一人の男を恋する娘となったのである。

おのれが抱く将軍家妹君に、そのような微妙な変化が起っているとは知らず、源四郎は、行手を右にえらんだ。

そして、さらに、なお、一町余りを進んだ時であった。

急に、源四郎は、眼光を冴えさせた。

樹木をおしつつんで流れて来る朝靄に、忍香の匂いをかいだのである。

忍香とは、忍者が焚くものである。

蝦蟇の油を、楮に漬して、燃やすのであるが、火の加減によって、匂いの漂うて行く距離がちがうのであった。そしてまた、その距離を知らせるために、匂いに強弱をつくる。

源四郎は、距離が近い、とさとった。

「黒兵衛――」

源四郎は、ひくく、しかし、透る声を、樹林の中へ送ってみた。

すると、たちまちに、風が分けるに似て、灌木のざわめく音が、つたわって来たかとおもう

や、とある巨樹の蔭から、ひょっこり、黒い兜巾を頭にいただいた矮小の姿が、あらわれた。

「大事ありませぬかな」

眇眼をほそめて、まず、のんきめかした口調でそう言うと、上半身を大きく揺れさせて、右へ傾けつつ、ひょこひょこと近づいて来た。

「よく来てくれた」

「家来でございまするて。主人の危急にかけつけるは勤めでございましょうがな」

なんでもない言いかたをしたが、昨夜、青松寺の庵室へ源四郎をたずねて来て、そこで待つ修太郎と美音から、愛宕山の争闘をきいてからの黒兵衛の行動は、機敏をきわめて、めざましかったのである。

一気に、山上へ飛んで来た黒兵衛は、高垣弥九郎が、社務所に横たわって、呻きつづけているのを知るとともに、禰宜の一人の口から、源四郎が、広姫とひとつになって、断崖から落下するのを、物蔭から目撃したときき出したのであった。

その箇処をたしかめておいて、密林へふけ込むべく、見当をつけて、いっさんに野へ駆け降りてみると、すでに、そのあたりには、数百をかぞえられる幕士の群の、右往左往する光景があった。

一計を案じた黒兵衛は、百姓に化けると、幕士の一人に近づき、もし、浪人態と若衆姿の二人をさがして居られるなら、もはや、すでに、この密林中にはいないと、詐った。浪人態の者が、いきなり、自分が曳いていた馬を奪って、気を失っている若衆を小脇にかかえて、西へ逃げ去った、と――。

そうしておいて――。

黒兵衛は、一夜中、密林内を馳せめぐって、捜し索めた挙句、徒労をくやしがって、忍香に希望を託して夜明けのひとときを、じっと、うずくまっていたのである。

しかし、その苦労を、みじんも顔にも出さぬところに、この盗賊の天性の明るさがあった。

「……されば、てまえが、おんぶ仕りましょうわい」

黒兵衛は、背中を向けた。

「たのむ」

源四郎は、広姫をあずけると、にわかに、眼前が紫色に烟るめまいにおそわれて、かたわらの松の幹へ、身をよりかけた。

「どうなされましたぞ?」

源四郎は、まぶたをふさいだまま、微かにかぶりをふった。

「心配は無用だ」

言いつつも、肩に来た喘ぎを、かくしきれなかった。

すると――。

ふいに、黒兵衛のせなかで、広姫が、首をたてると、

「打ちどころがわるかったのじゃ。手当をせねば……」

と、言った。

黒兵衛は、あっけにとられて、

「目ざめでござったのかや。おんぶするあいてがちごうたて――」
ふりすてるように、広姫から、双手をはなした。
広姫は、じぶんの痛みを忘れて、源四郎に寄ると、
「詫びまする。そなたにはこばれる途中で、気づいて居りました。……こんどは、わたしに、介抱させて欲しい。さ――」
と、わが身を支えにしようとした。
この驕姫が、生れてはじめて起したやさしい女心であった。
「……おん身に別状がなければ、館へおもどりあそばされたい」
源四郎は、まぶたをとじたまま、言いきかせた。
「いえ、わたしは、そなたとともに居りまする」
「迷惑だと、申上げなければならぬ」
源四郎が、冷やかに言いすてるのをきいて、黒兵衛は、にやっとした。
「姫様。てまえの主人の申しあげる通りでございまする。街道までご案内仕りましょうわい」
「いやじゃ！」
広姫は、はげしく、かぶりをふった。
「それがしについて参られて、どうしようと言われる？」
源四郎に問われて、広姫は、ちょっとためらったが、そのためらいをふりきるために、高く声を張った。
「わたしは、そなたの妻になりたい！」

黒兵衛が、びっくりして、亀の子のように首をすくめた。
源四郎は、目をひらいて、じっと、広姫を見すえた。
しかし、何も言わなかった。
広姫は、源四郎の蒼ざめたおもてに、微かな憐憫の色がうごくのをみとめるや、かあっと全身が熱くなった。
「おねがいじゃ！」
狂おしい身ぶりで、源四郎へわが身をぶちつけた。
「わたしを妻にしてたもれ！　おねがいじゃ！」
源四郎は、広姫をしりぞけるかわりに、どうしたのか、がくっと、首を垂れると、ずるずると、崩折れようとした。
それをささえとめた広姫は、きつい表情で、黒兵衛をふりかえった。
「そなた、伊皿子の竹芝寺を存じ居るかえ？」
黒兵衛は、知っているとも知らぬともこたえず、眉を八の字に寄せて、爪を噛んだ。
「主人を背負うがよい」
広姫が、命じると、黒兵衛は、
「姫様、心なされませい。女子のお振舞いではございませぬぞ」
と、忠告した。
黒兵衛は、ちゃんと知っていたのである。広姫が、源四郎にとりすがるとみせて、こぶしをか

ためて、その鳩尾へ一撃くれたのを――。

　恋する男を当て落すとは、いかにも驕姫らしいやりかたであった。

　黒兵衛は、不快であった。

「そなたのような下者から、指図は受けぬ。さ――背負うがよい」

「申されなくとも、お運び仕りますが、てまえの主人は、意志はかたい御仁でございますぞ」

「わたしは、妻になってみせる！」

　広姫は、断乎として言いはなっておいて、歩き出した。

　黒兵衛は、かぶりをふって、

「やれやれ……女と下臈とはかしこきようなれども、思慮浅き者なり、と源平盛衰記にあるが――」

　と、ひくくつぶやいた。

　広姫は、きっとなって、

「なんと申した？」

「いえ、こっちのくりごとでございます」

　四五歩すすんでから、広姫は、じぶんに言いきかせるように、

「……女はやわらかに、心美わしきなんよき――という源氏物語のことばぐらいはわたしもおぼえている。妻になれば、そうなると誓う」

　その声は、急に、やさしいひびきをおびていた。

　――妊婦ではあるまいがな、所詮は、水と油の縁じゃて、神子上源四郎には、他にふさわしい

女子が居るわい。

　胸のうちで、そうつぶやいたとたん、黒兵衛は、昨夜、青松寺の庵室に、修太郎とともにいた娘の優しい面差を思いうかべた。

　――まず、さしずめ、添うにふさわしい女子といえば、あのような……。

ひとり、そっと、微笑して、ぐったりと重い源四郎のからだを、

「よいしょ」

　と、ゆすりあげた。

　――はやく、目をさまされませい、御主人様。てまえ一人では、この勝気の姫君は、どうにも、追いはらえませぬて。

　密林がきれる地点で、広姫は、野に、じぶんを捜し索めている幕士たちはいないか、とうかがって、人影のないのをたしかめるや、ほっとして、黒兵衛に、ふたたび、訊ねた。

「伊皿子の竹芝寺を存じていやるか？」

「存じて居りますが――」

「そこへ参る」

「てまえの主人のすまいは、青松寺でございますが――」

「いや、竹芝寺へ参るのじゃ」

　広姫が、どうして、そんなにつよく竹芝寺を主張したか――その古刹には、次のような由来があったからである。

むかし――。

　竹芝の荘に住む男が、禁中の火焚屋の衛士を命じられ、京師に上って、夜な夜な、篝火を焚いて、大庭をまもっていた。

　某夜、姫宮が、御簾のきわ近くへお出ましになって、柱に凭って、こちらをごらんになっているとも知らず、男は、庭を掃きつつ、大声で、ひとり語ちた。

「さてものう、わしが、こうしてあじけない目に遭うて居るのも……国許で、酒壺にさした直柄の瓢めが、南の風が吹けば北になびき、北風が吹けば南になびき、西風が吹けば東になびき、東風が吹けば西になびき居ったさまを眺めたせいであろうよ」

　これをきかれた姫君は、

　――どんな瓢であろう？

　と、興味を抱かれて、つと御簾を押しあげ、

「その男、こちへ寄るがよい」

　と、さしまねかれた。

　男が、おそるおそる高欄の下へ蹲ると、姫宮は、

「いま申した瓢を、一度見たい。わたしをつれて行ってたもれ」

　と、命じられた。

　男は、空おろしくて、ふるえたが、姫宮の熱心なたのみに、やむなく、そのまま、背負うて、御所から抜け出した。その後、瀬田の橋を渡る際、追手を断つために、橋桁を一間あまり毀しておき、七日七夜を経て、武蔵国へ帰り着いた。

　御所では、大騒ぎになり、八方を手わけして捜すうちに、これこれの風ていの男が、最と麗しい上臈を背負うて、東の方へ逃げ失せた、と申し出る者があり、

「さては、武蔵国から来た衛士に相違なし」

　と、追手をつかわされた。

　ところが――。

　たずねあてられた賤が庵で、姫君は、さもさも幸せそうなご様子、追手に言われたことだった。

「わたしは、こうなる因縁であったのであろう。この家にともなわれて、くらすうちに、いみじゅうも住心地好く、もはや、二度と都へは、もどりたくないと思うようになった」

　姫宮の意志はかたく、枉げ得るとも見えなかったので、やむなく、追手は、京師に帰って、この由を奏上した。

　主上はきこし召されて、

「ぜひもなし。その男を罪しても、姫宮は還らぬであろう。竹芝の男が、生きて在る間、武蔵の国をあずけてとらせよ」

　と、命じられた。

　あらためて、勅使が下って行き、その賤が庵を、内裏のように構えて、姫宮をお住わせした。

　やがて、姫宮がお生みになったお子には、武蔵という姓を賜った。

　姫宮が、お逝きになった後、その家は、寺にされ、竹芝寺と号づけられた、と――。

幼い頃きかされた、このお噺話を、広姫は、思い出したのであった。

もとより、竹芝寺のそんな由来を知らぬ黒兵衛は、しぶしぶと、命令に従った。

……とある農家の裏手から、二頭の馬が、伊皿子めざして、駆け去って行って、ほどなく、むこうの街道上に、ふたつの影が、あらわれた。

畦径へ降りて、まっすぐに、こちらへ近づいて来ながら、小さい方の影は、棒きれをやたらにふりまわし、

「おーい！　おーい！　黒兵衛おやじは、いないかあ！」

と、のどいっぱいに、叫んでいた。

こたえるのは、こだまばかりであった。

口をつぐんで、ついて来る大きい方の影は、おくれがちであった。

「黒兵衛おやじ！　びっこおやじ！　はやく、見つけろおっ！　ばかやろうっ！」

「修太郎さん、そんなことを言うものではありません」

たしなめられた少年は、立ちどまると、朝陽をあびた欝然たる愛宕山の密林へ眩しげな視線を送って、ぎゅっとくちびるをひきしめた。

美音と修太郎は、夜明けるや、ふたたび山頂へのぼって、禰宜から、源四郎と広姫が断崖から落ちたこと、そしてそれをきいた黒兵衛が二人をたすけるべく走り去ったことを、教えられたのであった。

修太郎は、黒兵衛に対して、腹をたてていた。

——なんだい、あのおやじ、忍びの術の達人みたいなことを自慢していたくせに、まだ、さがし出せないんじゃないか！

なんとも、じれったいかぎりであった。

修太郎は、源四郎の身に万一のことがあったなどとは、毛頭考えてもいない。あんなに強い弥九郎よりも、もっと強い源四郎が、断崖から落ちたぐらいで、生命を喪うなどということは、断じてあり得ないのであった。

しかし、修太郎とちがって、美音は、おそろしい不安に心をつかまれてしまって、ふりはらえなくなっていた。

傷つきやすい少女時代に、あまりにも、大きな打撃を受けた美音は、こうした事態に直面させられると、つい、最悪の場合を想像してしまうのであった。そのやさしい心根をつつんでいるからだが、健康ではないために、常に神経が過敏になっている故でもあった。

青松寺から出て来る時に、すでに、はげしい不安にかられていたことだった。禰宜から、そのことをきくや、——ああ！　やっぱり！　と、眼前が紫色に烟るめまいにおそわれたのである。

この衝撃が、熱を呼びおこして、美音は、山から降りて来るうちに、ふわふわと、宙をふむような、浮きあがって来るイヤな気分になっていた。

そして——。

畦径を辿りはじめるや、美音は、歩みをのろくして、いくども、口をひらいて、淡い呼吸を、苦しげに継がないではいられなくなっていたのである。

「黒兵衛おやじいっ！　もう、そこへ、いないのかあっ！」
両手を口にあてて、密林へ呼んだ修太郎は、こだまが消えるまで、目を光らせていたが、「ちぇっ！」と舌うちして、美音に何か言いかけようと、振りかえった。
「おや？」
修太郎は、美音の顔色にはじめて気がついた。
「お姉ちゃん、どうしたんだい？　まっ青じゃないか」
走り寄って来た修太郎へ美音は、むりに微笑をつくろうとしたが、その気力もなく、
「ちょっと、気分がわるいだけなのです。……すぐ、なおりますから――」
そうっと、その場へ、しゃがんで、まぶたをとじた。
すると、にわかに、からだが、地面の中へひき込まれて行くような、つよいめまいが来た。
――いけない！　ここで倒れては！
腰と片手を地べたへついて、美音は、必死に、身を支えようとした。
「お姉ちゃん！　しっかりしろ！　おいらに、つかまれ！」
修太郎は、美音の様子がただごとではないのに、びっくりして、あわてて、その手をとって、自分の肩を貸した。
はるか彼方の林の蔭に農家があるようであったが、そこまで、美音を歩かせるのは、おぼつかなかった。
「よわったな、ちきしょう！」
困惑のまなざしを、街道の方へまわしたおり、騎馬の一群が、そこへさしかかって来た。

「おーい！」
修太郎は、その一隊へむかって、声をはりあげると、片手をうちふった。
「馬を貸してくれえっ！　病人だあ……」
実は、まねかずとも、こちらへまわって来る人々だったのである。
みるみる近づいて来たのは、いずれも立派ないでたちの武士ばかりであった。
先頭に立っているのは、白髯（はくせん）をたくわえた、双眼に光のある、修太郎に思わず肩をすくめさせた程の威風の持主であった。
「どうした？」
さびた声音が、やさしかったので、修太郎は、すぐに自分をとりもどして、
「加減がわるいんだ。馬にのせて、あそこいらの家へ、つれて行っておくれよ」
老人は、首をのばして、美音（みね）の顔を見下ろしたが、急に、眉宇をひそめた。
「豊島明重殿の息女ではないのか？」
そういって、ひらりと馬から降り立って、近づいて来ると、
「うむ。夫人の若い日に、生き写しだ。……あれからもう、五年経つ――」
感慨深げに、じっと見まもった。
美音は、苦しい息づかいをおさえて、そっと、まぶたをひらいた。
熱に潤んだまなざしが、そこに見出したのは、柳生但馬守宗矩の貌だった。
瞬間――美音の血が、凍った。そのかわりに、熱をふりはらって、意識が冴えた。

——天麗の佳人であったが、娘も、すこしも劣らぬ美しさをもって居る。

但馬守が、名高かった美貌を偲びながら、一歩寄ると、ふいに、美音は、よろよろと立ち上った。

「たしか、姉妹であったが、そなたは、妹かな？」

訊ねる但馬守へ、美音は、だまって、一礼すると、

「修太郎さん——」

と、うながして、よろめく足をふみ出した。

「お姉ちゃん、馬を……」

「よろしいのです。なおりました」

意外に強い声音で、美音は、こたえておいて、修太郎がさしのべた手をにぎりしめると、それに支えられて、一歩一歩を、必死にふみしめた。

但馬守は、敢えて、呼び止めなかった。

この娘が、自分をさける理由が、但馬守には、あまりにも、明白だったからである。

——胸を病んでいるようだが……あわれな！

野径に倒れているような惨めな境遇に追いやった責任の一端を、この自分も負わねばならぬ、と胸中に呟いて、但馬守は、遠ざかるそのいたいたしい優姿を見送った。

その畦径から、枯草の折れ伏した野へそれた時、但馬守の一行は、蹄の音を、速く、遠ざけて行った。

美音は、なお、倒れずに、足をはこんだ。

「大丈夫かい？　え、やすまなくてもいいかい？」

修太郎が、いくども心配して、血の色をうしなった顔を仰いだ。

美音は、そのたびに、微かに、首をふった。

やがて——。

朽ちかけた一宇の雨乞い堂を見つけて、美音は、修太郎に扶けられつつ、ついにそこまでたどりついた。

破れ縁へ腰かけて、蔀戸へよりかかると、美音は、小布をとり出して、口にあてた。

のどもとまで、血のかたまりが、ぐぐっとのぼって来るイヤな咯き気がつづいたが、口には、あふれなかった。

そうやって、しばらく、肩で大きく息づかっているうちに、咯き気は、おさまった。

「ごめんなさい。修太郎さん」

小布を口からはなして、美音が、よわよわしい微笑をつくってみせると、修太郎は、大人っぽく、眉を寄せて、

「馬を借りればよかったんだ。いかめしいおやじだったけど、親切にしてくれる様子だったじゃないか。むかしの知り人なんだろう？」

と言った。

「修太郎さん」

美音は、目を遠くに置いて、

「あのお仁を、討てますか？」
「なに？　なんだって？」
「あれが、柳生但馬守殿です」
「えっ！」
修太郎は、とびあがった。
「あいつが――ちきしょうっ！　あいつが、柳生但馬守か！」
目をむき、肩をいからせ、こぶしをにぎりしめる修太郎を、美音は、じっと見まもりながら、
「但馬守を討ちたいのは、修太郎さんだけではないのです。わたくしにとっても、敵と言いえるお人なのです」
「…………」
修太郎は、とまどった面持で、美音を見かえした。
「女や子供では、但馬守殿を、討ちとることは、かないませぬ。……わたくしたちは、人をにくむことよりも、人を愛することを、考えましょうね。修太郎さん、いいですか。これは、わたくしが、あなたに、心から、おねがいすること――」
いつもの修太郎なら、大声で、つっぱねたろう。
病む佳人の、雪のように白い容は、少年の目にも、﨟けて、一日だけを咲いて散る花のように、美しかったのである。

御場段切れ

夜明け――。
駒場野はずれの古い広い館の、がらんとした座敷に、ただひとり、猟師すがたに身を変えた糸耶が、放心のまなざしを、宙に送って、坐っていた。
父母弟の讐を復すべき日が、ついに来たのである。
はたして、この繊手によって、本懐がとげ得られるものかどうか――その不安をはらって、いまはただ、静かな虚心を持とうとして、身仕度をととのえてから、四半刻を、こうして、じっと動かずにいるのであった。
原野を流れる霧が、たてきった障子戸の隙間から、肌膚を刺す冷気を送り込んで来ていたが、それすらも、感じてはいなかった。
周辺の土民たちから、秩父屋敷と呼ばれているこの館は、遠い祖先秩父武蔵権守清光の頃に、構えられていた。時代が移るにつれて、さまざまの改築がなされていたが、武蔵野にその豪名を誇った伝統は、この座敷のたたずまいにも、一種の荘厳味をおびた古い趣をとどめていた。
漆を塗ったように黒びかりする巨大な柱や、天竺様の放射格天井や、吹寄菱の欄間など、これらは、そのまま、祖先が眺めた時と変りはない。
床の間に飾ってある小桜縅の鎧は、祖父の豊島兵衛尉頼重が、小田原陣にまとったものであ

る。

糸耶は、ふっと、祖先の声をきいたように、双眸に光を宿して、座敷を見わたした。

じぶんが、もし、不運にして、今日殪れたならば、もはや、この館を継ぐべき者はないのである。

妹の美音は、清光寺の住職によって、いずこかへ嫁いで行くこととなろう。

末裔さいごの一人を、館の物言わぬすべてのものが、じっと見まもってくれている――。

糸耶は、やおら立ちあがって、しずかな足どりで、仏間へ入った。

仏壇には、前列に三基の位牌が、まつられてあった。父と母と弟の――。

そのうしろには、百余の位牌が、びっしりと、ならんでいた。

糸耶は、灯明をあげて、合掌すると、長い間、身じろぎもしなかった。

――父上！

――母上！

――弟よ！

――この糸耶に、御加護を！

祈りは、それに尽きた。

春日局を討ちはたせば、じぶんもまた、三人のいる世界へ入って行くことを、のぞんでいるのであった。

糸耶は、三人の霊が応えてくれるのを、そうして、待った。

た。

糸耶・美音の父――豊島刑部少輔明重は、いかなる理由によって、老中井上主計頭正就に、殿中において刃傷におよんだか、その事実を、ここに記しておかなければならない。

糸耶が、この五年間に、耳に入れたかぎりでは、父に対する世間の批判は、冷淡なものであった。

「豊島刑部は、たしかに清廉潔白の士であったが、義理をまもらんとするに急なあまり、温順に帰すべき時世をわきまえずに、逆上気味であった。所詮は、武は以て天下を取るべしの、武弁殺伐の戦国の余風を承けた旧い人格であった。たかが、縁談上の憤懣で、殿中で、老中を討つなど、これは名を惜しむことにならず、威権に屈しなかったという名分にはなるまい。いやしくも、主君のおんすまいを、血でけがしたのだ」

たしかに――。

世間にきこえる刃傷理由では、豊島刑部の方にも、短気のそしりをまぬかれないものがあった。

まず、その理由を述べておこう。

刑部明重は、老中井上主計頭正就の長子河内守正利と、大阪町奉行兼堺政所奉行島田越前守直時の娘との間の縁談について、とりまとめ役を、老中酒井雅楽頭忠世から、命じられ、いったんは辞退したが、強い言葉で重ねての命令に、したがわざるを得なかった。

誠実な人柄だけに、明重は、引受けた以上、これを成立させるべく、江戸と大阪を三度も往復した。そして、ようやく、婚儀の日どりを決めるところまでこぎつけたのであった。

ところが、ある日、突然、明重は、家光の乳母お福（春日局）に呼びつけられて、

「上意」

と称して、

「井上河内守正利は、このたび、羽後山形城主鳥居土佐守忠政の娘と縁組なすべき旨、上様より仰せ出されたゆえ、左様心得られるよう——」

と、申渡されたのである。

明重は、愕然として、

「それは、主計頭殿も、すでに御承知でありましょうか？」

と、問うた。

「勿論のこと。その父親の願出がなくして、どうして上様の御意になろうか」

春日局は、冷然として、言いきった。

明重は、ただちに、井上邸へ、馬を馳せた。

主計頭正就は、訪問にこたえて、

「わしの方から願い出たことにされたが、あれは、お福殿の希望であり、もはや、上意と相成ったからには、やむを得まい」

と、言いのがれてしまった。

明重は、茫然とした。

明重にとって、自分からすすんで、とりまとめた縁談ではなかった。島田越前守直時とは、青年時代からの親しい友であり、むしろ、井上河内守正利に、その娘を嫁がせることは、明重としては、あまり賛成ではなかったのである。

酒井雅楽頭から、

「井上主計頭が、かねてより、島田越前守の娘が、美しく、才智があるときいていて、是非とも息子の嫁に、と希望している。このことは、上様のおん耳にも達していることだ」

と、言われて、それでは、と引受けた明重であった。

なんという侮辱であったろう。

てのひらをかえすとは、このことであった。

この破談には、必ず、裏面で、なにか、政治上の陰謀が圧力をくわえたからに相違ない、明重は、推察した。

しかし、上意、とあればたとえ、裏面にどんな宥し難い動きがあろうとも、幕臣としては、引き下らないわけにいかなかった。

明重は、ただちに、大阪へ飛脚を趨らせて、島田越前守に、破談の儀を知らせるとともに、自分の不明を詫び、且これは堪忍なり難い旨を、申送った。

おりかえし、越前守から、わが娘のことで、貴殿に間違いがあっては申訳ない故、重々忍耐されたい、と返辞があった。

しかし、ついに、明重は、堪忍しなかった。

寛永五年八月十日の未の刻、松の廊下における刃傷ぶりは、まことに、明重の武辺者たる面目を発揮したものであった。

ただの二撃をもって、主計頭正就を仕とめて、おのれは、背中を当番衆十人組の青木小左衛門

に抱きとめさせておきながら、従容として、血ぬれた白刃を逆持って、おのが腹から、青木の腹まで、一気に田楽刺しにつらぬいて、倶仆れに、絶命したのである。

後年、浅野内匠頭長矩が高家吉良上野介義央に刃傷におよんだ場面とくらべれば、明重の面目は、さらに鮮烈となるはずである。内匠頭は、二十五歳の青年でありながら、曲り腰の老爺の、額へわずかな傷痕をのこすのみにおわったのである。

この刃傷に対する老中たちの裁議にあたって、酒井忠勝ただ一人が、武士道の擁護のためには殿中の刃傷もはばからず、と喝破したことは、すでに述べたが、これは、忠勝が、明重のまことの肚の裡を読みとっていたからであった。

明重は、ただに、破談になった憤怒のみによって、井上主計頭を討ったのではなかった。

主計頭とお福が、醜い関係にあることを知っており、この両者に土井利勝が加って、幕政が壟断されることを、憂えた明重であった。

先年——元和八年、本多上野介正純が、改易となって、封土宇都宮十五万石を没収され、出羽国由利へ配流となった時、明重は、御目付役として、正使に附従して行った。

本多正純は、明重の人格を高く買っていて、その到着を待って、ただちに居間へ呼んで、改易となった真相を打明けたのであった。

これは、井上主計頭と将軍家乳母お福との共謀によるものであった。

改易の表面理由としては——、

一、私に鉄砲を鋳造したること。

一、その鉄砲を、公の関所を、欺いて、通過せしめたこと。

一、宇都宮城本丸の石垣を、無届で修理したこと。

この三箇条の罪であった。

たしかに、これらは、「武家諸法度」を犯していた。

しかし、これだけのことで、本多家ともあろう名門が、どうして、やすやすととりつぶされるものであろう。

本多正信・正純父子は、幕府創立にあたって、第一の功臣だったのである。

家康が最も信頼した謀臣は、本多正信であった。また、正信の方でも、その生涯をつくして全幅の智謀を献げたのであった。

正信は、家康より四歳年長で、ともに、その壮年期を、唇歯輔車の関係で、つらぬき通したのである。たしかに、正信には、さしたる武功はなかった。そのかわりに、家康の相談相手としては、殆ど唯一人の人であった。しかもなお、謀臣の上乗という、古来しばしば見られる危険人物的な不安を、家康に、みじんも、抱かせなかった。

その秘策陰謀をもって、家康の覇業を達成せしめて、なお、正信は、上野八幡一万石の小さな封土にあまんじたのである。

そして、正信の誠忠は、その子正純に継がれたのであった。

関ケ原役前後から大阪役まで——およそ家康の晩年二十年間は、本多父子の智謀によって、その天下統一はちゃくちゃくとしておしすすめられた、といっても過言にはなるまい。

例えば——。

慶長十九年、大阪冬の陣が和平をむすぶにあたって大阪城の壁を壊ち、隍をうずめさせたのは、本多正純であった。これは、約束の範囲をはるかに越えて、甚しい大規模の破壊ぶりであったので、大阪方は抗議の使者をしばしば寄越したが正純は、発熱と称して、引見しなかった。そして、本城をのこすのみに、この破壊をつづけてしまった。翌年攻撃の時に、城が早く陥ったのは、これがためであった。

正純の辣腕の一端である。

家康という人物は、遠い者に対しては大層寛大であったが、近い者に対しては苛酷なまでにきびしかった。わが子秀忠に対してすらも、ややもすれば冷淡な態度をしめした。

この父子の間に立って、その円満を欠くことのないように、非常に心胆をくだいたのが、本多正信・正純であった。もし、本多父子がいなかったならば、あるいは家康と秀忠の仲は、ついに、決裂していたかも知れない。

一例を挙げれば——。

秀忠が、関ヶ原役に、参陣が遅れて、家康の不興を蒙った。この時、正純は、まかり出て、

「これは、断じて、嗣君の責ではありませぬ。わが父佐渡守の誤算であり、ねがわくば、罪せられるならばわが父を——たとえ、死を賜うも苦しからず——」

と、言いはなったのであった。

君のために、おのが父を斬ろうとしたとは、如何なものか、という非難もあったが、家康の信任が、これがために厚くなったことは事実である。

ともあれ——。

正純は、父正信に劣らぬ、当代比肩すべき者のない辣腕家であり、父正信が、大久保忠隣失脚後、江戸における第一の執政者たりし時、すでに、駿府における第一の出頭人であった。

「武功覚書」にも、次のように記されてある。

東照宮には、正純を殊に御信用ありて、十八歳にて、未だ弥八郎と申せし時より、よろず御内密の御相談をも遊ばされたりしとなり。……何故にや、権現様には父の佐渡守をば、佐渡ああいたせ、こうせ、などと仰せられしが、子の上野介には、いつも上野殿ああめされ、こうめされ、などと、きっとしたるおん詞遣いにてありし、と。

当然——。

家康の死は、本多父子の勢力を、大きく傾けてしまった。そして、父正信が、家康薨去後五十日目に、後を慕うて、逝くや、正純はたちまち、完全なる孤立者となったのである。

辣腕者であるだけに、八方に敵が生れていた。

「本多上野介め、大御所を笠に被おって、専横きわまる。いまに、見ておれ！」

ひそかに、そう考えていた者は、非常な数だったのである。

ただ、将軍秀忠だけは、関ヶ原役において、自分をかばってくれた正純の恩を忘れず、家康薨去後、大幅に、封土を加えた。

正純は、それまで、それだけの権勢にもかかわらず、禄高は、わずか二万石であった。

秀忠は、正純に、宇都宮城を与え、十五万石にして、功労にむくいたのである。

もし、本多正純が、すでに、おのれの時代は去り、政権は、土井大炊頭利勝や酒井雅楽頭忠世の手中に移ったとさとって、敬遠されるままに、加判者の位置から退いたならば、改易の憂目に遭わずに済んだに相違ない。

正純は、それをしなかった。

のみならず、土井利勝に対して、まっ向から対立した。

両者が、口もきかず、挨拶も交さぬ間柄になった直接の原因は、井上主計頭正就の老中就任問題である。

主計頭正就を、加判者に推挙したのは、土井利勝であり、これは、ひそかに、家光乳母お福からたのまれたためであった。

正純は、家光が将軍になったあかつき、お福と土井利勝がむすびついて、江戸城を思うままにとりしきり、幕府の様相を歪めてしまうに相違ない、と看破したのである。すなわち、井上主計頭を、その年、安藤重信が死んで空席となった老中職に据えようとするのは、彼らの勢力を増大せんがためであった。

正純は、断乎として、反対した。

その理由として――。

井上主計頭の伯父こそ、大逆罪を犯した者であることを挙げたのである。

主計頭の祖父は、徳川家康の祖清康に仕えた父阿部大蔵大輔定吉であった。精忠無二の臣であった。

ところが、定吉の嫡子弥七が、突如として、清康を斬る大逆を犯したのであった。

定吉の精忠は、衆の能く知るところであったので、定吉は、そのまま清康の子広忠を輔佐する老職をつづけたが、わが子の大逆を愧じて、自らその祀を断った。弥七のほかに、娘が一人いたが、養子をとらずに、井上半右衛門清秀という者に嫁せしめた。そして、生れたのが、主計頭正就であった。

正就は、武将としては、なんら功名をあげたことはなく、秀忠の乳兄弟として、君側にはべって、納戸頭、小姓番頭、小十人徒歩衆頭などをつとめて、立身して行った人物であった。良吏としては、かなり高く買われていたが、一部からは、大奥の女中たちを籠絡する手腕に長けている佞臣、というそしりも受けていた。

いずれにせよ、東照権現様の御祖父を弑逆した謀叛人の甥たる者を、加判の地位に加えることは、断じて避けねばならぬ、と正純は、主張して、ゆずらなかった。

しかし――。

もはや、正純の主張を正しい、として味方する者は幕閣には、一人もいなかった。

正純の反対は無視されて井上主計頭は、閣老に加わった。

そして、正純を失脚せしめるべく、ひそかに、禍因をさぐったのも、主計頭であった。

記録によれば――。

元和八年四月八日、家康の七周忌の法会をおこなうべく、将軍秀忠は、日光参詣をふれ出して、十二日、江戸城を発し、十四日、本多正純の宇都宮城に宿した。

十九日に、いっさいの式をおわって、日光を下って、また、宇都宮城に宿泊する予定であった

が、急に、これを変更して、秀忠は、壬生に至った。

そして井上主計頭正就一人だけが、宇都宮城に入って、旅館構造の模様を巡察したのであった。

これは、秀忠が日光を下って今市に来た時、主計頭から、一通の密書を読まされたためであった。

密書は、秀忠の女兄奥平信昌の妻から、急使によって届けられたものであった。

「本多上野介正純は、容易ならぬ企てを抱いて居りますゆえ、くれぐれも御要心あそばすよう——」

主計頭に宛てて、自筆でしたためてあった。

秀忠は、そこで、主計頭を正使として、宇都宮城に遣し、

「このたび、日光参詣に際しては、格別の骨折りであったから、出府におよばず、そのまま、宇都宮で休息するがよい」

そう告げさせておいたのである。

密書の、容易ならぬ企て、というのは、鉄砲をひそかに製造したこと、宇都宮城の普請にあずかった幕府附人たる根心同心百人を殺したこと、宇都宮城二の丸三の丸の修築を申立てながら、本丸の石垣をも改築したこと、城中の殿舎改築については、怪しい構造があること等々であった。

全くの嘘もあり、誇張もあった。しかし、その半ばは、事実であった。正純の考えは、密書の訴える旨とは反対であった。将軍の身を大切に思うあまり、万が一の事変にもそなえて、鉄砲を

とり寄せ、防備万全の旅館を構造したのである。正純は、あまりに将軍に奉仕しようとした事が、かえって、その身の仇となったわけである。

豊島刑部明重は、改易没収に際して、そのことを、くわしく正純からききかされ、深く心の奥にとどめておいたのである。

五年後にいたって——。

清廉実直な明重は、春日局と井上主計頭から最大の恥辱を与えられて、本多正純の言葉を思い浮べ、

——よし！　この際、井上主計頭を殿中において、討ち果し、これをもって、幕閣内を、反省をさせることこそ、三代に仕えた臣たるものの報恩の道である。武士道の吟味とはいかなるものか、いまこそ、天下に知らしめてやる！

そう決意して、潔く決行したのであった。

さて——。

非運に果てた三基の位牌の前から、糸耶は、しずかに立ちあがった。

一歩、あゆみ出そうとして、ふと、父の位牌が、微かに動いたように感じて、頭をまわした。

錯覚と思いかえした糸耶は、

——この期におよんで、ひるんだか、糸耶！

みずからを、つよく叱った。

座敷へもどって、鉄砲を携げると、もはや、永久に見すてようとするわが家へ目をくれようと

せず、すたすたと、庭を横切って、茫々たる原野へ出た。

うごいてやまぬ霧は、遠く楢や竹の林を烟らせつつ、いま、朝の陽に追われていた。

淡々(あわあわ)とした、光のない晴れた空の下に、冬を待つ色に移りつつある原野は、糸耶の心を洗う荘厳な趣を湛えていた。

野末に起伏している連山は、夢のように淡く、かぎりなくひろがる旗すすきの波も、雲影のように茫乎としていた。

目を細めて、この一角に彳めば――。

そのむかし、新田義貞が骰子(とうし)を投げ打って、多摩川を渡って以来、この野をわけて疾駆して行った武蔵七党武士の騎馬すがたが、まぼろしとなって、彼方に泛ぶ。

「武相の兵は天下に敵なし」

とは、近古以来、武蔵を中心とした関東武士の剛勇を称賛した詞(ことば)である。

「額には、箭(や)は立つとも、背(そびら)には立てじ」

とは、その武士たちが、家訓として、その一族郎党に教えた語である。

広漠たる曠野が、この気概を生んだといえる。

月影の草より出て、草に入る壮大な景趣に心身をつちかわれて、尚武義侠の習俗をつくりあげた武蔵武士は、朝廷より任命された武官ではなく、いずれも、この原野の一隅に居を営み、百歩の畑を耕し、牧場を構えた土族たちであった。

太古のままの自然に教えられた生活が、彼らを勇敢にし、強健にしたといえる。

牧場の内から、良馬を選びとって、立て飼い、疾駆矢のごとく、進退あざやかな駿足にきたえあげた彼らは、明けても暮れても、これにうちまたがって、野獣を追い狩っているうちに、その血を闘志濃いものにしたのである。

武蔵武士は、戦いに臨むに当っては、生死は眼中になく、父が死んでも子はひるまず、子が討たれても親は退らず、死ぬるが上を乗り越え、乗り越え、闘った、という。

――わたしのからだには、武蔵武士の血が、流れているのだ！

糸耶は、眉をあげて、旗すすきの中を進んで行った。

その日――。

春日局以下、大奥から選ばれた御殿女中二十余名の行列が、駒場野に到着したのは、正午であった。

御代参という格式をもって、その行列は、往還の人々の目を見はらせるものものしいものであった。

春日局は、総蒔絵の駕籠(かご)に乗り、御年寄や中臈は、紅網代(あじろ)真鍮紋の駕籠をつらねた。

この駕籠をはさんで、部屋子、添番、伊賀者たちの随行したのは勿論であるが、他に、道具(薙刀)挾箱、長柄傘、索馬、騎馬供、供侍、徒士(かち)押(足軽)茶弁当、供槍など――これは、二十万石以上の大名行列と変りはなかった。

なお、それに加えて、お鷹野には、一足さきに、お目付や書院番や新御番や御小納戸や数寄屋坊主や小十人などが到着していた。

旗本の中には、大久保彦左衛門の渋紙面も交っていた。

じっとしていることのきらいな老人は、宿舎にあてられた寺院の境内で、しきりに馬を、乗りまわして、
「はっ、はっくしょいっ！」
と、わざとらしい大きなくしゃみをして、
「女わらんべの遊興にくっついて参ると、満身の創痍が、なげいて、ちくちくと痛み居るわい」
と、言ったり、寺僧が通りかかると、いきなり、
「作麼生！」
と、どなりかけ、びっくりして振り仰ぐのへ、
「解脱門内へ、禽獣を追いかけまわす殺生の徒を憩わせるとは如何？」
と、厭味をあびせかけたりしていた。
老人は、松平伊豆守から、ひそかに、今日起るであろう異変を耳うちされ、下手人を追うと見せかけて遁してもらいたい、と依頼されたので、自ら願い出て随行して来たのであった。
春日局を襲撃する者が、神子上源四郎ときいて、老人は、瞠目したが、
——それも、よし！
と、即座に肚をきめたのであった。
——源四郎のやつめ、空斎から、差料が村正と断定されて、大凶の剣相と観られ居ったが、さては、異変を起す宿運であったか。
老人は、その時の源四郎の言葉を思い出したのである。
「兵法者は、剣に生き、剣に死にます。かりに、おのが剣の相に負けて、悲運に遭うも、兵法者として、悔いはございますまい」

——源四郎の剣をもってすれば、春日局を討ち果すことは、さしたる難事ではないわい！　ひとつ、この目で見とどけてやろうず！
彦左衛門は、日頃のひねくれぶりを、さらに輪をかけたものに見せかけつつ、内心では、久し振りに、非常な昂奮をおぼえているのであった。
「はてさて——お鷹狩りに参って、衣裳をきかえるのに一刻以上も無駄に費さねばならんとはのう。獲物どもに、化粧の匂いをかがせても、はじまるまいて。……はや、日が昏れてしまうぞ！」
そうどなったとたん、彦左衛門は、はっと、ひとつの不安を、脳裡に持った。
——柳生道場の者たちは、一人も、姿を見せておらんぞ！
いままで気がつかなかったのが、迂濶であったというべきであった。
春日局の外出にあたっては、これまで必ず、名のきこえた兵法者たちがその顔を、供立の中へ交えていたのである。
——面妖しいぞ！
急に、顔をひきしめた老人は、紫の幕をめぐらした山門から馬を駆け出させると、
「お鷹野支配方は、いずれだ？」
と、叫んだ。
そこにつめていた徒士の一人が、
「鶴寄土手のむこうかと存じます」

「うむ――」

老人は、まっしぐらに、そこへ向って、馬をあおった。

鶴寄せの堤は、楢林の中を、大きくうねって、つづいていた。

そこを駆け抜けながら、彦左衛門は、油断なく、林の中へ、神経をくばった。

柳生の者たちが、ひそんでいるとすれば、この地点に相違なかった。

――必ず、春日局は、但馬守にたのんで、目に見えぬ場所へ、手練者どもを伏せさせて、おのが身をまもらせているに相違ない。

この推察は、あやまっていないはずだった。

しかし――。

堤に沿うて駆けつつ、彦左衛門は、なんの気配も察知することはできなかった。

鳥見役人が起居する鳥見屋敷が、すぐむこうに、藁の葺き足の美しい大きな入母屋の屋根をあらわした。

一気に、そこへ到着した彦左衛門は、庭で、鷹匠頭が拳に据えた白斑の鷹を眺めている御鷹野支配に、

「ご苦労――。大久保忠教じゃ」

と、声をかけた。

「ああ、これは、ご老人」

御鷹野支配は、笑顔をつくって、近づいて来て、

「御壮健にて、何よりに存じます」

「くたばる寸前までは、目も耳も口も、手足を自在に動かせてみせるわい」

そう言いつつ、彦左衛門は、屋敷内へ、鋭く、眼光を投じた。

同じ日の朝――。

伊皿子の竹芝寺の方丈の一室で、神子上源四郎は、悪夢にうなされて、ふっと、目ざめていた。

目ざめたとたんに、どんな悪夢であったか、記憶に残らず、不快感だけが残った。

まだ熱があるらしく、眼球が微かに痛み、歯は浮いていた。四肢は、けだるかった。

広姫に、ここへつれて来られたのは、二日前であり、それは知っていた。

いや、知っているどころか、昨夜は、ふいに、広姫が、顔へ顔を合せて来たのを、払おうとして、払いきれなかった源四郎である。

唇を押しあてられることに、こちらには、なんの感動もなかった。ただ、わずらわしかった。

――おれのような男を、どうして好くのか？

その不審を起しながら、広姫のなすままにまかせていた。

もとより、広姫の方でも、燃えるような高熱を発している源四郎に、長くかぶさっているわけにはいかなかった。

顔はすぐはなして、しばらく、手を握っていたが、住職に呼ばれて立って行き……その衣ずれの音をききながら、源四郎は、意識をうしなってしまったのであった。

――歩けるならば、今日のうちにも、去らねばならぬが……。

そう思いつつ、源四郎は、視力をとりもどそうと、天井の一点へ、眸(ひとみ)をこらした。しかし、その努力は、いたずらに、頭痛を招くだけだった。

音もなく、黒兵衛が、入って来たのは、この時であった。

「お加減は、いかがでございますかな？」

「だいぶ、よい。……迷惑をかけた」

「迷惑をかけられたのは、貴方様でございますわい。いやはや、なんとも、お気の強い姫様でございますて」

「姫は、どうなされた？」

「住職殿の忠告を受けられまして、当分この寺に住まうことを宣言なさるために、いったん、お城へ馬をとばしてお帰りになりましたが、午(ひる)までにはもどると申されて居りました」

「おれは、公方(くぼう)のお妹君など、妻にする気は起らぬ」

「左様でございますとも！　あの姫様は、少々きちがいじみて居りますわい」

黒兵衛のことばに、源四郎は、かねて思っていたことを甦らせた。

――徳川家の血すじには、異常なものがある！

そのことだった。

「ところで――」

黒兵衛は、ちょっと気づかわしげなまばたきをしながら、

「春日局のお鷹狩りは、どうやら、本日とりおこなわれる模様でございますが……」

と告げた。

昨日、源四郎は、高熱になやみつつも、ふと、予感がして、黒兵衛に、そのことを調べて来るように命じておいたのである。

――やはり、予感が当ったか！

源四郎は、肚裡でうめいた。

――このからだでは、春日局を討つことは、かなうまい。

――しかし、おれは、松平伊豆守と約束をした！　この機会をのがしては、再び、春日局が大奥から外へ出る日が、いつになるかわからぬ。

源四郎は、すっと、身を起した。

「むっ――ど、どうなさいます？」

黒兵衛は、黒兵衛で、源四郎が、そうと知れば、そのからだで駒場野へ出かけるのではあるまいか、と心配だったのである。

「そのおからだで、外出は、御無理でございますぞ。御用がおありならば、てまえが、代って、いたしましょう」

「わたしでなければ、果せぬ用だ」

「それは、御丈夫の時のことでございます。……失礼ながら、そのおからだで、剣はふるえませぬぞ」

黒兵衛は、源四郎のただならぬ決意の色を、その蒼白な面貌に見て、思わず、そう言った。

「わたしは、松平伊豆守殿と約束した。お前は、天井裏でぬすみぎいていたはずだ」

「……」
黒兵衛は、息をのんだ。
――よわった！
心から、そう思った。
「馬を引け、黒兵衛」
「し、しかし、そ、それは――」
「命令だぞ！　引けっ！　急ぐぞ！」
――南無！
黒兵衛は、ぎゅっとまぶたをふさいだが、うなずいた。
「やむを得ませぬ。したれど、てまえにお供させて頂かなければなりませぬぞ」
「いや、わたし一人で、行く」
「ならば、たとえ御命令であろうとも、馬を引きませぬわい」
「莫迦っ！」
源四郎は、よろよろと立ちあがって、床の間にたてかけた差料を、とろうとした。
黒兵衛は、かぶりをふった。
「その不屈の御気性に、てまえは惚れたのでございますて――」
そう言いすてて、馬を引くべく、黒兵衛は、走り出て行った。
春日局以下御殿女中たちが、胴服に霰小紋のくくり袴、黒ふくりんの背割羽織という男装をし

て、御鷹野へ入って来たのは、未の刻（午後二時）をまわっていた。
春日局は、ひとり、将軍家拝領の白銀の端反り笠をかぶり、白の采配を持っていたので、どんなに遠くからでも目立った。
局の前を、鷹匠頭が、家光愛用の「白雪」という白斑の鷹を、拳に据えて、進んだ。白雪の脚に、紅の緒総がついているのは、昨年、禁裏へ献上の鶴をとらえたしるしであった。
しきたりとして、随従しているのは、数名の中小姓、胡床持ちの小姓、馬丁、御道具方、それに伊賀者二名ばかり――それだけであった。
尤も、樹陰や堤の下や、小川のほとりや辻堂の裏手など、警固の目付や徒士が、そっと、うずくまっていた。
駒場野狩猟にあたって、騎馬勢子、諸番頭以上多くの軍士をしたがえ、騎馬勢子、諸番頭、組頭、番士、目付、徒士頭などが赤い旗をかざし、小十人ならびに徒士の勢子が青い旗をひるがえして、鯨波をあげて進退する光景は、ずうっと後世のものだった。すなわち、泰平の時世の軍隊教練をしたのである。
この当時は、本当の鷹狩りであり、勢子をして狩出させなくても、獲物は、たくさんいたのである。
鷹匠頭は、春日局をふりかえって、
「御場段切れには、理想の日和でございます」
と言った。
午後から雲がひろがって、薄陽になっていた。風も弱かった。

ゆるやかに傾斜した草原を横切って、椈林の中に入ると、鷹匠頭は、鷹の脚の紐を解いて、
「さ——」
と、春日局へさし出した。
春日局は、自分の拳へ鷹をとまらせて、
「するどい目じゃ」
と、微笑して、そのたくましい、不動のすがたを眺めた。
白雪は、御鷹野に入ったことをよく判っていて、胸を張り、大きく瞠いた目に凄い光を宿して、闘志をみなぎらせていた。
林のはずれに立てられた白い大きな吹貫(ふきぬき)のところまで、春日局は進み出た。
一町ばかり彼方に、小川が、白く光ってうねっていた。向う岸は、欝蒼たる黒い森であった。
森の中に、幾名かの鷹匠がいて、こちらの鷹匠頭が、赤い采配をうち振って合図をするや、一斉に、竿で、灌木を打った。
ひそんでいた鶉が、羽音をたてて、空へ飛び立った。
森から、小さな黒点が、ひとつ、ふたつ、三つ、と昇っても、なお、春日局の拳の上では、白雪は、首も動かさず、じっと、その行方を見まもっていた。
「お局様」
鷹匠頭が、声をかけ、春日局は、拳を、ぱっと振りあげた。
猛禽は、羽搏きの風を、そこにのこして、矢のように、まっしぐらに、森の上空へ向って、翔

けあがって行った。その迅さは、あっという間に、鶉の舞う中空より、倍ぐらいの高さまで、達した。
ほんの微かな一点と化した白雪は、さながら流星のように、狙いすまして、鶉の一羽めがけて、翔け降りて来た。
鶉が、鷹の襲来とさとって、逃げようとした時には、もうおそく、その鋭い嘴と爪で、一撃をくらっていた。
鷹匠頭が、竹笛を口にあてて、
ひゅーっ！
と吹き鳴らすと、鷹は、ひろげた翼をすぼめて、まっしぐらに、もとの上空へ、影が掠めるように昇って行った。と見るうち、忽ちに、一直線に、翔けもどって来て、春日局の拳の上へ、ぴたっと、停った。
「おお、たのもしや！」
春日局は、大きな感動の声をあげた。
撃たれた鶉が、落下したのは、小川近くの叢(くさむら)であった。
三名の小姓が、そこへ走って行ったが、殿(しんが)りを駆ける者が、ふと、灌木にかこまれた窪地へ、目をとめて、
「何者っ？」
と、叫んだ。
同時に——。

だあーん！

原野いちめんに、筒音が轟いて、春日局の拳の上から、白雪が、ぱっと翼をひろげて、数尺高く舞い立った。

弾丸が、局のかぶった端反り笠すれすれに、掠めたのである。

「曲者っ！」

小姓たちは、鶉をひろうのを止めて、血相変えて抜刀するや、白煙の漂う窪地めがけて、躍り込んで行った。

小柄な猟師すがたの狙撃者が、窪地から、とび出して来て、けものが草を分けて跳ぶに似た、おそろしく敏捷な身ごなしで、走り出すや、

「そやつ！」

「捕えろっ！」

樹蔭から、堤の下から、小川のほとりの叢から、辻堂の裏手から——八方から、警固の面々が、その速影へ向って、躍起の疾駆をしめした。

——われこそ、手柄を！

糸耶は、まさに、いっぴきのけものと化して、走った。

八方から、堰を切った奔流のように殺到して来る敵影も、目に入らず、恐怖もおぼえなかった。

——春日局を！

——ただの一太刀でも！

その一念のみが、火のように、小柄なからだに燃えさかっていた。

高い吹貫きの下で光る白銀の端ぞり笠をめざして、糸耶の四肢は、狂ったように躍った。

「こやつ！」

「うぬっ！」

短い、鋭い叫びとともに警固の士たちは、ふりかざした刀を、びゅっとあびせたが、いずれも、一尺も二尺もはなれた空間を、いたずらに搏っただけであった。

糸耶の速影が、風のごとくだったといえる。

右へ奔るとみせて、さっと左の方角へ転じたとみるや、まっしぐらに突進し、と思ううちに、ぱっと窪地へおどり込み——糸耶の疾駆ぶりは、予測すべからざる変化をもった。

そして、しだいに、春日局へむかって、迫って行ったが……。

いかんせん、その時すでに、局の身は、それまでどこにひそんでいたのか、突如として出現した七、八名の覆面の武士たちによって、まもられていた。

「しゃっ！　おのれ——曲者っ！」

草原の端で、ものすごい大声をほとばしらせたのは、大久保彦左衛門であった。

老人は、春日局をまもった覆面の武士たちを、曲者と呶鳴ったのである。

——南無！

馬脚をあおって、だだっと駆け出したが、

——あれは、源四郎ではないらしい！

その直感が、まだ気持に余裕をのこしていた。

——源四郎のやつ、あの小者に鉄砲を撃ちかけさせておいて、皆の目をそこへ集めておいて、隙をねらって局を討つ所存か？

そう考えたが、それも、いまは不可能に思われた。

柳生道場の面々が、春日局の周囲をかためてしまったのである。

——まずい！　まずい！

彦左衛門は、胸のうちで、叫びながら、馬をとばした。

糸耶は、十間あまりの近い地点まで達して、小姓の一人に、行手をさえぎられていた。

「ええいーっ！」

小姓は、春日局の前で、あっぱれな働きをしめそうと、高く気合を発して、大きく、一刀を、ふりかざした。

糸耶は、それにむかって、地を蹴った。

「あっ——う、うっ！」

糸耶の右手にかざした白刃の閃きとともに、小姓は、頭を斜めに傾けて、よろめいた。

その時——。

覆面の武士たちのうちから、二人ばかりが、しずかな足どりで、出た。

そこへ駆け着いた彦左衛門が、

「そやつ——わしにまかせいっ！」

と、呶鳴った。

「御老人！」

小姓の一人が、走り寄って、馬の口をとろうとした。

「たわけっ！」

彦左衛門は、小姓の顔を、ぱっと足蹴にした。

糸耶は、血ぶるいして、脇差を頭上高くかかげるや、

「春日局！」

と、絶叫した。

透きとおった白いおもては、点々と返り血を散らして、凄絶な美しさだった。

「豊島刑部少輔（ぎょうぶしょうゆう）明重がわすれがたみ糸耶、見参っ！」

これをきいて、春日局は、大きく目をみはった。

——明重のむすめが！

唖然としたことだった。

「なにっ！　豊島刑部のわすれがたみじゃと！」

これは、彦左衛門の叫びだった。

糸耶は、文字通り、死にもの狂いで、突進しようとした。

しかし——。

前をさえぎった覆面の武士へ、ひと振りするひまを与えられず、足をすくわれて、だだっと泳いで、草へのめった。

この光景を、遠く、森の中から神子上（みこがみ）源四郎は、目撃していた。
そのかたわらには、四名の鷹匠が、当ておとされて伏していた。
源四郎が、病軀に悲愴の闘志を張って、あわや、躍り出そうとした——一瞬はやく、糸耶は、鉄砲をうち放ったのである。
源四郎自身、春日局を仕とめる自信はなかった。
しかし、春日局に、恐怖の悲鳴をあげさせる動きは肚裡の決意となっていたし、彦左衛門の、戦場かけひきに慣れた行動を利用すれば、遁れることも可能と考えていたのである。
思いもかけず、同じく春日局の生命を狙う者の出現で、源四郎の阿修羅となる企ては未然に阻まれた。
——そうか。あれは、豊島明重の長女であったのか。
源四郎は、暗然として、ひき立てられる猟師姿を、木立の蔭から、見やった。

白珠香

「運・不運の岐れは、これでございますかな」
不意に、背後で、黒兵衛の声がした。
いつの間にか、命令にそむいて、やって来ていたのである——。
とっさに——。

源四郎の心が決した。
「黒兵衛！」
「はい——」
「あの娘を救うぞ！」
「え？」
黒兵衛は、のびあがって、
「娘でございますか、あれは？」
「うむ。修太郎と一緒にいた娘の姉だ」
「ほ——」
「お前の力を借りる」
「身代りになれとの仰せなら、よろこんで相成りますが……ちと、面倒でございますな。顔をつつんでいる面々が邪魔になるわい」
「あれは、柳生道場の者たちだ」
「されば、ますますもって、厄介でございますて」
「だから、やるのだ！」
と言い放つ源四郎の蒼白な病める貌を、黒兵衛は、ちらと、心配そうに見やったが、
「運は天にあり」
と、小さく呟（つぶや）いた。
「敵陣をひっかきまわす用意はいたして参って居ります」

「よし――」
二人は、森を忍び出ると、鳥影のように、小川の上を掠め過ぎて、草の茂った窪地へ、とび込んだ。
糸耶は、後手にしばりあげられて、春日局の前に、ひき据えられていた。
局は、微笑しながら、じっと見おろして、
「父が乱心の振舞いを、この春日のせいだと、そなたは、思いこめたか？」
「…………」
糸耶は、はげしく、睨みあげて、なんともこたえなかった。
「美しゅう育ったものを……あたら、あらぬ妄執にとりつかれて、散って果てやるのか」
「…………」
糸耶のくちびるが、わなないた。
「女は、女らしゅう生きる道があろうぞ。と申したとてもはや、おそいが――」
糸耶は、顔をまっすぐに立てた。
「貴女さまは、それで、女らしゅう生きて来られましたか！」
火のように鋭く、あびせかえした。
「ふゝゝ……」
春日局は、せせら笑った。
「女らしゅう心がけたからこそ、上様の御代理も、こうして勤めているのじゃ」
瞬間――。

糸耶は、局の顔めがけて、べっと唾を吐きあげた。
唾は、胸もとへかかった。
春日局の表情が、さっと険しいものと化した。
糸耶は、小姓の一人に、蹴倒されて、肩を、胸を、喘がせた。
「小娘め！　妄執のむくいのほど、思い知らせてくれる！」
春日局は、残忍な語気をそこにのこすと、くるりと背を向けて、歩き出した。
柳生の士たちが、そのあとにしたがった。
楢林を、ずんずんもどって行きながら、春日局は、
――小娘めが！
いくども、胸のうちで、いまいましく、罵った。
全身いたるところへ、糸耶の唾が吐きかけられているような不快感があった。近頃、この老女にとって、これ程の激怒すべき出来事はなかった。いや、ただの激怒ならば、あいてを、これから、どのような残忍な手段で片づけてやろうかという復讐心にすりかえることができたであろう。
激怒は、名状すべからざる狼狽した混乱の衝撃からむりやりに噴き出されたものだった。
どんな場合にも冷たい理知を失わないのを、ひそかに誇っていた女性であった。
それが、たかが、二十歳前後の小娘の必死の凝視を受けて、思わず、たじろぎ――その瞬間から、足もとの地面が音たてて崩れるような不安に襲われたのであった。

――たかが小娘いっぴき！
不安をおし伏せ、激怒を全身のものとしても、もはや、胸の奥の壁へ、泥のような不快感がべっとりとなすりつけられた意識を、払いのけることは、不可能だった。
女性という者は、自分で自分の心理を解剖することを、極端に嫌う。
その意味では、むしろ、ひどい臆病者である。病気に罹る怖れから病気になる臆病者に似ている。
まさに、春日局の状態は、いま、それだった。
なんとも堪えがたい焦躁感が、狂おしいまでに昂って来て、歩きながらも、いくどか、悪寒のような戦慄を、おぼえていた。
と――。
突然、去って来た場所から、鋭い叫び声が起って、春日局は、思わず、とび上らんばかりの衝撃を受けた。
「何事じゃ！」
われを忘れて、悲鳴をあげるように、のどをしぼった。
柳生の士たちのうちから、半数が、無言で、矢のように、木立をかけぬけて行った。
春日局は、えらばれた兵法者たちにまもられながらも、周囲の樹々が、一斉に無数の伏兵と化すような恐怖にとらわれた。
吹貫きの立てられたその場所は、濛々たる白煙に掩われていた。

黒兵衛が、地面へ投じたひと握りの火玉が炸裂したのである。忍びの術のうち、地遁十法に属する煙遁法であった。
柳生の士たちが、そこへかけ戻った時、すでに、源四郎は、彦左衛門の馬を奪って、糸耶をかかえて、鞍上の人となっていた。
「しやっ！　おのれ――不埒者っ！」
彦左衛門は、大袈裟な身ぶりで、抜刀して喚いていたが、これは、他の者たちの目にはいざ知らず、柳生の士たちには、いまいましいものに眺められた。
――ひねくれ爺め、日頃の欝憤を、この謀反ではらそうとして居るぞ！
疑う余地のない振舞いであったのは、彦左衛門が、柳生の士たちの疾駆をみとめるやいなや、おのが愛馬の臀部を、やっ、と薄斬ったのでも、明白であった。
馬は痛みに高くいななくや、魔の憑いた勢いで、走り出した。
「待てっ！　馬盗人め！」
老人が、太刀をふりかざして追いかけたのは、柳生の士たちの苦笑を呼んだ。
馬は、そのまま、旋風を起して、草原をつききり、鶴寄せ堤をおどり越え、街道へ出ていた。
糸耶は、救い主の背中へ、ひしとすがっていたが、これが何者か、まだ気づいてはいなかった。
ただ、ぴったりと合した肌へ、衣服を通してつたわって来る男の体温が、燃えるように熱いのを、どうしたことか、と訝っていた。
街道をかためていた警固の徒士たちが、不審を起して、ばらばらとまん中へとび出して、

「何者ぞ！」
「停まれっ！」
と、叫んだが、奔馬の勢いは、この阻止などものの数に入れず、驀地に、突破してしまった。
糸耶は、騎手の鮮やかな乗りこなしぶりに、爽やかな快感をおぼえた。
街道は、南へむかって、まっすぐに走っていた。
つい三年ばかり前に、伊予宇和島侯伊達氏の領地となっていて、ひろびろと、耕地が開墾されていた。
騎馬は、あっという間にその新地を抜いて、丘陵の林へ入っていた。
源四郎は、樹木が二重三重に映る眸に、とある杣小屋を映すと、たずなをひきしぼった。
そして、大きく、荒く、乱れる呼吸を、まぶたをとじて、おさめようとした。
「あっ！」
糸耶が、その横顔に、驚愕の叫びを発したのは、この時だった。

「降りられい」
源四郎は、まぶたをとじたまま、促した。
糸耶は、とっさに言葉が出なかった。
去る日——駒場野で、またたく間に、四名の敵を仆しておいて、わが屋敷に一飯を乞うたこの牢人者を、糸耶は、企てを看破されたと思って、討とうとしたのであった。
もとより、歯の立つ対手ではなく、こちらを茫然とさせるくらい、あざやかな退去ぶりをしめ

したものだったが……。
思いもかけず、じぶんを救ってくれたのが、この人物だったとは！
妹から、神子上源四郎、という名もきいていた。
「降りられい！」
源四郎は、かさねて促した。
「わたしは、さきを急ぐ——」
「あ、あの……」
何か言わねばならぬとあせり——あせればあせるほど、糸耶の気持は乱れ惑うた。
この時、源四郎は、波うって襲って来ていためまいに、ついに堪えきれず、がくっと、俯っ伏した。
糸耶は、はじめて、源四郎が、高熱になやんでいるのを、さとった。
——救われた恩をかえさなければならぬ！
目ざめたように、そう決意すると、糸耶は、瞬間、ふしぎなよろこびをおぼえた。
たづなを把るのは、糸耶の番だった。
「神子上殿。もう、しばしの辛抱です。がまんなされませ」
片手を、源四郎の胸へまわして、しっかとかかえるや、馬腹を蹴った。
それから半刻あまり後——。
麻布青山の、宏壮な大名屋敷の築地のつづく街道を一梃の駕籠につき添うて急ぐ市女笠の娘すがたが、糸耶のものだった。

駕籠の中に、源四郎が、ぐったりと意識をうしなっているのは、ことわるまでもないであろう。

糸耶は、大名屋敷の間口十間にもおよぶ矢倉門の、金の藤花をはわせた華麗な後藤彫の彫物を、市女笠の下から、ちらと仰いで、

——ひとの運命は、昨日と今日で、こうも変るものか！

暗い感慨を、胸にわかせた。

これは、青山忠成の屋敷であった。

家康が入国にあたって、諸侯に、地図をひろげてみせて、

「このあたりを、老馬を以て一円に乗回せば、その地を与えよう」

と、言うや、即座に青山忠成が、「それがしが——」と願い出て、それをなして、賜ったのが、この屋敷地であった。

糸耶の父と、青山家は懇意だったのである。

青山家は、江戸町奉行と関東総奉行を兼職した播磨守忠成はすでに逝き、嫡子伯耆守忠俊の代になっていたが、酒井雅楽頭忠世、土井大炊頭利勝とならんで、将軍補傅の栄誉をになっていた。

その父忠成は、いったん罪を蒙って職を退いた身のままに逝ったのであったが、その子忠俊は、家光が竹千代時代の教育がかりとして、朝暮の薫陶に至誠をつくして、その労をむくいられたのであった。

竹千代が廃嫡の風説があった頃、忠俊は、幼君が賢くあれとひたすら心に願うのみで、政治上の葛藤には一切ふれず、剛毅忠直の人格をまもったのである。その信義が、ついに、今日の地位を得たといえる。

その華麗な矢倉門に、栄誉がかがやいて、糸耶をして、わが身の惨めさと比べさせずにはおかなかった。

糸耶は、知らぬ。

この青山家も、すでに、土井利勝と春日局の陰険な策謀によって、その位置が、累卵の危機を迎えていることを——。

伯耆守忠俊が、老中職を追われて、謫居の秋を悲しむこととなるのは、もはや、日時の問題だったのである。

いま——。

まさに沈もうとする初冬の斜陽をあびたその矢倉門の、つかの間のかがやきこそ、青山家の運命を、象徴しているのであったが……。

糸耶は、ただ、わが身とひきくらべる暗い感慨のみを抱いて、その前を行きすぎて行った。

……さらに、半刻が過ぎて。

偶然のことであった。

糸耶が、ひそやかに、戸をたたいたのは、新しい構えの店々から明るい灯を流している本町通りに、一軒のみ、ひねくれて、頑として、檐の傾きかかった藁葺きの古家をいすわらせている——空斎のすまいであった。

戸が開けられ、空斎の陰欝な貌がのぞくと、糸耶は無言で、じっと見つめた。

空斎は、はれまぶたの垂れた細目を、きらっと底光らせたが、これも黙って、糸耶を入れるために、身を退けた。

糸耶は、ふりかえって、人足へ、駕籠をはこび入れるように合図した。

「誰かな？」

空斎が、問うたが、糸耶は、こたえず、駕籠が土間へ据えられると、

「手を貸して欲しい」

と、たのんだ。

空斎は、それが、神子上源四郎とみとめるや、一瞬、眉をびくっとひきつらせて、一層の凄味をおびた光を、細目から放った。しかし、口はとじたままだった。

糸耶は、空斎に手つだわせて、源四郎のからだを、奥の小部屋へはこんだ。

炉端で、対座した糸耶と空斎のあいだには、なお、しばらくの重い沈黙があった。

やがて――。

空斎が、粗朶を、火の中へ投じながら、

「仕損じられたの」

陰気に、ぼそりと言った。

「空斎殿の予言は、当った」

糸耶はこたえた。

糸耶の復讐のことを知っていた唯一の人物が、この空斎であった。

空斎は、かねてより、

「女人一人で、春日局は討てまい」

と、忠告していたのである。

糸耶は、この不気味な人物に、尊敬を寄せていたわけではない。味方とも考えてはいなかった。ただ、その判断力を信頼するに足りると、思っていたのである。

「あの男とは、どうして――？」

空斎は、怪訝のまなざしを、ちらりと糸耶へくれた。

「わたくしを、救うてくれたのです。病んでいる身もかまわずに、かけつけて、大久保彦左衛門殿の馬を奪い、わたくしを拉致してくれました」

「いかなる理由で？」

「わかりませぬ」

「…………」

空斎は、燃えあがる赤い炎へ、じっと、細目をあてて、口をつぐんだ。

「空斎殿」

「うん――」

「わたくしは、もう、春日局を討つことをあきらめなければならぬのであろうか？」

「左様さの……」

ひくく咳ばらいしてから、

「討てぬ者を討とうとするは愚かではあるが……お前様の気性が、このままあきらめきれるものか、どうかの」

「…………」

糸耶は、この時、奥から、源四郎のひくい呻き声をきいて、腰をあげようとした。

すると、急に、空斎は、猫背をのばして、

「あの男を、わしは、知って居る。人相は、宿世の罪業か、先祖の余殃を受けたか、凶色に翳って居る。その差料も、不吉の村正じゃ。かかわりを持たぬがよかろうと思う」

そう言った。

糸耶は、ちょっとためらっていたが、眉宇に勝気の色を刷くと、

「わたくしを救うてくれた仁です。見すててはおけませぬ。……空斎殿は、熱を下らせるよい薬をお持ちであろう。ねがえませぬか？」

とたのんだ。

空斎は、きこえぬようにじっと動かなかった。

糸耶が、かさねて、

「ぜひ——」

と、たのむと、空斎は、やおら身を起して、片隅の古葛籠へ寄った。

ごそごそと、中をさがしていたが、とり出したのは、鉄の小函であった。

糸耶は、それを膝の前に置かれたので、ためらわず、とりあげて、蓋をひらいた。

えもいわれぬ芳香が、匂い立った。

真綿の中に置かれてあるのは、雀の卵大の白珠（真珠）であった。

淡桃を帯びた銀白色の、純良無瑕の真丸（八方ころびの完全なる円）の大顆は思わず糸耶の息をのませる、神秘的な品位をそなえていた。

「これは……奈良三月堂の不空羂索観世音菩薩の宝冠よりぬすんだ品でござる」

空斎は、まず、そう教えた。

奈良三月堂は、天平五年、聖武天皇が良弁僧正に勅して、建立した。東大寺最古の伽藍である。

本尊不空羂索観世音菩薩は、寧楽時代の仏教美術の極致とされている。乾漆鍍金、寺伝良弁の作で、丈は一丈二尺であった。

その宝冠が、無数の白珠で飾られていることは、世に知られていた。

おそらく——。

この大きな白珠こそ、菩薩の光明を象徴するために宝冠の中央に輝やいていた品に相違ない。

だが、それにしても、海の底より採られた白珠が、どうして、芳香を放つのであろう？

糸耶が、まばたきもせずに、見つめていると、空斎が、薄ら笑みを口辺に刻んで、言った。

「白珠は匂うものではない。香を与えたのは、宝冠からぬすんだ後のしわざであろうよ。……熱病になやむ者に、かがせれば、効験あらたかじゃ。試してみなされ。……白珠を、お前様に、進ぜる」

「貸して下さればよい」

「いいや、呈上いたそう。わしなどが持って居ても、無意味じゃ。お前様のような類い稀な美女が持ってこそ、白珠も価値を持とうて。遠慮は無用じゃ」

空斎は、言った。

「では、遠慮なく――」

糸耶は、おしいただいて、立った。

奥へ入る糸耶の後姿へ、空斎は、じろっと視線を送ったが、その目つきは、しかし、ひどく、なまぐさい欲情をこめたものだった。

源四郎は、死んだように、仰臥していた。

枕もとに坐った糸耶は、白珠を、そっとつまみとって、源四郎の鼻孔へあてた。

しばらく、そうしたままでいるうちに、糸耶は、なぜともなく、ほっと深い溜息をひとつもらした。

半刻が、経った。

源四郎のまぶたが、微かにまたたくのをみとめて、糸耶は、

「おお……」

よろこびの声をあげた。

源四郎は、茫乎とした視線を、天井へ送って、おのれが何処にいるのか、たしかめようと、眉宇をひそめた。

糸耶は、息をのんで、その様子を見まもった。

ゆっくりと眸をまわした源四郎は、自分を凝視する貌を見出すと、

「あ――」

と、微笑をうかべた。

「そなただったのか」

そう言われて、糸耶の胸は、思わず、ときめいた。

何かこたえようとした糸耶は、源四郎が次に口にした言葉に、はっとなった。

「美音（みね）さん――だったな。約束を裏切って、……青松寺へ、もどって行けなかった」

そこまで、言いかけて、源四郎は、まぶたをとじて、浅い呼吸をととのえようとつとめた。

――美音は、この人と会っていた！

糸耶は、にわかに、嫉妬にも似たつよい感情にかられた。

――美音は、豊島の清光寺へ行かないで、青松寺に立寄った。そこに、この人がいたのだ。

そう判断した糸耶は、妹に裏切られたような腹立たしさをおぼえた。

妹が、今日のじぶんの企てを知っているわけはないのだ。だから、妹のたのみによって、この神子上（みこがみ）源四郎が、駒場野にあらわれたとは、考えられなかった。

妹は妹で、かってに、姉のじぶんに秘密で、身のふりかたをきめたに相違ない。

「……修太郎は、さぞかし、愠（おこ）っているだろう。……やむを得なかった。不甲斐なく、このざまだ」

自嘲して、ふたたび、まぶたをひらいた源四郎は、急に、視力がはっきりして、

「お――」

と、眸に光を増した。

糸耶は、微笑しようとしたが、頬がこわばった。

「お気づきですか」

それだけ言った。じぶんながら、かたい語気であった。

源四郎は、苦笑した。

「お妹御と、まちがえた。ゆるされい」

「いいえ。美音も、お世話になっている模様ですね？」

「いや……べつに——」

源四郎は、またふたたび、まぶたをとじた。

糸耶は、しばし沈黙を置いてから、にがいものをおし出すように、言った。

「わたくしは、貴方様を、危めようといたしました」

「…………」

「それにもかかわらず……どうして、わたくしを、救って下さいました？」

「…………」

「おきかせ給りとう存じます」

糸耶は、つよいまなざしで、源四郎の寝顔を見つめた。

「そのようなおからだで、どうして、わたくしを、救って下さいましたのか——」

「偶然であった、と申上げておこう」

源四郎は、こたえた。

「偶然、と申されますと？」

「左様、偶然、駒場野へ行きあわせた——それだけのことです」

「いえ！」

糸耶は、かぶりをふった。

「偶然とは思われませぬ。そのおからだで、駒場野などへ、何故あって——？」

「貴女のかかわり知らぬことだ」

源四郎に、つっぱねられて、糸耶は、はっとわれにかえった。

救われた礼をのべるかわりに、まるで、詰問し、咎めるようなじぶんの態度に自己嫌悪が来た。

——わたくしという女はどうして、こうも気性荒く生れたのか！

「すみませぬ。おゆるしを……」

糸耶は、頭を下げて、詫びた。

源四郎は、糸耶の膝の上にある白珠を見やった。

「いい匂いがいたすが……それですか？」

「はい。この家の主が、熱に効くと申して——」

糸耶に、それを近づけられて、芳香を胸へ吸い込んだ源四郎は、あらためて、部屋を見まわした。

「何人のすまいです？」

「空斎と申す、もと伊勢神宮で御師（祈禱師）をつとめていた者の家でございます」
「空斎――」
　源四郎は、すぐに、その陰惨な風貌と、自分の差料を村正と断定して、剣相を大凶と高言した時の態度を、思い泛べた。
「貴女と、あの御仁とは、ご懇意なのか？」
「はい、昨年のはじめ頃から――」
「わたしを、この家へかつぎ入れて、あの御仁は、貴女に、何か、申したのではありませんか？」
「べつに……」
　糸耶は、否定したが、空斎の不吉な予言を、胸のうちで、くりかえさないわけにいかなかった。

月夜斬り

忍ぶ恋路は
粟きび植えな
あわず戻れば
きびわるい

大声で、近頃はやりの弄斎節をうたいながら、一人の馬子が、檐をならべたうすい穢い旅籠通

りへあらわれて、とある一軒の土間に入ると、
「えらいことをやりおったぞ！」
と、どなった。
　油障子を開けて、三四人の首が、こちらへまわされた。
「なんだ、熊か――。てめえの法螺は、もうききあきた」
「こきやがれ。てめえら、博奕ばかりやってやがるから、世間のことには盲つんぼだ。今から、江戸中、人改めの大騒動になるのも知りやがらねえで――。脛に疵を持つ野郎は、ここらあたりにうろうろしていると、ふんづかまるぞ」
「はやく、しゃべれ。うまくしゃべったら、柑子をくれてやる」
　一人が、食べていた蜜柑を、見せびらかした。初物であった。そうでなくてさえ、当時、こんな果物などは、人夫たちの口には滅多に入らぬ高いねだんであった。
　熊は、ごくっと生唾をのむと、
「御鷹野でよう、猟師に化けた小娘が、短筒で、どかんと、ぶっくらわせて――公方様の乳母の春日局は、馬から落ちて、落馬して、蜻蛉みてえに、目玉をまわして、泡をふいたといわあ」
「ほんとか、熊！」
　小莫迦にした声が、奥から、かかった。
「こんど、かつぎやがったら、もう、てめえの馬には、乗ってやらねえぞ」
「てやんだ。もうも、こんども、いっぺんだって、乗ってくれたためしがあるけえ」
「だから、せめて、法螺に乗らせようと――、泪ぐましいやな。きいてやらあ。春日の婆あが、

てんかん起して、それからどうした？」
「これは、こんりんざい法螺じゃねえぞ」
「わかったわかった」
「いまに、お役人が、しらみつぶしに、胡乱(うろん)な奴らをしらべてまわるから、その時になって、あわをくらうな」
熊は、力んで、水っ洟(ばな)をこすりあげると、
「どいつもこいつも、あの大騒動を知りやがらねえんだから――目と臍(へそ)が、背中についてやがら」
「弾丸(たま)は、春日局(かすがのつぼね)に当ったのか？」
「それが、だ。……そもそもだ。そもそもとくらあ、こん畜生――」
この時、おもてから、深編笠の骨格秀れた牢人者がすっと入って来て、土間を横切って、二階へあがりかけたが、春日局という名をききとがめて、上り口に立ちどまった。
「年は二八か二九からぬ、色が白くて、目はパッチリと、鼻すじなんざ、背骨から、つうんと抜けたような別嬪が、白はちまきに赤だすき、一丈三尺の薙刀を小脇にかいこんで、やあやあ、それにあるは、春日局とおぼえたりっ――」
辻講釈をまねて、熊が、べらべらやると、
「莫迦野郎、てめえ、いま短筒を撃ったとぬかしたぞ」
「短筒は、ちゃァんと、臍のところにかくしてら、心配するねえ」
「まあいいや。それから、別嬪は、どうしたい？」

「右手に薙刀、左手に短筒、むらがる敵を、ばったばったとうち倒せども、無念残念如何せん、多勢に無勢――第一、まだ二八の十六番茶も出花、はずかしい年頃だからのう、裾の乱れを気にしたり、鼻のあたまの汗をふいたりしているうちに……」
「阿呆っ！」
蜜柑の皮が、飛んで来て熊の顔へ、あたった。
「おい――」
階段の上り口に立った牢人者が、編笠の中から、鋭く、熊を呼んだ。
「へ、へい」
「いまの話は、まことか？」
「だれが嘘なんか、あっしは、正直熊って――」
「どこの御鷹野での出来事だ？」
「目黒のさきって、ききやしたぜ」
「春日局は、どうした？」
「婆あ――いえ、お局は、ご無事だったそうで――。なにしろ、公方(くぼう)様の御威光がまぶしくて、短筒のねらいが狂ったという、もっぱらの評判でさあ」
牢人者は、油障子の中へむかって、編笠をぐるっとまわすと、
「卒爾(そつじ)な質問をするが、公方が辻斬りをされている、という噂をきかぬか？」
男たちは、ちょっと、互いに顔見あわせて、口をつぐんだ。
上下を通じて、殺伐の風は、いまだに横溢している時世であった。暗夜、街巷に立って、通行

人を斬っておのれの腕を試み、刀の利鈍を検する風は、慶長からずうっとひきつづいていた。旗本のうちには、千人斬りを高言している者もあった。

最近、江戸外郭及び府内各処の辻々に、辻番を創置していたが、この悪習を除去することには殆ど役立っていなかった。

「おめえ、きいたかや？」

「うん、きいたような、きかんような——」

「公方様は女ぎらいだと言うで……退屈じゃろうから、たまには、辻斬りもやられるかも知れんの」

牢人者は、そんな遠まわしな会話から、噂は市中にひろがっていると察したらしく、黙って、踵をまわして、階段を昇って行った。

頭がつかえそうな、ひくい天井の、汚れはてた小部屋に入った牢人者は、編笠をぬいで、端座した。

典雅、と形容するに足りる美貌の若者であった。若い婦女子のように肌理こまやかな、透るような白い皮膚であったし、眉も目もとも鼻梁も唇も、すべての造作が繊細で優美であった。うす桃色の耳朶から項にかけては、なまめかしくさえあった。

ただ、その切長な双眸に湛えられた光は、これはまぎれもなく、秀れた兵法者のみがもつものであった。

年頃は、二十二三であろう。

開けはなった窓から、昏れて行く晴れた空へ、そのすずやかなまなざしを送って、

「公方が辻斬りをして居るとは……出府の甲斐があったというものだ」

と、つぶやいた。

仄かな微笑を、その美しいおもてに刷いたが、それは見かたによっては、妖しいまでの不敵さをしめしていた。

行燈に灯を入れた頃あい、下女が、食膳をはこんで来たついでに、宿帳をさし出した。

若者は、筆を把ると、

牢人　宮本伊織

と、記した。

宮本武蔵の養嗣子として、西国にあって、非凡の麒麟児の高名をほしいままにしている若者であった。

数年前、宮本武蔵の驍名をきいた豊前の小笠原忠真が、これを招いて厚遇し、しきりに勤仕を申込んだが、武蔵は、応ぜず、代りに伊織を奉仕させた。しかし、伊織もまた、剣の修業にあたって、一侯に仕える窮屈をきらって、二年ばかりして、無断で、武者修行に出て、そのまま、全土経歴を罷めず——ついに、江戸へあらわれたものであった。

年明けてから、江戸城内吹上上覧所において、諸国の剣客を選りすぐって、御前試合が行われるであろう、という噂があって、伊織も、これに加わるべく出て来たのであった。

しかし、実は、伊織の目的は、ほかにあった。

出府の途次、駿府に立寄ったことから、その目的が生れたのであった。

伊織は、数年前、養父武蔵にしたがって、駿府城に招かれて、半年あまり滞在したことがあった。その間、大納言忠長の剣道稽古の相手をつとめたものであった。

忠長は、伊織に対して、身分を超えた親しさをしめしてくれたし、伊織もまた、忠長を敬慕した。

ところが、このたび、立寄ってみて、忠長の変りかたのあまりのはげしさにおどろかずにはいられなかった。

伊織が、伺候した時、忠長は、広間の上段の間に、ただ一人、うっそりと坐っていた。太刀持ちの小姓さえも、かたえに、はべらせていなかった。

伊織が、膝行して近づき挨拶すると、忠長は侘(わび)しげな微笑を口もとにうかべたが、血脈の浮いた濁った双眸は、わらわなかった。

「立派な兵法者になったな。その方の剣名は、この城にもひびいて居るぞ」

そう言って、無造作に、うしろに置いた太刀を把(と)ると、

「呉れよう。青江貞次じゃ」

と、伊織の膝の前へ、抛(ほう)ったものだった。

「御気色すぐれぬようにお見受けいたしますが……」

伊織が、問うと、忠長は、かぶりをふって、

「病んで居るのは、心じゃ。狂気の発作に、おのれ自身、おびえて居る」

「いかがなさいました？」

「ふん……」

忠長は、一方の襖(ふすま)へ、ちらと、目くばせした。

伊織は、すでに伺候した時から、襖のむこうに、人の気配があることに気づいていたが、あらためて、そこへ、鋭い神経を送ってみた。

それは、あきらかに、忠長の身を護るために、そこに位置を占めている士の気配ではなかった。

伊織は、すっと立つと、足音を消して、襖に寄り、さっとひき開けた。

ひそんでいたのは近侍ではなく、かなり年配の奥女中が、たちまち、狼狽の色をあふらせた。

「なんの理由あって、ぬすみぎきされる！」

伊織が咎(とが)めると、忠長が、

「伊織、よい。すてておけ」

と、制した。

襖をしめて、伊織が、元の座に就くと、忠長は、

「どれが、江戸方の隠密(おんみつ)か、わしの味方か——もはや、見わけがつかぬ。疑えば、悉くの者が、江戸方と思える。……そうじゃ。その方までが、土井利勝めから送られて来た隠密ではなかろうかと、疑いたくなる——そのような疑心暗鬼にさいなまれては、もはや、尋常なくらしはすごせないではないか」

そう言って、はははは、とうつろなかわいた笑声をたてたものだった。

伊織は、それから十日あまり、城内にとどまって、ひそかに、現状をさぐって見て、

忠長の言葉がまちがいないのをたしかめたのであった。

伊織は、忠長に別れを告げる時に、べつに何も言わなかったが、肚裡には、異常な決意をしていたのである。

——公方が、夜な夜な辻斬りに出ている！

この噂が、どうやら本当らしい、と知った伊織は、まさに天はおのれに組してくれたと、北叟笑んだのであった。

——今宵からでも、早速夜道をひろうか。

伊織が、そう心でつぶやいているおり——。

勢いよく階段をかけのぼって来る足音がしたかと思うと、隣室へとび込んで、

「うわあい！　こん畜生！……お姉ちゃん、この傷をふんじばっておくれよ」

と、叫んだのは、少年修太郎であった。

「まあ、どうしたのです？」

しずかに、牀にやすんでいた美音が、びっくりして起きあがった。

修太郎がつき出した左の手くびから、ぼたぼたと血汐がしたたりおちていた。額も破れていたし、唇も切れて、歯がまっ赤だった。

「いったい、だれと喧嘩をしたのです？」

美音は、大急ぎで、手当をしてやりながら、毎日どこかで大人あいてに喧嘩をして来る少年の無暴さに、あきれていた。

この旅籠は修太郎が、江戸へ出てから、ずうっと泊っていて、病んだ美音をともなって来てからも、もう十日以上になっていた。路銀はゆたかであったので、永く滞在していても、心配はなかったし、出入する下層階級の連中も、口のききかたや振舞いは粗野であったが、案外人情は厚かったので、美音もつい、一日のばしに、この二階で、からだをやすめているのであった。

「旗本奴っていうやつらさ。大髭を、鳥のしっぽみたいに、はねかえしてやがって、威張りくさって、柳生流を自慢しやがるから、おいら、癪にさわって、どなりつけてやったんだ。そうしたら、鐘馗みたいに、赤くなってさ——」

修太郎が、そこまで言った時、階下の土間から、荒々しい人声がひびいて来た。

「あっ——来やがった！」

修太郎は、ぴょんと、つッ立った。さすがに、恐怖の色は、かくしきれない。

「おにげなさい、修太郎さん！　その高窓から、屋根へ——」

美音は、せきたてた。

「おいら、にげるのはいやだい！」

「だって、あいては、一人じゃないのでしょう？」

「三人だ」

「そ、それじゃ、とても……どうしたって、にげるよりほかはないじゃありませんか。さ、はやく、はやく——」

美音は、夢中で、修太郎を、高窓のところへ、押しやった。

しかし、もうその時は、旗本奴たちは、階段をふみ鳴らしていた。

旗本奴――または、六方者、ともいう。

頭髪は、総髪に髷をとらずにただうしろへ掻き下げたの、または項部で手一束に截り揃えたの、かっそうというぼうぼうたる蓬髪など、いずれも好みは殺伐の風。そして、のこらずもみ上げの頬髭をはやし、蠟を混じた松脂をこれに塗って、空ざまにひねりあげていた。

服装もまた、おそろしく派手な野晒模様の綿入れ一枚に、白い帯を三重にまわして、朱鞘の大小を腰にたばさんでいた。

奇を衒い、侠勇を見せかけることのみに、日夜をついやしている手輩であった。

「ここかっ！　小わっぱめは――」

呶号とともに、杉戸をひきあけた面々は、思いもかけず、少年をかばうようにして、美しい嫋やかな娘が立っているのを見出すや、一斉に、目をむいた。

「はっはっはっ……これはこれは、大奥三千の中に置いても、なお光り居ろうず――大層な美形ぞ」

「小犬めが吠えて、掃溜に降りた鶴の居どころを教えてくれたぞい」

「細腰雪膚というものを、目のあたりに眺めたわい。果報、果報――」

口々に言いちらしながらどやどやと、ふみ入ってきた。

「うるせぇやっ！　けだもの野郎っ！」

修太郎が、全身を怒りにふるわせつつ、小刀の柄に手をかけて、狂ったように叫んだが、もはや、六方者たちの目にはとまらなかった。

「こどものことでございます。なにとぞ、お見のがしのほどを――」

美音は、恐怖に堪えつつ修太郎の肩をおさえて、すこしずつ壁ぎわへ、さがった。

「拙者は、旗本朱面組・松河藤十郎」

中央の男が名のるや、つづいて、

「同じく参海柿五郎」

「同じく鴨屋市郎太」

「同じく椎名三郎左衛門」

と、わめいてみせた。

どの眼光も、獲物をねらう毒蛇を思わせた。

「……おゆるしを」

美音は、くりかえして、壁の方へ、顔をそむけた。

四人は、呼吸を合せたように、一歩迫った。

「寄るなっ！　寄りゃがると――」

修太郎は、夢中で、小刀を鞘走らせた。

「修太郎さん！　いけません！」

美音が、あわてて、制しようとしたが、それより早く、一人がおどりかかって、小刀をふりかざした修太郎の手くびを鷲づかみにして、ひねりあげた。

同時に、二人が、美音の背後から、肩を、腕を、口を、おさえつけた。

美音(みね)は、いかりとはずかしさで、もがく力もなかった。

修太郎ともぎはなされて、男たちの手に、胸や腰をさわられると、文字通りけだものに襲われた絶望感をおぼえずにはいられなかった。

「ちきしょうっ！　ちきしょうっ！　ちきしょうっ！」

修太郎の方は、手をねじられれば、口でかみつき、口をふさがれれば、足で蹴りとばし、瞬時も抵抗を止めなかった。

「うるさいっ！　小わっぱ！」

一人が、大きなこぶしをぐんと、鳩尾(みぞおち)へ突き入れた。

「う一ん！」

修太郎は、白目をむくとあっけなく、その場へ、ひっくりかえった。

「お娘御──弟の無礼を詫びる心根を、われら朱面組、かたじけなくお受けつかまろうず──」

にたにたしながら、松河藤十郎が、髭面をつき出して、美音に頬ずりしようとした。

背後の一本の手が、ぐっと、胸の隆起をおさえた。

横あいからの猿臂(えんぴ)が、腰をすべって、下腹を撫でようとした。

……美音は、烈しいめまいをおぼえて、まぶたをふさいだ。

その時であった。

「見ぐるしい！」

凛とした一声が、入口から、なげつけられた。

美音は、はっと目をひらいて、そこに立つ秀麗な容子(ようす)の牢人者を見出した。

「なんだ、貴様は──」

「色子あがりか」

「おのれらの痩腕で、朱面組に歯むかいは笑止──さがれっ！」

だが、美容の若者は、眉も動かさなかった。

「六方者どもに、問答は無用であろう。一人のこらずのぞみの箇所を片端にしてくれる。場所をえらぶがよかろう」

昂然として、言いはなった。

「ほざいたなっ！　おのれ！」

朱面組の面々は、称するがごとく、顔に朱をそそいだ。

「おもしろい！　おのれのその色子面を、刻んでくれるぞ！」

「出い出いっ！　おもてへ出いっ！」

男たちの目が、そちらへ向いた隙に、美音は、必死の力で、自由をとりもどすと、修太郎のそばへ走って、抱きかかえた。

宮本伊織は、美音へ、ちらと、すずやかな一瞥をくれたが、無言で、足早やに階段を降りて行った。

朱面組が、そのあとを追った。

当時──。

江戸の市中には、二派の無頼の徒党が存在した。

旗本奴と町奴と。

いずれも、任侠——男伊達の気風を誇っていたが、第一義を武勇に置く以上、喧嘩口論を売物にして、世間におよぼす弊害は、甚しかった。

尤も、当時の人々は、造次にも顚沛にも、武勇を心掛けていたから、いわゆる男を立てるための、乱暴殺伐の職業を、ある程度当然のことと黙認していた。

男伊達は、すでに、慶長年間にあらわれていた。

記録によれば——。

家康は、慶長十七年夏に江戸の悪少年が徒党を組み異風の装束をなして、市中を横行することの盛んを見て、これを禁じている。

旗本大身の一人である柴山某が、その小姓に咎があって、これを成敗したところ、その小姓の朋輩が侵入して来て、柴山を刺し殺した事件があり、調べたところ、各旗本の小姓たちが、侠客風に徒党を組んでいることが判ったのである。そして、その数は、意外に夥しいものであったので、家康は、これを禁じたのである。

しかし、男伊達の勢いは、天下が泰平になるにつれて、とうとうと増して行き、いくたびかの弾圧も効果がうすかった。

慶長頃の「かぶきもの」は、やがて旗本奴となり、町奴となって、江戸市中を跋扈した。

天下が泰平になるとともに、儒教の教えが絶対のものとなり、四書五経は人倫大道の規範と信じられるにいたり、生きた人間の一挙手一投足は、ことごとく、それによって律せられはじめた。

戦国の惨劇は、すでに遠いものになり、江戸に生れ育った若者たちは、祖先の功名譚をくりかえしきかされて、彼ら自身の脆弱をさげすまれているような劣等観念を持たされた。

武士は、その力を収めて沈黙すべきものとなったばかりか、堪えがたい、わずらわしい形式にしばられて、その地位と体面をたもつために、日常座臥、出所進退に、きゅうきゅうとする運命に追い込まれた。

そして階級制度が、確立するや、武士にのこされたのは、虚しい誇りだけであった。

その代表が、譜代の臣旗本八万騎であった。祖先がことごとく家康の股肱であり、功労なみなみならぬものがあるにも拘らず、与えられた権力と富は、乏しかった。

禄ひくく、権威の高さが、彼らをして、奇妙な誇りを生ましめた。

旗本たちの無頼、横暴、放縦、遊侠は、みな、権力なき誇りがしめす反逆的な行動であった。

大名との反目、民間に対する乱暴狼藉、そして、自由奔放な日常の振舞いに、旗本たちは、鬱を慰やした。

昼を夜とし、夜を昼とし、夏は戸障子をしめきって、屛風をたてまわし、大火鉢をかこんで、小袖を三つ四つ重ね着して、熱い饂飩をむさぼり食い、冬になると殊更に庭に水を打たせて一面に戸障子を開け放ち、帷子をくつろげて扇を遣い、冷水をのんで冷そうめんを食った。夜に入れば、市中を横行し、あびるように大酒をくらって、ところかまわず、路傍にころがって、おのが身を、星と露にさらして眠るのであった。

武断的な血を享けた彼らが、極端に自己を放たんとすれば、当然こうした行動をとらざるを得

なかったであろう。

しかし、その行動が暴虐的な傾向を増せば、迷惑を蒙るのは、庶民たちであった。

「夜更けて通るは何者ぞ
　加賀爪甲斐か泥棒か
　さては阪部の三十か」

この俗謡が流行っているのをみても、市井の不安がわかる。

公儀においては、辻番改めと称して、書院番の小姓などが、市井を巡羅する制度をとったが、かえって、この役人たちは、旗本奴たちから、冷嘲、悪罵をあびせられた。

庶民たちが、自治制度を敷くことはゆるされなかった。通行の市民が、彼らの差料にふれたと咎(とが)められ、素首を路上へとばされても、周囲では、怯(お)じふるえて、傍観しているよりほかはなかった。

この旗本奴に対して、市井の中から無頼の者たちが徒党を組んで対抗することになったのは、当然の経緯であった。

当時の慣習として、町家に生れて腕力を好む者は、多く、博徒となって、放縦なくらしをおくるようになっていたが、この手輩が、花街を中心として、旗本奴たちと、強弱を争うようになったのも、すでに、遊里の繁昌が町人の金力によることをしめすものであり、この防衛隊として町奴たちがえらばれたことにほかならなかった。

いつの世にも、無頼の者たちの争闘は、遊興の巷を舞台として、まきおこる。

遊女たちから、勝者が、やんやの喝采をあびるところに男伊達(きすい)という言葉も生れたのである。

いま――。

江戸市中は、旗本奴と町奴との対抗が、絶頂に達しているといってもよかった。

旗本奴には、六法組、白柄組、大小神祇組など十数組がいたし、町奴には、幡随院長兵衛の率いる浅草組のほかに、これも十数組がいたのである。

月が冴えて、足もとの明るい野であった。

朱面組四名は、すでに抜きつれて、切尖に一貫の脈絡をたもって、宮本伊織をおし包んでいた。

いずれも、高言するだけあって、相当以上の腕前であった。

伊織は、まだ抜かず、両手をダラリとさげて、微動だにせずにいた。

風は遠くにあるようだった。きこえるものといえば、その音だけで、殺気のみなぎる静寂がつづく――。

月明りに四名の眼光が、凄じい闘志をこめて、伊織を射ていた。

伊織の彫ふかい秀麗な貌は、翳(かげ)ふかく、妖しいまでに美しかった。

ふっと――。

その貌が、微笑するようにうごいた。

「お主たちを斬るに、目は無用かも知れぬ」

不敵な言葉が、その口を衝いて出た。

「なにっ！」

「おのれめっ――」
四本の白刃が、憤怒をつらぬかせて、それぞれに、びくっ、と空間を移った。
一瞬――。
伊織は、一足引くと、
「如法闇夜剣！　いざ！」
叫びざま、目にもとまらぬ迅さで、一剣を腰から鞘走らせると、ぴたっと、八相にとった。
その双眸は、かたくとじられていた。
伊織の人生は、剣につきていた。生きることは、剣をふるうことだった。あえて盲目となって、多数を対手としてたたかってみることも、伊織自身にとって、なんら奇異の振舞いではなかったのである。
「む、むっ！」
「おっ――」
朱面組の六方者(むほうもの)たちは、侮辱と威圧を同時に感じて背すじに、戦慄を走らせずにはいられなかった。
あまりにも、人もなげな伊織の守勢であり、しかもその構えには、みじんの隙もみせず、妖気ともいえる凄味を湛えていたのである。
六方者たちは、その場へ縫いつけられたように、五体を固着してしまった。
そうして――いくばくかの時刻が流れた。
「来ぬか！」

この一声は、むしろ静かなものであったが、四名の肺腑には、鋭くひびいた。
さらに、幾秒間かが移って、伊織の八相の構えが、徐々に、青眼にかわっていった。
その白刃の移行こそ、四名の眸に、なんとも名状しがたい恐怖を与えることとなった。
伊織の剣が、完全に青眼となったせつな――。
当然そうしなければならぬ運命をおのれにさとったかのように、一人が、
「ええいっ！」
大上段にふりかぶりざま、だっと躍りかかった。
いけにえを求めていた伊織の白刃は、歓喜するがごとく、きえーっと唸りをたてて、その胴を横薙ぐや、黒血の糸をひきつつ、第二のいけにえにむかって、一閃をあびせかけた。
攻撃して来た敵を斬った刀を、そのまま、第二の敵に襲いかからせるのに、まったく、なんの無理もなかった。
第二の敵は、案山子(かかし)のように、なんのなすところもなく、肩から袈裟(けさ)がけに、断ち割られた。
血を見て狂う猛獣にも似て、第三の敵が、総身の筋肉に、ひび入らんばかりの力をこめて、
「うーむっ！」
と、吼えて、斬りつけた。
伊織は、頭上すれすれの空間で、これを、ぱあん、とはらいのけるや、ぱっと翻転して、
「やっ！」
と気合を発して、第四の敵にむかって、地を蹴っていた。

恐怖本能が、第四の敵をして、さっと一歩さがらせた。

すると——。

次のせつなには、もう、伊織の五体は、疾風をおこして、第三の敵めがけて、とびかかっていた。

まさに、予測すべからざる伊織の、魔のような動きであった。

もとより、第三の敵が、息を入れていたという次第ではない。

ただ、伊織の動きの方が、あまりに凄じく、あまりに迅かったことなのである。

第三の敵は、悲鳴にも似た叫びをほとばしらせて、防禦のひと振りを、むなしく、空間に描いた。

伊織の魔剣は、その脳天からまっ二つに、ぐーんと斬り下げていた。

そして、悠然として、第四の敵に正対して、ぴたりと青眼につける充分の余裕をしめした。

第四の敵は、もはや、闘志をあとかたもなく消してしまって、ずるっずるっと草をすべりながら、あとずさった。

伊織もまた、それを追って、水流に乗ったように、ツッ……と進んだ。

突如——。

第四の敵は、恐怖のあまり狂気したように、めったやたらに刀をふりまわしておいて、逃げ出そうとした。

伊織は、なんらの容赦もなく、その背中をざくっと斬り下げた。

伊織は、刀身の血糊を、仆れた一人の袴でぬぐって、腰におさめると、何事もなかったような悠然たる足どりで、決闘場をはなれた。

町屋通りまでは、二町ばかりあり、その草途を過ぎて、灯のある場所に曲る辻へ来て、伊織は、頭をまわした。

二間あまり後方に、小さな黒影があった。

「なぜ、尾けて来る？」

伊織は、べつに声音を険しく易えようとはせずに、問うた。

ずうっと、一定の間隔をとって、その黒影は、うしろを歩いて来たのである。

問われて、黒影は、わるびれずに、近よって来た。

辻番所から流れ出る明りに浮きあげた陰惨な顔は、空斎のものだった。

「それがしは、空斎と申す世を捨てた閑人でござる」

そう名のってから、左手をのばして、伊織の腰を指した。

「お手前様の差料を拝見つかまつりたく存じ、尾けて参った」

「なんのために？」

「名刀と見申した。……それがしの生甲斐は、名刀の相を観ること。もとより、見料などは頂戴せぬ」

「剣相は、並の鑑識では、やれぬが、自信があるのか？」

「それがしの忠告によって、不吉の差料はとり換え、その生命と家の安泰を保ち得た御仁は、二三にとどまらぬのでござる」

その高言を、冷笑できいた伊織は、しかし、拒絶するかわりに、歩き出した。

空斎は、対手が承知したものときめて、ついて行った。

旅籠にもどった伊織は、べつに、隣室の娘と少年へ結果を知らせもせず、わが部屋に入ると、大刀を床柱にたてかけておいて、座に就き、火鉢の上で音をたてている鉄瓶をとりあげて、白湯(さゆ)を飲んだ。

そこへ、のそりと入って来た空斎が、

「拝見いたしてもよろしゅうござるか?」

と、たのんだ。

「生甲斐とあれば、やむを得まい」

伊織は、冷やかにこたえた。

「御免――」

空斎は、剣をとって、懐紙を口にくわえると、すうっと鞘走らせた。

切尖を天に立てて、それなり、微動もしなくなった。

伊織は、腕を組んで、湯気が鉄瓶の蓋をおしあげて舞いたつさまを眺めていたが、あまりに長いあいだ、空斎が、沈黙をつづけるので、そちらへ、一瞥をくれた。

空斎が放つ眼光の凄じさは、さすがの伊織をして、はっと緊張をおぼえさせずにはおかなかった。

「ふむ――」

長い沈黙ののち、空斎がひくくうなった。

「三条宗近でござるな」

「左様」

象(かたち)ほそく、中鍛え、柾目(まさめ)こまやかに、地金黒く紫に光る。しのぎはややひろく、烱(やき)は白かった。

その白さは、白い玉を青い絹でつつんだように、底に沈んで、上に青みが、うっすらと浮いているのであった。刃は華やかにみだれて、鋩子(ぼうし)はしまって、匂いは、すこぶる深かった。

見つめれば見つめるほど、心が、刃の中へ吸い込まれそうな名刀であった。

伊織は、空斎の魅せられた様子に、まんぞくげな微笑をつくった。

「剣相は、いかがだ?」

すると、空斎は、われにかえったように、大きくうなずいてみせた。

「吉でござる」

「ふん――」

「但し」

そこで、空斎は、じろりと、伊織を見やった。

「ただ一箇処、流星ふたつが交叉する疵があり申すが、これが大凶」

「なにを意味する?」

「短命の相」

ずばりと言いはなった。

伊織は、べつに、眉宇もうごかさず、

「わしにまさる剣客に出会えば、敗れるは知れたことだろう。兵法者として、ふしぎはない」

と、言いすてた。

「いかにも、仰せの通りじゃが……、この疵を有す三条宗近が、いずれ出会うであろう敵は、あまりにも明らかゆえ、御要心なされい」

「その敵をきいておこうか」

空斎は、伊織が、あらためて、おのれの所有する名刀を、じっとうち眺めている様子を見まもりながら、

「村正の所有者でござる」

と教えた。

「村正！」

伊織は、空斎を見かえして、

「まことか？」

「誓って、いつわりは申さぬ」

「うむ——」

伊織は、すずしい眉目にさらに匂うように明るい色を刷くと、

「お主の知りあいで、村正を佩びた抜群の兵法者の名をきかせい」

と、うながした。

空斎は、ためらわずに、こたえた。

「小野道場随一の使い手・神子上源四郎でござる」

逢魔の辻

プツン……プツン……。

膝をそろえてかしこまり、猫背になり、もう半刻もそうさせられている黒兵衛は、ほかに為すすべもなく、顎の無精髭を、ひき抜いて、膝へ置いた手の甲へ、ならべているのであった。

もう、十数本もきれいにそろえてある——。

時おり、上目遣いに、燭台のむこうへ、ちらりと一瞥をくれるのだったが、そこに、しんと音もなく坐った人の横顔は、まったく仏像にでもなったように、うごかないのだ。

——やれやれ……どうなることとやら。

黒兵衛は、かぶりをふる。

われながら、人が好いと思う。

こうして、まるで忠僕のように、おとなしくひかえていなければならない義理はないのである。

主人から、そうしろと命じられたわけでもない。

ただ、主人の危急を救ってくれた恩義に対して、主人に代って、何かむくいなければなるまいという気持でいるのだった。

広姫は、慍っているのである。非常に慍っているのである。

これをなだめて、送りかえすことが、黒兵衛には、自分のつとめのように考えられていた。

しかし、広姫は、この竹芝寺の方丈から一歩も出ようとしないのであった。

……そうして、さらに、四半刻が移ったであろうか。

「黒兵衛――」

横顔をみせたまま、広姫が、呼んだ。

「はい」

黒兵衛は、あわてて、手の甲の髭の列をふきはらって、膝をまわした。

「源四郎殿が救ったと申す女子は、何者じゃ？」

「それが……」

黒兵衛は、内心、

――どうしてこうも、若いむすめというものは、疑いぶかいのか！

うんざりしながら、

「いくども申上げた通りでございます。春日局様にうらみを抱いた者らしい、としかわかりませぬ。たぶんとりつぶされたお大名がたのご息女でありましょうかと……」

「かくしているのであろう、黒兵衛！」

「とんでもない。てまえぐらい正直な人間は居りませぬわい。これだけが、てまえの唯一の自慢でございます」

「いいや、かくしている！」

広姫は、かぶりをふった。

そのまなざしの狂的なまでに一念をこめた光に、黒兵衛は、肌寒さをおぼえた。

「断じて、かくしては居りませぬ」

広姫は、きかなかった。

「わたしは、だまされませぬぞ！」

「だましては居りませぬ」

「黒兵衛！」

「…………」

「その女子は、源四郎殿と夫婦約束している間柄であろう？」

「冗談ではございませぬぞ、そ、そんな……」

「いいえ、わたしには、わかる。夫婦約束をして居らぬまでも、恋仲であろう！」

「御主人とは、懇意ですらありませなんだ」

「かくすな！……恋仲でなければ、どうして、源四郎殿が、あの病軀をもって、駒場野まで、馬を駆ろうぞ！」

「されば、あのあたりに所用がござって――」

「この広姫をごまかそうとしても、それに乗るような――」

言いざま、広姫は、激情に堪えがたくなったか、いきなり、前の几上の香炉をつかむや、黒兵衛へ、抛りつけた。

両手をさしのべて、ひょいと、受けとめた黒兵衛は、胸のうちで、
——それじゃ、勝手にしろ！
と、さけんだものの、さて、さっさと座を立つわけにもいかなかった。
この姫君が出現していなければ、主人は、愛宕山上に、屍をさらしていたであろうからである。

——いや！　ここが我慢！　我慢！
「姫様」
「…………」
「これだけは誓って申上げることができるのでございます。主人に、女子はついて居りませぬ。たった一人の家来であるてまえが、お誓いするのでございます」
そう断定してみせながら、黒兵衛は、脳裡に、美音のおもかげを、ちらと掠めさせた。
「それならば、なぜ、源四郎殿は、その女子を救ったのじゃ？」
「されば……義を見てせざるは勇なきなりと申すではございませぬか」
「春日局を討とうとするのを、義と見たのか？」
「けなげなふるまいとは、てまえの目にも……」
「いやじゃ！」
鋭い叫びをつんざかせて広姫は、両のこぶしで、じぶんの膝を打った。
「源四郎殿は、わたしのものじゃ！」
——いやはや、まるで、きちがいじゃわい。

黒兵衛は、その狂気に、こっちまでがひきこまれるのを、かんべんしてもらいたそうに、大きなてのひらで、わが顔をひとなでした。

「黒兵衛！」
やや長い沈黙ののち、広姫が、こんどは、沈んだ口調で呼んだ。それが、かえって、うす気味わるかった。
「なんでございますかな？」
わざと、とぼけ声を出した。
「わたしは、源四郎殿が、好きなのじゃ。死ぬほど、好きなのじゃ！」
またたく灯かげへ、遠い目をあてて、広姫は、言った。
素直なひびきをもったその告白を、黒兵衛は、はじめて、
——ほう！
と、きいて、視線をまわした。
——この勝気な姫君も、こんなにかなしい様子をみせるのかい！
「わかって居ります、姫様」
「けど……わたしの心は、すこしも、源四郎殿には、通じて居らぬ」
「…………」
「そうであろう、黒兵衛？」
「さ、そのあたりは、まことに、てまえごとき者には、一向に……」

「通じてはいないのじゃ。……それとも、通じていても、源四郎殿は、わたしのような女は、きらいなのであろうか」
「………」
黒兵衛は、腕を組んだ。
――すくなくとも、好きな方ではあるまいて。
「黒兵衛！」
また、その呼び声は、鋭くなった。
「はいっ」
黒兵衛は、あわてて、腕を解いた。
「わたしは、きらわれてもよいのじゃ！　好きなのじゃ！　どうしようもないのじゃ！　死ぬまで、源四郎殿を忘れはせぬ！」
「かならず、お心のほど、つたえますでございます」
「わたしは、いま一度、会って、この口からつたえたい」
「………」
「会わせて欲しい」
「お会わせいたしとうは存じますが、いずれへ行かれましたか……。ここしばらくは詮議の目もきびしゅうございましょうし――」
「その女子と一緒にかくれているのであろう」
想像しただけで、広姫は、いても立ってもいられない気色をしめした。

「その点は、ご安心なされませい。途中で別れると、てまえに申されて居りました」
「………」
広姫は、宙の一点へ、眸を据えて、しばらく、何ごとかを考えていたが、やがて、
「わたしは、帰ります」
と、ぽつりと言った。

同じ日の夜――。
ほのぐらい燭台の燈火がまたたくたびに、壁に映った調度の大きな影がゆらめくさまを、大きく目を見ひらいて、臥床の中から眺めつづけていた源四郎は、やがて、やおら身を起した。
熱は去っていたが、微かなめまいがのこっていた。
身支度をととのえた源四郎は、愛刀を左手にするとおもての間へ出た。
炉ばたに、ひとり、ひっそりと坐っていた糸耶は、
「あ――」
と、おどろきの視線を向けた。
源四郎は、坐ると、
「お世話に相成った。これにて、おいとまいたしたいと思います」
と、かるく頭を下げた。
「あ、あの……、まだ、おからだが、御本復とは思われませぬが……」
糸耶は、不安の面持で、言った。たしかに、その心配もあったが、源四郎にいとまを告げられ

て、はじめて、愕然とするほど、糸耶の心は、じぶん勝手な想いの中にいた、といえる。すなわち、糸耶は、看護しているうちに、いつの間にか、自分たち二人は、公儀のきびしい詮議を受けている同士だから、この家から出て行く時も一緒なのだ、と思いきめていたのである。

その気持の奥に、源四郎に対する思慕の情が、生れていることまで、糸耶自身、はっきりと意識しているかどうか……。

いずれにしても、糸耶は、いとまを告げられるや、急に、女らしい哀しみを湧かせて、うろたえずにはいられなかった。

「この家に、いつまでも厄介になっておれぬし、わたし自身の用事もあるのです」

源四郎は、炉火へ目を落しながら、静かな口調で言った。

「この家がおいやならば、わたくしが、ほかに見つけてさしあげとう存じます。いましばらく、静養なさいませぬか？」

糸耶は、じぶんの声音が哀願のひびきを含んだことで、淋しさを、はっきりとさとった。

——ひとりになりたくない！

急にこみあげて来た心からの願いであった。

「ご厚意はかたじけないが、わたしは、貴女とも、お別れしなければならぬ」

これは、きっぱりした言いかたであった。

「外は、詮議の目が光っております。空斎殿が、そう申しておりました」

糸耶は、さけぶように告げた。

源四郎は、糸耶のきついまなざしを受けとめた。

その澄んだ表情が、糸耶の胸をはずませた。

——このまま、わかれたくない！　わたくしは、このひとについて行きたい！

糸耶は、声なく叫んだ。

源四郎は、

「では——」

と、一揖(ゆう)して、立ちあがった。

糸耶の胸は、早鐘のように高く急(せわ)しく鳴った。

しかし、

「おわかれいたしたくありませぬ！」

とは、叫べなかった。

源四郎が、土間に降り立つや、糸耶は、はじかれたように立ったものの、ただ、いまはその双眸に、想いを燃やして、見つめるよりほかに、どうしていいかわからなかった。

源四郎が、表戸へ手をかけた瞬間、はっと思いついて、

「もし——」

と、呼びとめて、はだしで、土間へとび降りた。

「これを……ご持参下さいませ」

白珠をさし出した。

源四郎は、糸耶の燃えるまなざしをさけて、ちょっとためらっていたが、

「頂きましょう」
と、受けとった。
——このひととは、もう一度、会える！　屹度、会える！
糸耶は、とっさに、心で誓わずにはいられなかった。
……源四郎は、出て行った。
炉端にもどって、虚脱したように、呆然と、粗朶の焔を見まもりつづけてから、どれくらい過ぎたろう。
「どうされたぞ？」
不意に、土間から、訊ねられて、われにかえった糸耶は、いつの間に戻って来たのか、空斎の姿をそこに見出して、
「神子上殿は、去りました」
と、告げた。
「去った！」
空斎は、眉宇をひそめて、
「あのからだでは、もし柳生の者たちに発見されたなら、遁れられまい」
「…………」
糸耶は、胸に、鋭い疼痛をおぼえた。
——ひきとめるのであった！　必死になって、ひきとめるのであった！
「糸耶殿」

空斎は、その横顔へ、冷やかな視線をくれて、皮肉な薄ら笑みをうかべると、
「そなた、あの男が好きであったのであろうが……所詮、添われる運命ではない。あきらめたがよい」
「…………」
「わしの見たところ、あの男は、さまで、長く生きられまい」

厚い雲が、空いちめんにひろがって、暗い晩であった。
物騒な時世であり、こういう闇夜は、日が昏れるとともに、深夜のおもむきをおびる。
濠端の往還は、人の足音は全く絶えてしまい、水面で時折はねる魚の音だけが、高くひびいていた。
城の御門が扉をひらいて小人数の行列を送り出して来たが、その先頭で掲げられた提灯が、ぼうっと赤く闇に滲んで、これは、狐火を思わせた。
闇の中を、靄が、流れているようであった。
駕籠は、総蒔絵の立派なもので、窓に葵の紋がついていた。
陸尺が四人、伊賀者らしい侍が、駕籠わきに二人ずつ、そして、一間ばかりはなれて、覆面の武士が三人、したがっていた。
大名小路に入ったが、どの屋敷へ入る気配もなく、ひろい往還の中央を、しずしずと進んで行った。
樹木の深く繁った高い海鼠塀が、両側に、いつまでもつづいていて、途中、人影とすれちがう

こともなく、行列は、ゆるやかな坂を下って、外濠のほとりに出た。

「停めい」

駕籠の中から、声がかかり、陸尺たちは、しずかに、それを、地面に据えた。伊賀者の一人が、草履をそろえて、扉を開けた。

立ちあらわれた人物は、白絹で、おもてを包んでいた。羽織の紋は、葵であった。

うしろの武士たちの中から、一人が近づいて来ると、その人物は、

「但馬、今宵は、わしを一人で歩かせい」

と、言いかけた。

「それは、なりませぬ」

拒んだ声は、柳生宗矩(むねのり)のものであった。

「いや、是非とも、わし一人にさせい」

わがままな張りのある語気で、将軍家光は、言いはった。

「上様」

但馬守は、声をひくめると、

「市中の噂、すでに、消しとめ難い折柄、たっての御新刀試しなれば、やむなき仕儀と心得てお供つかまつる但馬守として、おそばをはなれるわけには参りませぬ」

「わしの腕が、それ程未熟か！」

「そうではございませぬ。将来に方途を失いました牢人どもが、徒党を組んで徘徊いたしております故、おん身に万が一のことがあってはなりませぬ」

「面白い！　そちは、わしに、多勢を対手としてたたかう獅子乱刀を教えてくれておるぞ」

「上様――」

但馬守は、語気鋭く、家光のわがままをたしなめようとした。

家光は、かまわず、さっさと歩き出していた。

偶然であった。しかし、後日になって考えれば、これは、神の摂理が働いたともいえることだった。

外濠の水面が、光ともいえぬ薄あかりをうごかしているのをたよりに、源四郎が、この道すじをひろって来たのであった。

片がわに、ずらっとつづいていた宏壮な大名屋敷の海鼠塀(なまこ)がきれて、林になった地点で、

――はて？

と、またまた本能にふれるものがあった。

べつに、その気配を目や耳で知ったというのではなかった。

並の人間とは全く異った感覚が、一瞬、正確に、闇にひそんだ殺気をとり得るのは、これまでの源四郎がふんで来た数知れぬ死地から得た経験のたまものであった。

これは、源四郎自身にもどう言いあらわしていいかわからぬ全身的な、磨(と)ぎすまされた本能の処置なのであった。

――来るぞ！

とさとったせつな、五体の神経は、それに備えていた。

しかし、姿勢も、足幅も、歩速も、すこしも変えてはいなかった。
ただ――。
いまの源四郎には、強敵を対手として、凄じい剣気を発するだけの体力は、のこされていなかった。
――何者？
それが、問題だった。
ただの辻斬りならば、これは躱すに、さしたる身の動きを必要としないことだった。
何か――ちがっていた。
尋常の殺気ではない、という閃きが、意識となった。
ひそんだ敵の殺気によって、電光のように、間髪に応ずる力が、おのれ自身の身うちに湧くのを常とする源四郎として、いまの瞬間、その力の不足を感じたのである。ということは、ひそんだ敵の殺気が、なみなみでないことを意味した。
数歩――ゆっくりと、過ぎた。
森としずまりかえった林の中の闇に、なんの気配もうごかさなかった。
――気のせいだったのか。
病みあがりの身の神経が錯覚したのか、と思いかえそうとした時。
二間あまり前方の路上に林の中から、一個の黒影が出現した。
そして、腰間から、一剣を微かに光らせつつ、抜き持った。
――そうか！

源四郎は、さとった。
あらわれた敵は、大した使い手ではない。しかし、背後に、林の中にひそむ者は、おそろしい。
「牢人！」
家光は、高い張りのある声音で、呼んだ。
「生命はもらうぞ！　覚悟せい！」
「…………？」
源四郎は、闇に利く目で対手がただの旗本ではないと見てとるや、遽に、四肢を緊張させた。
「行くぞ！」
家光は、青眼に構えると、じりっじりりっと、寄って来た。
源四郎は、その青眼に、柳生流独持のゆるやかな浮き沈みがあるのを見た。
――やはり、市中の取沙汰は、まことであったのか！
すでに、将軍家が辻斬りをしているという噂は、源四郎の耳にも入っていたのである。
これが公方ならば、当然、背後の林の中にひそむ者は、柳生但馬守と断定して、まちがいはなかった。だからこそ、木下闇の中から放たれた殺気は、なみなみならぬものであったのだ。
――無念！
源四郎は、おのが病軀を、のろった。
もし、日頃の健康な五体を保持していたら、但馬守に一戦を挑むに、またとない絶好の機会で

はないか。

但馬守とたたかって、断じてひけをとらぬ自信は、源四郎にあったのである。

——今夜、此処が、おれの死場所となったのか！

曲者詮議の網にかかるかわりに、将軍家の新刀試しの生贄(いけにえ)にされることに、源四郎は、皮肉な宿命をおぼえて、自らをわらった。

——しかし！

源四郎は、丹田に力を置くと、

——但馬守に、むざとは斬られぬぞ！

自分に、きっぱりと言いきかせた。

家光は、間合を詰めて来るや、

「やあっ！」

と、威嚇の気合とともに、大上段にふりかぶった。

源四郎は、猶、両手をダラリとたらしたまま、微動だにしなかった。

背後へ——路上へ、林の中から、但馬守がすすみ出た気配をさとり、闘志はそれへ送っていた。

但馬守の方は、源四郎の後姿にみじんの隙もないのに、ひそかに舌をまいて、

——できる！

と、肚裡に、微かな呻きを生んでいた。

とおーっ！

家光が、盲蛇(めくらへび)に怯(お)じぬ一撃に出ようとしたせつなをはずさず、但馬守の口から、

「えいっ！」

と、凄じい一喝が、源四郎の背中へたたきつけられた。

源四郎は、その一喝にひるまず、大きく一歩ふみ出しざま、居合抜きに、家光の剣を、刎ねとばした。

次の瞬間——。

源四郎の痩軀は、ひるがえって、但馬守に正対していた。構えは、陰の形であった。

家光の双手から離れた剣が、夜空を舞って、遠く、濠に、にぶい水音をたてた。

「如何に、但馬守！」

病軀にみなぎらせた神気を、源四郎は、その一声にした。

但馬守は、この時、愛刀を抜きはなって、青眼にとっていた。

闇を截(き)りぬいた源四郎の姿から、鬼気せまる凄絶の剣気が、焔のようにゆらめき立つのをみとめて、

——うむ！

と、戦慄した。

宿敵小野忠明が、蘇って、決闘を挑んで来た、としか考えられなかった。

まさしく、源四郎の陰の構えこそ、小野忠明が、その師一刀斎から受けた「一刀流水月秘法」にまぎれもなかったのである。

陰の構えは、元来が守勢である。しかし、いま、源四郎が、暗天にむかって切尖を直立させた静止相には防禦のための、破りがたく抜きがたい安定はなく、全き捨身の、おそるべき必死の一閃を予告していたのである。

というのも——。

陰の構えは、右肱を小脇にひきつけるのが普通であるのに、これは、左肩を引いて、右腕を大きく胸前にまわして、左肱を小脇にひきつけているのであった。

すなわち、完全に、右半身を隙にして、そこへ敵の一撃を誘うとみせているのであった。

敵が、振り下して来る一颯の刃風と、これに合せて右へ薙ぎはらう一条の白光と——。

電光石火の間の遅速が、勝負の岐れとなる。

しかし、源四郎が、これを使うには、おのが五体を但馬守の刃圏内へ、のぞんで容れなければならなかった。

ここに、生命をすてる無暴、とも評される一刀流の凄じさがあった。

剣禅一如の柳生流の最も忌避するところであった。

一歩と一歩の継ぎに、なんの澱みもみせず……地面を滑るがごとく、しかも、ごくゆるやかに、源四郎は但馬守に、迫りはじめた。

と同時に、源四郎は、その白刃を、真横へ、すこしずつ、倒していった。

身を進めるのと、剣を倒すのと——この動作は、闇の中に、まことに、みごとな、美しい一如ぶりを描いた。

但馬守は、大地に根生えたごとく、固着したなりであった。

いつか、空には、厚い雲が退いて、星がのぞいていた。

もし、この自然にして、神妙の動きを、源四郎が、但馬守の刃圏内にまではこび得ていたならば、あるいは、その一剣は、能く、但馬守の胴を薙ぎきっていたかもしれぬ。

五官はもとより、毛髪も爪も、いっさいのものを、たたかいのために動員した一歩一歩であった。いかに、源四郎に、異常の鍛錬があったとはいえ、病軀の、これに能く耐え得るところではなかった。

自らが、攻撃に出ることは、あまりにも無理であった。

五歩を滑り出て——一瞬、源四郎の総身に、冷水をあびせられたような悪寒が来た。

——うぬっ！

ふみこたえようとして、かっと、双眸を瞠いた源四郎は、次第に大きく浮き沈みしはじめた敵の剣に、すうっと吸い込まれそうな錯覚をおぼえた。

これをふりはらおうとして、歯をくいしばり、ぐっと、息をとめた。

そのために、それまでの、水のような静かな動きが、ほんのわずかな破綻を生じた。

但馬守が、どうして、この隙を見のがすものであったろう。

もし、この時、家光が、

「但馬、斬れっ！」

と、高声を発しなかったならば、但馬守は、風のごとく躍って、源四郎を襲い、まっ向両断にしていたに相違ない。

家光の叫びは、かえって、但馬守にとって、迷惑であった。その反対に、源四郎をして、猛然と、捨身の攻撃に出させることになった。
無言の気合を、闇につらぬかせて、源四郎は、いま一歩の不足の距離から、地を蹴った。
並の剣客ならば、この凄じい横薙ぎの一閃を、受けとめたり、かわしたりすることは、不可能であったろう。
但馬守は、すでに、源四郎の破綻を看破した余裕を得ていた。その余裕が、とっさに、自身を、半間あまり、跳び退らせることの有利を教えた。
源四郎が、むなしく、夜気を唸らせた一刀を、つばめ返しに、青眼にもどしたのは、まさに、おそるべき迅業であった。但馬守が反撃する隙を、みじんも与えはしなかった。
しかし――。
青眼にとって、
「来いっ！」
と、叫んだせつな、源四郎の心身は、巨大な槌で、砕かれるようにむざんにも、がくっと崩壊しなければならなかった。
但馬守は、冷やかに、ゆらっとゆらめいて、徐々に前のめりになる源四郎を見まもった。
「但馬っ！」
家光は、対手が地べたへ屈したにも拘らず、但馬守が、下段につけたまま、いつまでも動こうとしないのに、苛立った。

「いかがいたした？」
「勝負にはなりませぬ」
「なに？」
「患っているとみえまする」
家光が、つかつかと但馬守の脇まで歩いて来た時、源四郎は、奈落の底へひきずり込まれようとする意識を、ようやく、くいとめてわななく手で、剣を膝の前へ置いた。
「討たれい――」
従容としたその態度に、但馬守は、あらためて、
――よほどの者！
と、見た。
「姓名をきこう」
源四郎は、左手を膝について、身をささえつつ、ためらわず、
「神子上源四郎」
と、名のった。
「……む！」
但馬守の口から、ひくい呻き声が洩れた。
――この男か、神子上源四郎は！
すでに、この若者の存在は、幾年か前から、耳にしていたことだった。
柳生一門のおそろしい敵として認識したのは、駿府において、道場から送った隠密たちが次々

と仆(たお)される報告があってからであった。
駒場野において、小野道場から移って来た四士が斬られたのをきいた時には、あるいは、当主小野忠常のしわざであろうかと思い、
——いよいよ両門の確執は、血を噴くことになったか！
と、覚悟をきめたものだった。
ところが、神子上源四郎が帰府したという噂が疑いないものときまるや、
——さては、その若者のしわざだったか！
と、直感したのであった。
駿府から帰って来た左馬介憲巌の一行が、たまたま源四郎の姿を見受けて、これを愛宕山上で襲撃して失敗した報告があって、但馬守は、さらに、その腕前の非凡さにおどろかされたことだった。
左馬介がしたがえた七名の術者は、道場において、いずれを、師範代にしてもいい使い手たちだったのである。
神子上源四郎は、その七名の剣に包囲されて、みじんもたじろがず、その攻撃方法の裏をかいて、一人をなんの防禦のいとまも与えずに、血飛沫(しぶき)の下に俯っ伏さしめた、という——。
すでに、その直前に、同門の高垣弥九郎との決闘を果しておびただしい体力を消耗していたにも拘らず、源四郎は、それをなした、という——。
「神子上(みこがみ)源四郎……きいたおぼえがあるぞ」

家光が、言った。
但馬守は、この瞬間、
——この若者を、斬りたくない！
強く、そう思った。
兵法者としての、微妙な複雑な心理であった。
生かしておいて恩を売る、という気持は、毛頭なかった。
ただ——。
稀代の天稟(てんぴん)にめぐまれて、その才能をかくもみごとにきたえあげたこの若者を、この世から失うことが、あまりにも惜しまれたのである。
「上様——」
但馬守は、源四郎をかばうように、家光の前にまわって、頭を下げた。
「この男、実は、小野忠明が秘蔵の弟子にございます」
「ふむ——」
「左様か」
「おそらくは、忠明より一刀流水月秘法をさずけられましたる唯一人かと存じられます」
「なろうことならば、この場より放ちやり、他日、御前へ呼んであらためて、水月秘法を御上覧賜らば、斯道のお役に立つことの大いさは、疑いを入れぬ儀と存じられまするが……」
「それも、よかろう」
家光は、あっさり承知した。

するとーー。
源四郎が、垂れていた頭を徐々に擡げるや、
「神子上源四郎は、柳生但馬守の慈悲は受けぬ！」
と、はねつけた。
「慈悲ではない、勝負を、後日にのばすまでじゃ」
但馬守は、きめつけるように、鋭い語気で、申し渡した。
この時、提灯をかかげた供の人々が、近づいて来た。
柳生道場の高弟が、提灯の明りで、源四郎の姿を、じっと見すえて、
「お――」
と、おどろきの声をあげた。
「先生！　こやつ、何者かご存じでありましょうか？」
「……………」
「先日の御鷹野において、春日局殿を襲うた娘を救って、遁れた曲者でありますぞ！」
この高弟は、これが神子上源四郎とは知らなかったかわりに、駒場野にあって、春日局を護衛していて、糸耶を助け去った源四郎を目撃していたのである。
この外濠の往還へ通ずる林の中の細径を、二個の黒影が近づいて来たのは、ちょうど、このおりであった。
足もとを照している提灯が、上下に波のようにゆれるのは、これを掲げた者のからだが、一歩毎に大きく片方へ傾斜するせいであった。

すなわち、これが、黒兵衛であることを証明した。
うしろを来る者が、広姫であったのは、ことわるまでもない。
「お――」
黒兵衛は、急に、足を停めると、樹間の闇を透かして、往還の光景を見やった。
そこの提灯が浮きあげている一人の人物の姿をみとめて、
――あれは！
と、はっと直感したのである。
黒兵衛は、二年ばかり前のことだが、隅田川で旗本血気の面々に寒中游泳をさせている浮橋上の将軍家光を、河畔から見下したことがある。
当時は、まだ、隅田川に一橋すらも架けられて居らず、将軍家の行事のみに、浮橋をつくったのである。
橋梁を架すれば、要害のために悪し、と閣老の反対があったからである。
はじめて大橋（両国橋）が渡されたのは、ずっと後年、万治三年である。明暦の大火で、橋がない為に、下町の庶民たちが、逃げ場を失って、火に死に、水に死ぬこの世の地獄を現出したので、ようやく、幕府で架橋にふみきったのである。
尤も、橋のないことが、市中に住む庶民たちの行動をかなり自由にし、将軍家の行事にも、近よって見物することをゆるされたのである。
黒兵衛は、家光の顔を、はっきりと見おぼえていた。

——まちがいない、公方様だわい。

「どうしました、黒兵衛？」

背後から、広姫が、訊ねた。

「ちょっと、出て行けませぬぞ」

黒兵衛は、かぶりをふった。

広姫も、じっと、眸をこらした。

二人は、縛られた者が、地面から引きたてられるのを、見てとった。

——おっ！

黒兵衛が、肚裡で呻くのと、

「あ！」

と広姫が、驚愕の叫びを、小さく洩らすのと、同時だった。

提灯の赤い光が、はっきりと、その横顔を照したのである。

「黒兵衛！」

広姫は、思わず、黒兵衛の肩を、つかんだ。

「姫様、はやまってはなりませぬぞ！　柳生但馬守が居りますぞ！」

黒兵衛は、別人のようにきびしく、制した。

邪宗門

「やあ、鶴だ！」

大きな声をはりあげて、楢林の中から躍り出た小軀が、なだらかな丘陵の斜面をまっしぐらに馳せのぼって行った。

頂上のくさむらに、すっきりとした優美な立姿をみせていた二羽の夫婦鶴は、少年を、二間あまりまで近づけておいて、大きく翼をひろげるや、かるやかに舞い立った。

「ちぇっ！」

舌うちして、小石をひろいとるや、翔け跡めがけて、びゅんと投げた少年は、頭をまわして、

「美音さあん！」

と、呼んだ。

市女笠と杖を手にした美音が、ふもとにあらわれて、

「道はこちらですよ、修太郎さん」

「この頂上で、ひとやすみしようよ」

修太郎は、肯かずに、すとんと、腰を下してしまった。

上野を越えて来て、一刻——。

茫々としてひろがる武蔵野は、もう目路の果てまで木と草であった。

ゆるやかに起伏する丘陵も、葉をすてた雑木をわずかにちらばせていて、淡い冬の色である。

薄曇りの空から落ちる光に、息づいている草木は、もう一本もない、蕭条たる景色が、江戸の市中から来た少年と娘に、なんとはなしの心細さをおぼえさせる。

「美音さん、清光寺って、ここから、うんと遠方かい？」

修太郎は、枯草をひきぬいて、口にくわえながら、不服な口調で訊ねた。

「いいえ、もうすぐなのです。……ほら、あそこに、すこしとがった丘があるでしょう。あのむこうです。このあたりも、もう豊島郡なのですから——」

「ふうん……豊島って、美音さんの先祖だろ？」

「ええ——」

「こんなひろいところを、支配していたのかい。徳川家康に、ほろぼされたんだね？」

「いいえ、徳川殿より、ずっと以前に、ほろんでしまいました」

「だれにほろぼされたんだい？」

「太田道灌というひとに——」

美音は、東南の一角を、指さした。

「あのあたりに、平塚城というお城があって、ずいぶん堅固だったそうですけど、太田道灌の火攻めに遭って、落ちてしまったということです。それから、つづいて練馬城も、石神井城も——」

修太郎は、うすい唇を、きゅっとひきしめて、きいていたが、

「こんどは、江戸城が、攻められて、落ちる番だぞ」

と、言った。

美音は、びっくりして、

「どうして、そんなことを考えるのです、修太郎さん？」

「どうしてって、そうじゃないか。城をかまえて、三代ぐらい、威張ったら、こんどは、どこかの強い武将が、あらわれて、やっつけるだろう。きまっているじゃないか」

「修太郎さん！」

美音は、めずらしく、きっとなって、少年を見すえた。

「遠いむかしの支那の戦国策という本に、こういうことばがあります。乱を以て治を攻むる者は亡び、邪を以て正を攻むる者は亡び、逆を以て順を攻むる者は、亡ぶ、と。わかりますか。これまでに、たくさん亡んだ武将たちは、みんな武門の誇りということばかり考えて、覇道をなしとげようという野心だけを燃えたたせたおかげで、目的をとげた秋には、もう次の敵将に、その地位や権力をゆずらなければならなかったのです。……いけないことです。管子という人のことばに、およそ国を治むるの道、必ずまず民を富ます、というのがあります。民を苦しめるのは、戦争です。一人の武将の野心のために、幾万人の民が、どんなに苦しむことでしょう。……戦争は、もうたくさんです。やっと、国が平和になったのです。これからは、幕府の人たちが、民の幸せのために、りっぱな政事をして下さるのを祈らなければなりません」

「だって……だってさ、徳川に亡された大名の家来たちは、どうなるんだい？　うらみを忘れて、百姓になれというのかい？　さむらいの恥じゃないか。さむらいだぞ。さむらいは、武士道があるんだぜ！　ご主君が亡されて、泣き寝入りなんか、できるもんかい！」

修太郎は、躍起になってまくしたてた。
「修太郎さん――」
美音(みね)は、少年に、つよくおしつけようとしたじぶんを反省しながら、やさしく言った。
「あなたは、さむらいがえらくて、お百姓はいやしい、とお思い？」
「さむらいは、生命をなげ出して、ご主君の馬前で討死するんだぜ。百姓は、土を掘りくりかえして、米や麦をつくるだけじゃないか」
「だから、討死するのがえらくて、米や麦をつくるのがいやしいのでしょうか？」
「男子に生れたら……さむらいになりたいのが、あたりまえじゃないか」
「それは、そうですね。でも、お腹がぺこぺこでは、いくさができませんよ。お百姓が米や麦をつくって下さるから、いくさもできます。……いえ、さむらいは、米や麦をつくって下さるお百姓たちを、平和にくらさせてあげるために、国をまもって、敵とたたかうのではないでしょうか」
「わかったよ。江戸城を、だれも攻めなければいいんだろ。徳川が、ずうっと、天下を治めていればいいんだろ」
修太郎は、憤然とした態度で、石ころをひろいとると、投げとばした。
「ごめんなさい、修太郎さん。わたくしは、あなたを叱ったのではありません」
美音は、遠いまなざしを、冬枯れの野原へ送った。
「さむらいの家であるために、わたくしの先祖は、一人のこらず、刃に斃(たお)れてしまったのですもの……」

祖父の豊島兵衛尉頼重は秀吉の小田原北条氏の征討に加って、忍城攻略に討死している。父明重は、老中井上主計頭(かずえのかみ)正就を殿中において刃傷して、おのれも果てている。この罪によって次代を継ぐべき美音の弟主膳正継重は、わずか十四歳で、父のあとを追って、切腹したのである。
弟が、上使の残酷な宣告を受ける時、美音は、隣室にひかえていた。
「お父上は、見事な御最期であった。……お許(こと)も、豊島家最後の男子として、立派に、作法せられい」
上使が、そう言いきかせているのをきき美音は、烈しい反撥をおぼえて、全身がわなないたのを、忘れない。
――お父上が、刃傷なされた罪を、弟がどうして背負わなければならないのであろうか？
美音には、わからなかった。
父が、いかなる堪えがたい仔細(しさい)があって、老中を斬ったのか、それは知らないが、そのために、わずか十四歳の弟が罰せられて、切腹をしなければならないとは、なんという合点しがたい処置であったろう。
十六歳の美音は、人の世の、人が定めた掟をのろわないではいられなかった。
母も姉も美音も、継重の腹を切るありさまを見ることはゆるされなかったが、介錯役(かいしゃくやく)の柳生道場高弟の戸沢新八郎の、一刀を振り下す鋭い懸声が、ひそとして固唾(かたず)をのんだ部屋までひびいたせつな、三人とも、わが身を斬られた衝撃で、ひしとまぶたをとじたものだった。
検使が入って来て、

「立派な御最期――さすがは、武蔵名族の裔として、はずかしからず、感服いたした」
と告げた時、母と姉はなんと思ったかは知らないが、美音は、胸のうちで、つよくかぶりをふって、
――弟は、どうして、さむらいの家などに生れたのであろう！
と、声なく叫んでいたのであった。
美音は、いま、修太郎を、不幸な弟に代る者として、愛そうとしていた。だから、修太郎には、平和な未来が欲しかったのである。
半刻ばかり過ぎての頃あい――。
原野を横切って、とある丘陵の麓をまわり、狭い渓間を辿ろうとしたふたりは、ふと、同時に、足を停めた。
――なんだろう？
不審のまなざしを合せた。
びょうびょうたる楽器の音が、楓の林の中から、ひびいて来たのである。笛でも尺八でもないようであった。そして、その調べも、耳なれぬものであった。
樹間をすかして見ると、柿葺きの入母屋の屋根があった。
「行ってみようか」
修太郎は、好奇心をすぐ行動に移そうとした。
「でも……」

美音は、ためらった。
近道をしようとして、たまたま、この杣道をえらんだので、街道からは、はるかに遠いこの渓間は、全く人目をさけるためにえらばれた場所に相違なかった。そうしなければならぬ仔細をもった人のすまいと考えて、まちがいはなさそうであった。
「ご遠慮しましょう」
美音は、修太郎に、行きすぎようと、うながした。
しかし、修太郎は、きかなかった。
「いいじゃないか。……ちょうどお昼だから、弁当をつかわせて欲しい、ってたのめば……」
たしかに――その楽器の調べる旋律は、哀切をこめて、心をつよく惹いた。
美音は、修太郎に、手を引っぱられるままに、楓の林に歩み入った。胸のうちに、微かな不安な予感をおぼえつつ……。
「ふうん！」
修太郎は、その閑寂な屋敷の全景が視野におさまる地点に出ると、小鼻をふくらませた。
「亡ぼされた大名の隠れ家みたいだな」
少年の目にも、そのたたずまいに、犯しがたい品位が保たれていると、見てとれたのである。
冠木門の左右に、太い角竹を半間置きに整然と並べた藪も、これは、心をくばって、きれいに手入れがしてある眺めだった。
冠木門は、いちめんに葺がついていて、いかにも、ものさびて、古雅な匂いをただよわせていた。

「修太郎さん――」
　きっちりと閉ざされた門扉を見やって、美音は、修太郎の手を引きとめた。
「お寄りするのは、止しましょう」
「だめだよ！　ここまで来ちまったんじゃないか。入ろうよ。かまうもんか！」
　修太郎は、ずんずん近よって行くと、門脇の竹編みの潜戸を押した。

「たのもうっ！」
　のどいっぱいに呼ばわる修太郎の声に、楽器の音は、ぴたっとやんだ。
　どこかの大大名が、野趣閑寂の景趣を愛でる茶道にこったあまり、この林泉中をえらんで建てた茶邸――とも受けとれる風雅なたたずまいであった。
　柿葺の土庇のふかい玄関に立つと、ほのかに、香のかおりが、漂うて来て、美音は、招かれない客の不作法に、いまさらに、忸怩として肩をすぼめる心持にならずにはいられなかった。
　修太郎は、一向に、遠慮はなかった。
「たのもうっ！」
　それにこたえて、
「ただいま――」
　澄んだ女性の声があって、まっすぐに通った廊下の奥の板戸が開かれた。
　初老の、気品のあふれた人であった。
　玄関に並んで立つ美音と修太郎に、目を置いて、ちょっといぶかしげに、廊下にたたずんだ

が、すぐに、近づいて来た。
「おいでなさいませ」
　片膝を畳につき、片膝に両手をかさねる姿勢が、ぴたりとみごとな構えになって、これは、格式高い大名の奥方が、身分の下の訪客にむかってしめす挨拶ぶりだった。
「ぶしつけに、見も知らぬ身が、お屋敷をけがしまして、申しわけございませぬ」
　美音は、作法にこまかく心をくばりつつ、旅の途次ふと、耳にしたことのない楽器の妙音に魅せられて、さそい込まれた者たちであって、縁はしをお借りできて、弁当をつかわせて頂けまいか、とねがった。
「おやすいこと、どうぞ、お好きな場所をおえらびなさいますよう――」
　婦人は、にこやかに承知して、下婢を呼んだ。
　美音と修太郎は、土庇の袖壁をまわって、庭に入った。
　渓の水をひき入れた細流れがうすく木洩れ陽に光る野趣ゆたかな苑路をみちびかれて行くと、石畳があって、小さな腰掛待合が設けられてあった。
「おやすみなさいませ。すぐに、お茶を持って参じまする」
　下婢は、そこへ、ふたりを入れておいて、ひきかえして行った。
「美音さん。いまの小母さんは、ずいぶん、りっぱだったね。大名の奥方みたいだったぞ」
「むかしは、そうだったのでしょう。きっと――」
「ひとりだけで、ここに住んでいるのかな」
「さあ――？」

「さびしいだろうな……おんなって、損だな。家がほろびてしまうと、こんなところに、ひとりでかくれていなければならないんだからな」

そう言ってから、修太郎は、はっと気がついて、手を頭にやった。

「あ――ごめん！　美音（みね）さんも、そうだったんだ」

「修太郎さんの言う通りです。女は、ほんとに、つまらない」

そうこたえた美音は、しかし、すぐに、胸のうちで、――でも、女に生れた幸せを、わたくしは知っている。

と、呟いた。

源四郎の俤（おもかげ）が、泛んだのである。

――どこに、おいでかしら？

俤が泛んだとたんから、胸のうちに、痛みが起きた。

こうして江戸の町からはなれて来たことを、心の片隅では、後悔しているのだったが、それは源四郎にめぐり会う機会が遠ざかる不安のためであった。

じぶんでも、ふしぎであった。ただ二度しか会ったことのない人に対して、日々に想いを深めるのが――。

あいてには、おそらく、じぶんの想いは通じていまい。

それでいいのだ、とじぶんに言いきかせているのは、病弱の身が永く生きのびられる筈がないというあきらめによる。

美音は、父を、弟を、母を喪った時から、じぶんの人生に、幸福はおとずれないだろう、と思いきめていた。

清らかな天性を、そうした気持で、ますます透明に澄みわたらせて来た娘だった。

たまたま、飄然として出現した源四郎が、その孤独な心の底へ、ひとすじの陽光の箭（や）のように、つよい印象をそそぎ入れて行ったのである。

心の底にねむっていたものが、その光のために、めざめた、といえる。

とはいえ――。

心の表面では、なお、なんの破紋もひろがってはいなかった。美音の態度も振舞いも、やはり、源四郎を知る前と、かわりはなかった。

そこに、美音のかなしさがあった。

このまま、永久に、源四郎にめぐり会えないでも、美音は、ひっそりと生きて行き、やがて静かな死を迎えることができるであろう。

下婢が、お茶を、はこんで来た。

この時、もう修太郎は、焼き飯を頬ばっていた。

美音は、ていねいに礼をのべて、お茶を受けとった。

修太郎は、お茶をひと飲みしてから、

「あの小母さんは、だれだい？」

と、訊ねた。

下婢は、黙って笑顔をかえしただけであった。

腹がくちくなると、少年というものは、もう、じっとはしていられない。

「あ——修太郎さん」

美音（みね）が、とめるいとまもなく、修太郎は、たたたっ……と走って、たちまち、苑路を小さくなってしまった。

美音は、あとを追おうとしたが、思いなおして、ここで待つことにした。

修太郎には、

——あの楽器を見とどけてやれ。

その好奇心があったのだ。

母屋の廻り縁に来た修太郎は、そうっと、はいあがると、柱と障子戸の隙間へ、片目を寄せた。

ひろい座敷のまん中に、あの初老の婦人がむこう向きに坐っていた。

目は、床の間の掛物へ、じっとあてられていた。

——なんだろ？

それは、修太郎の目にも奇妙な絵だった。

純白の長衣をまとうた美しい女性（にょしょう）が、はだかの赤ン坊をかかえている図柄だったが、そのゆたかに波うった頭髪は、白銀色であったし、そのうしろには、燦然たる金色の円光が描かれてあった。長衣の裾を流れている白いものは、雲のようである。

のみならず、よく目をこらしてみると、背景の青空の雲上にも、おごそかに、両手をさしのべ

た人物が立っている。

——阿弥陀様みたいだけど……。

修太郎は、変な仏像があるものだ、と思った。

婦人の手に数珠があるのが見えて、仏像にまちがいない、と合点はしたが……。

と——。

婦人の口から、ひくく、祈りのことばが洩らされた。

「天にましますわれらが御親、御名をたっとまれたまえ、御代きたりたまえ……天に於て思召しままなるごとく、地に於てもあらせたまえ……我らが日々の御やしないを、今日、我らにあたえたまえ……我らが、人にゆるし申すごとく、我らが科（とが）をゆるしたまえ……あめん——」

——へええ！　妙ちきりんなお経だな。

「……がらさみちたまうまりあに御礼をなし奉る……御主は御身と共にまします女人の中に於て、わきて御果報いみじきなり……また御胎内の御身にてまします……でうすの御母さんたまりあ、いまも、我らがさいごにも、我ら悪人のために、たのみたまえ……あめん——」

——おや？　じぶんのことを悪人と言ったぞ。この小母さんは、悪人かい？

修太郎が、胸のうちでいぶかったおり、屋敷の外で、馬蹄の音がした。

瞬間——修太郎は、野性の小動物のようなすばやさで、縁をとび降りて、袖壁の前の石燈籠の蔭へ、かくれた。石燈籠のまわりは、木賊（とくさ）がしげっていて、修太郎の姿を、縁から見えなくした。

べつに、悪いことをしたわけではないので、かくれる必要もなかったようなものの、少年の敏

感な本能が、そうさせたといえる。

門を入って来たのは、三騎であった。

いずれも、黒い布で面を覆っていた。どこかの藩士と受けとれるいでたちであった。

先頭の者は、馬から降り立つと、六尺を越えた偉丈夫であった。

うしろの二人へ、何かひくく言いかけたが、これは、ふしぎな言葉であった。

修太郎は、袖壁をまわって来た三名を、石燈籠の蔭から、そっと、うかがって——とたん、あやうく、声をたてそうになった。

先頭の偉丈夫の、彫ふかい双眼には、青い瞳が光っていたからである。

とっさに——。

修太郎は、座敷の床の間の掛物の総てを納得した。

——切支丹だ！

おそろしい迅さで、小さな胸が高鳴った。

切支丹という存在は、すでに、一般の人々にとっては、疫病のように、忌み避けなければならないものとなっていたのである。

——ここは、切支丹の隠れ家なんだ！

修太郎は、目くらみをおぼえた。

——どうしよう？　美音さんに報らせなければ！

にわかに、ここが、陰惨な、残忍な館に一変した。

抜け出すことは、生命がけの力をふるわなければならないような気がした。

——畜生っ！

たらたらと、脇の下から冷たい汗が流れつとうた。

三名は、そこに修太郎がひそむとは気づかず、座敷に上って、黒い布をはらった。

異国人は一人で、あとの二人は、かなり立派な容貌の、一瞥して、いずこかの旧家臣と判る人物たちであった。

界国人は、婦人とさしむかって、座に就くや、たどたどしい口調で、

「いけません、もういけません、志津女さん——」

と、言って、かぶりをふった。

志津女と呼ばれた婦人は、くらい翳を眉宇に刷いた。

「いけませぬか！」

悲痛な声音で、鸚鵡がえしにした。

「貴女の予感、当りました」

異国人は、そう告げた。

江戸における切支丹宗門徒が、天主のめぐみをつたえる聖者として仰いでいるゼスス会の伴天連ジュアン・グレコ——日本名を寿庵と名のる人物が、この偉丈夫であった。

ザビエルの開教以来、日本における切支丹宗門は、ようやく、幕府の凄じい弾圧に遭うて、全滅しようとしていた。

その伝道の初期には、九州と上方京阪地方の布教を主として、秀吉が、禁令を発する頃まで、

四五十年の間、山陰をのぞく、日本西半分は、どこにも、切支丹の存在を見た。寺院や学校、病院なども、なかなか多かった。

京には、秀吉から特に賜った地所に、「天使の聖母」という立派な寺院が建てられ、西洋風のキョストロがあり、美しい庭園が、設けられていた、という。

長崎には大規模の病院がつくられ、それぞれ、百人以上の患者を収容し、日本人もその事業に参加し、寄付も多かった、という。

秀吉が、突如として、布教師追放令を出したのは、天正十五年であった。天下統一とともに、信仰の自由をも、これをうばう心に傾いたのである。しかし、秀吉のそれは、多分に、気まぐれな圧迫であった。

次いで、天下を掌中にした家康も、切支丹宗門に対して、これを弾圧する意図は強かったが、一方においては、外国人教師を利用して、海外貿易を促進しようという政策をとっていたため、かなり大目に見るところがあった。

禁教令は布かれていたし、また九州諸処には、加藤清正の狂的なまでの憎悪をはじめとして、迫害殉教がつづいていたが、江戸にあっては、家康は、海外交通のために、布教師を厚遇していた。

通訳の役をつとめていたジュアン・ロドリゲスなどは、自由に京や伏見の城門を出入していた、という。本多正純は、つねに、布教師を保護して、家康にとりなしていた。

慶長十年には、全土に、五千五百の新しく洗礼を受けた者があった、と記録にのこっている。

家康が、将軍職を、秀忠にゆずったその年、切支丹にとっては、多難の運命が暗示された。

秀忠は、江戸市中では、切支丹を検挙しながら、他方、外国使節としての教師たちを厚遇したのである。

江戸には、八丁堀に、「ロザリヨの聖母」という寺院があったし、浅草には、フランシスコ会の事業のひとつである癩患者収容所も設けられていたのである。

しかし――。

保守気風のつよい秀忠は、段々に禁教令を励行するようになって来た。

最初の大迫害は、慶長十七年、駿府と江戸で、爆発した。

秀忠は、旗本中に、洗礼を受けた者があるときいて、激怒して、徹底的な調査を命じたのである。同時に、寺院の破壊も命じた。

しかし、この時、旗本中の大立物原主水が逃亡したため、公儀は、これをきっかけとして、毎年ぬきうち的に検挙を行なう方針をたてた。

翌十八年には、ついに交易使節である布教師（パアデレ）の一人ソテロも、教徒二十七人とともに捕えられた。二十七人の中には、士分以外に、大工や門番も交っていた。

この年は、各地において、召捕や刑死が、すくなかった。

大阪冬の陣が、はじまったため、しばらく迫害の手はゆるめられたかにみえて、布教師たちは、活動すべき好機会と相談しあったが、それも束の間のことにすぎなかった。

豊臣滅亡とともに、徳川氏は、名実ともに天下の権威を握り、その為政の峻烈を示すには、切支丹弾圧が、最もいい方法であった。

ひとつには、外国通商の方面で、オランダとイギリスが、しだいに先着者の勢力を奪ったので、幕府としては、通商を目的に切支丹伴天連を利用する必要がなくなった。

教師は、入国を禁止され、これより後は、伝道は潜伏状態に入り、追求に隠れ忍び、迫害と闘いつつの仕事となった。

それでもまだ、秀忠の政策は、江戸や京や大阪の信徒の捕縛処罰をもって、みせしめとする程度であった。そして、イスパニヤ王使節がやって来ても、もはや歓迎はせず、謁見を拒み、贈品を受けつけずに、追い返すことによって、布教師たちに恐怖を与える間接手段をとった。

元和九年、家光が三代将軍の位を継いで、その弾圧は、みるみる凄じいものとなったのである。

迫害刑罰は、公儀の威光を公に知らしめるために、特におごそかに、仰々しく行われた。

その年、旗本中の大立物原主水以下五十余名が、アンゼリス、ガルベスの二人の伴天連とともに捕えられて、芝の海岸（今日の田町九丁目）で火あぶりの刑に処せられたが、その殉教の惨烈に、見物人の中に交っていた信徒たちが、われを忘れて、竹柵の中へとび込んで来て、ともに焼き殺されんことをねがった、と記録にのこっている。

家光は、その信徒の中に、御小姓組の士が交っていたときいて、

「数年の後には、全土に、ただ一人の切支丹も存在せしめぬように、いたしてくれる」

と、言いはなった。

江戸には、まだ、数千の信徒がいたのである。

寛永元年には、男五人女七人が火あぶりになり、牢死した者の屍骸も火焔の中へ投じられた。

寛永三年には、癩収容所がとりつぶされ、患者六十八人は投獄され、ことごとく病死した。

寛永六年には、かなり身分のある人々が、夫婦子供あわせて十三人、水責めに遭った。中川清左衛門という牢人は三日間、水に漬けられたあげく、竹の刃で、頭をしごき斬りにされたが、息絶えるまで、でうすの御名を唱えていた。

寛永八年にも、五組の家族が火あぶりになり、当歳の女の児は、その父母の面前で、殺された。

……こうして挙げていけば、きりがないくらいである。

そして、ついに――。

幕府は、最も苛酷な政令を、昨日、江戸市内の辻々に高札にして公示した、という。

江戸全市民の宗旨改め、ならびに踏絵を行なうこと。

同時に、宗門者密告――訴人に対して与える賞金を、伴天連ならば銀二百枚、信徒ならば百枚、と定める。

また、一人の嫌疑者があれば、その家族全員ならびに兄弟姉妹も同罪として召捕って、火刑にすること。

この政令に対して、落書、張紙をする者があれば、これも、信徒とみなして、捕縛すること。

この布令は、まさに、切支丹門徒に対する最後通告であった。

座敷には、悲痛な沈黙が、つづいた。

志津女が、ほっと、ふかい溜息をもらして、つぶやいた。

「公儀の尊厳をたもつために、これまで、幾万人のいのちが、天主様の御許へ送られたことであろう！」

寿庵グレコは、志津女の血の色をうしなった顔を、じっと見まもったが、なにも言わなかった。

他の二人も、俯向いて、身じろぎもしなかった。

やがて、寿庵が、重い口調で言った。

「志津女さん、長崎へ行きませんか？　長崎は、まだ、安全です」

しかし、志津女は、かぶりをふった。

「わたくしは、ここにおります」

「しかし……もう、ここも、まもなく、発見されます」

「江戸の市中には、千人以上の信徒たちがいるではありませぬか。あの人たちは、どんなに迫害されても、江戸からにげ出しますまい」

この時、武士の一人が、きっとなって、鋭い眼光を、庭へまわした。

「何者だ！」

縁側から誰何の声がかけられるのと、木賊の蔭から修太郎が脱兎のごとく、とび出すのと、同時だった。

「待てっ！」

武士は、大きく跳んで、修太郎をとりおさえようとした。

猿臂が、肩へかかった――瞬間、修太郎は、腰の小刀を、抜き打ちに、びゅっと、切りまわした。

少年と見ての油断が、武士に、

「うっ！」

と、呻いて、その右手くびから、血飛沫をあげさせた。

「こやつ！」

もう一人の武士が、目をいからせて、庭へ躍った。

「つかまるかいっ！」

こういう危機を迎えるやこの少年の血は、野性の狂暴に還って、波だち、わきかえるようだった。

恐怖などは、みじんもなかった。

逃げると見せて、数歩走ってから、くるっと、向きなおるや、両脚をふんばって、

「来い！」

と、青眼にかまえた。

その闘志といい、法形にかなった構えといい、これは、武士の目をおどろかせるに充分だった。

「こども！　刀を引け！」

「引くもんか！　きさまら、切支丹だぞ！　天下の御法度をやぶっているんだぞ！」

のどいっぱいに、叫んだ。

縁側へ出て来た志津女が小さな修羅姿を見て、何を思いあたったか、
「あっ！」
と、烈しいおどろきの声をたてた。
武士たちは、素手で捕えることの面倒さに、ちらと顔見合せた。そして、手くびを傷つけられた方が、走って行って、六尺棒をつかんで来た。
美音が、血相かえて、細流れに沿うた苑路を、駆けて来たのも、この時だった。
「修太郎さん！」
二間あまりてまえで、必死に呼んだ美音は、息が切れて、膝を折った。
「い、いけません！　修太郎さん！　いけません！……か、かたなお、お引きなさいっ――」
修太郎は、しかし、目をむき、歯をむいて、構えを崩さず、
「美音さん！　こ、こいつら、切支丹だぞっ！」
「えっ！」
美音は、よろよろと立ちあがったが、そのまま、立ち竦んでしまった。
志津女が、庭へ降りた。
「わたくしに、おまかせ下さいませんか」
志津女は、武士にそうことわっておいて、修太郎の前へ、足をはこんだ。
修太郎は、その清雅なすがたを睨みつけつつも、しぶしぶ小刀を下げた。
「そなたに、たずねたいことがあります」

「なんだい？」
修太郎は、反抗的に、肩をそびやかした。
「そなたの姓名は？」
「ちぇっ！」
修太郎は、舌うちした。
「ひとに名まえをきくのなら、自分の方から名のるのが礼儀だぞ」
「おお、これは、あやまりでした。わたくしは、志津女と申す、西国に亡んださる大名の身よりの者です」
「おいらは、室伏修太郎だ。それから、こっちは、美音さんだ。美音さんの先祖は、このあたりを支配した豪族だったんだぞ」
志津女は、口のうちで、
――室伏修太郎？
と、くりかえしてみたが、記憶にはないらしく、
「国は、どこですか？」
「若狭だ」
「え！　若狭！」
志津女の顔色が、にわかに、動いた。
「そなた、若狭に、両親がいて、育ちましたか？」
この問いに対して、修太郎は、たちまち、憤然たる様子をしめした。

さげすまれた、と感じてはげしい反撥をおぼえたのである。少年の敏感な神経に対して、志津女（しずめ）は、あまりに自身の心をはやらせ過ぎた、といえる。

修太郎は、黒兵衛や源四郎や美音（みね）には、すなおに、自分が、小浜湾の赤礁崎（あかぐり）という岬にすてられていたと教えたのであるが、この見知らぬ気品のある中年の婦人に対しては、何故か親しめないものを感じて、

「両親がいたから、おいらは、生れて、育ったのじゃないか」

と、叫んでしまった。

「そ、それは、そうであろうが……」

「いたんだぞ！　おいらの父上は、立派なさむらいで大谷吉政様の旗本だったんだぞ！」

「………」

志津女は、当惑して、口をつぐんだ。志津女の面持をうかがっていた美音が、はっとして、

「修太郎さん――」

と、うしろからその肩へ手を置いて、「せっかく、やさしく、おたずね下さっているのですもの、あなたも……」と、ささやきかけた。

修太郎は、肩をゆさぶって、美音の手をふりはらった。

「この小母さんは、おいらが、捨児か、とききたいんだろ。捨児なもんか！　おいらの父上は、大谷吉政様の右腕だったんだぞ！　ざまみろ！」

修太郎は、気が狂ったようなはげしさでわめいた。

「修太郎さん！」

美音（みね）は、必死になって、修太郎を抱きかかえようとした。

「わかりました」

志津女（しずめ）は、じぶんの態度がいけなかったことを反省して、やさしく、うなずいてから、

「そなたを、決して、さげすんだのではありませぬ。詫びまする」

と、頭を下げた。

修太郎は、小鼻をふくらませて、口をとがらせた。それから、小刀を鞘（さや）におさめると、

「美音さん、行こう」

と、うながした。

美音は、志津女の前へすすむと、

「御無礼のほど、なにとぞ、お見のがし下さいませ。お立寄りしたために、この様なご迷惑をおかけいたしまして、申しわけございませぬ。わたくしども、江戸を去って参りました者ゆえ、なにかの御懸念がおありでございましたら、その点は、決してご心配下さいませぬよう……、ご厚意におん礼申上げて去らせて頂きとう存じます。ご当家のことを決して口外いたしませぬことをお誓いいたします」

と、述べた。

志津女は、さびしく微笑して、

「貴女が、豊島家の裔（すえ）のおひとならば、ともに語りあいとう存じますが、ここでお別れすれば、もう二度とめぐり会えますまい。お弱そうにお見うけいたしますゆえ、くれぐれも、おからだを

おいといなさるがよい」
と、いたわった。
修太郎は、もう、どんどん、門にむかって歩き出していた。
美音は、いくども、頭を下げておいて、そのあとを追った。
志津女が、しずかに、座敷にもどった時、寿庵が、ひくい声音で、
「あの少年、志津女さんに似ていました」
と、言った。
志津女は、しばし、黙っていたが、つぶやくように、
「天主様のみが、ご存じでございましょう」
と、こたえた。
一方——。
野に出てから、美音が、
「修太郎さん、どうして、あの小母様に、嘘をついたのですか？」
と、とがめると、修太郎は、やけに、石ころを蹴とばしながら、こたえた。
「おいら、なんだか、腹が立ったんだ！」

光の中へ

ふっと、源四郎は、意識を蘇らせた。
墨を流したような闇の中であった。闇そのものが、黄泉の国のたそがれの微光のように、ふしぎなかがやきをもったものに感じられるのは、源四郎の神経が、まだ、衰えている証拠のようであった。
からだは、筵の上に横たえられていた。筵の下は、土で、冷たさが、骨にしみる。
——牢獄らしいが、地下であろうか？
しばし、身じろぎもせずに、闇に、まなこをひらいていた。
捕えられた惨めさを考えるよりも、生きていたことを安堵する心があった。
——但馬守は、おれを斬らなかった。どうするつもりか？
水のような冷静さが、胸のうちにあるのが、これは、生きる力に感じられた。
源四郎は、ふかく呼吸してみた。湿った、かびくさい夜気だった。
「お気がつかれたか？」
闇の中から、声がかかった。
気づかぬことだった。人がいたのである。
「どなたか？」
源四郎は、起き上って、じっと眸を凝らしたが、なんの影も見わけられなかった。
「ただいま、灯をともします」
対手は、そう告げて、もそもそと動いた。
やがて、かちっと、燧石を切る音がしたかと思うと、そこからあかい灯が滲み出た。

燭台のかたわらに坐っているのは、年配もさだかでない、ぼうぼうたる蓬髪弊衣の人物であった。

源四郎は、しかし、その双眼が澄んでいるのをみとめた。

「お手前は、ここへかつぎ込まれた時は、ひどい高熱でしたな。よく癒られたものだ。お若い、からだをきたえて居られる。うらやましいと存じた」

囚人は、そう言って髭の中で、微笑した。

「ここは、どこでござろうか？」

源四郎が、訊ねると、囚人は、ちょっと不審げに、

「ご存じないか？」

「存ぜぬ。……捕えられてすぐに、意識不明になりましたので――」

「われら信徒が、ほかに入れられる場所はござらぬ」

「信徒？」

こんどは、源四郎が、いぶかる番だった。

「信徒と申されると――？」

「お――では、お手前は、信徒ではありませんか？」

「…………？」

「左様でしたか。それでは、ここが、どこかご存じないのも無理はない。ここは、小日向の、切支丹牢屋敷でござる」

――切支丹牢屋敷！

源四郎は、愕然となった。

――おれが、何故に、切支丹牢屋敷につながれなければならぬのか？

「わからぬ！」

源四郎は、うめいた。

その様子を、見まもっていた囚人もまた、納得しがたいらしく、

「御貴殿は、信徒と思いちがいされたのではありませんか？」

「いや、そんなはずはないのです。わたしが捕えられる理由は明白だったのだし、捕えたのが柳生但馬守でした」

「ふむ――」

囚人は、ちょっと考えていたが、

「しかし、その理由が公にできぬ性質のものであれば、ひそかにとじこめるのに、ここは、いちばん、適して居りますぞ。但馬守ならば、当然、思いつこう。隣りが、柳生家の下屋敷だから――

――」

そう教えられて、源四郎は、

――そうか。

と、合点した。

――隣りが、但馬守の隠居所か。

但馬守は、将軍家に乞うて、この捕虜の身柄を、私にもらいうけたに相違ない。将軍家にして

も、辻斬りにえらんだいけにえであってみれば、但馬守のねがいをしりぞけるわけにいかなかったであろう。

「わたしは、神子上源四郎と申す者」

源四郎が、正座して、名のると、対手は、

「神子上、と申されると、小野次郎右衛門殿とゆかりがおありか？」

と、問うた。

「恩師より賜った姓です」

「ほう……それは！」

囚人は、眸をかがやかせた。

「次郎右衛門殿とそれがしは、むかし、林家の道場で、机をならべて、道春先生の講義を受けた間柄です。……申しおくれたが、それがしは、原主水と申す」

「え？」

源四郎は、おどろいて、あらためて、まじまじと、対手を見つめた。

「原主水殿は、先年、捕えられて、芝の海岸で、火刑に遭うたときききおよんで居りますが……」

囚人は、その疑惑に対して、さびしげに、声をたてて笑った。

「まさに、ここにいるのは、生きた亡霊でござる。しかし、原主水に、まぎれもないのです。……火刑に処せられるのは、それがしの替玉でござった」

「………」

「それがしを生かして居るのは、公儀が、江戸の全信徒を一網打尽にするための手段に使おうこ

んたんによる」

旗本の身でありながら、切支丹宗門に帰依して、江戸における大立物となったこの人物が、最初に捕吏の手にかかろうとしたのは、慶長十七年――二十年前のことだった。

巧みに逃亡して、駿府へ趨って、ひそんでいたところを、召捕えられたのが、それから、四年後であった。しかし、その時は、背中に烙印を押されて、追放に処せられ、生命の危機からはまぬがれたのであった。

再び、江戸で捕縛されたのは、十年前――元和九年であった。

火刑に処せられたのが身替りの信徒であったとするならば、この人物は、牢獄内に十年間をすごしたわけである。

その不退転の信念に対して、源四郎は、心から敬意をはらわないではいられなかった。

「おうかがいしますが……」

源四郎は、主水を見つめて言った。

「宗門をまもるのが、さほどまでに大切なこととは、わたしには、よくわかりませんが……」

「宗門を破壊しようとする公儀の狂気ぶりが、それがしたちには、よくわかり申さぬのと同じことわりでござろうか。御貴殿が、天主様の恩寵がおわかりにならぬかぎり、迫害に堪え、火あぶりに遭うてなお、微笑みつつ、祈りの声を絶やさぬ信徒の心中を、くみとることは叶いますまい」

主水の語気は、衰えぬ気力をしめした。

源四郎は、あらためて、牢内を見まわした。

地下牢であった。

周囲は、白い黴（かび）のふいた石壁でかこまれている。天井は、細かな組亀甲の厚い檜板で、しかも、鉄わくがはめてあった。

一隅に石段が設けられてあって、その上に、鉄格子の片引扉が、びしりと閉めてある。

窓は、ひとつもなかった。

外界の空気が洩れ入るとすれば、その扉の隙間からであろう。扉の外側もまた、二重三重の厳重なかこいがしてあることと想像される。

人力をもってしては、これを破ることは不可能であった。

「原殿は、この地下牢に、どれくらい、おすまいか？」

「四年に相成る」

「四年！」

源四郎は、暗然となった。

――おれは、十日も我慢できそうもない！

「信仰が、その忍耐を与えてくれたと申されるのですか？」

「左様――」

「いつか、脱出できる希望をおすてにならずに――？」

主水は、微笑して、源四郎を見かえした。

「生きている限り、希望をすてぬ。これが信仰でござる」

「……………」

源四郎は、ふと、主水に、くわしく、きいてみたいような気が起ったが、それが、剣の道にどれだけの利になるだろう、と思いかえした。

「ともかく、ここから、抜け出す工夫をしなければなりません」

源四郎は、言った。

自分に言いきかせる言葉だった。

「あわてないことでござる。天命があれば、必ず、陽を仰ぐことが、叶い申そう」

「わたしは、お手前とちがって神明を信じて居りませんし、幾年もこの闇の中に居る忍耐もありません。頼り得るのは、自分の力のみと考えて居ります」

「お若い御貴殿が、そう申されるのは、当然だが……」

主水は、そこまで、言って、沈黙した。

源四郎は、急に、はげしい焦躁にかられて、立ちあがった。

壁をつたって、ひとまわりしてみた。それから、石段をのぼって、鉄格子の扉をしらべてみた。

天井が、はたして、破れるものかどうかも、考えてみた。

その結果、胸に来たのは絶望であった。

その様子を見まもっていた主水は、ひくく、

「奇蹟がおこらぬかぎり……」

と、つぶやいた。

——奇蹟！

源四郎は、じっと、主水を見かえした。

「お手前の信仰は、この苦難に堪えるためには、必要と存じますが、それが、救いの手をさしのべてくれようとせぬ天主とやらへの信仰なら、これは、いかがなものであろうか」

「神子上殿は、後生を考えたことがおありか？」

「ありませぬ」

「われらは、天国というものを信じて居ります。天主様は、われらの来るのを、お待ちになって居るのでござる」

「失礼ながら、それは、死の恐怖からまぬがれんがための、心置きではありませんか？」

「いや、ちがい申す」

主水は、しずかな口調で、神の尊厳と慈悲について語りはじめた。

しかし、その説教は、耳をかたむけているうちに、源四郎に、莫迦々々しさをおぼえさせるに役立っただけであった。

デウスが、万事叶い給う、よろずの源、天地森羅万象を造り、はじめもない、果てしもない御尊体である、というがごとき教えは、到底、源四郎の心には、受けつけられなかった。

恰度、この時刻——。

この切支丹屋敷の門前へ美々しい行列が、到着していた。

総蒔絵の乗物から、立ちあらわれたのは、広姫であった。

広姫は、一丈余の高さをもつ塀が、数十間にわたってつらなったいかめしい構えを、眉をひそめて、眺めやった。

塀上には、鋭利な刃物が外より内へむかって、無数にならべてあった。

広姫は、切支丹宗というものに対しては、ただ邪教としか教えられて居らず、また知る興味もなかった。

踏絵をこばんで、磔刑になったとか、十三歳の少年が、少年なる故に処刑を免ぜられようとするや、自らすすんで十五歳だと称して歓びつつ火あぶりになったとか——そんな話をきくたびに、

——なんという、おろかな者たちであろう。

と、あわれむよりは、さげすんだものであった。

いま——。

幾百人——いや千を越える信徒たちが、幽囚の憂目に遭った屋敷を眺めて、広姫の胸のうちには、ただ、嫌悪感しかわかなかった。

神子上源四郎がとじこめられていると知ったのでなければ、他にいかなる理由があろうとも、広姫に、ここをおとずれる気持の起ろうはずがなかった。

門をまもっていた番士から、その到着を報されて、おどろいて出て来た屋敷支配の大目付・井上筑後守配下の与力は、広姫に挨拶してから、その来訪の目的を、おそるおそる問うた。

「この屋敷の地下牢に、十年余も、信仰をひるがえさぬ頑な者が居ると、ききおよびました。一

度、会って、その者の口から、切支丹とはいかなるものか、語らせようと思いたちました」
「それは、しかし、姫様――ご身分にかかわるお振舞いかと存じられます」
与力は、顔色を変えて、拒んだ。
「わたしは、切支丹に興味を抱いたのではありませぬ。邪教を信ずるにもせよ、十年の永きにわたって、いかなる拷問にも耐え忍んだ男とは、どのような面構えか、見たいだけじゃ」
「姫様。他の罪によって、繋留いたして居る囚徒とはちがいまする。地下牢を設けて、入れて置くいわれを、何卒お考え賜りますよう――。また、これは、大目付の許可がない限り、それがし一存にては、はからいかねる一大事にございます」
「わたしは、将軍家の妹じゃ！　井上筑後守に頭を下げる必要があろうか！」

供をして来た中﨟が、与力のそばへ寄って来て、一度仰せ出されたら絶対にお心をひるがえされぬ姫様のことゆえ、極力内分にするから、おねがいする、とささやいた。
与力は、大目付まで、馬を走らせて来ることを言いはった。
広姫は埒があかぬと見るや、さっさと門をくぐって行った。
与力が、狼狽して、行手をさえぎったが、かまわず進んで来る広姫に、文字通り、手がつけられなかった。そのからだにふれることは、ゆるされぬことだった。
与力は、切腹をかくごした。
「地下牢へ案内してたもれ」
広姫は、決意をひそめたしずかな声音で、命じた。

「やむを得ませぬ」
長崎の出島にひとしく、高低四千坪余の広大な屋敷であった。御蔵、番所、吟味所、牢屋、斬罪所、火刑所、梟首所が、棟をならべていた。
もともと、井上筑後守の下屋敷であったのを、その人が大目付、宗門奉行となったのを機会に、牢屋敷に改造したものであった。
与力は、さきに立って、吟味所の裏手から、御蔵と御蔵の鞘小路を抜けて行った。
地下牢は、一見、ただの番所とおぼしい建物の中から降りて行くようになっていた。
広姫にしたがっていたのは、中﨟二人、局五人、そして添番一人、伊賀者一人であった。
黒の紋付の木綿羽織をつけた伊賀者は、始終顔を伏せていたが、これは、一歩毎に、大きく半身を傾斜させるひどい跛であった。
その番所構えの建物の前に来た時、伊賀者は、ひとり、こっそり、にやりとしたことだった。
ひどいおでこで、眇眼で、反歯で、無類の醜男であるこの男が、何者であるか、もう説明する必要はあるまい。
広姫との手筈は、できていたのである。
与力は、同心から、鍵を受けとると、どっしりと閉ざされた格子扉の錠前へ寄った。
広姫は、ちらりと、うしろをふりかえった。
伊賀者は、上目で、その視線を受けとめて、人目にさとられないように、合点してみせた。
……扉は、ぎいっと軋って、開かれた。
その時であった。

一行の背後へ、しずかな足どりで、一人の老武士が、近づいて来たのは――。
「姫様。……不穏の企ては、ゆるされませぬぞ！」
底力のある重いひびきをもったさび声に、広姫は、ぎくっとなって、ふりかえった。
柳生但馬守の姿が、巨巌のように大きなものに眸に映った。
「わたしが、何を企てて居ると申すのじゃ？」
広姫は、気をとりなおして、鋭い口調できり返した。
但馬守は、鷹揚に笑って、
「御存念のほど、この爺の口から申上げなければいけませぬかな？」
と、言った。
広姫は、いかにも、万事を見透している但馬守の態度に、かっとなった。
「申してみよ、わたしが、何を企てて居るのじゃ？」
「されば……」
但馬守は、広姫の昂奮しきった白い顔へ、じっと、鍛えた眼光を放って、
「先般、愛宕山上において、普化僧の群が、小野道場の神子上源四郎なる若者を、襲撃いたした際、姫様には、行き会いなされた由――」
「それがどうしたのじゃ！」
「姫様は、それよりしばらく前、源四郎から、侮辱をお受けなされたおぼえありとか……それをかえさんために、いきなり、源四郎に斬りかかられたそうでございますな？」

「あの男のいのちを、わたしの手で、仕とめてやりたかったのじゃ！」
「はたして、左様でありましょうかな」
広姫は、但馬守の眼光に堪えようとして、必死に、眸をいからせていなければならなかった。
「わたしが、源四郎を逃そうとしたとでも申したいのか？」
「ご自身で、そう仰せられた方が、お気持も楽になりましょう。われら武辺者には、若い婦女子の心は、とんと判りかねますが、神子上源四郎と申す奴、なかなかの果報者と存じられます」
「ええい――なにを申す！　無礼であろうぞ、但馬！」
「無礼を承知で申上げて居ります。姫様、貴女様は、将軍家おん妹君にあらせられますぞ！　軽挙は、かまえて、おつつしみ遊ばされなくてはなりませぬ。徳川家にお生れ遊ばしたという、かくれもない一事を、とくとお考えなさいますよう――」
「いやじゃ！　わたしは、じぶんの心をいつわりとうはないのじゃ！　わたしはわたしの望むがままに生きて行くのじゃ」
「古来、何人がそのように気ままに生き終せましたろうか。人おのおの、生れ育った世界に、苦しみも悲しみも堪えて生きて行かなければなりませぬ。いかに海が濶くとも、魚の躍る場所はかぎられて居りますぞ。どのように空が大きくても、鳥の舞う範囲もおのずから限りがありましょう。……このことわりを、とくとお考え下さいますよう――」
但馬守は、誠心をおもてにあらわして、いさめた。
広姫は、しばらく、黙っていたが、ふいに、口走った。

「但馬！　わたしは、もう神子上源四郎の妻なのじゃ！」
「なんと仰せられます！」
　但馬守は、さすがに眉宇をひそめた。
　まわりの者たちも、顔色をかえた。
　広姫は、遠くへまなざしを置くと、
「わたしは、源四郎と、伊皿子の竹芝寺で、幾夜かをすごしました」
「姫様！」
　但馬守が、鋭く叱った。
　広姫は、視線を但馬守へもどすと、
「妻たるものが、とらわれの良人に逢いに参ったのがどこがいけないのじゃ。但馬、貞婦の道を、そちの口から、きこうか！」
「姫様！　たわむれにも、そのようなことを申されるものではありませぬ」
「わたしが、源四郎の妻になったのを、嘘だと申すのか！　まことじゃ。わたしは、源四郎に、身も心も捧げました」
　このことばをきいている者のうちで、伊賀者に化けた黒兵衛は、内心、
——やれやれ、女子というものは、一途に思いつめると、何を口走るやら、わからんわい。
と、あきれた。
——御主人様がおききなされたら、どんな顔をなさるやら……。
　思わず、地顔になって、かぶりをふった。

　とたんに、黒兵衛は、但馬守の眼光が、自分を射ているのを感じて、首をすくめた。
「但馬！」
　ふいに、広姫が、地べたへ膝をついた。
「たのみまする。この通りじゃ」
　両手を土について、頭を下げた。
「源四郎に、会わせて下され……何卒、解き放って下され。……あの人に、なんの罪があろう。上様が、公方のおん身を忘れて、辻斬りなどを……」
「姫様っ！」
　但馬守は、烈しく叱咤すると、広姫を、立ち上らせた。
　広姫の顔は、濡れていた。
　うってかわった、よわよわしいまなざしにすがりつかれて、但馬守は、当惑しつつ、やさしい口調で、
「姫様。もはや、源四郎の身柄は、但馬守一存にては、どうにもなりませぬ。……しかしながら、上様におかせられては、源四郎の非凡の腕前をおみとめ遊ばして居りますからには、あるいは、格別のおぼしめしがあるやも知れませぬ。それまでは、何卒、結果を悪しゅうするようなお振舞いをおひかえ遊ばしませぬと——」
　そう言いきかせながら、但馬守は、なんの意味か、また、じろりと黒兵衛を見やったことだった。

数昼夜がすぎたようであった。
　昼も夜もない暗闇にとざされた中で、一日のはじめは判じがたかった。
　源四郎と主水(もんど)とのあいだには、そのあいだ、多くの会話は交されなかった。おのおの、おのれの想いに沈んで、身じろぎもせぬ時間が、大半であった。
　――たまらぬ！
　突如として、発作的に、源四郎は、立ちあがることがあったが、この焦躁を抑えるためには、黙然として端座して祈りをこめている主水の姿を眺めるのが役立った。
　源四郎は、暗闇の時間があまり永くつづくと、主水に、燈火をもとめた。
　今日――といっても、朝か夕かわからなかったが、源四郎が、目ざめて起き上ると、主水が、話しかけて来た。
「神子上(みこがみ)殿は、御両親はおありか？」
「居りません。物心ついた時には、すでに、他人の手によって育てられて居りました」
「何処で？」
「大阪城にて――」
「大阪城！」
　主水は、おどろきの色を、おもてに刷(は)いた。
「大阪城内で、育たれたのか」
「左様です」
　源四郎は、猛火の荒れ狂うた落城の日の光景を思いうかべた。

「落城した時、わたしはまだ十歳でした。よく生き残ったと、いま考えても、ふしぎなくらいです」
「一人で、逃げられたのかな？」
「いえ。わたしをかばい、逃がしてくれた婦人が居りました。……その婦人がいなければ、わたしは、すでにその時、この世に亡かったでありましょうし、たとえ生きのびていても、野伏にでもなりはてて居りましたろうか……。兵法に志すなど夢であったと存じます」
「その婦人に、御貴殿は、ひろわれた？」
「三歳の時、若狭の浜辺に置きすてられて居りましたのを……」
「ほう、それは――」
「おぼろな記憶ですが、船に乗せられて来たようにおぼえて居ります」
　源四郎は、胸に熱いものがあふれて来て、しばし、絶句した。
「そのご婦人は、どうなされた？　城内に果てられたか！」
「いえ、そんなはずはありません。生きて居る、と信じて居ります。いつの日にか、必ずめぐり会える、と心にきめて来ました。わたしが、一流の兵法者たらんと、おのれをむち打ったのも、その日のためでした」
「……………」
「志津女(しずめ)、というひとでした」
　これをきくや、主水の顔色が変った。

「なんと申された？　しずめ？」
主水の異様に光るまなざしを受けとめて、源四郎の胸が、さわいだ。
「左様、志津女という婦人です。ご存じですか？」
主水はすぐにこたえず、沈思していたが、やがて、
「存じて居り申す」
と、うなずいてみせた。
源四郎は、息をのんで、主水の次の言葉を待った。
主水は、しずかに語りはじめた。
「大阪落城に際して、敗亡の運命に加わった伴天連は、数人ござった。その中に、ジュアン・グレコと申す御仁が加わって居ったのです……」
日本名を寿庵と称すこの布教師は、イスパニヤ人で、グラナダの貴族の生れであった。十六歳の時、ゼスス会の修行に就き、二十三歳のおり、東洋伝道のために、国を出た。印度を経て、天川に来り、そこで神学の教授をして、十年を経た頃、日本の切支丹に迫害が起りはじめたのを知って、身を挺して、渡って来た。慶長五年、齢三十四の時であった。
長崎で日本語を習得し、京に出て、上京で伝道所を管理すること数年。また大阪で働いたが、のち北国に出かけて、越中、能登、加賀を伝道した。北陸地方の伝道は、高山右近が金沢に住むようになって、次第に始められていたが、寿庵は、けだし、右近に招かれたのであった。
慶長十九年の大追放に、加賀の前田家でも、もはや高山右近を保護することが出来なくなった。したがって、寿庵もまた、北国を去らねばならなかった。

寿庵が、大阪にひそんだのは、それから程なくであった。
恰も、この頃、大阪では、関東に対抗して、一戦の準備をいそぎ、牢人者が続々と集っていた。
寿庵は、これらの牢人者の群の中に入って、天主の教えを説き、かなりの信徒をつくり、それをきっかけとして、大阪城に入ったのであった。
寿庵が身を寄せたのは、明石掃部の屋敷であったが、そこでたまたま、知りあったのが、志津女という女性であった。
志津女は、寿庵の教化によって、切支丹宗門に帰依して、最も熱心な信徒のひとりになったのであった。
「……志津女殿は、寿庵師とともに、ぶじに猛火の中から、城外へのがれられた」
主水に、そう告げられるや、源四郎は、動悸はげしく、
「いまは……いまも、ご無事でしょうか？」
と、訊ねた。

主水は、微笑してうなずいた。
「お達者でござる」
「おお！」
源四郎は、うねりあげて来る感動で、肩を波うたせた。
「いまは、何処に？」
「この江戸の郊外に――」

「郊外に！」
源四郎は、もうこんな地下牢に寸時もとじこめられてはいられない焦躁にかられた。
「神子上殿」
「は——」
源四郎の眸には、にわかに、主水の姿までも、尊敬すべきものに映った。
「御貴殿は、おそらく、ここから、あまり遠くない日に脱出なされるだろう」
「それは、お手前様と同時ということになります」
「いや——。それがしは、すでに、四年間のうちに、おのれの運命を見きわめている。これは、生きる希望を抱くこととは、別の予感と申してよい。……御貴殿は、ちがう。お若いのだし、力もおありだ。御自身の力で、不可能事を可能にもなさることができるはずと存ずる。……御貴殿を眺めているうちに、ふと、そう感じ申した」
「……………」
「次郎右衛門殿より、神子上の姓を頂かれたのであれば、さぞかし、秀れた胆力と腕前をお持ちであろう。それを、わが宗門のために役立てて頂けまいか」
「……………」
「御貴殿が、志津女殿に恩報じをされたいと心掛けておいでならば——それがしのたのみをききとどけて頂けるならば、それが一番の志津女殿のおよろこびとなろうと存ずる」
「承知しました。脱出できたあかつきには、微力ながらこの身を挺することをお約束いたしましょう」

「忝じけない」
主水は、頭を下げてから、
「公儀が、それがしを生かしているのは、江戸の全信徒を一網打尽にしようがための手段に使わんがため、と申上げましたな」
源四郎が、うなずくと、主水は、ひくく笑って、
「それだけではござらぬ。目的が、ほかにある。……武田信玄の私鋳金が、およそ五十万両、隠匿されている場所を、それがしが知っており、それを白状させんがためでござる」
——五十万両！
源四郎は、おどろいた。
そんな莫大な軍用金が、何処かにかくされていようとは、想像しがたいことだった。
「それがしは、捕えられて以来、あらゆる拷問に堪え通して、白状することを拒否して参った」
曽て、武田信玄は、天産ゆたかな金を採掘して、定位貨幣及び切遣い金をつくった。これは、非常に規模の大きなもので、金座を設け、松木、野中、志村、山下の四家が担当した、という。
世に、これを甲金と称して、完全な純度を有するこれは、後世いくたびも吹きかえられて、五倍にも十倍にも増されることとなったのである。
「それがしのおたのみというのは、五十万両の隠匿場所を、御貴殿にたしかめて頂き、志津女殿とともにくらしておられる寿庵師に御一報頂けまいか、ということでござる」
主水は、膝を正して、しずかな声音で、言った。

源四郎は、承知した。
と——。
この時、源四郎は、何を思ったか、燭台を把ると、立ちあがった。
天井にむかって、それを高くかかげて、ずうっと見わたしていたが、主水をふりかえると、
「ぬすみぎきされたかも知れませぬぞ」
と、告げた。
主水は、べつにおどろかなかった。
「御貴殿が、ぶじに陽の目を仰いで下されば、むざと、敵の罠にかかるようなことはござるまい」
そう言って、箸を一本つまみとると、土の上へ、絵図を描きはじめた。
それから、およそ、二刻あまり過ぎたろうか。
源四郎は、ふたたび、鋭い眼光を、天井へ放った。
こんどは、あきらかに、天井裏に、人の忍んだ気配があった。
じっと、全神経をあつめて、そこをうかがっていた源四郎は、ふっと、破顔した。
「黒兵衛か——」
呼びかけると、応えて、
こつん、こつん、こつん……
三つ叩かれた。
「お手前様の予感があたったようです」

源四郎は、主水に言った。
それから、天井裏にむかって、
「黒兵衛、その天井は破れぬ。ほかに、工夫をたのむ」
その応えは、二つ叩くことだった。
やがて、粗末な食事がはじまった時、源四郎は、冷えた汁を口にして、
「原殿。これに、忍者が用いる睡り薬が混じてあると存じます」
と、教えた。
「左様か——仮死状態にして、外へはこび出させておいて、たすける工夫でござるな」
主水は、微笑して、その汁を、あまさず飲んだ。
源四郎は、その様子を眺めて、なぜか、ふと不吉な思いを持った。

隅田河原

空は、晴れわたって、遠かった。
風もなく、陽ざしは、もう春が来たか、と思わせるほど、あたたかかった。
中空をゆるやかに舞う都鳥の白い影を映して、隅田川の満々たる広い流れは、のどかに、美しく、澄みきっていた。
とある堀から、ゆっくりと、一艘の舟が漕ぎ出されたが、その単調な艪音もまた、こののどか

な景色に、ふさわしいひびきを添えた。

「あっあっ……あァあ……」

いかにも、ねむそうなあくびをもらしたのは、舟の中へながながと仰臥した客であった。

船頭が、ときどき、ふしぎなものでも見るように、ちらっと目をくれているほど、典雅な美貌の持主であった。

いでたちも、華やかな朱色の武者羽織をつけ、浅黄の小袖を着流していたが、後頭で組んだ両手の袖口からは、紅絹（もみ）がこぼれて、これは色子若衆の好みで、肌の白さに鮮やかにはえて、なまめかしいのであった。

「船頭――」

「へい」

「江戸というところは、いたるところ埃だらけで、馬や牛の糞だらけと思うて居ったが、こんな眺めの佳いところもあったのだな」

「左様で……、もうすこしのぼりますと、もっと景色もよろしくなりましょう」

ギイ……

ギイ……

と、艪を軋らせて、船頭は、ゆっくりと、仰臥した者を左右にゆすって、漕いで行く――。

下総側の岸辺は、深い木立がつらなり、樹間に、大名の下屋敷の高塀が、白く浮き出ていた。

「旦那様」

船頭が、呼んだ。

「なんだ？」

「申しわけございませぬが、御座船がのぼって参りましたので、しばらく、あそこの瀞（とろ）でお待ち下さいましょう」

「御座船？」

美貌の客は、むっくり起きあがった。

成程、下流から、拾梃立ての船が、舳先（みよし）に、真紅の葵の紋の旗を立てて、ちょろ船を三艘あまりしたがえて、のぼって来ていた。

「将軍家か――」

「いえ。春日局様でございましょう。今日は朔日でございますから、毎月、浅草寺へ御代参なされて居ります」

「ふん、春日局か。……かまわん、船頭、さきに行こうではないか」

「旦那様、お咎めを蒙っては、ばからしゅうございます」

船頭は、かぶりをふった。

舟は、老樹の根が、洗われている濃みどりの瀞（とろ）へ、しのびやかに、すべり入った。

御座船が、その前方に来た時、艫（とも）に、御殿女中が、十人あまり花が咲いたように、華やかな姿をあらわした。

それだけの挙措によって、一人の上臈を交えていることが、あきらかであった。

――あの老女が、春日局か。

と、こちらの舟の客は、見やった。
一人の女中が、すすっと艫の端に出ると、ずっと、空を仰いでいたが、
と――。
「えいっ！」
かん高い一声を発して、右の振袖を、ぱっとひるがえした。
手からはなれたのは、手裏剣であった。
きらっと、陽光を撥ねて、宙を縫ったが、頭上にひくく舞う都鳥の群は、なんの変化もしめさなかった。
悠々として、この明るい陽光の満ちた空間を舞うのを愉しんでいる――。
じぶんたちを狙う者があると気づきながら、それが絶対に当らぬと、さげすんでしまっているようであった。
かわって、もう一人が、その位置に立つと、懸声もろとも、一投したが、これも、むだであった。
御座船は、艪の動きを停めていた。
小憎いことに、鳥たちはその上を一向に去ろうとしないのである。
さらに、三番目の女中は狙いをつけて、かなりの正確さではあったが、鳥たちにその飛翔の弧線を乱させることすらも、叶わなかった。
「憎や！」
女中の一人の腹立たしげな叫びが、ここへもきこえた。

「観世音詣での途中に、鳥撃ちの趣向か」
美貌の客は、皮肉なつぶやきをもらして、やおら、立ちあがった。
「船頭――」
「へい」
「春日局のあたまへ、一羽おとしてみせようか」
「…………」
船頭は、おどろいて、客の顔を見まもった。
白い優しい顔には、昂然たる自信の色が湛えられていた。
無造作に、懐中から、笄(こうがい)形の手裏剣を三本とり出したのは、この客が、すでに、この術に長(た)けていて、常に、投擲の用意をしている証拠であった。
この舟上から、鳥たちの空間まで、およそ十間の距離があった。
客は、手裏剣を右手に一本、左手に二本、持って、すずやかなまなざしを仰がせた。
その双眸が、ふっと細められた。
瞬間――。
右手をおどらせて、第一の手裏剣をはなった。
それが、一条の閃光となって、飛んで、鳥の群に達しないうちに、もう、左手から右手へ移された第二の手裏剣が、宙を截(き)っていた。つづいて、第三も――。
いわば、三本の手裏剣はまっすぐに引かれた軌道に乗って走るがごとく、一列となって、翔け

あがった。

奇妙にも――。

一羽が撃たれて、落ちたその跡へ、二羽めが吸いよせられるように来て、第二の手裏剣を白い腹に受け、さらに、三羽めが、撃たれることを望むがごとく、そこへ来たのであった。

但し、落下の場所は、それぞれ、ちがっていた。

一羽は、舷（ふなべり）をかすめて、水中へ落ち、一羽は、葵の旗にあたって、その下へころげ、さいごの一羽が、春日局のまん前へ、横たわった。

この一瞬の、あざやかな手練の迅撃ちは、春日局をはじめ、女中たちを、茫然たらしめた。

美貌の客は、視線が一斉にこちらへ向けられるや、

――見たか！

とばかり、誇らかな微笑をうかべた。

その華やかな美しい姿は、女中たちの息をのませるに充分であった。

春日局が、かたわらの女中にささやき、その女中が、ちょろ船の警衛の御小納戸衆に、下知した。

ちょろ船は、いそいで、瀞（とろ）へむかって、漕ぎすすめられて来た。

「春日局様の命によって問う。姓名は？」

「宮本伊織」

客は、高らかに、御座船にもきこえるように、こたえた。

女中たちのあいだに、動揺がおこった。

宮本伊織という剣名は、すでに、大奥へもひびいていた。

「沙汰あるまで、そこに、ひかえられい」

ちょろ船は、ひきかえして行った。

伊織は、ふっと、冷やかな表情になると、

「船頭、都鳥は、食えぬか？」

「へ、へい。……臭うございますので――」

船頭は、身も心もちぢめながら、こたえた。

「ふふふふ。煮ても焼いても食えぬ婆さんに、臭うて食えぬ鳥を供したわけか」

ちょろ船が、再び、近寄って来た。

「春日局様が、会うてみたいと仰せられて居る。こちらの船へ移られい」

伊織は、鼻でわらった。

「お断り申す」

「なんといわれる！」

御小納戸（おこなんど）衆は、気色ばんだ。

「春日局様のお召しでござるぞ！」

「お召し？……はゝゝゝ」

伊織は、白いのどを見せて、高笑った。

「無礼な！」

「なにが、無礼！　この宮本伊織は、徳川家には無縁の牢人者。将軍家の御乳人などに、お召しにあずかったりしたくないために、こうして山河をねぐらとしてくらして居り申す。鳥を撃ち落したのは、禄に飢えたあまりのしわざにあらず。大奥につかえる者どもが、万が一の場合、あの未熟さで、何条もって、将軍家のおん身を守護できようぞ。座輿とは申せ、衆人の観るところで、嘲笑をまねく振舞いなど、厳につつしむべき、と思うて、これをいましめただけのこと。それがしが、もし、天下をくつがえさんとする曲者ならば、あの未熟な女中どもの住む大奥こそ、将軍家の御首(みしるし)を頂戴すべき絶好の場所、と思いなすであろう。治にいて乱を忘れざるの心が、泰平に狎れた大奥からすでにおきすてられたのを、無縁ながらも、兵法者の一人として、あわれんだにすぎぬ。……春日局に伝えられい。それがしの腕前ごときに舌をまかれるようで、大奥の取締りなど、どうしてなし得ようぞ、と」

凛々と張る高声に、眼前の者はもとより、御座船上の人々も、ひとしく、息をのんだ。

かりのたとえにもせよ、将軍家の首を刎ねる、と高言してはばからぬ傲慢さは、凄じいかぎりであった。

なぜか、春日局は、これを憤らず、また、従う者たちに咎めさせなかった。

御座船は、ふたたび、十余梃の艪をうごかして、ゆるやかに、さかのぼって行った。

「旦那様――」

船頭は、なお動悸の去らぬ怯え顔で、ごろりと仰臥した伊織を呼んだ。

「よ、よろしいのでございますか？」

「なにがだ？」

「あの、御座船のあとに、し、したがって参っても……」

「おれは、浅草寺に詣でるために、この舟をやとった」

「し、しかし、春日局様御一行がおまいりなさいますと、これは、どうしても、陸へ上ってから……何事も無く済めば、よろしゅうございますが――」

「お前は、船頭だ。舟を漕(こ)げばよい」

伊織は、冷やかに言いすてた。

宮本伊織が、手裏剣術を会得していたことは、その養父の武蔵の事蹟を見れば、これを異とするには足りない。

伊織は、後年、武蔵が逝って十年目に、「小倉の碑文」を立石した。この碑文中に、左の一条が読める。

あるいは真剣を飛ばし、あるいは木戟（木刀）を投じ、逃げる者走る者、逃避する能わず、その勢い恰も強弩（石弓）を発するが如く百発百中……養由の術も斯く以上とは思われず……云々。

養由とは、支那の伝説的武勇伝中の人物で、弓矢を持って技は神に入り、ひとたび、彼の狙いを受けたがさいご、嘗てこれを遁れ得た者はなかったと、「春秋左氏伝」中の成公十六年晋楚鄢陵の戦のくだりに、見えている。

武蔵が、どうした経緯によって、手裏剣術を修練し、会得したか、つまびらかではない。

「丹治峰均筆記」に――

武蔵。幼年より父無二が兵法を見こなし、常に誹謗す。無二、子たりといえども、そのことによって、心に叶わず。某日、無二、楊子を手ずから削るに、武蔵一間へだてていたり。無二、その小刀をもって、手裏剣に、武蔵を撃つ。武蔵、おもてをそむければ、小刀は、後の柱に立ちぬ。無二、はなはだ憤りて、平日わが兵法を誹るは不都合なりとて、更に手裏剣をうたんとせしに、武蔵は、また面をそむけて、かわしぬ。されど、ついに父の怒りにふれて、家を出て播州にいたり、母方の叔父某の、僧となれる庵に行きぬ。時に九歳なり。

父無二斎は、もとよりわが子を殺そうとして、手裏剣を撃ったのではなかったろう。威(おど)しのためであったに相違ない。

これは、武蔵に、手裏剣術というものに対して、目ざめさせることになった、と思われる。

後年、武蔵は、宍戸梅軒とたたかった時、この手裏剣術を役立てている。

その時、まだ武蔵は、修業時代であり、鎖鎌(くさりがま)という異様な武器に、生れてはじめて出くわしたのであった。

梅軒は、壮齢で、その武器を持てば天下無敵の自負を、長軀に満たしていた。

たしかに、すでに、その武器によって、十余人の強敵を殪(たお)していたことだし、殪すたびに、新たな工夫を加えていた。

左手に長大な陣鎌をふりかざし、その柄の末端につけた長い鉄鎖の先の分銅を、右手で、唸りをたてて、宙に截ってまわしつつ、じりじりと迫って来るさまは、凄じいものであった。

武蔵は、むしろ寸のつまった刀を青眼にとっていた。

しかし――。

梅軒の鎖鎌の精神をつたえききながら、これを避けて通らなかった武蔵は、意中に、ひとつの成算があったのである。

――手裏剣によって、これを破ってみせる！

その確信であった。

投擲するに適当な寸法と形の短刀を、右手で抜くに便利なように、常に、左前半に帯びていたのである。

したがって、梅軒と対峙するや、その構えは、かけひきを含んでいた。左手に太刀を持ち、それを一直線に延ばしてみせたのである。当然、左半身の体形になり、右手は、手裏剣を撃つべく、短刀の柄にあてられていた。

後年に伝えられている、その際の武蔵の構えは、

「刀を左手に持ち、かるい右脇構えとし、切尖を天に指して左半身、いかにも刀を鎖で巻かれまいとするがごとき要心ぶかい態を装いつつ、右手を短刀の柄に添えた」

とあるが、この陰の形は、槍のごとく突いて来る攻撃に対する備えであるから、あやまりと見るべきであろう。

太刀を一直線にさし延べて、これを鎖で巻かせておいて、小刀を抜きざま、ふみ込んで、斬り下す構えをとったと考えられる。

梅軒の方は、武蔵のその太刀か、または左手を巻きからめるとみせて、実は、まっ向眉間を狙って分銅をまわしつつ、肉薄してきた。

梅軒が、詰めた間合は、完全なる勝利を信じて、びゅっと振り込んだ分銅が、凄じい唸りを生じて武蔵の顔面に飛んだのと、武蔵が右手の短刀を、梅軒の胸に放ったのと——全く同時であった。

武蔵がそらした顔面を、六角形に削った分銅が、紙一重で唸り過ぎた刹那、梅軒は、

「おおっ！」

と、ひくい呻きを発した。

短刀は、その胸いたを、ふかぶかと刺し貫いていた。

次の瞬間——。

武蔵は、手裏剣を撃った右手に、太刀を移すやいなや、大きくふみ込んで、

「見たかっ！」

と、一喝もろとも、大上段から斬り下していた。

梅軒のからだは、血煙りあげて、まっ二つになった。

武蔵は、二刀流を編んだと伝えられているが、その多くの試合においては、この手裏剣術によって、勝利を収めているのであった。

伊織が、養父武蔵から、この手裏剣の秘術をさずけられたのは、当然である。

伊織が、小倉の城主小笠原右近太夫忠真に仕えたのも、手裏剣による縁といえた。

忠真は、手裏剣の名手だったのである。大阪陣の際忠真は、当時、信州深志（現在の松本）の城主たりし父信濃守秀政、兄忠脩とともに、出陣し、父兄ともに討死したが、自身は、かねて手

練の手裏剣術で、危機を脱した、という。したがって、平和になってからも、手裏剣術への執心はふかく、筏型もの剣を工夫しわざわざ、備前まで、従臣を遣して、長船祐定に、これを鍛えさせて、常に修練をおこたらなかった。

忠真が、宮本武蔵を招いたのも、かねて、その手裏剣術の秀れていることをきいたからであった。

但し——。

手裏剣術は、卑怯の飛道具として、兵法者たちから忌みきらわれる傾向のあった当時のこととて、武蔵は、「兵法三十五ヶ条」「五輪書」には、それについて、ふれてはいない。

ただ、養子伊織に、さずけることによって、その術を後世にのこそうとしたのである。

ところで——。

柳生流においては、すでに、手裏剣に対する工夫がなされていた。

いわゆる無構えの構えである。すなわち、柳生流秘伝「活人剣の巻」の十字手裏剣神妙剣が、それである。手裏剣が飛んで来る先に、その高低を察知して、十字にそれを切って落す術であった。

一説によれば——。

若き日の但馬守が、柳生庄において、武蔵と立合って、その手裏剣に、三度が三度とも破れて、ふかく心に刻んで、工夫に工夫を重ねた挙句、編んだのが、十字手裏剣の秘奥であるといわれている。

いずれにせよ。

伊織が、出府して来た目的のひとつに、但馬守の十字手裏剣を、養父にかわって、破ることをかぞえられる。もし、吹上御苑において、上覧試合が催されるのであれば、伊織は、但馬守にむかって、それを挑む腹であった。

そのために、わざと、大奥の噂になるように、春日局に、その秘術ぶりを見せておいたのである。

したがって、伊織は、憎しみを買うように、わざと傲慢にかまえてみせたのであったが、これをとがめずに去った春日局の意中は、ちょっと読みとりかねた。

——ふん、もしかすれば、春日局め、わしの肚裡をはかったかも知れぬ。

それならそれでよいのだ。

この典雅な美貌の持主は、但馬守に挑む目的のほかに、大きな野望を抱いていたのである。

「へい、着きましたでございます。旦那様」

船頭に呼ばれて、ずうっと、まぶたをふさいでいた伊織は、やおら、身を起した。

「あれか、浅草寺は——?」

河原の彼方に、ま新しい観音堂の茅葺き(かやぶき)の屋根が望まれた。

「去年、焼け落ちましてな、あらたに建立されたのでございます」

「ふん——」

河原からまっすぐに延びている往還上に、春日局一行の姿が見えないのに、ちょっと不審をおぼえつつ、伊織は、舟から降りた。

京の寺院の、宏壮な構えを知る伊織にとって、江戸が誇る名所のひとつである眺めが、あまりにも貧しいのに、なかばあきれ、なかばさげすんだ。

——漁師どもが、川の中からひろいあげた観音像だから、この程度がふさわしいのか。

参詣する善男善女の、みすぼらしい風態も、伊織の心を、いよいよ傲慢にするに役立つだけであった。

——天下を取っても、文化はつくれぬ。

ふっと——。

おのが手練の手裏剣で、将軍家光の胸を貫いたならば、徳川家は、たちまち、音たてて崩れ落ち、ふたたび、天下の覇権(はけん)は、京を中心にして争われるのではないか——そんな想像が、脳裡(のうり)をかすめていた。

この自分の腕ひとつが、天下をくつがえす!

なんという壮烈な、誇らしい想像であろうか。

原始のままの喬木にかこまれた境内に入って行きながら、伊織は、ひとり、微笑した。

あたたかい日であったので、参詣人の数は多かった。

御堂の前に立つと、再建されながらも、その小規模なたたずまいが、伊織には、幕府のケチくささと受けとられた。

両手を合せる興味もなく、伊織は、御堂の右に建った小宇へ、寄ってみた。

その中には、古絵馬が、かざってあった。

一文が、その下にしめされていた。

唐の世祖の時、楊子華という人がいた。かつて、壁上に馬を画いた。その馬が夜いなないて水草を索めるがごとくであった。天下は号けて楊子華を画聖と称した。また、聖宮門の両廡の下にえがくところの人馬は、みな流汗の迹があった。慶暦中に、一夕、人馬の声がした。明るくなって観るに、汗が流れていた。しかも、今にいたってきえないのである。この古絵馬も、はじめかかげた時には、夜毎に額を抜け出て、境内の草を喰み、田畑を荒したので、曳縄を書添えて、出ないようにしたのである。

そんなことが、記してあった。

——ふん、ばかばかしい！

伊織は、嗤って、つと、はなれようとした。

その時——。

自分にそそがれる険しい視線を、背に意識した。

ためらわず、かえり見ると、数間さきに、異形のいでたちの旗本奴が、七八名立っていた。

伊織が見かえした双眸は、あまりにすずやかで、これは、対手がたを、とまどわせたくらいであった。

伊織が、五六歩遠ざかってから、一人が、

「あいや——」

と、大声をかけた。

伊織は、そ知らぬ顔で、歩いた。

「待たっしゃい！」

旗本奴たちは、だだっと駆け出して来て、伊織をとりまいた。

伊織は、歩みを停めなかった。

正面の男が、呶号した。

「待てと申して居るのだ」

伊織は、ふふふと薄く笑っただけであった。

「なにがおかしいぞ！　おのれ、われわれが朱面組と知って、わらうかっ！」

「……………」

「われわれの朋輩四人を斬った牢人者は、貴様であろうがっ！」

「左様——」

こともなげに、伊織は、こたえておいて、なお、悠々と足をはこんだ。

「よしっ！　ここで出会うたが、観世音の御利益だ。勝負せい！」

「そのつもりで、場所を河原にするために歩いて居る」

「なにっ——ぬけぬけと？」

「さわぐな。善男善女に見物させてよい光景ではあるまい。まして、斬られるおぬしたちにとっては、だ」

「ほざいたなっ！」

朱面組の面々は、いずれも、凄じい形相となった。

どこ吹く風か、といった伊織の爽やかな顔色と、あまりにきわだった対蹠であった。堤に出る

と、伊織は、すぐに降りて行かずに、下流へむかって、進んだ。
「降りぬかっ！」
と、喚かれたが、無視した。
森に入り、そこを抜け出ると、黙って、堤を下って行った。
もうそのあたりには、人影はなく、青い流れと白い石ころが、ひろびろと拡っていた。
足場をえらんで立つと、伊織は、はじめて、対手がたの顔を、ひとつひとつ眺めやった。

このおり――。
堤を、下流から、ひろって来るふたつの人影があった。
前に立っているのは、市女笠をかぶった若い女性であった。うしろにしたがっているのは、空斎であった。
「糸耶殿――」
呼んでから、のどに痰がからんだか、ぐぐっと鳴らして、
「わしのカンでは、春日局は、浅草寺へは詣でて居るまい」
「…………」
「浅草寺代参は、口実に相違ない。どこか、ほかの場所で、気散じをいたして居ると考えられる」
「…………」
沈黙をまもる市女笠の下の顔は、冷たくひきしまっていた。

春日局が、御座船で、浅草寺へ参詣に行ったときいて、糸耶は、再びこれを狙い撃つべく、決意して隠れ家を出て来たのであった。
空斎が、ひょこひょこついて来たのは、空斎の勝手であった。
「のう、糸耶殿。討つな、とは申して居らぬ。討つには、討つように、手段をえらばねばなるまい。……お前様は、自身の烈しい気性に、負けて居る」
「…………」
「わしが、絶対に討ち損じない手段を考えようと申して居るのは、嘘ではない。わしには、策がある！」
この陰鬱きわまる人物が、めずらしく、熱のこもった語気で、そう言って、はれまぶたの垂れた細目を、きらと光らせて、糸耶の後姿へ、なめるようにあてているのであった。
空斎は、実は、こう言い添えたいのだ。
「お前様を、たった一夜でよいから、抱かせてくれるなら――」
この生命をなげ出して、春日局を見事に討たせてみせる、とこれまで、いくど、胸のうちで、呟いたことか。
それを、口に出して言えず、また、挙措にもしめし得ないところに、惚れた者の弱さがあった。
左様――。
浮世を横目で眺めて、冷笑しているかに見えるこの男にも、まだ、若い美しい女に心を奪われる人間くささがのこっていたのである。

空斎は、なんと言いかけようと、返辞すらかえさぬ糸耶(いとや)について行かねばならぬおのれの惨めたらしさに、一瞬、腹が立った。

——ねむり薬をくらわせて、犯してやろうか、と思いまどったことがあったが、いっそ、やってのければよかった！

その悔いが来た。

と——突然、糸耶が、立ちどまった。

「お——あれは！」

糸耶の視線の方角を目で追った空斎は、思わず、声をあげた。

河原上に——。

白刃を抜きはなった旗本奴に包囲されて、まだ無手で、すらりと立っている華やかな装いの若者は、空斎が、その差料三条宗近の剣相を短命と断定してやった宮本伊織に、まぎれもない。

——ふむ！　朱面組が、あの夜斬られた、朋輩の讐を復(かえ)そうというのか。身のほど知らずに、蟷螂どもが手をふりかざして、毒蛇を招き居るわい。

空斎は、せせら笑った。

まさしく——そのおろかさが、次の瞬間、そこに証明された。

横あいから、一人が、だっと斬りつけるのをきっかけにして、伊織の姿が、おそろしい迅さで、白刃の林の中を跳躍した。

遠目に、これは、真紅の飛沫を宙に彩って、美しい眺めとさえいえた。

伊織の翻転がおわった時、七つの屍骸が、石ころに横たわっていた。

その中央に佇んだ伊織は、屍骸の一箇が、息をふきかえして、よろよろと立ちあがるのを待って、

「来るか！」

と、薄ら笑った。

「く、く、くそっ！」

血まみれの目に、口に、のこりの生命の焔を燃えあがらせ、太刀をふりかぶって、上半身を反らせた。

伊織は、一歩出ると、

「死におくれるなっ！」

一喝しざま、きえーっと斬り下した。

右腕を両断して、頸根から胸へ——ものの見事な袈裟がけの一颯であった。

旗本奴は、朽木のように倒れた。

伊織は、額にかかった返り血を、左の手の甲でぬぐうと、しずかな足どりで、流れの際へ近よって、刀身を洗い、次いで、手と顔を洗った。

糸耶は、そのおちつきはらった動作を、魅せられたように、見まもった。

空斎は、その横顔をぬすみ見て、たちまち、暗い嫉妬の色を顔にかすめた。

「糸耶殿。参ろう。あの若者は、わしは一度出会うて居る。神子上(みこがみ)源四郎と同様、人相が凶色に翳(かげ)って居る。かかわりあってはならぬ」

と、先をうながした。
しかし、糸耶(いとや)は、うごかなかった。
伊織が、堤にむかって、近づいて来るや、空斎は、苛立った。
「糸耶殿！」
思わず、声を荒げた。
その声で、伊織が、目をあげた。

——はてな？

伊織は、ちょっと小首をかしげて、堤の上の若い女性の笠陰の白い顔を、じっと見やった。
つぎに、空斎を見やってから、「ふん——」と、口もとをほころばした。
足をはやめて、堤をのぼって来た伊織が、視線を糸耶に据えて、言ったのは、
「ちがったか！　美音(みね)という娘か、と見まちがえたか」
その言葉だった。
伊織のあまりな美貌ぶりに見とれていた糸耶は、はっとわれにかえって、
「美音を、ご存じなのですか？」
と、訊ねかえした。
「ははは……妹御か。道理で、よく似た」
「妹に、どこで、お会いなされましたか？」
「小田原町の、うす穢い旅籠で——」

「旅籠で——？　妹は、もう市中にはいないと存じて居りましたが……」
「十二の少年(こども)と一緒であった。その少年が、朱面組と称する旗本奴をからかったおかげで、わしが代って喧嘩をすることになった。いまの光景も、そのつづきと思ってもらってよい」
そう言って、伊織は、ははは、と明るい笑い声をたてた。
それから空斎へ視線を移して、
「その夜、この御仁が、わたしについて来て、差料の剣相を観てくれた。短命の大凶と申したな」
「…………」
空斎は、何か言おうとして、口をもぐもぐとうごかしたが、声を出さなかった。
「そうだ、おぬしにきかねばならん。わしが出会うて、雌雄を決しなければならぬ敵が、村正を佩びる神子上(みこがみ)源四郎と、おぬしは断定したな」
これをきくや、糸耶の顔色が、さっと変った。
「わしは、小野道場におもむいたが、神子上源四郎は、すでに破門になって居った。……おぬし、その居処を知って居ろう、教えてもらいたい。おぬしの予言にしたがって、勝負するぞ」
「それがしは……」
空斎は、あきらかな、狼狽の様子で、
「神子上の居処など、存じ申さぬ。ご自身で、尋ね当られるがよかろう」
と、言った。
「空斎殿！」
糸耶が、空斎をにらんだ。

「貴方は、なんの理由で、神子上（みこがみ）殿とこのおひととをたたかわせようというのです？」
「…………」
「気まぐれなら……ゆるせませぬ！」
糸耶（いとや）は、鋭くきめつけた。
空斎は、居直った。
「気まぐれでは、ござらぬ！　神子上源四郎の差料村正と、この御武家の差料三条宗近は、いずれ、近い日に出会うて、互いに、血をもとめて、きりむすぶ宿運と、剣相が教えたまでのこと――」
「ちがいます！」
糸耶は、叫んだ。
「貴方は、神子上殿を憎んでいた。それで、この方の腕前を見て、神子上殿とたたかわせ、仆そうと企てた。そうにちがいない！」
「わしが、どうして、神子上を憎もうぞ。なんのいわれもない」
抗弁しつつも、糸耶の、娘にあるまじき烈しい気魄に押されて、じりっと退った。
すると――。
伊織が、冷然として、言った。
「娘御――。斬ってかまわぬ男であれば、わしが、斬るぞ」
瞬間、本能のすばやさで、空斎は、ぱっと一間余を奔った。

「糸耶！　わしを敵にまわすと、後日、思い知らねばならぬぞ！」
にくにくしげに、嘯（うそぶ）いた。
うそぶきつつも、油断なく、伊織の態度をうかがっていた。
「斬るか？」
伊織が、かさねて、訊いた。
「いいえ――」
糸耶は、かぶりをふると、空斎に言いかけた。
「空斎殿、源四郎殿の差料が村正であることは、いつわりであろう？」
「いつわりではない！」
「貴方の嘘つきは、このわたしがよく知って居ります」
これをきくや、伊織が、威嚇の眼光を燃やして、
「おいぼれ！　たばかったか！　わしが、短命などと――許さんぞ！」
と、大きく一歩ふみ出した。
空斎は、夢中で、堤を走り出した。
みるみる小さくなるその姿を見送って、伊織は、
「はゝゝゝ」
と、おかしげに笑った。
「わたくしは、豊島刑部明重という者の長女糸耶と申します」
「わしは、宮本伊織」

糸耶(いとや)は、きいて、あらためて、その水際立った腕前の持主を、まじまじと見まもった。

——そうなのか。このひとが……。

さればこそ、と合点されたことだった。

「豊島明重と申されると、先年、殿中で、老中に刃傷におよんだ——あの烈士か？」

「はい」

伊織が知っていてくれたことが、糸耶にはうれしかった。

隠密行

「は、は、はっくしょいっ！」

木下闇の中で、大きなくしゃみが、静寂をやぶった。

月は、空にあり、森の外の往還は、白かった。うすい靄が、かかっていて、彼方の切支丹屋敷の宏壮なたたずまいが、おぼろに溶けていた。

時刻は、もう三更をまわっていたろう。

「おそいな」

黒兵衛は、くしゃみのあとで、かるいあくびをすると、うしろにつないである馬へ、

「ほら——」

と、何か食物を、さし出した。

馬は、ぬうっと首を延して来て、それをくわえた。

「妙なものだ、人間というやつは……」

黒兵衛は、自分につぶやいた。常に孤独で生きて来たこの男は、自分と問答することに馴れていた。

「べつに、なんの仔細があったわけでもないのに、わしは、あのお方を好きになった。左様さ、女に惚れる以上に、これは、ぞっこん参っている、ということになるのだ。自分で自分の、この料見が、どうも納得できないのだから、おかしな話だ。……好きなんだなあ。それでいいのだな。わしのような、大通りをさけて、裏道をあるきたがるように生れついた者は、こういうあんばいに、理屈ぬきに好きな対手をつくって、家来になってみるのが、いいのだな。頭が働けば、尾も動く——それさ。おっ！」

黒兵衛は、さっと、立ちあがった。

埋門(うずみもん)が開いたのである。

二頭の駄馬が一人の非人に曳かれて、出て来た。

黒兵衛は、馬の背に、それぞれ、大きな木箱が乗せてあるのをみとめて、にやりとした。

「首尾は上々——」

往還を、ぽくぽくと、のろい足どりで行き過ぎるのを、見送っておいて、黒兵衛は、自分の馬にまたがると、森の中を縫って、駆けて行った。

黒兵衛が、湯島聖堂となりの馬場にぬけ出て、二頭の駄馬を迎えるまでには、なお四半刻を必要とした。

「ご苦労――」
　黒兵衛は、前に立つと、非人へ、小粒銀をつかませた。
「大丈夫ですかい、親分。あとで、おれに、迷惑は、かからねえんでしょうね？　あとで、ばれたら、首がとびやすからね」
「この芸当は、わしの才覚ではないのさ。公儀の、花も実もあるおはからいと思うがいいわさ。……さ、おろしてもらおうか」
　黒兵衛は、いきいきした声音で、うながした。
　木箱は、そろそろとおろされた。
　黒兵衛、すばやく縄を切って、蓋を開けると、非人に命じた。
「おい、手伝ってくれ」
　ぐったりとなった死骸をかかえ出して、地べたへ横たえると、黒兵衛は、その胸へ、耳をおしつけて、しばらく、じっときいていたが、
「よし――」
　と、大きくうなずいた。
「息がありますかい？」
　非人は、月光に照らされた寝顔をのぞき込んだ。
　神子上（みこがみ）源四郎のものにまぎれもなかった。
　一瞥しただけでは、完全な死人であった。

　次に――。
　もうひとつの木箱の蓋を開いて、非人とともに、手をかけたとたん、
「おや?!」
　黒兵衛は、はっとなった。
　冷たい肌膚が、源四郎のものとはちがった触感を、手にあたえたのである。
　これは、黒兵衛の、ゆたかな、経験がものをいったことである。
「おかしいぞ！」
　急いで、ひきあげ、源四郎のかたわらへ仰臥させた黒兵衛は、樹脂を塗ったこよりに火を点して、その白蠟の顔をしらべた。
「いかんわい！　これは、蘇らぬ」
　黒兵衛は、いたましげに、かぶりをふった。
「齢もとりすぎて居ったし、牢屋ぐらしが永かった。あの激しい薬に、体力が負けたらしい」
　黒兵衛は、当惑した。
　――源四郎様だけに、仮死して頂くのであったな。
　黒兵衛にとっては、べつに、蘇生してくれなくてもかまわぬ人物であったが、どうやら、源四郎が、救い出すと約束したらしいので、この失敗は、失敗したではすまされない気がした。
　――よわったわい！
「親分……」
　非人が、おずおずと、声をかけた。

「おれは、もう、これで、去なしてもろうても、ええかな？」
「いや、ちょっと、待て。屍を、ここにすてておくわけにはいかん」
「沼にまで、持って行かなけりゃならんかね？」
「無縁仏にする御仁ではあるまい。御主人が目をさまされてからの相談じゃ」
「それは……それを待っとったら、夜が明けてしまうが——」
「やむを得んわい」
黒兵衛は、平然として、つるりと顔をひとなでした。
源四郎が、まぶたを開いたのは、それから一刻あまり経ってからであった。
「お——お気づきなされたぞ！」
やすみなく、その四肢をもみつづけていた黒兵衛は、歓喜の声をあげた。
なおしばらく、源四郎は、星の消えた夜明け前の空を仰いで、痴呆のように——というよりも、まったくの痴呆状態でいた。
やがて——。
意識が、ひとつの糸口を見つけて、たぐって行くように、思考力をとりもどしはじめると、それは急速に、源四郎を本来のおのれに還させた。
「黒兵衛……」
視線を移して、黒兵衛の顔を見た。
「うまく参りましたな、御主人様」

皓い歯をむいて、黒兵衛は、笑ってみせた。
源四郎は、むっくりと、身を起した。黒兵衛があっけにとられたくらいの軽やかさで——。
——これは、以前、しびれ薬に耐えるように、その修業をされたことがあるな。
そう察しられた。
源四郎は、となりに仰臥した屍骸を、見やった。
「残念ながら、このお方は、もう……」
黒兵衛が、告げると、源四郎は、うなずいて、
「予感がした。お気の毒であった。……しかし、当人も、すでに、覚悟はできておられたようであった」
「左様でございますか。……このなきがらは、いかがいたしましょうかな？　馬を曳く者は、あそこに待たせておりますが——」
「髪と爪だけを持って行こう。あとは、お前の処置にまかせよう」
「かしこまりました」
黒兵衛は、非人を呼び寄せて、髪と爪を剪りとった屍骸を、再び木箱に納めると、葬るべき場所を指示した。
源四郎は、大小を受けとってから、黒兵衛が乗って来た馬に、またがった。
「黒兵衛、明後日、正午、吉原の角町にある京花屋という店で会おう」
「ほう——」
黒兵衛は、びっくりして、

「遊女をお買いなされますか？」
「うむ。京花屋に、紅葉太夫という絶世の美女がいるそうな。それを買う」
源四郎は、言いのこすやさっと、馬首を向けかえて馬場を駆け出て行った。
黒兵衛は、ちょっと、小首をかしげて、見送っていたが、
「いいわさ。なにかのお考えがあるのじゃろうて」
と、つぶやいた。

——おれは、生きている！
馬をとばしながら、源四郎は、自分に言っていた。
空には、すこし明るい色がさしていたが、往還はまだ暗かった。
深沈と寝しずまった夜明け前の世界を、ただ一騎、冷たい風と高い蹄の音を起して、颯爽と奔り過ぎて行くことに、無上の快感があった。
疲労感は、五体のどこにものこってはいなかった。
文字通り、蘇生のよろこびが、心身に満ちていた。
あの地下牢の中で、たくわえていた鋭気が、いまこそ、ものを言う思いであった。
源四郎は、察知していた。
背後から、馬脚の速力に合せる余裕のある迅さで、追跡して来ている者があることを——。
これは、馬上の人となった瞬間に、すでに、彼方にひそんでいる人影をみとめていたことである。

徒士で、馬を追って来ることができるのは、隠密以外の何者でもない。
——追って来い！
薄ら笑いだけの余裕がある。
自分が屍骸になって、切支丹屋敷から、運び出される時から、あとを尾けて来て、あの馬場で、遠くから辛抱づよく様子を見まもっていた隠密である。
柳生但馬守の指令を受けていると、断定してよかった。
——流石は、但馬守だ！　と、思う。
切支丹屋敷の連中は、自分と原主水が、本当に死んでしまった、と信じたに相違ない。但馬守だけが、それを仮死と看破して、しかも、そ知らぬふりをして、輩下に、見とどけるように命じたのだ。
源四郎は、主水との問答を、天井裏から、何者かによって、ぬすみぎきされた直感を持っていた。その時から、仮死によって脱出できても、身の近くには、絶えず、鋭い目があることになろう、と覚悟したのである。
しかし、これは、源四郎にとって、生甲斐となった、といえる。
おそるべき敵は、但馬守なのであった。
あのおり——。
もし、こちらが病軀でなかったならば、但馬守をやぶり得たはずであった。それは、但馬守も、みとめていないわけはない。
——但馬守は、おれが、主水からたのまれた五十万両の隠匿金を、横あいから奪おうと決意し

た。おれが、この孤剣で、それを防いでみせる！
　男子として、たたかい甲斐のある仕事であった。

——はてな？
追跡していた黒衣の男は、急に、立ちどまると、地に伏せて、耳をすました。
馬蹄の音が、うそのように、消えたのである。
町家通りを抜けて、左右が松林になった地点であった。
その彼方は、草原であった。
往還は、まっすぐに延びて居り、脇道はないのであった。
見失わぬ自信があったのである。
——どうしたというのだ？
えらばれた隠密は、狼狽した。
はね起きると、林の中へ、鋭く眼光を配りつつ、風のように奔って、草原へ出た。
いないのだ。煙のように、消えうせたといってよかった。
「くそ！」
ひくく、呻いた。
その時——。
突如として、後方から、地を蹴る蹄の音が起った。
——しまった！

隠密は、ほぞをかんで、身がまえた。
林の中から出現されてみて、はじめて、消えた理由がわかった。
立っている騎馬の影を、さがしもとめて奔ったのが不覚であった。
人馬もろとも、地上へ横臥して、こちらをやり過したのである。
たちまちに——。
飛び寄って来るや、源四郎は、鞍の上から、破顔して、
「神子上（みこがみ）源四郎、いまだ生命をながらえて在るのは、柳生殿のおかげかと、いささかの恩義を感じているともどって、伝えていただこう」
と、言った。
「…………」
隠密は、無言で、一歩退くと、左右いずれかに跳ぶ気配をしめした。
「追跡を止めぬ、というのか？」
「…………」
「やむを得ぬ！」
源四郎が、馬を躍らせるのと、対手が、右方へ跳ぶのが、同時だった。
次の瞬間、隠密は、一間余を跳んだにもかかわらず、眼前に躍って来た馬に、あっとなって、反射的に、腰の一刀を抜きはなったが、もうおそかった。
自分が右方へ跳ぶのを、どうして源四郎が看破したか——そのおどろきの中に、隠密は、おのが肩に、強烈な衝撃をあびて、のけぞった。

源四郎は、闇に弧線を描いた剣を、ぴしっと鞭にして、馬脚を迅めるや、みるみるうちに、草原を小さくなって行った。

朝の明かりが誘って来たように、濃い霧が流れて来てしばらくの間、野も樹木も道も、白一色につつまれてしまった。

鳥が二三羽、霧の外へむかって、あわただしく、はばたいて行ったほか、静寂はつづいた。

かつん……

かつん……

奇妙な物音が、往還のかなたからひびいて来た。

これは、一定の歩幅をもって、近づいて来て、林の梢が、霧の中からあらわれて来た時、その下に達していた。

夜明けの道を歩いて来たのは、一人の武士であったが、その一脚は、木だったのである。

小野道場の高足筆頭高垣弥九郎が、隻脚となりながら、常人とかわらぬ速力をとりもどすべく、毎朝三里を歩いている刻苦の姿であった。

弥九郎は、源四郎に、その一脚を、膝もとから切断されて、十日も経たぬうちに、まだ血の滲むなまなましい傷口へ、木をあてて、歩行の練習をはじめたのである。

――源四郎を討ち果すために！

その一念が、弥九郎をして、いかなる苦痛にも堪えさせていた。

いまでは、早飛脚にも劣らぬ疾走も可能となっていた。

――今日も、上天気だな。

空の高みへ目を送りつつ、林の中をくぐって行こうとして、ふと、どこかに、ひくい呻き声をきいた。

草を紅に染めて俯っ伏している黒衣の男を発見した弥九郎は、一瞥しただけで、

――忍びの者だな。

と、さとった。

抱き起してみて、その深手が、冴えた一刀によるものとみとめて、たすからぬと知り、耳もとに口をあてて、

「遺言あれば、きこう」

と、叫んでやった。

「……や、やぎゅうへ――」

「なに？　柳生！」

「……たのむ！」

「何を、だ？」

「…………」

「神子上(みこがみ)……げん、しろうは――よ、よしわらの、き、きょう花屋に、い、いると……」

弥九郎は、心中で、おそろしい叫び声をあげた。

源四郎め！　いたか！

「よし、わかったぞ。神子上源四郎は、吉原の京花屋にいると、柳生道場へ報せるのだな？」

隠密は、微かにうなずいて、がっくりと事切れた。

遊女祈願

江戸の遊里は――。

　家康が入城して間もなくの頃に、すでに、城下に遊女屋の建設があった。

　慶長のはじめには、麴町八丁目に十数軒、鎌倉河岸に同じく十余軒、それから大橋の内、柳町には二十軒あまりが散在していた、という。

　狭斜のことも、江戸繁栄の一助であるから、公儀も、これを公認した。

　北条家の牢人庄司甚左衛門という者がいた。

　慶長のはじめに、江戸が年を逐（お）うて繁昌するのをきいて、おのれも何か一事業を営もうと肚をきめて、駿州の旅宿業者たち二十数人をまねいた。

「お前たちが抱えている旅人洗足（すすぎ）の女どもを、江戸へつれて行って、遊女宿を開いたら、大当りに当ると思うが、どうだろう？」

　と相談しかけると、たちまちに、一決した。

　しかし、商売が商売だけに、もし城下に入ったら、お咎めがあろうとおそれて、荏原郡荒井宿の海辺の地所を借りうけて、営業をはじめた。

　おもての入口には、三尺幅の紺の長暖簾（のれん）をかけて、その両端に、鈴をつけておいた。

　客が来て、暖簾をくぐると、鈴が、チリリンと鳴る。それっと女たちが、迎えに走り出る。……

　これによって、鈴ヶ森と呼びならされるようになった。（これは、刑場の鈴ケ森とは別であった）

　家康は、放鷹を好んで、近郊にしばしば遊猟をこころみていたが、たまたま、品川に来て、その半日をすごしたついでに、鈴ヶ森の浜へ出て、休憩した。庄司甚左衛門は、この時こそ、とねらって、遊女を美しく装わせて、茶をはこばせた。

　家康は、それが遊女だと知らされると、笑って、

「江戸も、だんだんに、都ぶりになるの」

　と、言った。

　京では、公卿が、遊山に出て、よく傾城を招くからであった。

　甚左衛門は、家康が上機嫌であったときくや、すぐさま、府内の一箇処に、遊女町を取立てたい旨を願い出た。

　許可が下りたのは、一年ばかり後の、元和三年であった。

　葺屋町につづく荒地二町四方が給された。ここは、葭茅が生茂っていたので、葭原（よしわら）と名づけられたが、更に祝って吉原という名字に改めたのであった。

　東北より南へ町を割り、本町を中心として、京町、江戸町、伏見町、堺町、大阪町、角町、新町と区劃した。柳町、鎌倉河岸、麴町の女たちは、すべて、ここへ移された。（現在の日本橋の和泉町、高砂町、住吉町、難波町あたりにあたる）

　公儀の評定所から、甚左衛門へ渡された五ヵ条が、今日にのこっている。

一、傾城町の外、傾城商売いたすべからず。ならびに、傾城囲いの内に、何方より雇いに来候共、さきざきへ傾城を遣わし候こと向後一切停止たるべき事。

一、傾城買い候者は一日一夜より長逗留いたすまじき事。

一、傾城の衣類は、紺屋染めを用い、すべて金銀の摺箔など一切着せ申すまじき事。

一、傾城町は家作普譜など美麗にいたすべからず、町役などは江戸の町格式の通りに相勤め申すべき事。

一、武士町人ていの者に限らず出所たしかならざるもの徘徊候わば、住所吟味いたし不審に相見候わば奉行所に訴え出るべき事。

掟は、いかにも、このように厳重であったが、実際には、社会全般にわたって秩序のととのわぬ時代であったから、取締りは寛大であった。

評定所の式日には、太夫遊女が三人ずつ給仕に出ていた。士太夫は、まだ、遊女というものを賤しめていなかった。家康自身が、平気で、遊女のくんでさし出したお茶を喫する前例をのこしていたのだから――。

郭外へ出てはならぬ布令も、形式的なもので、町売りという言葉もあって、招かれれば、どこへでも赴いた。神社、仏閣への参詣を口実にしたという。

ただ、場所が、萱葭(かやあし)が、ぼうぼうとむらがったものさびしい湿地帯の中にえらばれているだけに、日が昏れるとともに、大門までの通い路が、物騒をきわめて、人影が絶えることになるために、その盛況も、昼のうちだけであった。

吉原へかよう者が、金子(きんす)を懐中に用意しているのは当然である。これを、飢えた牢人や無法者

たちが、ねらうことになるのであった。

遊郭が不便の僻地につくられて、市内散在の遊女が禁じられるとともに、あちらこちらに風呂屋ができて湯女(ゆな)を置いて、これを枕席に侍(はべ)らせるようになったのも吉原にとっては、痛手であった。

郭の遊興が、昼間とかぎられるのも、客にとって気が重かった。

客を招くために、郭うちで、女歌舞伎の興行をやったり、勧進舞いや獅子舞いなど、景気づけているのが、当時の状況であった。

今日も――。

大門を一歩入ると、騒々しいまでに、音曲がひびきわたっている。

しかし、もうそろそろ風が冷たい鋭い音をたてて、黄昏(たそがれ)をさそって来る時刻なので、ぞろぞろとぞめいて行く人々の足どりも、なんとなく落着かなくみえた。

揚屋をえらんで、登楼して行く者。駕籠(かご)をやとって、大門を出て行く者。それぞれに、おのが身のふりかたをきめるひとときが過ぎて通りに人影がまばらになった頃合――。

山岡頭巾をかぶり、派手な蝙蝠羽織をつけた長身の武士が、一軒の青楼の茜染めの暖簾をわけて、あらわれた。

宮本伊織であった。

宵空を仰いで、

「雨か――」

と、つぶやいて、歩き出そうとすると、暖簾うちから、ばたばたと跣で、追いかけて来た遊女は、乳房も脛もあらわな緋色の寝間着すがたであった。

「ぬしは……あたしが、湯に入っている間に――薄情な！」

肩で呼吸をはずませて、伊織の袖に、すがりついた。

じろりと、冷たい一瞥をくれて、伊織は、無言で、その手をふりはらった。

遊女は、ひるまず、

「おねがい！　もう一度、あがって――あと半刻だけでいいから、ね。ほんに、後生だから！」

と、必死に、たのんだ。

通りかかった嫖客たちは、頭巾のかげの伊織の美貌を、灯の中にみとめて、

――成程、これは、ひきとめられるのも、むりはない。

と、微笑したが、しかしそれは、すぐに、ひっこめなければならなかった。

急に、遊女が、胸をおさえて、海老のように背を折ると、その場へ、崩れ込んだからである。

すっと、はなれた伊織は見向きもせずに、悠々と足をはこび出していた。

つとめを忘れて、女心のいじらしい一途な様子をしめすのを、煩わしいとおぼえるのはいいとして、これを当て落しておいて立去る冷酷さは、嫖客たちを唖然たらしむるに充分だった。

「おいっ！」

見咎めて、行手を、大手をひろげてさえぎる大兵の壮者の出現は、これは、当然そうなる仕儀と、皆の目に映った。

「貴様、この吉原に遊んで色子面を鼻にかけた挙句、この不粋な退去ぶりは、なんだ！」

「要らぬお世話だ」

伊織は、薄ら笑った。

「おのれが――どうでも大門をくぐりたいのなら、まず、拙者の股をくぐって行け！」

大鬚髯を空ざまにひねりあげた荒武者体が、大鍔朱鞘の大刀を閂におしひろげて、ぱっと、針金入身の裾をひきまくって、大股にふんまえたさまは、遠くにある者の目をも、見はらせずにはおかなかった。

伊織は、ちょっと沈黙を置いてから、

「くぐれば、よろしいのか？」

「おう、くぐれいっ！」

「やむを得ぬ」

荒武者は、大きく胸を反らした。

伊織は、二歩ばかり退った。

立ちどまって、このなりゆきを見まもっていた人々は、

――案外な意気地なしよ。

と、伊織を、さげすんだ。

すっと、伊織は、身を沈めた。

次のせつな――。

鳥影が地上を掠め去るに似た迅さで、ツツツ……と滑走しざま、あっという間に、その股間を

くぐり抜ける光景に、見物の群は、唖然(あぜん)となった。

しかも――。

驚きは、それだけで、すまなかった。

伊織が、その背後一間あまりの地点で、すらりと立って、そのまま見かえりもせず、すたすたと四五歩行った時、それまで、仁王のようにその姿勢を固着させていた荒武者が、朽木のように、どうっと、前へ倒れた。

あっとなって、目を見はった人々は、みるみる、その股間から、おびただしい血汐が、地面を流れるのをみとめなければならなかった。

伊織は、くぐり抜けつつ、小刀を鞘走らせて、摺りあげに、腹から背まで、断ち斬っておいて、疾駆(しっく)を止めた時には、もう、腰に納めていたのである。

誰人の目にも、この迅業(はやわざ)は、とまらなかったのである。

いまは、遠ざかるその後姿が、怪しい通り魔とさえも、眺められた。

そのまま、ゆっくりと、大門を出る――。

郭をとりまく堀に架けられた橋を、渡りつつ、遊女から習った小唄を、ひくく口ずさんでいた。

　君が来ぬとて
　枕な投げそ
　投げそ枕に
　科(とが)もなや

無心にもどったそのあゆみが、ふと、停められたのは、むこうから、しずかに渡って来た一人の牢人者とすれちがった瞬間、神経にぴりりっとつたわるものを、感じたからであった。

これは、自分でも説明しようのない異常なまでに磨ぎすまされた感覚が、すれちがった者の持つ剣気にふれた、といおうか。

対手が、こちらのなお消えやらぬ殺気を鋭く感じとった――それを、逆にまた、こちらが、感じとった、といいかえてもよかった。

すれちがったのは、神子上(みこがみ)源四郎であった。

伊織は、首をまわして、源四郎の後姿を、じっと見た。

源四郎は、ふりかえらなかった。

伊織には、それが、気に食わなかった。

瞬間――。

伊織の全身から、凄じい剣気が噴いて出た。

夕風に乗って、それは、源四郎の背中を打った。

源四郎の足が、ぴたっと停められた。

――斬った！

伊織は、そう確信した。

たしかに――。

源四郎は、目ざめたように、はっとなったたし、その刹那、氷のように冷たいものが背すじを走

るのをおぼえたのであった。

　とっさに、ふりかえってこれに対する身構えをとろうとして、それを為さなかったのは、源四郎が、幾度びも死地に入って、白刃の下を潜った経験をもって、本能のように、こうした場合のおのれの処置をさとっていたからであったろう。

　疑いもなく、背後から襲って来た剣気は、なみなみならぬ凄じいものだった。これまで受けたおぼえがないくらいであった、といえる。

　しかし、それは、あくまで、剣気であって、真剣ではなかったのである。

　こちらの身に異常はないことであった。

　ここで、ふりかえれば、眼光が火花を散らすことになる。それが、のっぴきならぬ立場を招くことは、火を見るよりあきらかであった。

　対手は、こちらを、斬った、と満足したに相違ない。

　満足させておいて、このまま、ふりかえらずに行き過ぎれば、何事も起るまい。いわれもなく、勝負することは、源四郎のこのまぬところであった。

　源四郎は、ふたたび、足をふみ出して、かわらぬ歩調で、橋を渡った。

　伊織は、なお、立ちどまって、じっと、源四郎を見まもっていたが、急に、微かな苛立ちにかられて、

「卒爾ながら、問い申す」

と、声をかけた。

　距離はすでに、眼光が火花を散らすには、遠かった。

　源四郎は、しずかに、顔をまわした。

「貴公、兵法者ならば、なぜに、それがしの挑戦を避ける？」

　伊織は、昂然として、なじった。

「お手前は、つい今、人を斬られたであろう」

　源四郎は、言いあてた。

「いかにも、斬った」

　伊織は、睨みかえした。

「兵法者の勝負というものは、互いに、その時と処を、心に悔いなきように、えらばねばならぬと存ずる」

　源四郎は、そう言った。

「ふゝゝ……」

　伊織は、薄ら笑った。

「兵法は、戦場より出たるもの、血が血を呼ぶことに、なんの不思議があろう」

「こちらは、迷惑――」

「なに！」

「われらが師によって、剣は、一心明かにして八方の事物を映す形（かたち）を有すると教えられた身としては、常に勝を貪ろうとする存念は持たぬと受けとられたい」

「ふむ！　心気不動不止の守行を日夜修業しているというわけか」

肝要場において勝負を得んと心がける士は、常に勝つべき筋をつくして、その勝ち安きに勝つ。
　この理を、もちろん、伊織が知らぬはずはなかった。
　ただ、相逢う陜路に、おのれの心機に鋭くふれる対手を発見した瞬息の間、本能ともなっている闘魂が、伊織をして、そのまま、行き過ぎさせなかったのである。
「貴公、一刀流か？」
「左様——」
「それがしは、宮本伊織。貴公を、小野道場の神子上源四郎と見たぞ！」
　これは、確信をもって、口にしたのではなかった。
　——もしや？
　と直感が働いて、そう言ってみたのである。
　源四郎は、こたえた。
「勝負をおのぞみならば、いずれの日か、これは、機の熟するまで、といたしたい」
「悠長な！」
「待たぬと云われるのなら、当方は、避けて応じないまでのこと——」
　源四郎は、一揖して、歩き出していた。
　——やはり、あれが、神子上源四郎であったか！
　伊織は、空斎の予言が、嘘でなかったことを、ひしひしと感じた。
　——あの男を斬るか、わしが仆れるか？

宿運とさとっていいとさえ思われた。
　この機をはずさず、猛然と挑戦したい衝動が起った。これを抑えたのは、源四郎の言葉が理路を辿っていることを、意識からふりはらえなかったためであった。
　——よし！　必ず、たたかうぞ！
　源四郎に勝つことが、兵法者としての大成の第一門をくぐる気がした。
　伊織は、養父武蔵が宿敵を次々と仆して行った、獰猛なまでの闘魂を、そのまま受け継いでいた。

　木の香もまだ新しい青楼であった。
　造りも立派だし、風儀も正しくし、遊女たちに湯女とちがった雰囲気をつくらせようと、けんめいになっている吉原であった。
　二階の座敷に通された源四郎は、少女に、まるで大名かなぞのように扱われて苦笑しなければならなかった。
　床柱に凭りかかって、まぶたをとじて、待つ——。
　——あれが、宮本伊織だったのか！
　おのれの生涯において、最大の強敵であろう、という意識は、大門のところから、ずうっとつづいていたのである。
　衣ずれの音がして、その意識は、払われた。
「ごめん下さいませ」

障子が開かれ、そこに、しとやかに頭を下げる遊女を一瞥した源四郎は、
——はて？
と、眉をひそめた。
臈(ろう)たけた、といえるまでに美しい細おもてに、どこか見おぼえがあるようであった。
「紅葉太夫にございます。今宵のお遊び、うれしゅう存じまする」
紹介する者がなくては、はじめて登楼して、すぐに呼べない位をもたされている遊女であった。
源四郎は、ひと握りの土を、とどけることによって呼ぶを得たのであった。
ひと握りの土は、切支丹屋敷の地下牢から持って来たのである。そして、それを、この遊女にとどけるようにたのんだのは、原主水であった。
紅葉太夫は、障子を閉めて、源四郎のかたわらに来ると、遊女の仮面をぬいだ真剣な面持で、
「わたくしどものご支配様は、お、お亡くなりあそばしたのでございますか？」
と、問うた。
源四郎は、黙って、うなずいた。
紅葉太夫は、だんだん俯向きつつ、涙を膝にこぼした。
その横顔を見た瞬間、源四郎の記憶が、よみがえった。
——そうか。あの少女だった。
もう七、八年も経っていることだった。
源四郎が、まだ前髪を置いて、小野道場で、下男がわりの日々をすごしている頃だった。

晩秋の黄昏(たそがれ)どき、使いに出た源四郎は、路上で、巨きな赤狗(あかいぬ)におそわれて、にげまどうている老婆と少女を見かけた。
どこかの旗本の子女らしい装いをした少女であった。老婆は、乳母と見うけられた。
源四郎は、赤狗の眼光の凄じさを見て、狂犬だとさとるや、とっさに、走りよりざま、抜き打ちで、両断した。
老婆は、両手を合さんばかりにして、礼をのべたが、意外だったのは、十二三になる少女の態度だった。
刀身をぬぐって、腰に納める源四郎を、まばたきもせずに、まじまじと見まもっていたが、ふいに、
「さむらいの刀は、犬など斬るものではありませぬ」
大人びた口調で、そうたしなめたものだった。
若い源四郎は、むっとして、
「斬らねば、貴女がたが、かみつかれたではないか。これは、狂犬だったのです」
と、教えた。
「いいえ、たとえ狂犬でも、武士のたましいである刀をけがしてはなりませぬ」
「では、どうしたら、よかったというのです？」
「峰打ちにすればよろしかったのです。狂犬ならば、役人がつかまえてくれましょう」
「お嬢さま！」

老婆が、おろおろして、制しようとしたが、少女は源四郎に、きついまなざしをあてたまま、
「さむらいの心がけを忘れたひとなど、わたしは、きらい！　礼など申しませぬ」
言いすてて、くるっと、背をむけると、さっさと歩き出していた。
源四郎は、老婆に詫びられつつ、その小さな後姿をにらんだ。
――なんという小憎い小むすめだろう！
その時は、無性に腹が立ったことだった。
しかし――。
どういうものか、後日、折にふれて、少女の言葉がふっと、脳裡によみがえって、これは、講堂におけるいかめしい教えよりも、きもにふかくとどめられていたのである。
あの少女の後身が、いま目の前にする遊女だった。
「……あの」
涙をはらった紅葉太夫に呼びかけられて、源四郎は、われにかえって、見かえした。
「ご支配様のいらせられた牢の土を、どうして、貴方様が、ご持参下さいましたのでございましょう？」
「わたしも、そこに、とじこめられていた」
「まあ！」
紅葉太夫は、目を見はって、
「では、貴方様も――」
「いや。わたしは、切支丹とは無縁の、信仰など持合さぬ兵法者にすぎぬ。……別の事由によって、とらわれの身になっていただけのこと。ただ、地下に設けられた陰惨な牢に、ともに起臥ししているうちに、主水殿と、なんとなく心がかようて、そなたに、主水殿の祈り土をとどける仕儀と相成った」

酒肴が、はこばれて来た。
「どうぞ、一献お召上りませ」
紅葉太夫に、すすめられて、杯をとった源四郎は、注がれたそれを口にまで寄せて、止めた。
「どうなさいました？」
「いや、べつに……もともと、たしなまぬ方ゆえ――」
そうこたえてから、源四郎は、ややしばらく沈黙していてから、
「そなたは、いずれ、名のある旗本の家に生れたであろうに……」
と、言った。
紅葉太夫は、はっとなった様子で、源四郎を見まもった。
「わたしは、ずっと以前のことだが、一度出会うている」
「えっ？」
「そなたは、まだ十二三であった」
「…………？」
「わたしは、そなたから、武士道の吟味について、教えられた」
これをきくや、紅葉太夫の口から、「あっ！」と、おどろきの叫びが、発しられた。

「貴方様は……あの折の――わたくしどもの危難を救うて下さいました……」
源四郎は、微笑して、
「そなたは、わたしに、さむらいのたましいである剣を、犬の血でけがすなど、もってのほか、と叱った」
「ああ！」
紅葉太夫は、まざまざとあの日の光景が思い出されて、大きくうなずいた。
「おはずかしい。お詫びの申上げようもございませぬ。……無礼の程、おゆるし下さいませ」
つつましく、頭を下げた。
「いや、詫びてもらうために、思い出してもらったのではない。わたしの方で、礼を申してもよい気持なのだ。そなたの言葉は、今日まで、忘れずに来た」
「いえ、いえ……、救って頂きながら、なんという高慢な――後になって、思い出すたびに、身も心もちぢむような心地がいたしました。……平常、父の口ぐせになっていたのを、そのまま、いちばん正しいことと思い込んで、あのような知ったかぶりを申してしまいました。ほんとに、わるうございました。かんにんして下さいませ」
「そのようにあやまられると、わたしの方が当惑する。……酒を飲もうか」
源四郎は、杯をあけて、さし出した。
紅葉太夫は、まじまじと源四郎を見まもりつつ、酒を注いだ。
「……でも、うれしゅうございます。あの時のお方が、こうして、ご支配様の祈り土をご持参下さいましたのでございますもの」

半刻あまり、もの静かなままに、時間が移った。
口数すくなく対座しているあいだに、源四郎は、つい、杯を重ねていた。
「……離れに、お牀をとらせましょう」
紅葉太夫が、立とうとすると、源四郎は、とどめて、
「わたしは、泊るつもりで参ったのではない」
と、ことわった。
「お急ぎの御用がございますか？」
「べつに、急いではおらぬが……」
「それならば、どうぞ、一夜だけでも、お世話させて下さいませ」
紅葉太夫は、源四郎の返辞をきかずに、出て行った。
床柱に、身を凭(よ)りかけてまぶたをとじた源四郎は、
――酔ったかな？
と、四肢に、わずかなけだるさをおぼえた。
紅葉太夫から、志津女(しずめ)の隠れ家の在処をきき出せば、すぐに立ち去るつもりであったが、地下牢から出て来た身にとって、青楼の灯は明るくあたたかく、つい腰が重くすわってしまっていた。
「ごめん下さいませ」
かわいい声をかけて、禿(かむろ)が、入って来た。

手に、一通の封書を持って、教えられた躾通りに、すり足で寄って来て、片膝をつくと、

「いま、おもてで、このお手紙をお渡してほしい、とたのまれました」

受けとってみると、宛名は、たしかに自分であったが、差出人の署名はなかった。

「どのような御仁であった？」

「おさむらいでございました」

源四郎は、封を切った。

長剣は断を期す。磨きて腰間にあり。汝、兵法者ならば、これが利鈍の試しの贄となるをおそるる勿れ。もし、怯じて、これを拒まんか、汝が臥す青楼は、烏有に帰すべし。

時　半刻後

場所　郭外南方、日暮池

――宮本伊織が、待ちきれずに、寄越した挑戦状だな。

源四郎は、その瞬間には、そう考えた。

しかし、すぐに、

――伊織ならば、名を署さぬはずはない。

と、思いかえした。

――何者か？

自分が、ここに登楼ったのを知っているのは、黒兵衛以外にいないはずであった。

――あの隠密が、重傷に屈せずに、但馬守の許へもどって行ったのか？

そうだとしても、こんな決闘状をつきつけて来ようとは思えなかった。

――やむを得ぬ！

源四郎は、肚をきめた。

自分が、ここにいることを知っている者ならば、仆さねば仆される敵と考えてよかった。

この家に火を放たれては、気の毒であるし、それが公儀の詮議となっては、こちらの身の働きの不自由となろう。

源四郎は、禿に、

「承知した、と伝えてもらいたい」

と、階下へ降りさせておいて、厨子棚から、硯筥と懐紙を把った。

描いたのは、絵図面であった。

それをたたんで、袂にすると、立って、座敷を出た。

見当をつけて、廊下を歩いて行き、とある障子内からあらわれた一人の禿に、紅葉太夫の居間を、訊ねた。

「お客様は、傾城の居間をたずねるものではありませぬ」

禿は、分別くさい口をきいた。

「紅葉太夫は、牀をとりに行ったのだ。居間であろうが――」

「それならば、こちらで、ございます」

禿は、さきに立って、案内しかけたが、くるっと頭をまわして、にことして、

「太夫が、茶亭に、迎えるお客様は、貴方様が、はじめてでございます。果報と、お思いなさい

ませ」
と告げた。
あちらこちらの部屋で、三味線の音がして、今様がうたわれていた。
裏庭に出て、竹木賊張りの塀に沿うて、露路をすこし行くと、風流な萩張付戸の中門があった。
茶亭は、その中に、檜皮葺きの宝形造りの屋根を、おりからのぼって来た月の光に、くろぐろと浮かせていた。
丸窓の障子に映えた灯が、宵闇に、美しく滲んでいた。
禿は、小走りに寄って行って、
「太夫さま。お客様が、待ちきれずに、お寄りなされます」
と、声をかけた。
ちょっと、間を置いて、気配がうごいて、にじり口の片引戸が、開けられた。
「どうぞ……」
源四郎は、そこへ近づくと、
「いささか急ぎの用ができたので、郭を出て参る」
と、告げた。
紅葉太夫は、おどろいて、にじり口に白い顔をのぞけて、源四郎を仰いだ。
「今夜はおもどりには、なりませぬか？」
「もどりたいが、もどれぬかも知れぬ。その時、そなたに、お願いしておきたいことがある」

源四郎が、袂から、絵図面をとり出して、
「これを……」
と、説明しかけると、何を思ったか、紅葉太夫は、その手を、両手でやさしくはさんで、
「お茶を一服さしあげます。お上り下さいませ」
と、すすめた。
すすめるというよりも、そのまなざしが、必死な色で、すがった。
四畳半の茶室は、静慮し黙想する禅院のたたずまいのように簡素な美をたもって、源四郎を迎えた。
利休がとなえた「和敬清寂」を、そのひとつひとつの趣きにあらわそうとしているのであろう。
床の間には、
「礼之用和為貴」（礼の用、和を貴しと為す）
論語・学而の一句が、かかげてあった。
軸の下には、荒菰（あらごも）が打敷かれ、素焼きの瓶子（へいし）に神酒、高坏（たかつき）に洗米をそなえてあった。
灯は、三叉した青竹にのせた土器から、灯芯の白い尾をたらして、ほのぼのと、ゆらめいていた。
とうてい、遊女が客をもてなす場所とは思えなかった。
炉をへだてて、貴人畳に坐った源四郎は、紅葉太夫の点前を、黙視しているうちに、
――これは！

と、心をひきしめた。

その点前ぶりが、茶道の奥義に達しているものと見てとれたが、それよりも、その気品のある所作が、微塵も隙のない厳しさによって保たれているのに、目を見はらされたのである。

――剣の道も、茶の道も、奥義に達すれば、まったく同じ厳しさをしめすものか。

源四郎は、自分の膝の前へ、帛紗（ふくさ）にのせて茶碗をさし出す白い手の、指一本にも、その厳しさを含んでいるのを、みとめないではいられなかった。

源四郎に、茶道の心得はなかった。

そのことを、ことわると、紅葉太夫は、にこりとして、

「茶事の法は、あるといえばあり、ないといえばない、そのようなものと存じます。どうぞ、お飲みになりたいようにお飲みなさいませ」

「左様か――」

源四郎は、双のてのひらで、茶碗を抱いて、ひと口に、飲んだ。

にがいばかりであった。

紅葉太夫は、炉に燃える美しい焔へ、じっと、目を落していたが、ひくく、つぶやくように、

「これから、果し合いにお行きなさいますか？」

と、問うた。

――どうして、それがわかる？

源四郎は、はっと、紅葉太夫の清雅な俯向き顔を見まもった。

「僭上（せんじょう）のことばとお思いなさいましょうが……剣気と申すのでございますか、それを、貴方様のお顔に、感じましたので――」

紅葉太夫は、俯向いたままで、言った。

「……剣気が」

源四郎は、ひくく、つぶやいて、なぜか、慙（は）じ入る心持になった。

「…………」

紅葉太夫は、そっと、源四郎を見やった。

瞬間、冷たく沈んだ源四郎の横顔が、紅葉太夫をして、われにもあらず、胸にときめきをおぼえさせた。

この若い兵法者とは、かならず、めぐり逢うて、こうして二人きりで、向い合うことがあると、ずっと前から予感があったような気がした。

旗本でも大身の、武門を誇る家に生れた身が、傾城に堕ちるまでには、人にも言えぬ悲しい辛酸をなめて、多くの男たちにけがされてしまったが、心だけは、誰人にもゆるさずに、かたく閉ざして、生きて来たつもりであった。

まるで、この若い兵法者にめぐり逢うために、そうして来たような錯覚を、急におぼえて、紅葉太夫は、うろたえなければならなかった。

「神子上（みこがみ）様――」

「…………」

ふたりの視線が、合った。

紅葉太夫の頬が、ほのかに紅潮した。

「もし——もしも、今宵の果し合いを、お避けになれるものなら、そうして下さいませぬか」

「剣気をむき出したわたしに、余裕がないというのか？」

「いえ——」

かぶりをふって、

「わたくしども信徒にとって、貴方様は、ご支配様に代る大切なお方におなりのような気がいたすのでございます」

「それは、思いちがいであろう。わたしは切支丹となる善根など持合せては居らぬ。これまで、多くの人間を殺して来たし、これからも、げんにこうして、血を流しに行こうとしている。神に面をそむけて生きて行く宿運を背負うている」

「いいえ、貴方様が信徒におなりになる、と申すのではございませぬ。信徒たちのために、大きな働きをして下さるように思えてなりませぬ」

紅葉太夫は、はっきりとこう言いきることで、予感を確信したかったに相違ない。

源四郎は、黙って、炉火へ目を落して、なんともこたえなかった。

しばらく、茶室には、炉にかけられた釜の口から鳴る松風だけが、あった。

源四郎は、

「行かねばならぬ」

ひくく、自分に言いきかせると、絵図面をとり出して、

「もし、万が一、わたしが、ここへ戻って参らぬ時は、そなたから、信徒衆へ報せて、ここに五十万両が隠匿されているかどうかをたしかめ、寿庵なるいるまんに教えてもらいたい。原主水殿から、わたしへの依頼は、このことであった」

と、告げた。

紅葉太夫は、眸をまばたきもさせずに、源四郎にあてて、

「貴方様は、かならず、おもどりなさいます」

と、言った。

「それは、わからぬ。強敵のような予感がして居るし、罠がしかけられているようにも思える」

「どうしても、お行きなさいますか？」

「行かねば、この家に火を放つ、と予告している」

源四郎は、そう言ってから、あらためて姿勢を正すと、

「そなたには、かさねて忠告をもろうた。忝じけない。剣気をむき出したのは、わたしの未熟。心いたす」

と、頭を下げた。

それから、刀を把って、立ち上った。

「お帰りを、ここで、お待ち申上げて居りまする」

紅葉太夫は、畳に両手をつかえた。

良人を戦場へ送り出す——その気持であった。

ところが——。

源四郎が、土間へ降りたとたん、ふいに、紅葉太夫の胸に、音たてて、烈しい衝動が来た。
「もし——」
呼ばれて、ふりかえった源四郎は、眉をひそめた。
血の色を引いたその細おもてには、おんなの哀しい本能が、あふれていた。
胸に、肩に、みるみる、せわしい喘ぎをしめしたかと思うと、それまでの澄んだ態度を、偽装でもあったかのように、かなぐりすてて、
「神子上(みこがみ)様——」
と、裾をみだして、走り寄った。
源四郎は、ぶちつけるように、すがりついて来た若い肢体を、とまどいつつ、受けとめた。
それなり……いくばくかの時刻が移った。
ふと、源四郎は、紅葉太夫を、つきはなすと、おもてへ去った。
あとには、微かな嗚咽がのこった。

乱麻

——はて？
一歩毎に大きくからだを傾斜させて、夜道をひろって来た黒兵衛は、吉原の灯を、かなたにのぞむ地点で、前を行く者を、透し見た。

自分と同じく、その上半身を平衡に保てない足どりであったが、これは、跛ではなく、義足であることは、足音でわかった。
しかし、黒兵衛を、いぶからせたのは、そのことではなかった。
——どこかで見かけたな？
警戒心が極度に鋭敏になっているのは、その稼業が、知らず知らずに、身につけさせたのである。
つと、黒兵衛は、歩行の法を変えた。
音もなく、かるく、やわらかく、するすると滑るように、追って行って、距離を二間あまりに、ちぢめると、再び、もとの歩き方に、もどった。
とたんに——。
前を行く者が、振りかえった。
気配もなく近づいて来て、ふいに、足音をたてた者を、怪しんだのは、当然であった。
こちらは、振り向かせるのが目的であった。
黒い厚い雲が、雨を落さずに、風に追われて去り、遠い空には月が出ていた。
——あ！
黒兵衛は、何者かを、みとめて、にわかに緊張した。
しかし、それをみじんも様子に洩らさず、ひょこひょこと、足をはやめて、追い抜いて行った。
むこうは、こっちを見知らぬ安心感があった。

追い抜いて一間ばかり先に出た。
「おい――」
声が、かかった。
黒兵衛は、歩きながら頭をまわして、
「へえ？」
と、いかにも、町人らしい、怯じ気を滲ませた物腰をしめした。
対手は、これには、だまされなかった。
「貴様――拙者を、存じておるな？」
「いえ、べつに……お見かけいたしたことは、ございませぬが――」
「嘘をつくな？」
急に、義足を高く地に鳴らして、迫って来た。
黒兵衛は、べつに、あわてて、足を動かしもしなかったが、その距離は依然として、同じにひらいていた。
「貴様は、忍びの術に長けておる！　ただ者ではあるまい」
「商売が、飛脚でございますので――」
「言うなっ！」
いきなり、抜き打ちに襲って来た白刃であった。
高垣弥九郎は、義足で、一間を飛んだのである。

「乱暴なさる」
かるがると、跳び遁げて、そう言った声音が余裕あるものであったことが、弥九郎をして、さらに、狂暴たらしめた。
「おのれがっ」
吼えて、大上段にふりかぶった弥九郎の、さらでだに肉の殺げ落ちた面貌は、誇張ではなく、悪鬼に似た。
さすがに、黒兵衛は、ぞっとなった。
――まてよ！
とっさに、泛んだ直感は、
――この人物も、源四郎様が、京花屋においでのことを知って、やって来たのではないか！
そのことだった。
「高垣弥九郎様！」
一向に存じ上げぬ、としらばくれたはずの男が、ぬけぬけと、その名を呼んで、月かげに、皓い歯をみせた。
もともと、この盗賊の眇眼は、対手に、ちょっと、小ずるい、皮肉を含んだ表情を印象づけるのであった。
「うぬっ！」
弥九郎は、満身から火噴かせるほどの憤怒をしめした。
「やはり、貴様、拙者のあとを尾けおったな！」

「なに……そういうあんばいに逆上なさるところが、ご自身に、何か、気ぜわしい、険悪な目的をお持ちである証拠でございますな。それでは、兵法者として、あまりに余裕がない、と申すもの――」
「く、くっ……くそっ！」
弥九郎は、さらに、猛然と、一間余を跳躍した。
しかし、こんどもまた、白刃は、むなしく、夜気に唸って、宙を裂くにとどまった。
「はゝゝ、そのお足では、まだ、目的はとげられますまい。思いかえされませい」
「貴様っ！　神子上源四郎が手下だなっ！」
「語るに落ちる。ご自分の方から、白状なさいましたな。お手前様は、すでに、尋常の試合に敗れ去った御仁。てまえの主人にうらみを抱くのは、いささか、見苦しいと申上げなければなりませぬ」
「下郎ずれが、小癪なっ」
「その下郎ずれにも、およばぬともなれば、何条もって、一刀流日本一の使い手に、むかい得ようぞ！」
「……か、かっ！」
意味のない吶号を、のど奥からふりしぼって、弥九郎は、狂気のごとく追おうとして、どうっと、つンのめった。

その時刻――。

源四郎は、すでに、廓を出て、雑木がまばらに生えた蕭条たる野をあゆんでいた。
月の光の中を、まだ肌にしみる夜風に吹かれて行くと、つい今までいた青楼の灯のあかるさが、はるかな遠いものになっているのが、感じられた。
源四郎の胸中に、湿った感慨が湧いているゆえかも知れなかった。
紅葉太夫の白い肢体の柔らかさ、あたたかみが、はらうすべもなく、この身にのこっていて、これは、源四郎として、はじめての経験であった。
――おれは、女の柔肌を知らずに、今日まで生きて来た。
いまさらに、そのことが思いかえされていたのである。
どうして、紅葉太夫が、突如として、自分に必死にすがりついて来たのか、その時は、わかったような心地がして、しばらくの間、抱きとめてやっていたのだが、去って来てみると、女心のふしぎな動きは、武骨のおのれなどには、所詮理解しがたいもののようであった。
源四郎は、流れのはやい薄雲の中に浮いている月を仰いだ。
感慨が、ひとつのおもかげを、その空に描くこととなった。
――どうしたであろう、あの娘は？
美音のことであった。
――からだが弱そうであったが、どこかで病み臥しているのではあるまいか？
愛宕山上の決闘に臨む自分を、修太郎という少年とともに、見送ってくれた時の、澄んだ優しいまなざしが、はっきりと、記憶にのこっていた。
なにかを訴えているまなざしであった、と思う。

なにかを？

源四郎は、それを、自分で解いてみることを、ひかえて来た。

ゆくりなくも、美しい遊女の涙を見せられて、源四郎は、美音(みね)のおもかげをよみがえらせて、

——あの娘は、おれを好きになっていたのではなかろうか？

自分に言ってみた。

言ってみた瞬間、美音という存在は、あの時以来、ずうっと、わが胸の底に、大切なものとして、そっと秘められて来ていたような気がした。

——生きていれば、めぐり逢えるであろう。

源四郎は、月にむかって、そう言いかけた。

このおり——。

深くなった雑木林のむこうで、あわただしく水鳥の飛び立つ音が起った。

日暮池が、そこにあった。

源四郎の意識が、現実にたちもどるとともに、鋭く磨ぎすまされた。

水鳥が舞い立つのは、そこにすでに、敵が、こちらを迎え撃つ殺気をみなぎらせた証左となる。

果し状には、それとはっきり記してはいなかったが伏兵をそなえ、謀計をめぐらしているものと推測できた。

敵は、一人ではない。この予感は、水鳥の音によって、あやまたないものとなった。

立ちどまって、ちょっとまよった。

このまま、林の中をまっすぐに抜けて行くべきか？

それとも、まわり道を採るか？

池畔に出るまでに、木下闇に、不意の攻撃の用意がなされていると直感されたからである。

——どうすべきか？

孤身を、死地にふみ込ませるのに、唯一の有利と、いえば、自由に奇襲の方法をえらび得ることであった。

宮本武蔵が常に勝利をおのれのものに帰したのは、その巧みさであった、と源四郎も、ききおよんでいる。

孫子の兵勢にも、

「兵は常勢なく、水は常形なし。能く敵に因りて変化し、而して勝を取る者、之を神と謂(い)う」

と、出ている。

たとえ、孤身と雖も、おのれの内には、千人の兵があると思いなして、これを用いる術を心得ていなければならぬ、とは戦国の名将の言葉である。

源四郎は、しかし、兵法がゆるす詭道に対して、抵抗をおぼえた。

——兵、応ずる者は勝つ。

敵より挑まれて、已むを得ずして、これに応じていればこそ、自分は、このように、水のごとく冷静な境地でいるのである。

水鳥をおどろかせた敵がたこそ、すでに、みずからの立場をみだしているものと考えられなく

はない。謀計を用いる者の、おちつかぬ余裕のなさとも受けとれる。

――よし！

源四郎は、覚悟した。

堂々と、まっすぐに、足をふみ出した。

月かげも地に落ちぬ深い樹林であった。

もはや、一歩一歩が死地と、考えられた。一枝の蔭も、敵がひそむものと、神経をくばる必要があった。

風は梢の上で渡っている――。

それが、急に深く吹き降りて来て、樹々を鳴らす瞬間を、源四郎は、警戒しなければならなかった。

……殺気は、林ぜんたいにみなぎっているかと思われた。

――む！　来れ！

一歩毎に、猛気ともいえる闘いのための心気が、冴えて来る。

とある地点で、歩みをとめたのは、全身に満ち満ちて来た血汐を鎮めて、呼吸を深い静かなものにするためであった。

梢を縫って織り込んで来る月光に、まだらに染めわけられたおのが五体が、もはや、完全に、木蔭にひそんだ敵の目にさらされているのを感じる。

さらに、数歩進んだ時――。

殺気を慕うかのごとく、烈しい風音が、地を摺るようにして、樹間にとび込んで来た。そして、それが、また、枝葉をゆさぶって、空の高みへ翔けすぎて行き、ふたたび、ひそたる静寂がもどったせつな。

びゅん！

びゅん！

左右の闇の中から、鋭く弦音が鳴った。

同時に――。

源四郎は、腰間から、滑り出させた一剣に、その弦音に合せる刃唸りを生ましめた。

二矢とも、二つに折れて、源四郎の足もとへ落ちた。

次の瞬間――。

源四郎は、魔影のような迅さで、三間余を奔った。

奔りつつも、小柄を抜いて、前方の闇へ投じた。

「うっ！……むっ！」

木樵が積んだと見せかけた薪の山の蔭から、断末魔の呻きが、もれた。

さらに――。

源四郎のとった行動は、神速かつ正確であった。

「…………」

鳥の掠めるにも似た足力を発揮しつつ、白刃を、水平に、円弧を描いていた。

その弧線の中に、一樹があり、当然、幹は両断された。

かんまんに、樹冠を傾けはじめたその樹の高い枝で、狼狽した人間の動きがしめされた。第三の矢を、源四郎にねらいつけていた伏兵であった。

凄じい音をひびかせて、人もろとも樹が横転した時、源四郎の姿は、すでに、林を突破して、池畔のくさむらに、立っていた。

それにむかって、両わきの灌木から、ひょーっ、と二本の槍が、くり出された。

源四郎は、余裕をもって、一槍のけらくびをつかみ、一槍を切ってすてた。

一斉に、くさむらの中から、七八個の黒衣の敵影が、立った。

無言で、冴えた双眸を放った源四郎は、

――そうか！

と、うなずくところがあった。

敵影は、のこらず、抜きはなった刀を、地摺りにかまえたからである。

月明りにも、そのひとつの黒影が、えらばれたる使い手と、見わけられた。

距離は、五間余りあったが、源四郎にむかって放射して来る殺気は、凄じいものがあった。

源四郎は、自ら進んで、おそるべき必殺剣の圏内へ、身を運び入れるべく、足をふみ出した。

――と、

「えいっ！」

地面を割って、躍り出るように、背後から、伏兵の一人が、猛然と、襲いかかって来た。

源四郎の痩軀が、くるっと翻転した。

月光を撥ねて、二刀が、きらっときらめいた――次の瞬間には、源四郎は、黒い血飛沫の噴いた其処から一間も跳んでいて、しかもその勢いをそのまま継続させて、疾風のごとく、敵陣へむかって、草をわけて走っていた。

それに応じて、黒影たちは、地摺りの構えのまま、さっと、間隔をひらいた。

ぴたっと、足場をさだめた源四郎は、声音さわやかに、

「おのおのがたを、柳生道場の面々と見た。何者とも知らずしてたたかうのは、仆れて後にこの世に悔いをのこすことになるが、宿縁の対手とあらば、敗れて、いささかのうらみもない」

と、言いはなった。

柳生流の極意に、「月陰」というのがある。

日月陰陽のうち、月と陰をえらんだ極陰の剣法である。月は形があって、闇夜を照し、陰は形なくして闇そのもの。そして、月の光があってこそ、陰を見得る。たとえば、闇夜にたたかう時、敵の形も見えず、わが影も見えぬ。しからば何をもって対手とするか。敵もおのれも、昏いところに物を尋ねるごとく、太刀を振って、地を払ってみる。その探る太刀の光を見当てとして、たたかうことになる。

当然、構えは、地摺り下段となって、敵から、こちらの向脛を見込んで打込んで来るや、その太刀の光にあわせて、わが太刀の光を映しかえす間髪の迅業を、つづけさまに、使う。

これを、「月陰」という。

月陰は「山陰」という極意に転化する。これは、陰陽表裏であり、敵の変化に対する自在の動きを謂う。さらに、山陰は、烈風が海上を吹きまくって、波をさかまき立てるにたとえた「浦

波」という秘術に移る。
敵陣は、源四郎にむかって、この戦法を予告したのである。
源四郎は、恩師からさずけられた一刀流絶妙の秘法のことごとくを、渾身にふるう立場に置かれたのである。
いまこそ——。
その「法形」は、
表は、電光、明車、内流、浮身、払捨(ほしゃ)
裏は、妙剣、絶妙剣、真剣、金翅鳥王剣、独妙剣
この十本をいう。
例えば——。
このうちの「払捨」というのは、一瞬にして、敵の両腕を断つ迅業である。
神子上(みこがみ)典膳が、小野忠明と名をあらためて、江戸入りした頃のことである。
江戸郊外の膝折村というところで、兵法者が、七人の無辜(むこ)の民を斬って、一軒の民家に籠居した事件が起った。村長(おさ)は、江戸へ趨(はし)って来て、決断所へ訴え出た。公儀では、小幡勘兵衛景憲を検使として、討取り方を、忠明に命じて、赴かしめた。
忠明は、その村邑にいたり、戸前を望んで、しずかに声をかけた。
「小野次郎右衛門忠明、降命によって、江戸より参った。汝、戸外に出て勝負をするか、我、戸内に入るべきか——いずれをえらぶも可なり。いかに？」

兵法者は、かねて忠明の高名をきいていたので、
「一刀流をこの目で見とどけるのは、今生の果報。尋常の勝負をいたす」
とこたえて、馳せ出て来た。
しかし、二剣は、一合も交らなかった。
兵法者が、青眼にかまえるや、忠明は、するすると進みざま、きわめて無造作に、その両腕を、斬りすてた。そして、景憲をふりかえるや、
「首を取るべきや否や？」
と、問うた。
「討たれい」
景憲のこたえにうなずいた忠明は、壁に凭りかかった兵法者の首を、丁と刎ねた。
いわば、この剣法は、野太刀の刹法(せっぽう)から生れたものであった。
柳生道場の面々にとって、一刀流十本の法形を、源四郎にふるわせる目的があったのである。
一刀流の神技は、小野道場にはなく、源四郎にのみ、受け継がれていることを、柳生但馬守は、知っていたのである。
当然、多勢をもって、とりかこめば、源四郎はその十本の法形を組んだ迅業——乱曲(よれ)・風楊・分身(ほつ)の神技を、縦横に使わねばならぬのであった。
これらは、口伝にして、無量の習いを必要とする。
この神技をはばんで、源四郎を仆すことは、柳生流の極意に、さらに新たな工夫発明を加えることになるのであった。

一刀流極意の教えのうち多勢を対手として、野にたたかう心得として、八方散乱、というのがある。

いかに、敵が多かろうとも、身の抜けかた、身のひらきかたが巧妙であれば、敵陣は、人が人の邪魔になって、われに当って来るのは、常に一人である。

八方とは四方四隅を謂う。（隅とは「内すみ」角とは「外すみ」のことである）

その四方四隅へ、身を抜け、転化すれば、たとえ、完全にとりかこまれていても、その全員を対手と思う必要はない。敵はただ一人と心得ればいいのであった。

そこに、小野忠明が、刻苦して生んだ乱曲、風楊、分身の凄じい秘術が、発揮されることになる。

柳生流としては、一度は必ず見とどけておかねばならなかった。

「……参る！」

正面の敵が、地摺りの構えのまま、すっすっと、草をふみわけて、間合を詰めて来た。

源四郎は、ただ、一刀を、だらりと右手に携げたなりだった。

さっ、と白刃が、源四郎の向脛をねらって、白い閃光を走らせた。

これに合せて、源四郎が地を蹴っていれば、攻撃者は、「月陰」から「山陰」へ、そして「浦波」の猛然たる巻打ちに出ることになるのであったろう。

源四郎は、そうしなかった。

わずかに、身を引いただけであった。

敵は、横薙いだ刀身を、右方へ水平に延べたまま——その姿勢を、わずかのあいだ、固着させていた。

それから、徐々に、上半身を傾けていって、どさっと、くさむらの中へ横臥した。

いつの間にか、その胸には、小刀が、刺さっていたのである。

「…………」

源四郎は、無言で、一人を仆されてもなお、動かぬ敵影へ、ずうっと視線をまわしたのち、ゆっくりと、その屍骸から、小刀を抜きとった。

「こちらから、参る！」

大刀の切尖を地へ落し、小刀をまっすぐに、前へさし出したふしぎな構えで、源四郎は、進みはじめた。

……殺気は、ここに、炸裂する瞬間を迎えた。

源四郎の影が、大きく飛躍した。

黒い血飛沫が、宙に撒かれ、呻きとともによろめく敵を、一瞥するいとまもなく、源四郎は、次の敵にむかって、襲いかかっていた。

すると——。

敵陣は、柳生流独特の虎乱片手斬りを放つべく、大きく円を描いて馳せながら、源四郎の速影をとらえようとした。

同じ時刻、紅葉太夫は、その茶室のじぶんの座で、釜の松風をききつつ、源四郎が無事に戻っ

て来ることを、祈っていた。
　われを忘れて、源四郎にすがりついて、哭きむせんだじぶんのはしたなさが、堪えがたい羞恥となって身をつつんだのは、ほんのわずかの時間であった。それが過ぎたあとには、じぶんでもふしぎなくらい、澄んだ気持になっていた。
　灯を消して、月かげを、室内へ迎え入れたのも、この気持をさらにふかめたかったからである。
　炉火が、月光の中に、柔らかな美しい焔をあげていた。ただの粗朶ではなかった。焔が、仄かな芳香を漂わせるのは、伽羅を加えているからであった。
　——わたくしは、女のしあわせが、いつじぶんにやって来るか、長い年月、待っていた。
　紅葉太夫は、心で、つぶやく……。
　——とうとう、じぶんにも、来た。
　身も心もなげ出してもいい男性が、今宵、目の前にあらわれたのである。
　当然、めぐり逢う運命をもっていたその人が、ここで、しずかに、じぶんの点前の客となったのである。
　ぶしつけに、じぶんが口にした言葉を、ふかくうなずいてくれて、死地に向って、出て行った。
　——あの方は、必ず、ここへおもどりになる。
　そのために、じぶんの言葉が役立った、と信じたかった。
……ふと、紅葉太夫は、われにかえって、点前にかかった。

いま凄絶の修羅場にあって、一剣におのが生命を託して闘っているのであろう源四郎にささげる一服の茶であった。
　茶碗を帛紗にのせて、
「さ——どうぞ」
と、姿なきその人の膝の前へ、さし出した。
　そのおりであった。
　戸口に、音もせぬのに、冷たい夜気が、流れ込んで来た。
……瞬間、不吉な思いが脳裡をかすめて、傾城のからだは、かたくこわばった。
　総身血まみれた源四郎の、幽鬼と化した姿が、戸口に立った、と想像した。
　紅葉太夫は、頭をまわす勇気がなかった。
「そなた、紅葉太夫であろうか？」
　源四郎のものでない声に呼ばれて、紅葉太夫は、呪力を解かれたように、戸口を見やった。
　黒布で顔をつつんだ武士が、そこに佇んでいた。
「紅葉でございますが、せっかくながら、今宵は……」
と、ことわりかけるのをさえぎって、
「客ではない」
　ぬっと、上って来て、
「神子上源四郎が、そなたに渡したものを、こちらへもらおう」

そう言った。

ぎく、となった紅葉太夫は、眸をそらして、

「神子上様より、なにも、受けとっては居りませぬ」

と、こたえた。

「その顔の色が、受けとったとこたえて居る」

不気味な、肚を刺して来る声音だった。

源四郎を、死地へおびき出す。当然、源四郎は、覚悟をきめるとともに、紅葉太夫に後事を託すであろう。それを奪い取る。

巧みにたてられた計画であった。

柳生側では、源四郎を尾けた隠密が斬られるや、ただちに、棺を馬ではこんだ非人をとらえて、源四郎の行方を白状させたのであった。

非人は、源四郎が、黒兵衛に「吉原の京花屋で会おう」と言いのこしたのを、きいていたのである。

……紅葉太夫は、この脅迫からのがれられぬ、とさとった。

あいては、ただ者ではないのだ。

しかし、のめのめと、絵図面をさし出す気持はみじんもなかった。

天国をかたく信じる者にとって、死はすこしも怖しくなかった。

ただ、くやしかったのは絵図面を、どうして、人知れぬ場所へかくしておかなかったか、ということであった。

絵図面は、紅葉太夫のふところにあった。

澄んだ眸をあげて、紅葉太夫は、侵入者を見やった。

「武士にあるまじき、卑怯な企てと存じます」

「問答は、必要とせぬ。絵図面を渡してもらおう」

「貴方様のお名は？」

「そなた、斬られる覚悟か」

「いたしかたございませぬ」

「では、きかせておこう。柳生左馬介憲巌」

「わたくしの仇は、神子上様が討って下さいますでしょう」

それをきくと、左馬介はふゝゝゝ、とひくくわらった。

「遊女らしからぬ見あげた態度だ。切支丹ならば、死も、よろこびとするのか」

紅葉太夫は、こたえず、膝をまわして、左馬介に、背を向けるとまぶたをとじた。

その口から、ひくく、おらしょが誦えられた。

柳生左馬介が、茶室を出て、風のように去ってからいくばくかの時刻が、移った。

中門をくぐって、禿に案内されて内露路に入って来たのは、黒兵衛であった。

「禿さんや——」

「あい」

「そなたは、捨児であったかな？」

ぶしつけな問いに、禿はむっとなったらしく、ふりかえって、

「なぜ、そのようなことをおたずねじゃ？」

きつい口調で、問いかえした。

めっかちで、びっこの、およそみにくい男を、禿は、心から、さげすんでいた。

「親がいるなら、そなたのような可愛い子を、こんな泥沼には沈めまいて」

「ここは、泥沼ではござんせぬ」

「美しい蓮の花が咲いても泥沼にかわりはあるまいが……」

——なんて、いやなことを言うお客だろ！

禿は、ぷんぷんした。

神子上源四郎の家来で、急ぎの用がある、とたのむから、親切に、案内して来てあげたのに、なんという無礼な、たしなみを知らぬ片端者なのだろう。

「……あそこです」

禿は、指さすと、くるりと踵をまわして、とっととひきかえして行ってしまった。

「はっはっは……慍ったわい」

黒兵衛は、ひょこひょこと、月光の中に、その半身を大きく傾けながら、茶亭へ近づいて行った。

——はてな？

丸窓が、くらい。

——月の美しさにさそわれて、野へ出なされたか！

黒兵衛は、にじり口に寄って、

「お晩で——」

と、声をかけた。

返辞は、なかった。

——やはり、留守かな。

上り込んで待っている無遠慮も、やむを得まい、と自分に言って、片引戸を、そっと開いた。

とたんに、黒兵衛の神経が、ひきしまった。

血が匂ったのである。

覗き込んだ目に、炉端に、俯つ伏した遊女の、むざんな姿が、映った。

とび込んでみて、

——ああ、いかん！

と、暗然となった。ただ一太刀で、袈裟がけに斬られて事切れていた。

——これは、どういうことか？

黒兵衛は、当惑して、そこにどさっとあぐらをかいたが、すぐにまた、立ち上った。

——源四郎様は、どうなされたぞ？

ふしぎであった。

源四郎は、身に微傷だに負わずに、帰路にあった。

敵陣が描く虎乱片手斬りの円のただ中に置かれて、源四郎の迅業は、三人までも仆した。

その時、遠くにあって、鋭く笛が鳴った。
と――柳生の面々は、一斉に、後退したかとみるや、源四郎一人を、其処にのこして、消え去ったのであった。
源四郎自身としては、なお、数人を斬るだけの自信はあったが、生きのびて、廓の灯を眺められるとは、考えてはいなかった。
いま――。
ぼうぼうたる蘆荻の原野のまん中に、星を聚めて地上に置いたように、美しく燦めく一郭を望みながら、源四郎はこうして歩いていることが夢のような気がしていた。
――隠密たる者が、ひとたび狙った敵を、中途にして、見すてるはずはないのだが……。
ましてや、柳生道場にとっては、駿府において、送り込む手練者を次つぎと斬られた恨みの敵である。
さらに幾人かの犠牲者を出したとしても、必ず、討取ることはできた、と思われる。
――但馬守の指令であろうか？
それならば、何故に、但馬守は、その指令を出したのか？
源四郎には、わからなかった。
月光に染められた痩軀が、微傷だに負うていないことは、なんとしても、ふしぎなのであった。
――おれは、生きている！
いくども、胸でつぶやいてみるのだが、これは、歓喜とはならなかった。四肢には、なお、突

如の襲撃に備える鋭気がこもっていたし、一歩一歩、脂粉と絃歌の里へもどって行くことはどうしたわけか、微かな不安があった。
……大門を入ると、通りは、もう人影はなかった。
客待ちの駕籠が、そこここにあるだけで、もうこの時刻、ぞめき客を呼ぶ家もないに相違ない。長暖簾のかかった入口からは、いたずらに、明るい灯が流れているばかりであった。
その灯をあびて、月が映す影とを交えながら、ゆっくりと京花屋へ向って行く源四郎の姿を、とある物蔭から、凄じい眼光が射た。
――源四郎！
心中で、大きく叫びつつも、からだは動かなかった。
源四郎の姿には、妖しいまでの精気がこもっている、と見てとれたのである。
撃って出られないのは、怯じ気ではなかった。むしろ、その精気を見て、粛然となった故であった。高垣弥九郎も一流の兵法者であることにかわりはなかったのである。
「あ――おもどり」
源四郎が、母屋を抜けて裏口へ出た時、廊下から、禿が声をかけた。
「紅葉太夫は、まだ、茶亭であろうか？」
「あい」
近づいて来て、小声になると、
「ご要心なされませ」

「どうした？」
「めっかちで、びっこの、怪しい男が、たずねて来て居りますぞえ」
「はゝゝ、それは、わたしの家来だ」
「まあ！」
禿は、目を見はったが、急に、つんとして、
「へんなご家来」
と、つぶやきすてると、ばたばたとむこうへ、かけ去って行った。
源四郎が中門をくぐろうとすると、急ぎ足で近づいて来た黒兵衛にぶっつかった。
「おっ！　ごぶじで――」
黒兵衛は、よろこびの声をたてた。
源四郎は、微笑して、
「太夫の点前にへきえきして、にげ出したのか？」
「御主人様！」
黒兵衛は、声をひそめると、
「太夫は、何者かに、斬られて居りますぞ！」
「なに？」
源四郎は、水をあびたように、そこに棒立った。
「一太刀でな、こと切れて居りますわい」
「…………」

源四郎は、歯をくいしばった。
――そうか！
いま、はじめて、納得がいった。なぜ、柳生の面々が、呼笛によって、潮のようにひき去って行ったか。
――おれを、おびき出しておいて、おれが渡した絵図面を、紅葉太夫から奪い取ったのだ！
源四郎は、茶亭へむかって歩みながら、曽てない憤怒に、四肢がふるえた。
室に入って、あわれなむくろを抱きあげた時、そのくちびるからもらされた言葉のひとつが、よみがえった。
「わたくしども信徒にとって、貴方様は、ご支配様に代る大切なお方におなりのような気がいたします」
信徒たちのために、大きな働きをしてくれるように思えてならぬ、と予言したのだ。
好むと好まざるとに拘らず、いま、その立場に置かれたと、ひしひしと感じた。
……ふと。
源四郎は、炉の中へ、鋭く視線を投じた。
きれいに撫でられた灰の上に、文字が読めた。
やぎゅう、さまのすけ
平仮名で、そう記してある。
消え行く生命の灯を、この灰文字をのこすために、かきたてて、火箸をとりあげたに相違な

い。

──そうか。この女を斬って、絵図面を奪い去ったのは、柳生左馬介であったか！

宿縁の敵であった。

駿府にあって、柳生側の隠密の頭領として、源四郎を討つことに躍起となって果さず、また、愛宕山上で、これを九死まで追いつめて、一生を得させてしまっている左馬介であった。

三度目の出会いは、これは、源四郎の方からおもむかねばならなくなった。

「黒兵衛」

「はい──」

「わたしとともに、地下牢からはこび出してくれたのは、あれは、この江戸の切支丹門徒にとって父とも仰ぐ原主水という御仁であった」

「へえ──噂だけはきいて居りましたが、あのお方が……」

「主水殿は、武田信玄の私鋳金およそ五十万両の隠匿場所を知っていた」

「五十万両！　まるで、夢のような話でございますな」

「その場所を、主水殿は、わたしに教えておかれた」

「ほう！」

「わたしは、其処を絵図面にして、この傾城に手渡しておいた。それが、奪われたのだ」

「ふむ！」

黒兵衛は、唸った。

源四郎は、紅葉太夫のなきがらを、北向きに仰臥させて、胸で手を組ませてやると、隅から、

腰屏風を持って来て、その前に立てた。

「御主人様」

黒兵衛は、眇眼を光らせて、

「これから、すぐさま、その場所へおもむかれますか？」

「わたしとお前と二人でか？」

「無謀でございますかな？」

「おそらく、そこが、わたしたちの死場所となろう」

いまこそ思いあたるのは、柳生の面々が、自分を生かしておいたのは、もし万一絵図面がでたらめのものであった時、五十万両が永久に地に埋もれたままになることを懸念したためなのだ。

「しかし、むざむざ、五十万両を、指をくわえて、敵に渡してしまうのは、なんとしても、我慢がなりませぬわい」

盗賊である黒兵衛の、心からなるくやしそうな声音であった。

「いや──むざとは、渡しはせぬ！」

源四郎は、きっぱりとこたえたことだった。

孤　雁

からっ、からっ……

からっ、からっ……

単調な軋り音であった。

しかし、朝の澄んだ陽ざしを迎え入れた古びた庫裏の板の間に、これは、いかにもふさわしい、平和なひびきをもっていた。

山繭の糸を、つむぐ音であった。

つむいでいるのは、美音（みね）であった。

ここ——王子十条野はずれの古寺清光寺に来てから、ふしぎに、美音は、午後の微熱はおこらず、食欲も出ていた。

朝夕の梵鐘の音に心をあらわれて、俗界をはなれた静謐に身をひたしていると、美音の顔は、日一日と乙女らしい美しい血の色をよみがえらせるようであった。

といって——。

ただ、無心に、糸をつむいでいるわけではなかった。

こうして、単調な仕事をしていることが、美音に、ひとつの想いを深めさせる。

——あの方のために、わたくしは、こうして、糸をつむいでいる。

そのことだった。

この寺の下男が、永年かかってあつめていた山繭を、くれた時、美音は、

——これで、あの方のきものをつくろう。

と、思いたったのである。

美音の脳裡では、神子上（みこがみ）源四郎が、いつの間にか、この世で良人とする唯一の人と、きめられ

ていた。そして、それは、源四郎の方でも、知っていてくれるような気がしていた。

　ほうれや、ほう
　ほうれや、ほう
　焼野の雉（きぎす）が、
　泣いたげな

裏庭で、修太郎のうたう声がした。

陽のさしそめた頃に、とび出して行き、午に息せききって、かけもどって来て、大急ぎで、ご飯をかき込むや、また、風のように何処かへ消えて行く——そんな毎日であった。

　三日月ながめて
　泣いたげな
　母さの顔に似ていやる
　月の細さが悲しゅうて
　ほうれや、ほうと
　泣いたげな

美音は、その哀調をおびたふしまわしに、ふっと、胸が痛んだ。

——修太郎さんも、ほんとうは、親が欲しいのだ。

あの邪宗門の屋敷で、志津女という気品のある女性にむかって、修太郎が必死に叫んだ時の光景が、思い出された。

「おいら、捨児なもんか！　おいらの父上は、大谷吉政様の右腕だったんだぞ！」

修太郎は、やっきになって、叫んだものだった。

あとで、野に出て、美音が、どうしてあんな嘘をついたのです、と訊ねると、修太郎は、石ころを蹴とばしながら、こたえたことだった。

「おいら、なんだか、腹が立ったんだ」

——あのご婦人は、修太郎さんを見て、異常な様子をしめされた。顔だちが、どこやら、似かようていたような気がする。

——もしかすれば？　わたくしはそう思った。修太郎さんから、国は若狭だときいたせつな、顔色をお変えになった。思いあたったからなのだ。

——ひょっとすると、修太郎さんも、あのご婦人になにかをつよく感じたのではなかったろうか？　だから急に、やっきになって、嘘をついて、つっかかったのではなかろうか？……きっと、そうなのだ。

美音は、もう一度、修太郎をつれて、あの屋敷をおとずれなければならないと、思う。

「美音さん！」

勢いよく、土間へかけ込んで来た修太郎は、

「おいら、もう、いやだ！」

小さな肩をそびやかして、語気烈しく、言った。

「なにが、いやなのです？」

「こんなところにいるのが、いやなんだ！」

「でも、まだ、来てから、いくらも経っていませんよ」

「美音さんのからだが治るまで、と思って、がまんしているんだ。……もう、大丈夫だろ？　出て行こうよ」

「どこへ？」

「江戸だよ」

「江戸へもどって、どうするのです？」

「どうするって、わかっているじゃないか。さがすんだよ、あのおさむらいを——。おいらに、約束してくれたじゃないか。おいらが柳生但馬守を討つのを、助太刀してやるってさ」

「……それは」

「おいら、知っているぜ。美音さんも、あのおさむらいに会いたいんだろ？」

「…………」

「ちゃんと、わかってら。美音さん、好きだろ？」

美音は、じっと修太郎から見つめられて、かくさずに、

「ええ——」

と、うなずいた。

「じゃ、からだが治ったらぐずぐずしていることないじゃないか。行こうよ、江戸へ——」

「でも——」

「女って、イヤだな。行きたいくせに、まよっていて」

「修太郎さんは、せっかちね」
美音(みね)は、今日まで、夢にも考えていなかったことを、急に、修太郎に言い出されて、ほのぼのとした希望がわくのをおぼえずにはいられなかった。
――江戸へ出て、あの方にお会いする！
そうしてはならない命令でも受けていたように、かってにじぶんをしばっていたものが、かんたんに、解けてしまったように、にわかに、心がはずんで来た。
――そうしてもいいのだ。だれも、とがめはしないのだ。わたくしの気持次第で、あの方に、お会いできるのだ！
「でも――」
美音は、不安のまなざしを修太郎に当てて、
「ひろい江戸ですもの。なかなか、あの方のいらっしゃるところは、尋ねあてられないでしょう」
「わけないじゃないか。牢人者だもの、住むところはきまっていらあ。青松寺の和尚さんだって、行先ぐらいきいているよ。それに、黒兵衛おやじもいるよ。どこかの辻に、黒兵衛おやじ出て来い、と札を立てておけばいいんだ。……美音さん行こうよ」
「修太郎さんは、ほんとにあたまがいいのね」
「いいともさ。室伏修太郎は、世が世であれば、天下も取ることができる手相をもっているんだぜ」
「だれが、手相を見てくれました？」

「黒兵衛おやじさ。あいつ、盗っ人のくせに、学問もあるし、いろいろなことを知っているよ。あの小父さんの家来には、もって来いさ」
美音は、ちょっと考えていてから、きっぱりと、
「参りましょうか、江戸へ――」
「行くかい！　うん！　行こう！」
修太郎は、顔をかがやかせて、ぱんぱんと、手をたたいた。
「でもね、神子上(みこがみ)様にお会いしても、すぐに柳生但馬守を討って欲しい、なんて言い出してはだめですよ」
「わかっているよ」
「修太郎さんは、せっかちなんだから、心配です」
「大丈夫、大丈夫！　おいらは、あの小父さんに、剣をならいたいんだ。おいら、三年経ったら一流の兵法者になる自信があるんだ。嘘じゃないぜ」
「わかっています。あなたは、とても天分がありますよ。裏庭で、毎朝、木剣をふっているのを見ていますもの――」
「さあ、きまった。これから、行こう」
「ほら、すぐ、そんなに、せっかちなんだから……」
たしなめつつも、美音はおのずとこみあげるうれしさを、顔からかくせなかった。
美音と修太郎が、清光寺住職に見送られて、江戸へ発った日は、今日から春になると報せでも

するような、あたたかい微風が野にそよいでいた。

　事実、春が来ている証拠には――。

　森の常緑針葉樹の梢には、黄味の勝った、透明な若葉が、陽光をうけて、伸びようとしていたし、その針葉樹のあいだにはさまった落葉濶葉樹も、艶のある若芽をふいていた。

　そして、二人が過ぎて行く野道には、青い若生が、やわらかく光っていた。

　小鳥のさえずりも、空にあったし、くさむらをかすめる小動物の影も、いきいきしていた。

　修太郎は、うれしくてたまらず、自身でつくった木剣で、打ち据えるべき獲物をねらって、絶えず、右へ、左へ、とくさむらへおどり込んでは、また、美音（みね）のそばへもどって来ていた。

　そのうち――。

　美音は、けものの鋭い啼き声をきいて、立ちどまった。

「こいつ！」

　修太郎が、第二撃をくわえるべく、木剣を振りかざした下から、ぴょんと跳びはねたのは、いっぴきの小狐であった。

「修太郎さん！」

　美音は、なんとなく、可哀そうになって、お止しなさい、と言いかけたが、もうその時には、傷つきつつも、小狐は、灌木の嫩葉をゆるがせて、二間あまり、飛んでいた。

「やるかっ！」

　修太郎は、やっきになって、追った。

「修太郎さん――にがしておやりなさい」

　美音の声は、しかし、少年の耳には、とどかなかった。

　たちまち――。

　むこうの森の中へ、修太郎の姿は、馳せ入ってしまった。

樹間に、神社の屋根の鰹木（かつおぎ）が、ちらちらとのぞいていた。

――神さまのお使い狐だったら、修太郎さんは、ひどい罰があたるのではないかしら……。

本気で、美音は、その不安を抱いた。

　修太郎は、なかなか、もどって来なかった。

　美音の不安は、次第に、大きくなった。

　しかたなく、じぶんも、その森へ入って行くよりほかはなかった。

　陽光のさえぎられた、ほの暗い木立の奥を、すかし見て、

「修太郎さあん――」

と、呼んでみたが、そのこだまがかえって来たばかりで、なんの返辞もなかった。

　美音は、烈しい胸さわぎをおぼえた。

　ぎょっ、となったことだった。

　朽ちはてて、ひと押しすれば、音たてて倒れそうな鳥居の、ちょうど真下に、修太郎が、胸まで土の中へ埋まって、がくんと、首を仰向けていたのである。

　気を失っていた。

「修太郎さん！」

美音（みね）は、夢中で、走り寄って、ひきずり出そうとした。

病後の美音の力には、修太郎の小さなからだも、意外に重いものだった。

やっと、ずるずると、腰までひきあげた時、美音は、急に、なんともいえないイヤな臭気をかいで、胸が、むかむかとした。

それを怺（こら）えて、修太郎を地面へ横たえると、ふうっと、目の前が紫色に烟るようなめまいが来た。

——いけない！

恐怖が、全身をしめつけた。

この廃れた神社には魔気がある！　そう直感したのである。

小狐の祟りがあるかも知れない、という予感もあったので、美音は、その魔気を吸い込むまいと、息をつめて必死の力をふるって、修太郎を、数間ひきずってから、背に負った。

森をぬけ出るまで、美音は、いくどか、膝を折って崩れ込みそうになった。

喘ぎ喘ぎ……やっと、野へ立つと、もう精根尽きて、修太郎を、くさむらに落した。

すると、修太郎が、ようやく、呻いた。

「修太郎さん！　しっかりして！　目をさまして！」

両手で頬をはさんで、ゆさぶると、ぴくぴくとまぶたを痙攣させて、うす目をひらいた。

「ああ！　よかった！」

大きく溜息をつく美音へまぶしげに焦点をあわせた修太郎は、

「おいら……どうしたんだ？」

と、つぶやいた。

「あそこの神社の入口で、穴に落ちていましたよ」

「穴に……そうだ。おいら穴に落ちたっけ」

「瘴気にあてられて、気が遠くなったのでしょう？」

「う、うん。なんだか、とても、くさかったよ。……もがいたら、それっきり、わからなくなった」

「狐を追いかけた罰ですよ」

「ああ——そうだな」

修太郎は、すなおに、みとめた。

……少年が、元気をとりもどすのは、あっという間である。

修太郎は、さっさと起き上った。

「修太郎さん、おねがいがあります」

およそ二刻あまり、原野の中を横切って来て、にわかに、音たてて、はしって来た驟雨（しゅうう）をさけて、とある古びた阿弥陀堂の庇の下に入った時、美音（みね）が、きり出した。

「なんだい？」

修太郎は、さあっと降りそそぐ水幕に、雲のきれめから、眩しく、陽がさしかけた美しい光景を、見とれながら、ききかえした。

「あの切支丹の屋敷にいらした小母さまのことですけどね」

「うん――」
「修太郎さんは、もう一度、会ってみる気持はないかしら」
　遠慮ぎみに、そういう美音を、修太郎は、見やった。その表情は、少年らしからぬ思案を含んだものだった。
「…………」
　黙って、まじまじと、目を据えて来る修太郎に、美音は、やさしい微笑をかえして、
「どうかしら……会ってみたくはない？」
　と、すすめた。
　修太郎は、ぷいと、顔をそむけた。
「おいら、いやだ！」
　その拒否は、きかぬ気をあらわした口調ではなされなかった。妙に弱いひびきをもっていた。
「どうして、いや？」
「あの小母さんは、おいらを、乞食の子でも見るような目つきをしやがったんだ」
「いいえ、そんなことはありませんでした。あなたが、国は若狭だとこたえたら、なにか、思いあたるふしがおありのご様子でした。それで、両親がいて、そこで育ったかどうか、おききになったのです」
「あの小母さんは、いったい、何を思いあたったんだい？」
「さあ……もしかすれば、あなたの顔が、あの小母さまの親しいお方に似ていたのではないでしようか」

「…………」
　修太郎は、とまどった目色になると、爪を噛んだ。
「修太郎さん」
「う、うん――」
「あなたの名まえは……あなたが、小浜湾の岬にすてられていた時に、つけられていたのではないでしょう？」
「ああ、大谷吉政様が、つけて下されたのだ」
「だから、あの小母様も、ご存じなかったのです。……だけど、あなたの顔は、きっと――」
　と、美音がくりかえしかけると、修太郎は、いらいらした様子になって、
「そんなこと、どうだっていいじゃないか！」
　と、さえぎった。
「いいえ、どうだって、よくはありません」
　めずらしく、美音は、つよい語気で、言いかえした。
「おいら、親なんか、いらないんだ。おいらをすてるような無情な親なんか！」
「にくくて、すてたのではないでしょう。よくよくのふかい仔細があったからだと思います」
「どんな仔細があったか、知らないが……無情だよ！　美音さん、あんたは、もし、あの神子上の小父さんの子どもを生んで、なにか困ったことが起ったら、すてるかい？　え？　すてるかい？」

そうきり込まれて、美音は、当惑するとともに、にわかに、動悸をおぼえた。
——わたくしが、神子上様のお子を生む！
夢にも意識にのぼせたことのない仮定を、修太郎に、口にされて、美音は、頬のあたりが、火のように熱くならずには、いられなかった。
——ああ、もし、そうだとしたら！
「美音さん！」
修太郎が、大声で、呼んだ。
「きいているんじゃないか！　どうなんだい？　すてるのか、すてないのか！」
美音は、思わず、真剣な面持でかぶりをふってしまった。
「すてるものですか！　死んだって……はなしませぬ！」
「そうら、ごらんよ。すてないじゃないか。じぶんの生んだ子をすてる母親なんて、世の中でいちばん、無情なんだ」
そう吐きすてて、じっと、はれ行く野を見つめる修太郎のまなこが、うっすらと潤んだ。
はっと、われにかえった美音は、
「あ——ごめんなさい。わるかったわ。美音があやまります」
そっと、その肩に手をかけた。
「美音さんが、あやまることなんか、ないや……。雨があがったら行こうよ」
修太郎は、うながした。
「ええ、行きましょう」

美音は、修太郎を、あの屋敷に、ともなうことをあきらめた。
……肩をならべて、ものの三丁と辿ったろうか。
竹ぎれをひろって、道ばたの草をたたきたたき歩いていた修太郎が、ふと、
「美音さんは、あの小母さんが、おいらの母上だと思ったのかい？」
「い、いえ……べつに——」
美音は、微かな狼狽をおぼえて、かぶりをふった。
「……おいら、切支丹なんか、きらいだけど——もし美音さんが行ってみようと言うのなら、行っても、いいや」
やがて——半刻ばかり後のこと。
美音と修太郎は、見おぼえのある狭い渓間に入っていた。
修太郎は、ちょっと立ちどまって、樹間をすかして見て、
「今日は、あの音は、きこえないね」
「え？……あ、そうね」
美音は、あの哀切をこめた旋律を耳によみがえらせた。
ふしぎに、あの日から、ときどき、美音の耳に、それはよみがえっていて、なんとなく、なつかしかった。
……やがて、二人は、屋敷の全景を眺める場所に立った。
修太郎は、ちらと、美音を見やって、

「美音さん、なんて、挨拶するんだい？」
と、訊ねた。
「挨拶って？」
「だって、べつに、やって来る理由なんか、ないんだろ？」
「それは……でも」
美音は、修太郎を、じっと見つめて、
「きっと、あの小母様の方で、よろこんで迎えて下さると思います」
「どうだか、わかるもんか」
「いいえ、きっと——」
「ふん——」
修太郎は、一瞬、さっと唇をかみしめたが、急に、両手を、ぶんぶん、ふりまわした。
「美音さんは、やっぱり、あの小母さんが、おいらの母上だと思っているんだ」
「………」
「そうだろ？　え、そうだろ？」
美音は、もうかくせなかった。
「修太郎さん、もし、そうだとしたら……どうする？」
修太郎は、ほんのしばらく、返辞をしなかったが、
「どうもしねぇや！」
と、つっぱなすように、こたえた。

「おいら、うれしくなんかないぜ！」
「ほんとに、うれしくない？」
「ああ、ほんとだとも！　おいら、一人で生きて来たんだ。これからも、一人で生きて行くんだ」
美音は、それが反語であることを、さとると、修太郎の手をとって、無言で、ずんずん歩き出した。
太い角竹のならんだ藪をすぎて、冠木門の前に来るや、二人は、顔を見あわせた。
扉は開いているばかりか、一枚は、むざんにこわされていた。
不安が、胸に来た。
——どうしたのだろう？
二人は、そおっと、門内を覗いてみた。

ぎくっ、となったことだった。
柿葺きの土庇のふかい玄関に、人が倒れている！
美音と修太郎は、ともに、烈しい不安にかられて、しばらく、そこを、石のように動かなかった。
「斬られている！」
修太郎が、ちいさい声でつぶやくや、美音は、思いきって、足をふみ出した。
それは、武士であった。先般、修太郎をつかまえようとした一人のようであった。

のぞいてみると、廊下にも、一人、俯つ伏していた。

「美音(みね)さん！」

修太郎は、美音の手を、ぎゅっとつかみしめた。

「ど、どうしよう？　あの小母さんも――」

「いいえ！　いいえ！」

美音は、つよくかぶりをふった。

……屋内は、いたるところに抵抗の痕跡がのこっていた。

座敷の床の間に掛けられたさんた・まりあ像は、むざんに、ひき裂かれていた。

しかし、もうほかに、仆(たお)れている者はいなかった。

完全な、空屋敷と化していた。

――もしや！

と思って、美音は、修太郎をうながして、苑路をつたって、じぶんたちが弁当をつかった腰掛待合へ、行ってみた。

傾いた陽の、静かな光があるばかりであった。

「つれて行かれてしまったんだ」

修太郎が、ぽつりと言った。

「…………」

美音は、ふかい疲労をおぼえて、ここに腰かけるとぼんやりと、前を流れる渓の水へ、目を置いた。

――異国の神さまを信仰しては、なぜいけないのだろう？

その思いが、脳裡(のうり)にわいていた。

――神さまを信じることが、悪事を犯しているように見られるなんて！

「美音さん。切支丹は、つかまったら、火あぶりになるんだろ？」

修太郎のことばに、美音は、総身に冷水をあびせられたような戦慄(せんりつ)をおぼえた。

あの気品高い婦人が、磔(はりつけ)柱にくくられて、火焔をあびる光景が、ちらと、想像された。

美音は、想像するじぶんまでが、残酷な人間になってしまった気がした。

「修太郎さん――」

「うん」

修太郎も、ひどく神妙な表情になっていた。

「あの小母さまが、火あぶりになんか、なるはずがありませぬ！」

美音と修太郎が、しょんぼりと、冠木門まで出て来た時であった。

彼方の丘陵の麓のあたりから、馬の蹄の音が、きこえて来た。

とっさに、二人は、危険を予感した。

「かくれましょう」

「うん――」

走り出て、楓の林の中へ入って、そっとしゃがみ込んだ。

二騎のようであった。渓間に入って、あきらかに、こちらへ近づいて来た。

急いでいるらしく、蹄の音は、たちまち、耳に高くなった。
修太郎が、そうっと、首をのばそうとするのを、美音(みね)はあわてて、ひきとめた。
渓間を出た地点で、馬はとめられて、なにか相談しているらしく、声があった。そして、一騎ずつわかれて、ふたたび蹄の音が起った。
一騎は、美音たちが辿って来た原野の方へ向う様子であった。
もう一騎が、林の中へ馳せ入って来た。
灌木の繁みの蔭から、透し見ていた美音は、巧みに樹間を縫って飛ぶ騎馬の影を、はっきりと、とらえた瞬間――。
「あ！」
と、声をたてた。
同時に、修太郎も、ぴょんと、立ちあがった。
「黒兵衛おやじだ！」
二人は、声をあわせて、呼んだ。
「おっ――」
手綱を引いた黒兵衛は、頭をまわして、眇眼(すがめ)をこらした。
「これは、意外なところで対面じゃ！」
まったく思いがけないことだった。
黒兵衛は、馬から降り立つと、走り寄って来る二人に、
「あんたがたは、いつの間に切支丹になったかな？」

と、いった。
「ちがわい！」
修太郎は、息をはずませながら、
「おやじこそ、どうして、ここへ来たんだ？」
「御主人様の命令でな――」
黒兵衛は、にこにこして、修太郎と美音を見くらべて、
「よかったわい。これも切支丹の神様のおひきあわせであろうかな」
「あの……あちらへ、お行きになったのは、神子上(みこがみ)様ではございませぬか？」
美音は、訊ねた。
「左様、わしもすぐあとを追うことになって居りますわい」
美音は、微かになった蹄の音に耳をすませて、にわかに胸がはずむのをおぼえた。
「さて――偶然は偶然ながら、これは、どういうことであろうかな？」
黒兵衛は、そう言って、隠れ切支丹の屋敷を見やった。
「おいらたち、あの屋敷の小母さんをたずねて来たんだ」
修太郎が、こたえた。
「ほう……小母さんというのは？」
「志津女(しずぬ)と申されます」
美音(みね)が告げると、黒兵衛はぽんと、わが額をたたいて、

「わしも、実は、その志津女様を、たずねて参った」
「え？」
「志津女様には、われらが御主人が、少年の頃、海山の恩を蒙られたそうな」
「まあ！」
美音も修太郎も、びっくりした。
「あんたがたは、どうして、志津女様をたずねて来たのかな？」
美音は、こたえをためらった。
すると、修太郎が、はっきりとこたえた。
「おいらの母上かも知れない、と美音さんが言うんだ」
「おっ――そ、それは、まことですかな、お嬢様？」
「もしや、と思いまして、たしかめに参ったのですけど、もう、いらっしゃいませぬ」
「おいでにならぬ？」
「はい――」
「何処へ去られたぞい？　わしは、是非とも、御主人の口上を伝えねばならん」
「捕ったんだ、役人たちに！」
修太郎が、叫んだ。
黒兵衛は、無言で、大きく上半身を傾けながら、屋敷へむかって、進んで行った。
美音と修太郎は、それぞれの感慨を胸に抱いて、黒兵衛のもどって来るのを待った。
やがて、ひょこひょこと、冠木門から姿をあらわした黒兵衛は、いたましげに、かぶりをふって、

「もう、どうにも、ならんわい」
と、つぶやいた。
修太郎が、ぱちぱちと、まぶたをまたたかせて、
「切支丹は、火あぶりになるんだろ？」
と、美音に投げた同じ問いを、くりかえした。
「そういうさだめになっては居るがな……、いかんわい。火あぶりは、いかんわい。熱うてかなわん。むごい話じゃ」
黒兵衛は、当惑しきった表情であった。
美音は、なにか、修太郎に言いかけようとした。
修太郎は、くるっと、うしろ向きになると、走り出した。
みるみる、小さくなって、渓間へ消えると、そこから、声いっぱいに何かを叫んだ。

毒

昇って来た大きな赤い月にむかって、源四郎は、馬をとばしていた。
およそ、この方角、ときめて、疾駆して来たのであったが、不安はあった。
富士のかたちをした森、というだけの目当であった。
原野の広さは覚悟していたが、日暮れてから、かなり時間を経過して、なお、その森がみとめ

られないのであった。
記憶にとどめた絵図面の不確実さが、思われた。
北へ行くべきを、西へ走っているような気もしていた。
——あれか？
と、彼方に浮きあがった森をみとめて、馬を停めると、じっと、双眸を凝らした。
富士のかたちとは、思われなかった。
——ちがうようだ。
視線をめぐらして、方角をたしかめた。
——まちがいないのだが……。
さらに、遠方を目指さなければならないのか、と按じた。
その時——。
南の方にあたって、はるかに、馬蹄の音が夜風に乗って来た。
かなりの数の騎馬ときいた源四郎は、一瞬、脳裡にひらめく予感で、
——よし！
と、自身にうなずいた。
すばやく、地上へ降りると、鞍の下に敷いていた毛氈を切りとって、細く裂き、馬の蹄を包んだ。
音を消すためであった。
ふたたび、馬上の人となるや、凄じい勢いで、南に向って、とばしはじめた。

満月が、その赤い色を消して、光を冴えさせはじめた頃あい、源四郎は、とある台地から、渓間へ移る薬研形の坂路に達していた。
杉木立が、一方の原野をさえぎっていて、奥深かった。
これは、源四郎にとって、好都合であった。
巧みに馬首をあやつって杉木立の中へ、乗り入れると、
——まだ、かなり間がある。
と、おのが疾駆ぶりに、満足をおぼえた。
みごとに、先廻りしたのである。
やがて——。
いそがしく、馬をあおって来る数騎が、坂路の上に出現した。
源四郎は、木下闇の中で、微笑した。
予感は、当っていた。柳生道場の面々に相違ない。
——ここに、神子上源四郎が、いるぞ！
胸中で、昂然と、そう叫んだ。
「まだか？」
「いや、もう程なく——」
源四郎の眼前を駆せ過ぎる時、騎馬の群には、その短い会話があった。
源四郎は、微笑して、これをきいた。

杉木立を抜けると、平地になって、松の繁った断崖の裾をまわることになる。

蹄の音が、断崖にさえぎられて、きこえなくなるのを待って、源四郎は、猛然と、道へ馬を乗り出して、とばしはじめた。

目的地まで追跡する最初の予定を、更えて、敢然と襲撃する肚をきめたのである。

敵は、六騎。

――斬れぬはずはない！

上半身を、鞍の前輪に伏せるようにして、鞭を鳴らして、矢のように、坂を下って行った。

……殿りにいた者が、後方から迫って来る音に、はっと気づいて、ふりかえった時、すでに、距離は、十間もなかった。

「誰だ？」

前の者たちも、頭をまわした。

「何者っ！」

殿りの者が、声をはりあげて、誰何した。

それに応えて、すっと身を起すなり、源四郎は、ぱっぱっと、鞭を馬へ打ちあてて、通り魔が襲いかかるに似た勢いで、肉薄した。

そして、三間余に迫るや、一剣を月光に燦めかせて、八双にかまえた。

「やっ！」

「おっ！」

短い、鋭い驚愕の叫びに対して、

「神子上源四郎、参るっ！」

颯爽として、あびせた。

殿りの者が、抜刀して、これに備えるいとまを与えず、流星のように真一文字に突入するや、

「えいっ！」

一颯――大きく宙に弧線を描いて、これを、のけぞらしていた。

次の瞬間には、もう、ぴたっと、八双の構えにもどっていて、月かげを宿して冴えた双眸を、前の敵にあてていた。

「うぬっ！」

さきの四名に、距離をひらかせようとして、その者は、片手摑みの太刀を源四郎にさしのべつつ、手綱をしぼって、馬首を向けかえようとした。

不意をくらって、馬が前脚を、高だかと、はねあげた。

そのせつな――。

源四郎は、その脇に出ざま、敵の太刀を打ち落していた。

両手が、しびれて、あっと、前へのめったところを頸根へ、一撃が来て、源四郎が走り過ぎた時には、もう馬上から消えていた。

一撃で、一騎を倒す――。

神技ともいうべき迅業をもって、源四郎は、さらに二名までも、地上へ転落させた。

のこり二名は、追われることの不利をさとって、ぱっと左右へ――一方は、松の樹蔭へ、もう

一方は、深い草むらの中へ、逃げた。
躊躇なく、源四郎は、後者を追った。
草むらが、馬脚をはばむ茂りかたをしていれば、数間も追う必要はなかったであろう。
土は堅く、草はやわらかであったので、必死に逃げのびようとする敵騎を、とらえるには、ものの二町も疾駆しなければならなかった。源四郎の誤算であった。
もう一騎を遁す焦躁にかられつつ、ついに、追いつめるや、のびあがりに、一閃を送った。
これは、はずれて、敵は地上へ跳んだ。
源四郎もまた、馬をすてると、じりじりと迫った。
背後に、せわしく馳せ過ぎて行く馬蹄の音をきいて源四郎は、
——いかん！
と、おのが誤算を悔いた。
一騎を遁すことは、五騎を仆したことを全く無駄にすることであった。
なぜならば、隠密が徒党を組んで行動を起す場合、必ず幾組かに分れて、時間と距離を置きつつ、異変に備える定めであったからである。
源四郎は、敵影に、ほんのわずかながら、怯じ気が滲むのを見てとると、一歩退った。
一騎を遁してしまった以上、この敵を斬ってもしかたがない。
「去れ」
冷やかに、言いすてて、馬へ歩みかけた。
隠密にとって、慈悲を受けることは、屈辱であった。

おのれの恐怖心を、対手に看破されたと知るや、
「勝負っ！」
呶号とともに、五体を躍り上らせて、斬り込んで来た。
源四郎は、草に身を沈めて、きえーっと横薙いだ。
断末魔の叫びが、夜空に吸い込まれて行った時、すでに、源四郎は、馬上にあった。
逃げて行く者の音は、もはや、耳にはとどかなかった。
追うのは徒労であった。
源四郎は、月の原野を、じいっと透し見た。
夜霧がかかっていて、目的の森を見わけることはできなかった。

「ふうむ——成程な」
むざんに裂かれたさんた・まりあ像が床の間にある座敷で、黒兵衛は、腕を組んで、大きく三、四度、合点した。
美音と修太郎が、こもごも話すいきさつをきいて、志津女がもしかすれば修太郎の生母であるかも知れないというわけがわかったのである。
「これは、早速に、御主人様に、お報せしなければならんが……」
「小父さんは、いったい、どこへ行ったんだい？」
これは、美音もききたいところだったので、黒兵衛を、じっと見まもった。
「五十万両の黄金をさがしにな」

「え？　五十万両だって？」
「武田信玄がのこした甲金でな。これが、さる場所にかくされていることを、御主人様は、お知りなされたという次第」
「へーえ、おどろいたな。夢みたいな話だな。さがし出したら、小父さんのものになるのかい！」
「そのことだて――」
　黒兵衛は、にやにやした。
「その五十万両を、志津女様にさしあげる、ということに相成ったら、どうであろう」
「どうしてだい？　どうして、あの小母さんに、あげてしまうんだい？」
「御主人様に、この秘密を教えてくれたのが、この江戸の切支丹の総支配であった原主水殿でな、つまり、原主水殿は、五十万両を、切支丹をひろめるために、使おうと考えて居られた。不運にして、捕えられて、地下牢にとじこめられてしまったので、同志の人々に教えるすべが無くなった。そこへ、たまたま、神子上源四郎という兵法者が捕えられて来たので、その人となりを見こんで、遺言されたわけであるな」
「小父さんは、切支丹じゃないじゃないか」
「切支丹ではないが、志津女様に海山の恩を蒙られたお人とわかったので、主水殿は、秘密を打明けられたのだて」
「小父さんは、あの小母さんに、五十万両を渡してしまうつもりかい？」
「左様さ、恩がえしをしなされる」
　修太郎は、ちょっと、爪をかみつつ、考えていたが、

「おいら、あの小母さんの本当の子であったらいい」
と、つぶやいた。
「五十万両を受け継がれるからかの。なかなか、欲深いわい」
「いいや！」
　少年は、つよくかぶりをふると、
「おいら、美音さんのために、豊島家を再興してやるんだ。そうなんだ。徳川なんかに仕えないでも、元の通りに大きな豪族になればいいんだ」
「ははあん、五十万両で、一騎当千の牢人者を何十名か召しかかえて、秩父山中にでもたてこもって、お城でもきずくかな。お嬢さんは、女城主におなりになる」
　黒兵衛は、少年の夢に、調子をあわせた。
「修太郎さん、そんなことを考えるのは、お止しなさい」
　美音は、たしなめた。
「美音さん、おいら、空想しているんじゃないぜ。……小父さんも、牢人者だろ。けど、どんな大きな大名にでもなれる人だろ？」
「左様、左様――それは、この黒兵衛が、うけあうぞ。勇気、忍耐、温情――お若いのにあれだけの大器は、めったにあるものではない」
「だから……だから、美音さんのおむこさんになって豊島家を再興すればいいんだよ。五十万両は、それにつかえばいいじゃないか」

「うまいっ！　その通りだ」

　黒兵衛は、ぽんと、膝をたたいた。

　美音（みね）は、思わず、涙ぐんだ。修太郎が、いつの間にか、じぶんの心に秘めた想いをくみとってくれていて、とっさに、こういう計画をたててくれるということは、なんというやさしさであろう。

　ともに、みなし児の淋しさが、心と心をより添わせて、姉弟にもまさる仲にしていたのである。

「では、ひとつ、おぬしとわしとで、志津女（しずめ）様におねがいすることにしようかな」

「うん――」

　好人物の盗賊ときかぬ気の少年は、うなずきあった。

　美音には、もとより、それがゆるされたとしても、五十万両を受ける気持は、みじんもなかった。ただ、神子上（みこがみ）源四郎の妻に、たとえ一日でいいから、なることができれば、もう次の日に死んでも本望であった。

　しかし、それを口にする勇気はなく、

「かくされてある場所と申しますのは、どのあたりなのでしょうか？　おききですか？」

と、訊ねた。

「この十条野の北辺に、富士の森というのが、あるそうな。鎌倉がはなやかであった頃、箱根権現と同じ資格の権現社を森の中にまつって、足利頃までは、祭礼もにぎにぎしかったが、いつの間にか廃れて、いまでは、詣でる人もない、という。そこの境内に、五十万両が埋めてある――」

　これをきくや、美音は、慄然として、動悸をおぼえた。

――あそこだ！

あやうく修太郎とじぶんの生命を奪おうとした魔気のこもった――あの神社のことである。

「修太郎さん――」

　美音は、喘ぐように言った。

「神子上様が、お行きになったのは、あそこです。あの神社です！」

「へえ、あそこか――。あそこに、五十万両が、かくしてあるのかい」

　修太郎は、自分が危険な目に遭ったことなど、けろりと忘れた顔つきだった。

「あんたがたは、知って居ったのですかい。これは、いよいよ、偶然じゃわい」

　黒兵衛は、にこにこした。

　美音は、こわばった表情で、黒兵衛を見つめると、

「すぐに、行って下さい。いけないのです。あそこには、何かおそろしいものがあります。神子上様に、くれぐれも御用心あそばすように、知らせて下さい」

「おそろしいもの、というと？」

　黒兵衛は、けげんそうに、美音を見かえした。

「修太郎さんが、小狐を追いかけて行って、鳥居の下の穴に落ちこみました。すると、そのまま、気を失ってしまったのです。ただの穴ではなかったのです」

「そうだ！　おいら、穴に落ちたとたんに、なんだかいやなにおいをかいで、それで、それっき

り、なにがなんだか、わからなくなっちまったんだ」
　修太郎も、真剣な目つきになった。
「わたくしも、修太郎さんをひきあげようとして、その臭気をかいで、めまいをおぼえました」
「ふーむ！」
　黒兵衛は、腕を組んで、小首をかしげた。
「あの神社に、誰も、おまいりに行かなくなったのは、きっと、わけがあるのです。……なにかの祟りがあるのです。きっと、そうなのです。あれは、ただの瘴気ではありませんでした。……黒兵衛さん、すぐに、行って下さい！」
　美音の必死な言葉に、しかし、黒兵衛は、なお半信半疑の様子をしめした。
「わしは、怨霊とか狐狸のたぐいの祟りなど、あまり信じない方じゃが……」
「いいえ、いいえ！　わたしも、修太郎さんも、ほんとに、ひどい目に遭ったのです。嘘ではありません」
「それは、祟りではなく、ほかの何かの原因ではありませぬかな」
「そうかも知れません。でも、ともかく、危険なのです」
　黒兵衛は、立ち上った。
「大急ぎで、追いかけましょうわい。……したが、われらが御主人は、そのような毒気に対しては、敏感なはずですぞ。その心得がなくては、兵法者とは申せますまいて」

　それと知らずして、富士の森に到着した源四郎が、まっすぐに、鳥居をくぐらなかったのは、

幸運であった。
　敵の到着を待ったために、神社の裏手にかくれることを、考えたからであった。
　裏手へまわるには、馬脚のぬめる湿地帯を突破しなければならなかった。いや容易に突破しがたいと見てとったから、源四郎は、敢えて、その手段をえらんだといえる。
　森は、大きかった。
　馬をはげましながら、難渋を克服して行った源四郎は、
　——これは、ただの森ではないな。
と気づいていた。
　往昔、これは、豪族の砦であったに相違ない。
　三方を湿地帯にかこまれた地形は、守るに絶好である。
　曽て——。
　豪族たちは、自らの利益のために、その所有地を、都の権門勢家あるいは近畿の大社寺に寄進して、荘園とし、自らは荘長荘司と称して、従来通り土地の実権をにぎり、且つそれを子孫に世襲せしめて来た。しかし、やがて、荘長荘司の地位も、後から来た地頭の勢力に圧迫されて、次第に、崩壊して行った。
　足利の中期から、元亀天正の頃にかけて、荘園の紛争は、絶え間なく、くりかえされた。
　もともと、武蔵野の豪族たちは、地方在庁の官吏であり、中央の綱紀の緩んだのに乗じて、利権を漁り、勢力を扶植して、荘園を営んで来たのである。そして国守自らは任が終って、京へ帰っても、あるいは、その子を派し、または、孫を遣って、土着せしめ、漸次根を張り枝をひろげ

たのであった。

平安朝の末期から鎌倉時代にかけて、武蔵野の各地は、ほとんど、これらの大小豪族で、うずまっていた。これを総称して、武蔵七党武士、といった。

七党武士は、剛勇をもって顕(あらわ)れていたが、同時に、原始の野に生い育った無学単純の故に、義に就き恩に感ずることも早かったが、また義を棄て恩を去ることも、一朝一夕の仕事となっていた。いわば、所領の安堵を得ようとするあせりがその進退を、軽率なものにしてしまったのである。

その伝統が、戦国の世になっても、のこっていて、豪族たちは、しだいに、ほろび行く運命を、如何ともすることはできなかったのである。

この富士の森も、それら豪族の一人が、最後の砦として、襲い来る西国の軍勢に抗すべく、拠ったところではあるまいか。

森の中に、馬をすてておいて、源四郎は、断草離々たる小径を、さがしあてた。

樹木がまばらになり、館の址(あと)とおぼしい石階礎石が足にあたった。

樹木は、松で、その梢に朧月がかかっていた。

辿って行くうちに、月あかりにほの白く浮いた花を見出した。迎春花であった。

昼間眺めれば、黄色であるが、夜の光にそめられて、かれんな白色であった。

――この館に住んでいた人たちが愛(め)でたものか。

ふと、感慨が、胸に来た。

年々歳々花相似たり
歳々年々人同じからず

あだし世の、夢にうつろう儚(はかな)い人生が、ここにも、偲(しの)ばれた。

あるいは、この迎春花を植えたのは、美しい可隣な乙女であったかも知れぬ。武蔵野のただ中に生れ、育って、四季のうつりかわりに、よろこびやかなしみをさそわれつつ、やさしい心根をはぐくんだ、と想像してみる。

戦火が、襲って来て、その優しい姿は、館とともに、むざんに消えはてたのであろうか。

源四郎は、立ちどまって、行手に盛りあがった築地の跡をみとめた。

あきらかに、そこに、宏壮な館があったと、判る。

ふと――。

美音の俤(おもかげ)が泛び、源四郎は、

――こうした人里はなれた森の中で、あのやさしい娘と、夫婦になって、ひっそりと庵をあむことができたら……。

と、想った。

良き妻になってくれるであろう。自分もまた、良き夫となろう。……望んで、かなえられぬことはないような気がする。

源四郎は、月かげの中で、ひとり、微笑した。

――おれは、死地に入ろうとする毎に、あの娘の俤を、心に描いている。

ともに誓いあった仲ではない。行きずりといってもいい他人なのだ。にも拘らず、どうして、

このように惹かれているのか。

孤独で生きて来た男が、はじめて、胸に宿した若い美しい俤であった。

いつか、めぐり逢うであろう期待を、ずうっと、もちつづけていることを、いまは、源四郎は、否定しなかった。

美音（みね）が、自分を好いていてくれることに、すこしも疑いがないのも、ふしぎであった。

――今夜を、生きのびて！

自分に言いきかせると、源四郎は、築地跡を越えた。

深い叢竹（むら）を抜けると、社殿の北門に出た。

夜目にも荒廃したたたずまいであった。瑞垣は崩れ、屋根の大千鳥や軒唐破風は壊れて、垂れさがっていたし、板壁は破れていた。

源四郎は、本殿の横手をまわって、幣殿に入った。

月かげの忍び入った内部は、蜘蛛（くも）の巣だらけで、一歩一歩、イヤな音が軋（きし）った。

幣殿と拝殿との境に来て、源四郎は、立ちどまった。

境は、桟唐戸によって、仕切られていた。

そこで、敵の来るのを、待つことになった。

腕組みをして、微動もせず、遠くの音をききわけようと、耳に全神経をあつめて――約四半刻が過ぎた。

きこえる――。

しかし、源四郎に、闇の中で、眉をひそめさせたのは、それが、一騎の蹄（ひずめ）の音だったことである。

逃げた者が、ただ一騎で、むかって来た、と判断するよりほかはなかった。

――どういうのだろう？

当然、数騎あるいは十数騎が勢いよく森に入って来るものと、考えていた源四郎は、一騎で来た敵の肚裡（はら）を、はかりかねた。

一騎に偵察させておいて、本隊は、用心ぶかく、森の外に待機している、と受取ってよいのかも知れない。

いずれにせよ――。

こちらは、動かずに、待つだけのことである。

まっしぐらに、鳥居をくぐって来た騎馬は、その荒いいななきで、月の原野をひた走って来たことをしめした。

地上に降り立った黒衣の士は、なんのためらいもなく、階（きざはし）をのぼって、拝殿にふみ込んで来た。

そして、燧石（ひうちいし）を打って、用意の紙燭に火を点（つ）けた。

ぼうっと、手もとから、うしおのように、赤い灯が闇をおしやって、ひろがった。

桟唐戸の隙間から、じっと眸（ひとみ）を据えた源四郎は、対手もまた、こちらへ視線を送って来るのを見て、

——覚悟ができているな。

と、読んだ。

「神子上源四郎殿に、申入れる」

対手は、呼びかけて来た。

「…………」

源四郎は、動かず、無言だった。

「それがし、考えるところあって、貴殿に味方いたしたい」

申出たのは、そのことだった。

——そうか！

源四郎は、合点した。しかし、なお、ふかく、沈黙をまもった。

「神子上殿。いつわりは申さぬ。それがし、桑田鎌之助は、柳生の道場には、二年前に入門した者。もともとは、馬庭念流を修めて、これが正統を継承いたすべき身であり、柳生流をひそかにぬすむ使命を帯びているのでござる」

「…………」

「五十万両に目くらんで、柳生に背叛いたすのではこれなく、ひとえに、貴殿が一刀流の神技を慕う者でござる」

「…………」

「神子上殿！　神明に誓って——」

桑田が、語気に必死なひびきをこめるや、源四郎は、すっと、境から、姿をあらわした。

「お手前は、いま、柳生流をひそかにぬすむ使命を帯びる、と言われたな？」

「左様——」

「すでに、ぬすんで、使命は達した、と言われるのか？」

「それは……」

「まだ、ぬすんでいないのであれば、なぜに、背叛される？」

「貴殿の一刀流の精妙にうたれたいまは……」

「ふふふ……」

源四郎は、薄ら笑った。

「されば、他日、他に何流かの秀れた技倆を観たならば、また、一刀流を裏切る、と言われるのか？」

「…………」

桑田は、こたえにつまると、本能的に、一歩退った。

その面上には、微かな戦慄が滲んだ。

「この神子上源四郎をあざむくには、もっとほかに巧妙な方法を思いつくべきであった。……自身、本心で、柳生に叛くことを考えたのであれば、これは、兵法者として、義によって、ゆるせぬ。いずれにもせよ、お手前の生命は、ここで落ちるぞ！」

冷然と、あびせて、すっと、滑り出た。

桑田は、灯を消しざま、数尺を跳び退った。

源四郎は、抜かずに、しずかに迫って行った。

桑田は、退りつづけた。

洩れ入る月の光は、床を匐っていて、映した二個の影法師を、ゆっくりと移動させた。

一瞬――窮鼠が猫に噛みつくに似た躍動を、桑田の黒影が、起した。

これに応じて、居合抜きの迅業をしめした源四郎の動きは、なんの音も、ともなわなかった。

一方の壁にむかって、つッ走った桑田は、それへ、一刀を突きたてて、がくっと膝を折った。

明けて来た空を、背にして、黒兵衛は、馬をとばしていた。

草の海には、薄い霧が、流れていた。

まだ、鳥もけものも、ねむっていて、蹄の音にも、おどろく気配はなかった。

模糊として烟った世界である。

――本来ならば、だ。

黒兵衛は、自身に言っていた。

――五十万両を盗もうと企てるのは、このわしであるべきなのだ。はんたいに、奪われまいとしているとは、なんという皮肉なめぐりあわせと、いうものであろう……。どうやら、わしも、盗賊稼業を廃めて、忠実な家来として、神妙に勤めるべき秋が来たのかも知れぬわい。

……富士のかたちをした森は、程なく、かなたに浮きあがった。

黒兵衛は、用心深かった。

ずうっとてまえの林の中に、馬を停めておいて、姿も見せずに、草を掠めて、森に達した。

鳥居をのぞむ地点に、しばらく、ひそんでいてから、どうやら、その静寂が無事なものとたしかめて、近づいて行った。

「おっ！」

鳥居の下まで来て、黒兵衛は、大きく目を剥いて、境内の光景に、かたずをのんだ。

惨たる眺めであった。

およそ十数個とかぞえられる人馬の死骸が、そこに横たわっていたのである。

「ふむ！」

まさしく、美音の予言通りであった。

一瞥しただけで、人馬は、斬られて、仆れているのでないことが、あきらかであった。奇怪な毒気にあてられたのである。

左様――一歩、出ようとして、黒兵衛は、その臭気をかいだ。

さいわい、黒兵衛には、息を止める術があった。

大急ぎで、境内を見わたして、そこに、源四郎の姿がないのをたしかめておいて、拝殿へ入った。

そこには、一人の士が、これは、ものの見事に、一太刀で斬られて、こと切れていた。

――御主人のお腕前だわい。

直感した黒兵衛は、さらに、幣殿に入って、

「おーい！」

と、呼んでみた。

おのれの声が、こだまになったばかりであった。

——どうなされたぞ？

不安が起ったが、あわてて、うち消した。

——毒気を避けて、ひとまず、立退かれたに相違ない。

そう自分に言いきかせた。

狂い雨

静寂は、あまりに深いと、どこかで、じーんと、微妙な音が鳴っているような気がするものである。

糸耶（いとや）はその音をききながら、小袖を縫っていた。

それは、宮本伊織に着せる小袖であった。

ここ——千駄ヶ谷の古刹聖輪寺にほど近い一軒家に糸耶が、伊織とともに移り住んでから、もう二月あまりが過ぎた。

隅田河原で、伊織と知合い、なんとはなく、連れられて、その旅宿に立ち寄って、その夜のうちに、糸耶は、犯されたのであった。

伊織に、酒をすすめられ、つい盃をかさねて、酔うたのが迂闊（うかつ）であった。

はっと目ざめた時には、衣類は剥がれて、裸身は、伊織のたくましい腕の中にあった。

事終って、伊織は、床から出た時、

「そなたが好きだ。……好きな女を、わがものにするのになんのふしぎはない。そなたの方で、きらうなら、悪夢であったと忘れすてて、立ち去るがよい」

そう言ったのである。

糸耶は、立ち去れなかった。

——憎い男！

伊織を、その目で見たのも、長い時間ではなかった。

毎夜、伊織の腕の中で睡るうちに、糸耶の心は、いつとなく、こうなる運命であった、と受けとっていた。

そのうちに、糸耶は、いつすてられるか、という不安を意識に置くようになっていた。それは、もう、糸耶が、伊織にすてられては、生きて行き難くなったことをしめすものであったろうか？

伊織が、いつまで、この江戸に滞在しているのか？　なんの目的で、とどまっているのか？

そして、江戸を去れば、何処へ行くのか？

糸耶は、知らなかった。伊織も語らず、糸耶も、きかなかった。

糸耶は、伊織の行くところなら、どこまでもついて行く決意をしていた。

春日局に対する復讐心は、いつとなく薄れていた。糸耶は、やはり、若い女でしかなかったのである。

この家を借りてからは、糸耶は、妻としてのくらしに、心をくばるようになっていた。伊織

は、時を定めずに、ぶらりと立ち出て行き、また、ぶらっと戻って来たが、その留守のあいだ、糸耶は、底知れぬ寂しさに陥入っていて、帰宅の音をきいて、はっと、われにかえるのを常とした。

いまも――。

宵の静寂の中で、糸耶は、ただ機械的に指を動かしながら、しんしんと身にしみ入って来る音なき音に、孤独感をあじわっていた。

ふと――。

糸耶は、遠く、微かに、経声が起っているのを、ききわけた。

聖輪寺で、勤行がはじまったのであろうか。

しばらく、耳をかたむけているうちに、糸耶は、ひとつの歌を思い出した。

いかでわれ、清く曇らぬ身となりて、心の月の影をみがかん

西行法師がつくった一首であった。

保元二年の秋の末、法師は、東へ東へと辿って来て、蘆花風にひるがえる武蔵野の原に来た。塵外の身に、なお旅路の塵をつもらせて、草より出て、草に分け入っているうちに、何処からともなく、風のもたらす読経の声をきいた。

――はて？

笠を擡げて、四辺を見まわした西行は、声を案内(しるべ)に足をはこんで行くほどに、草を拓(ひら)き、茅を束ねて、小さく結んだ庵の前に行き着いた。

頭に雪をいただき、眉に霜を置いた一僧が、経几にむかって、余念もなく、法華経を誦していた。

西行が、声をかけると、やおら振りかえった老僧は、おだやかな微笑をかえして、請じた。

一室の内は、粛然として、一物も置いてなかった。

老僧は、西行の問うままに、

「それがしは、郁芳門院の武士でござったが、指折りかぞえれば、六十余年前、女院には図らずも亡(う)せ給うて、それがしは、あまりの浮世の果敢(はか)なさに、手ずから髻(もとどり)を切って、都を立ち出て、野ともなく里ともなくさまようちに、この野中に住みつくように相成り申した。朝夕、法華経を誦むおかげか、寒暑にも冒されず、虎狼にも襲われず、ときおり、ゆゆしき天童がおとずれ来て、食物を置いてくれ申す故、飢えもせずにかく罷り在るのでござる」

と、物語った。

天竜童子、以為給仕の妙文に合(かな)えるもの、身はすでに仙中に入っていると、思われた。

郁芳門院とは、白河天皇の皇女媞子(よしこ)内親王のことで美貌は古今に比なしとたたえられた。おそらく、この人物も、ひそかに、恋していたに相違ない。

西行も、もとは鳥羽上皇に仕えていた北面の武士であり、浮世をはかなんで、弓矢の道をすてたのである。

彼我相似て、ともに、感慨の情深く、両者は、語り継いで、夜を明かした。

その別離にあたって、西行が誦んだ一首がそれなのであった。

糸耶は、老僧が結んだ庵は、あるいは、このあたりであろうか、と思った。

読経の声がやんで、さらに、半刻ばかり過ぎた頃あい——。
糸耶は、ふと、裏手に、誰かが、ひそんでいるような気がした。
——何者であろ？
直感は、鋭くはたらく糸耶であった。
立って、厨子棚から短剣をとると、音をしのばせて、そっと、裏口へ近づいた。
裏手は、深い竹藪になっていた。
いつの間にか、小雨が降っていて、笹から落ちる微かな雫の音が、夜の静けさを一層さびしくしていた。
板戸に耳をあてて、じっと、外の気配をうかがった。
消えている。
——気のせいであろうか？
思いかえしながらも、なお、しばらくは、そこを、じっと動かずにいた。
公儀の探索は、一応うちきられているとはいえ、気をゆるめてはならぬ身であった。
伊織には、まだ打明けてはいなかったが、いずれは秘密を知られることを覚悟していた。
「よし、それならば、わしが力を添えて、そなたに春日局を討たせてやる」
あるいは、伊織が、そう言ってくれるのではなかろうか、という期待もなくはなかったが……。
しかし、それよりも、伊織に見すてられまいとねがう女心が、糸耶を弱くしていて、このくらしが一日でも永くつづいてくれることの方が、大切になっていた。

いま、糸耶が、いちばんおそれているのは、捕吏に、この家をさぐりあてられることだった。
——やはり、気のせいであったのだ。
自身に言いきかせて、糸耶は、居間へひきかえして来た。
とたんに——水をあびたように、糸耶は、そこに、立ちすくんだ。
いつの間にか、音もなく、忍び入って来た者が、そこに坐っていたのである。
空斎であった。
「無礼でありましょうぞ！」
一瞬の驚愕が去ると、烈しい憤りで、糸耶は、叫んだ。
「無礼は承知の上でござるよ」
垂れ目を、暗く光らせて、空斎は、うそぶいた。
糸耶は、これまで、この人物を相談あいてにしていたじぶんが、ふしぎに思われた。
なんという陰惨な翳をもった存在であろう。眺めているだけで、こちらの心までが、どす黒く染まるようであった。
その矮小の軀から、怪しい毒気でも、ゆらゆらと、ただよい出ているとも見える嫌悪感をおぼえずにはいられなかった。
糸耶が、遠くはなれて坐ると、空斎は、ふゝゝゝと、含み笑いをしてから、
「糸耶殿も、所詮は、かよわい女子であったようじゃな」
と、言った。

「…………」

「宮本伊織のような冷酷な男に、だまされるとはの――」

「だまされたのではありませぬ」

「だまされたのでなければ手ごめにされて、あわれや、もうこの男にすがって生きて行くよりほかはないと思いきめた、と言いかえようか」

「…………」

「いずれ捨てられる身が、日々の不安で、ひどうやつれてござる」

「お黙りなさい！」

糸耶は、きっとなって、空斎をにらみつけた。

「わたくしをさげすむために、わざわざ、この家をさがしあてて、泥棒猫のように忍び入ったのか！　その振舞いをこそ、慙じるがよい！」

「なんの――わしが、慙じるところは、みじんもない。わしは、これまで、お前様のために、何事もよかれと祈って参ったのじゃ。わしの忠告が、ひとつでもあやまっていたであろうか。お前様の方で、わしを信頼しなかったばかりに、策もあろうに、自身一個の智慧と力で、為そうとして、ことごとく失敗して、このざまではないか。宮本伊織の玩弄物になって、やがて、敝履のごとくすてられて――それでは、豊島刑部明重の長女たる氏素姓が、泣こうぞ！」

糸耶は、すっと立ちあがった。

「出て行くがよい！」

「出てけとな――」

空斎は、にたりとした。

糸耶は、一瞬、鳥肌がたった。

「生命が惜しくば、伊織殿のもどらぬうちに、出て行くがよい」

「生命など、惜しゅうはない」

空斎は、平然として言いかえすと、やおら、腰を上げかけた。

糸耶は、本能的に、一歩退って、身がまえた。

せつな――。

「あっ！」

空斎の右手が、おどった。

糸耶は、顔へ飛んで来た白いつぶてを、両手でふせいだが、当って、ぱっとくだけるや、濛と舞いたつ煙が、じぶんの意識をうばう魔力を有つものと、気がついた時は、もうおそかった。

すばやく、次の間へ、にげた空斎は、煙が消えてから、のそりと、もどって来た。

ま白い柔肌、翠羽のように優美な眉、明眸を伏せた長いまつ毛、花に似て露をふくむ朱唇――

それらが、いま、空斎の腕の中に、

――意のままにするがよい。

というがごとく、ゆだねられている。

このしっとりとした若い女体の重みは、どうだ。黒髪の匂い、柔肌の香、そして、乱れた裾からのぞく脛の、なんというなめらかな白さ。

空斎は、あえいだ。

この幾歳――空斎は、いかにも色情などは枯れはてた態度で、美しくなってゆく糸耶(いとや)のすがたを、ひそかにじっと見まもって来たのである。

誰が知ろう。この醜い矮小(わいしょう)の軀の中に、糸耶を恋うて燃える情熱が、かくされていたことを――。

機会あらば、と蛇のごとく狙っていた次第ではない。あるいは、人知れぬままに、永久に、その胸に秘められたなり、おわったかも知れない。

たまたま、宮本伊織という色子面の剣客があらわれたおかげで、この陰惨な人物の胸に、狂暴な獣慾がわきたち、その機会をつかむべく、この一月あまり、物蔭から、牙をといでいたのである。

――おれは、糸耶を抱いているぞ！ 夢ではないぞ！

飢えた野獣が、いまこそ、獲物をとらえた歓喜で、空斎は、糸耶の胸のふっくらと盛った隆起のひとつを、わななく五指で、鷲掴んでみた。

――これだ！ これが、おれに、欲しかった！

濁りまなこを、かっとひきむき、炎でも吐くかのように、熱した息を噴いて、ぐぐぐっと、抱き腕に力をこめた。

「……む、むっ！」

意識なきままに、糸耶は、苦しさにうめいた。

――おのれのものだ！ もう、はなさぬ！ 死んでもはなさぬ！

空斎は、糸耶のからだを、肩にのせて、よろよろと立ち上った。

おれは、外道(げどう)になってやる！ それでよい！ 外道になって、地獄に落ちようとも、おれは、満足だ！

空斎は、ぐったりと重い女体をかついで、小雨の中へ出た。

降りかかる冷たさも、おし包む闇の深さも、空斎には、おのれの味方のように思われた。この雨の闇では道に行会う者は、ないであろう。

肩にくい入って来る重みは、かえって、空斎の五官をあおる強い刺激であった。

ふらふらと、憑(つ)かれたように、空斎は、歩きつづけた。

と――。

空斎をして、はっ、とわれにかえらせたのは、遠くからきこえるうた声であった。

上方よりわたって来た、近頃流行の弄斎(ろうさい)節であった。

　逢うて立つ名が
　立つ名のうちか
　逢わで立つこそ
　立つな名なれ

――おっ！ 伊織めがっ！

空斎は、闇の中に、にたっとわらった。

むこうから、帰宅を告げてくれたのである。

空斎(くうさい)は、雑木林の中へ、手さぐりでふみ入ると、そっと、糸耶(いとや)を、くさむらへ横たえておいて、息をころした。

微醺(びくん)をおびて、伊織は、そこまで戻って来た。

傘をさして、提灯を携(さ)げていた。傘にも、提灯にも、家紋が入っていた。

——お！　彼奴、土井大炊(おおい)の屋敷に参って居ったな。

空斎は、伊織がそこへ招かれたことに、何かがある、と直感的な疑惑をおぼえた。

それよりも——次の瞬間、空斎の全身を凍らせたのは、

「うっ……む、むっ！」

と、糸耶(いとや)が、ひくく呻いたことだった。

——南無三！

空斎は、あわをくらって、その口をふさごうとした。

だが、その時はもう、伊織の足が停められていた。

濡れた闇を透かして、じっと、雑木林へ、視線を据えていたが、

「なんだ？」

ふいに、大きく、声をかけた。

空斎は、歯を食いしばり、肚裡で、唸った。

九分九厘まで、おのが計画が成った——と歓喜したのも、つかの間であった。

——なんとしょうぞ！　むざむざ、渡して、たまるものか！

翼があるものなら、糸耶を抱いて、雨雲の奥へ、翔(か)け上りたかった。

「おいっ！」

伊織は、ずかずかと、くさむらへふみ込んで来た。

「そこに、ひそんでいるのは、何者だ？」

——おのれ！　おのれっ！　おのれっ！

空斎は、声なく、焦躁の喚(わめ)きをあげた。

「こたえぬところをみると、怪しい奴だな」

伊織が、三間の間近に迫るや、空斎は、狂気のごとく、叫んだ。

「寄るなっ！　寄ると、糸耶の生命はないぞ！」

腰から、脇差を抜きはなって、糸耶の胸へ擬した。

「ふむ！」

提灯を高くかかげた伊織は、

「空斎——貴様か！」

と、言いあてた。

息づかいせわしく、空斎は、同じ言葉をくりかえした。

「ええいっ！　寄るなっ！……寄れば、こ、この女の生命は、ないのだぞっ！」

「貴様——」

伊織は、冷やかにわらって、

「糸耶に惚れていたのか」

「それが、なんとした！　惚れて、わるいか！」
「べつに、わるくはない。誰が、どこの女に惚れようと、それは勝手だ。……しかし、空斎（くうさい）、その女は、いまは、この宮本伊織の妻だぞ」
「知って居るわ。うぬが、手ごめにして、仮寝の宿に飼うたのだ。いずれは、すてる存念であろうが――」
「すてようとすてまいと、貴様に、口をさしはさまれる筋あいはない。……しかし、正直なところを申せば、もはや、いささか鼻について参った」
「ほざくなっ！　おのが冷血を誇示して、なんの見ばえがあろうぞ！」
「はゝゝゝ」
伊織は、高笑いした。
「女に惚れられる男と、惚れる男とでは、所詮、談合はつかぬ。……ただ、ここに、きわめて簡単な解決策がある。惚れられた男は、その女に倦いて居る。惚れた男は、その女を欲して居る。されば、惚れられた男から、惚れた男に、その女を呉れてやろうではないか」
「……む！」
空斎は、意外な伊織の申出に、ひくく唸った。
「何処へなりとも連れて行け」
あっさりと言いすてて、伊織は、踵をまわした。
もし、空斎が、曽ての冷静な観察者の立場にいたならば、伊織のそぶりに、決して警戒心を解かなかったであろう。

いまの空斎は、恋に狂った一個の煩悩の徒でしかなかった。
伊織の冷酷な態度を、憎むとともに、ほっと安堵した。
その隙を、伊織は、のがさなかった。
くるっと向きなおったせつな、
懐中から抜きとった手裏剣を、その右手から放っていた。
「うっ！」
脇差をつかんだ手の甲に、ぐさと刺されて、空斎が、撥かれたように、つッ立った。
それへむかって、伊織は、風のように、走り寄った。
恐怖がほとばしらせる異様な叫びとともに、空斎は、数尺とび退って、懐中から、麻薬玉をつかみとって、一投した。
これは、しかし、伊織の頭上を越えて、はるか後方へ、飛んだ。
遁れられぬとさとりつつも、その四肢は、狂気で、おどった。
だが、それも、一間と走ることは、ゆるされなかった。
「うっ……あっあっ！」
樹の幹にぶっつかり、それが救い主ででもあるかのように抱きついた瞬間、背後から、抜き討ちの一刀が、刃風をうならせて来た。
右肩から、袈裟（けさ）がけに――幹もろとも、空斎は、まっ二つになって、地べたへころがった。
「ふん――」

枝からふりかかった雫を、わずらわしげに、身をゆすって、はらった伊織は、ゆっくりと、糸耶のところへ、ひきかえして来た。

踞みかかって、

「おい――」

と、ゆさぶってみたが、なんの反応もなかった。

――空斎めに、もうすでに、犯されているのではないか！

ちらと、その疑いが、伊織の脳裡をかすめた。

――斬ってしまうか？

次に湧いたのは、おそろしい考えだった。

今宵、伊織は、土井利勝に招かれて、その屋敷におもむいたところ、近く、小野一刀流を、将軍家師範たる「御流儀」から除くつもりであるから、あらたに、師範役として道場をひらく気持はないか、とすすめられたのであった。

「これは、春日局殿の希望である。局は、よほど、その方の腕前が、気に入った模様じゃ」

利勝は、そう言って、にやりとしたことだった。

実は、腕前よりも、その方の美男ぶりが、局の浮気心をそそったに相違ない、と言いたかったのである。

伊織は、すぐには、悦びの色をしめさず、考慮の日数をもらって、辞去してきたのであった。

春日局の走狗となることは、もとより伊織の嫌悪するところであった。

しかし、兵法者として、「御流儀」を称することは、何よりの魅力である。のぞみ得る最高の

地位である。

伊織は、受ける受けぬはべつとして、満ち足りた気分でもどって来たのである。

――もし、師範役となるならば、この女は邪魔だ。

伊織は、そう考えたのである。

――斬るか？

伊織は、もう一度、自分に問うた。

――待て！

伊織は、自分が、出府して来た目的を思い出した。

駿府に立寄り、大納言忠長に目通りして、そのあまりの変りかたにおどろき、その侘しい述懐をきいて、ひとつの異常の決意をしたのではなかったか。

忠長のために、その兄の将軍家光を斬る！

やってみしょう、とおのれに誓ったことであった。

それが、いまは、土井利勝から、師範役に推輓すると言われて、心が浮きたった――その軽薄な自身に、忸怩たらざるを得なかった。

伊織も、天下に一流を主張してはばからぬ矜持を抱く兵法者であった。

養父武蔵の孤高の精神も、あらためて、思いかえされた。

――おれは、春日局ごとき奸婦の走狗とはならぬぞ！

胸のうちで、そう叫んだ伊織は、そこへ、糸耶をすてて、おのが道を歩む足どりで、雨の中

を、すたすたと遠ざかって行った。

……糸耶が、意識をとりもどしたのは、雨があがり、東の空が、しらじらと明けて来た頃あいであった。

うす目をひらいた糸耶はなおしばらく、夢裡のうちにあるごとく、うつろな眸を、高い梢のあたりへ仰がせていた。

はっとなって起き上った糸耶は、数間かなたに俯伏した空斎のむくろを見出した。

とっさに、脳裡に来たのは、

——じぶんは、どうして見すてられているのであろう？

その不審であった。

空斎を討ち果したのは、伊織に相違ない、という直感が生んだ不審であった。

当然、じぶんのからだは、わが家にはこばれていなければならないはずである。

不吉な予感が起った。

よろめき立った糸耶は、空斎に犯された痕跡が、からだにのこってはいないことをたしかめて、道へ出た。

もう、わが家には、伊織はいないのではないか？

その不安が、胸いっぱいにひろがっている糸耶であった。

小走りにわが家へもどって、裏口から、そっと、入ってみると——。

伊織は、ちゃんと、牀の中に、やすらかな睡りをつづけていた。

茫然として、その寝顔を見まもった糸耶が、突然、おそろしい身ぶるいをおぼえたのは、かなりの時間を置いてからであった。

——なんという、冷酷な人であろう！

じぶんを救っておきながら、そこへすてておいて、この家に、平然としてやすんでいられるとは！

流水譜

年あらたまったこの月の二十四日、前将軍秀忠が、薨じた。年五十四であった。

将軍家光は、二十七日、秀忠の柩を増上寺に遷すや、その日のうちに、外様大名を城内へ召して、その去就を試みた。

そして、その後で——。

土井利勝を一人、密室に入れて、左の数ヵ条の実践を、明日よりの方針とする、と申渡した。

ひとつ、今年中に、家光自ら、数十万の大兵を率いて上洛し、幕威を輝すこと。

これは、先年、後水尾天皇が、幕府に無断で、皇女一宮に御譲位になった事件があり、とかく、公武のあいだが、うまく折合わぬ状態にあったからである。後水尾天皇は、多年にわたって、幕府に対して憤りを抱いていられたのである。それは、秀忠の女和子が入内して以来、生じたものであった。武家の女の入内は、建礼門院以外にないことであり、これさえ、平清盛は、後白河法皇の猶子として入内せしめたくらいであったので、先例故格を主とする朝廷では、和子の

入内を悦ばなかった。だが、強引に、入内となるや、御料地も増し、贈献も殖え、皇室の逼迫していた経済が多少好転したものの、御附武家なる者が、禁中及び公家に対して、その全般にわたって、権力をふるいはじめたので、当然、不満が昂ずることとなったのである。

主上以下朝廷の人々は、御附武家によって、身うごきできぬ状態にされてしまったのであった。

　思うことなきだにそむく世の中に哀れすててもおしからぬ身は

後水尾天皇が、憤りをこめられた御製のひとつである。

無断で御譲位になったことは、

——いかに幕府と雖も、皇位のみは如何ともしがたいぞ！

と、最大の報復だったのである。

家光は、この際、京に対する幕威を一層増進することを、もくろんだのである。

次に——。

ひとつ、大名統制をさらに厳重にすること。そのみせしめのために、実弟駿河大納言忠長を抹殺すること。

忠長は、前年から、金地院崇伝、天海を通じて、叛心など毛頭ないことを告げて来ていたのであり、秀忠の病篤しときいて、その見舞いを嘆願して、許されなかったのである。

家光は、この哀れな弟を、抹殺することによって、諸大名を完全にふるえあがらせ得る、と考えたのであった。

冷酷な性情においては、家康、秀忠の比ではなかった。

家光は、外様大名を城内に召して、こう言い渡したのである。

「祖宗二公は、かつて、卿等と同列であったため、従来卿等には特殊な優遇をせられたが、予は生れながらの将軍であるから、今後は、譜代同様の取扱いをする所存である。もし、これに不平ならば、三年の暇をつかわすゆえ、帰国して、去就を決しられるがよい。弓矢をもって天下を争うは、武士の面目である。なんら遠慮には及ばぬ。予はまだ戦陣の経験がないから、馳せ向って、兵の利鈍をこころみるであろう」

二代薨去を機会に、家光は、将軍の威厳を、絶対的なものにしたかったのである。

忠長抹殺は、もとより、土井利勝ののぞむところであった。

第三には——。

ひとつ、耶蘇教徒を、日本全土より一人のこらず払うこと。

家光の肚のうちには、完全なる鎖国の計画が成っていたのである。いわば、朝廷や大名や牢人に対すると同様に、外国に対しても強圧政策をもってのぞむことが、最良の国家守護と断定したのである。

すでに、イギリスの東印度会社は、平戸商館を閉じて退去していたし、ルソンは、使節を送って来て交易の維持に努めんとしていたが、伴天連潜入の首謀国として、しりぞけられていた。わずかに、オランダが平戸に、ポルトガルが長崎へ来ているにすぎなかったが、これとても、貿易は極度の制限を受けていた。

邦人の異国渡海は、厳禁されることになった。異国へ渡るのは、奉書船（朱印船）に限られて

しまうわけであった。

家光は、切支丹を禁じ、伴天連の潜入を防ぐのみならず、さらに進んで、その巣窟たるルソンを征する遠大な企図も抱いていた。

先年、肥前島原の城主松倉重政は、幕府に十万石の朱印船を給わらば、独力でルソンを征服してみせる、と申出ていた。幕府は、これを許して、ルソンを視察せしめた。重政は、ルソンに追放せられている高山右近を訪問する名目で、吉岡九左衛門、木村権之丞を、しばしば渡航せしめて、地形、内情を探索させたが、不運にして、重政自身が逝ったため、雄図は空しく終っていたのである。

——よし！　将軍自ら、軍を率いて伐ってやる！

家光は、常に、この壮挙を思いめぐらしていたのであった。（もし、島原の乱が起らなければ、あるいは家光は、海を渡って行ったかも知れず、歴史は変っていたと考えられる）

とまれ——。

禁教は、ここに、徹底的に行われることとなったのである。

実は——。

大納言忠長は、すでに、昨年の暮に、甲州の鳥井成信のところへ、蟄居を命じられていた。これは、天下に公表されず、忠長自身、寝耳に水の命令だった。

秀忠はすでに、病重く、忠長に蟄居を命ずる気力がなかったのであり、土井利勝と春日局との密談による処置なのであった。

利勝は、家光には、

「大納言様、おん自ら、甲州へお移りになって、これまでの御所業についての謹慎の御意にございます」

と申出て、その許可を得てしまったのである。

家光は、その時は、弟のことは、これで片づいたと思っていたのである。ところが、忠長が、いよいよ、甲府入りをすると、諸大名のあいだに、

「あまりに冷酷な処置だ」

という同情が、寄せられていると、隠密からの報告があった。

「せめて、大御所が逝かれてから、すべきではなかったか」

という声もあった、という。

いよいよ、秀忠が薨去してみると、

「大御所の死をはやめたのは、亜相蟄居の報が耳に入ったからだ」

という声が、起るに相違ない、と家光に思われた。

——いかにも、予は冷酷な兄だ。予が将軍であるかぎり、徳川の安泰を、百年後、千年後までたもつには、この冷酷こそ必要なのだ。予は、忠長を、蟄居のみでは許さず、それによって、諸大名を、はらわたまで恐怖せしめてやるぞ！

よって、家光は、利勝に、忠長の抹殺を命じたのであった。

この冷酷には、多分に、私的復讐の念がこもっていたことは、否めない。

家光は、父母が、自分よりも弟を愛していたことを、骨髄にしみるまでに、知っていた。就

中、母——崇源院が、弟を溺愛して、自分をまるで継子のように扱ったことは、断じて忘れられぬ口惜しさであった。

崇源院は、淀君の妹で、姉に似て、美しかったが、片よった性格で、傲慢で、ヒステリイであった。忠長を愛することも極端であれば、家光を虐待することも極端であった。

いけなかったことは、秀忠が、その妻を恐れたことである。それが、証拠に、秀忠は、自分の庶子である保科正之に、松平姓を名のらせることはおろか、対面することさえも、妻をはばかって、遠慮したのであった。

妻が悪む長子家光を、秀忠は、可愛がることはできなかった。

家光は、ただ、乳母お福（春日局）ひとりに愛されて、育ったようなものであった。

春日局は、偏執的気質においては、崇源院にまさるとも劣らぬ女性であった。ただ、崇源院とは、比べもならぬくらい聡明であった。したがって、隠忍しつつも、家光を将軍にするために、つぎつぎと、みごとな手の打ちかたをしたのである。もとより、長子が継ぐという大義名分に味方されてのことだったが……。

いわば——。

家光と忠長は、すでに生れた時から、崇源院と春日局という二人の女性によって、敵として対立する運命に置かれていたのである。

そして、家光は、生母の憎しみと、春日局の暗示的な執拗きわまる教育を受けて、氷のように冷たい血をもった人物になったのである。

秀忠が薨去した夜、森川出羽守が、殉死したが、これは、大御所を崇慕したあまりの追腹ではなかった。

出羽守は、崇源院の信頼が厚く、忠長を幼少の頃から贔屓していた。したがって、春日局や土井利勝から、ひそかに、憎まれていたのである。秀忠が生きているあいだは、処分をまぬかれていたが、その薨去に会ってみれば、自分が受けるであろう返報のおそろしさは、火を見るよりも明らかであった。出羽守は、殉死せざるを得なかった。

出羽守が、家光から、二十年来、たった一言も声をかけられなかったことを、人々は、知っていた。

家光のその性情を、いまだに思い知らず、なお、一縷の希望を抱いている忠長が、おろかというべきであった。

忠長は、甲府へ蟄居してから、およそ六十余通の手紙を、江戸にむかって書いていた。

「我等儀、遠所に罷在り、御機嫌の御様体、心元無く存じ候儀、御推量成される可く候、其に就いて江戸近辺迄罷越し、御機嫌伺い申度く——」

と、病篤い父を見舞いたいと嘆願し、

「今度び、我ら煩い故、召使い候者共、むざと申附け、重々罷り違い候儀」

と、詫び伏し、

「向後、御年寄衆御指図次第、万事仕る可く候」

と、曽ての家臣である土井利勝らに対して、頭を下げ、ついには、誓紙をもって、おのが心底を明白にしようとまで、惨めな謝罪ぶりをしめしたが、ついに、それらの手紙は、春日局と利勝

の手に、にぎりつぶされてしまったのである。

……利勝は、家光の命令を受けるや、その夜、松平伊豆守をまねいて、それを文書にしてしめし、実行に移すように要請した。

その日、屋敷へもどって来た伊豆守は、夕餉の席にも、申しわけに坐っただけで、ずうっと居間にとじこもって、家臣を近づけなかった。

武家諸法度の改正の仕事は、すでに、おわっていた。

伊豆守は、黙然として、正座して、沈思しているだけであった。

――徳川家を磐石の安泰に置くには、かくまでに、大きな犠牲をはらわねばならぬのか！

憂悶は、そのことだった。

これまで、ほろんでいった数多くの大名たちのことを、思いかえしてみる。いずれも、落度らしい落度はなかった。ほろぼした方がいいから、ほろぼしたのである。

松平忠輝も、福島正則も田中忠政も、最上義俊も、本多上野介も、松平忠直も、蒲生忠郷も……。

そして、いま、また、大納言忠長も。

――土井大炊が、老中筆頭でいる限り、まだまだ、犠牲者は出るであろう。

そう考えられることだった。

伊豆守は、決して、利勝を嫌悪してはいなかった。その政治的手腕も、充分みとめていた。しかし、すこしも、尊敬できないでいた。大人物の器ではないと、断定することもできた。

利勝については、次のような逸話が、有名であった。

ある時、利勝は、席上に落ちている唐糸をひろって近習役の大野仁兵衛を呼んで、

「仁兵衛、この糸を大切にしまっておくがよい」

と、命じた。

仁兵衛は、受けとって、何気なくひきのばしてみれば、せいぜい一尺にも足らぬ唐糸である。

仁兵衛は、しかし謹厳篤実の士であったから、その唐糸を腰袋におさめておいた。かたわらに在った近習たちは、君前であったので顔に出して笑いはしなかったが、主君の吝嗇を、心中で卑しんだ。ささいな糸屑などを惜しむとは、如何あそばされ候や、とあとで吐き出した者もいた。

三年あまり過ぎてから、利勝は、脇差の帯尾の組みが解けるや、ふと思い出して、ちょうど仁兵衛がかたわらにいたので、

「先年預けておいた唐糸はいかがいたした？」

と、問うた。

仁兵衛は、腰袋をひらいて、うやうやしく、それをつまみ出して、返上した。

利勝は、その唐糸で、帯尾をつくろいおわると、老臣寺田与左衛門に、

「仁兵衛に、三百石加増してとらせい」

と命じた、という。

それから、利勝は、あっけにとられている近習たちにむかって、

「よいか。その方たちは、この唐糸が、何地で製しられたものか存じて居るか。これは、唐土より、万里の波濤を凌いで渡って参った品じゃぞ。一寸一尺の糸なりとも、無益に棄てるべきものではない。紡織の苦辛を思えば、容易のことではない。わしは、天物をみだりに粗末にすることをきらうぞ。仁兵衛は、能く、わしの命を守って、今日まで、腰袋（きんちゃく）におさめて置いてくれた。どうじゃ、その方たち、一尺の糸で、三百石の禄を与えたは、吝嗇（りんしょく）なるや否や？」

と、言いはなった。

この逸話をきいた時、伊豆守は、利勝をえらいとはすこしも思わなかった。

商人の逸話としてならば、これは、立派であろう。いやしくも、幕閣の首席に在る者としては、あまりにも心がけが余裕のない貧しいものに思われた。

伊豆守は、いつぞや、利勝が、旗本の若い士たちをあつめて、教えているのを、きいたことがあった。

「国を治めるのは、富を本とする事は、いうにおよばぬ。諸氏たちまでが、菓子屋の子が菓子をねだらぬごとくしたいものである。常に多くあれば、安んじて、卑心は起らぬ」

恒産を与えて、恒心を求める――これは、たしかに、政事をなす者の心を用いるべきことに相違なかった。

太史公貨殖伝にも――。

君子富めば好んで其徳を行い、小人富めば以て其力に適す。天下興る、皆利の為に来り、天下攘々、皆利の為に去る。夫れ千乗の王、万家の侯、百室の君、尚貧を患うるあり。而るを況んや、匹夫編戸の民を乎。富は人の情性、学ばずして倶に欲する所のものなり。

そう記されてある。

利勝が、常に、この心がけでいて、徳川の覇業を平民に利せしむると為しているならば、何故に、こうまで、つぎつぎと、数多くの大名をとりつぶしてゆくのか。そのために、どれだけ、飢えた者がでるか。

伊豆守は、利勝の心がけと行動に、大きな矛盾をおぼえないではいられなかった。

例えば、忠長が、駿府から追われた今、その家臣たちは、どうなるのか？　忠長にしたがって行った者の九割までが、旗本の二男、三男であった。武功をもって禄を得る時代の去った世に、新知に取立てられた家臣たちのよろこびは、いかばかりであったろう。それが、一朝にして失われるのである。

徳川家の権威を増すために、こうした夥しい犠牲者を出すのも、またやむを得ぬ仕儀というのであれば、利勝は、平常、さかしらな口をきかぬがいいのである。

伊豆守は、今日、利勝から、数ヵ条の実践方針を明示されて、暗然たらざるを得なかった。

――御三代は、名君ではおわさぬ！

はっきりと、さとった。

――しかし、徳川の天下はつづくであろう。

いかに家光が、冷酷な血を継いで居ろうとも、すでに、徳川家は、ゆるぎない磐石の基の上に建ったのである。

応仁の乱当時にあっては、よほどの英主でなければ、その臣下をして誠忠を尽させ、己を致さ

せ、一国の秩序を保つことはむずかしいが、松平徳川氏主従の関係は永く、三河武士道は、確固たる発達をみせているのである。

松平親忠より家康まで六代におよぶ三河武士の団結は、一朝にして崩れるような、なまやさしいものではない。譜代――すなわち世襲の主と世襲の家臣との、永い年月の親しみは、戦乱をくぐりぬける毎に、深いものになったのである。東に今川、西に織田という優勢な敵に挟まれ、絶えず逆境に在って、君臣ともに、つぶさに艱苦を甞めたのである。

家康の父広忠は、十三歳の時、大伯父内膳のために国を逐われ、わずか七、八名の従者を伴って、伊勢に遁れ、十五歳の時に、駿河に今川氏を頼り、十七歳の春、辛うじて岡崎に入るを得た。家康は、六歳にして人質となり、今川氏に送られる途中、織田氏に捕えられて、七歳より駿河に移り、十九歳にしてやっと岡崎に帰ることをゆるされた。

二代の主君の流浪辛苦は、三河武士をして、その忠義の念を不動のものたらしめた。

大久保彦左衛門の「三河物語」にも――、

御主はいずくに御座候とも、譜代の御主様への御奉公なれば、各々我々のこらず罷出て、先懸けをして、親を討死させ、子を討死させ、伯父姪いとこを討死させ、その身も数多の疵をこうむり、その間あいだには、尾張寄せければ、出ては禦ぎ、昼夜心をつくし、身をくだき、未だ竹千代様の岡崎へ入らせ給わぬ悲しさを、各々の身に余りて嘆きけり。

と、記されてある。

こうした手ひどい周囲の強敵の圧迫が、三河の君臣の間を、はなれがたいものにしたのである。これは、十八世紀において、プロシャのホーヘンツォルレン家が、仏・露・墺の三強国の間

にはさまれて、艱難を甞めたため、比類ない挙国一致をかち得、なお同王室が、十九世紀のはじめ、ナポレオンに圧迫されたため、プロシャ人民の熱誠な渇仰を受けて、数年ならずして、外敵を掃攘し得たのと、酷似している。

――やんぬるかな！

伊豆守が、まぶたをとじて、胸のうちで呟いた時。

次の間に、微かな人の気配が起った。

ぱっと、双眼をひらいた伊豆守は、しかし、誰何せず、自分を中点にして、床の間の差料と、仕切襖との距離をはかった。

暗殺者か、と疑ったのである。

そのまま、数秒が過ぎた。

伊豆守は、気配が殺気を含んだものではない、とさとった。

「入って参るがよい」

平静な音声で、うながした。

襖が、するすると開かれた。

そこに、両手をつかえたのは、神子上源四郎であった。

「そちか――」

「夜中、盗賊のごとき振舞いをつかまつり、申しわけございませぬ」

「但馬守に捕えられていたそうだが、よく遁れられたな？」

伊豆守は、すでに、そのことを知っていた。

「お詫び申上げなければなりませぬ」

源四郎は、入って、うしろ手に襖を閉めてから、

「春日局殿を、駒場野にて討ち果す儀、ついに叶わず、もはや、その機会にめぐまれませぬ」

「よい。あれは、わしのたのみが無謀であった。今にして、春日局一人をこの世から消したところで、なんの益も得ることにはならぬと、判った」

「…………」

「源四郎、亜相殿が、甲府蟄居と相成ったことを存じて居るか？」

「噂にて――」

「わしは、そちから、亜相殿が、江戸城攻略策の講義を、軍法学者からきかれた、と報らされて、あるいは、全土に戦火が燃えるかも知れぬと懸念した。……はゝゝ、取越苦労であった」

「…………」

「徳川の礎はかたい。大御所御他界にても、みじんもゆるがぬ。亜相殿は、所詮ほろびるべき宿運を背負われた」

「…………」

「お上には、亜相殿を生かさぬ御決意だ」

源四郎は、顔をあげて、伊豆守の沈痛な面持を見まもった。

「源四郎――」

「は？」

源四郎は、訊いた。

「伊豆守様が、亜相様のお生命をちぢめる役をお引受けなさいましたか？」

「武士と申すものは、生きのびることが、面倒だな。そうは思わぬか？」

伊豆守は、それにこたえるかわりに、

「人生五十年、化転のうちにくらぶれば、夢幻のごとくなり、と織田信長は、舞うて、今川義元を、討ちに趨ったが……まさしく」

と、独語するように言った。

それから、源四郎を、しずかに見まもって、

「江戸を去らぬか、源四郎」

と、すすめた。

「伊豆守様。この源四郎になさねばならぬ大事が起りました故、今宵、お願いに参上いたしました次第でございます」

源四郎は、必死のまなざしをかえした。

「きかぬ、と断ったら、如何いたす？」

「やむを得ませぬ。それがし独力にて、たたかいまする」

伊豆守の表情は、あくまでしずかであった。

「きこう」

「申上げます。このたび、王子十条野において、寿庵グレコなる伴天連をはじめ、切支丹信徒数

十名が召捕られた事件についてのお願いにございます」
「そちは、切支丹とかかわりを持っておるのか？」
「因縁と申すものでございます」
源四郎は、切支丹屋敷の地下牢で、原主水とともにくらしたことから、偶然にも、切支丹信徒の中に、自分が年少の時、母にもまさる高恩を蒙った婦人がいるのを知り、会おうときめたその日に捕縛されたことまでを語った。
「志津女と申すその女性をすくわざるかぎり、それがしは、こののち、死ぬまで、忘恩の徒としておのれを日夜責めなければなりませぬ」
すでに、火刑は決定したことであった。もはや、踏絵をさせるまでもなかった。あらゆる迫害に堪えて生き残った最後の一団と思われる以上、その信仰を放擲させるための拷問など、無駄であった。
彼らすべては、紅蓮舌に巻かれつつも、天国へ昇ることの歓喜を、高らかな祈禱に誦えて、焼け死んで行くであろう。
「源四郎」
「は――」
「この伊豆に、信徒の一人の生命乞いをするのは、いささか、あまえ過ぎはせぬか？ すくい得るものか、すくい得ぬものか、道理を考えてみるがよい」
「もとより、それは、仰せを待つまでもありませぬ。熟考のすえのお願いでございます」
「不可能だの」

伊豆守は、言いすてた。
「その不可能を可能にして頂きとう存じます」
源四郎は、ひきさがる気色をみじんもみせなかった。

しばらく、沈黙があった。
伊豆守が、言った。
「源四郎、そちは、わしに、ただすくって欲しい、と申出て居るのではないな？」
「もとより――」
源四郎は、大きくうなずいてから、
「伊豆守様には、武田信玄の私鋳金についてご存じ寄りありましょうか？」
「甲州金のことか」
勿論、伊豆守が、金銀の私鋳について、知らぬはずがなかった。
金銀が貨幣として用いられたのは、銅の貨幣と同じく、ずいぶん古いことであった。当然、私鋳は行われていた。
金銀をもって定位貨幣をつくったのは、秀吉である。
豊臣時代に入ると、一般経済は、もはや、幼稚かつ低価な多種の銅銭を混用しているだけではあきたらなくなっていた。また、交易にも、円滑を欠くうらみがあった。
諸侯は、あらそって、鉱山所在の領土をわがものにすることに努め、採掘製錬を行い、貨幣を鋳造したのであった。これは、慶長の年に、徳川氏が、貨幣制度に一大改革を行うまで、継続さ

れた。
　私鋳銭の中でも、有名なものは、中国の大内氏、甲州の武田氏、加賀の前田氏であった。大内氏は、領内に、石見銀山を持っていた。加賀前田氏には、加賀産花降銀という大小両形の判があった。領国加越能三ヵ国に通用させるため、国内諸山から採掘した銀で、手許にあった鎌倉時代の花降銀を標本に、加賀国武蔵の辻の武蔵治郎兵衛、金屋彦四郎に、金座、銀座を命じて、造らせたのである。
　甲金または甲州金と称されるのは、もちろん甲州だけに使われた小判であった。甲州は、天産豊かであって、純良な小判をいくらでも造ることができた。したがって、金座の規模も大きく、定位貨幣及び切遣い金にして、なお余ったという。
「その甲州金が、いかがいたした？」
「およそ、五十万両あまり、隠匿されている場所を、それがし、原主水殿より打明けられました」
「そうか」
　明敏な伊豆守は、すぐに合点した。
「江戸の切支丹の巨頭を、今日まで生かしたのは、その甲州金が欲しい為であったか」
「主水殿も、そう申して居りました。主水殿は、それがしに、それが、たしかに、いまだ、その場所に在ると調べたならば、寿庵グレコに一報してもらいたい、と遺言いたしました」
　伊豆守は、内心、
――甲金五十万両あれば、これを倍に吹きかえることができる。

と、思った。
「そちは、たしかめたか？」
「その場所へ参りはいたしましたが、この目で見とどけることは叶いませなんだ」
「なぜだな？」
「五十万両は、軍用金として、隠匿されたとおぼしく、これが盗まれぬように、猛毒とともに、地下に埋めてあると、判じました」
「ふむ――」
　伊豆守は、武田流軍書に軍用金は、毒をもって包み隠し置くべき、という一条を読んでいたので、源四郎の話を疑わなかった。
「柳生道場の隠密らが、その場所を知って、それがしと前後して、到着いたしましたが、不覚にも、その猛毒にあたって、悉く仆れました」
「左様か――。しかし、それならば、但馬守は、そのことを、大炊殿へ報告いたすであろうから、そち一人の秘密とはなるまい」
「いえ――」
　源四郎は、かぶりをふった。
「但馬守は、主水殿がそれがしに、隠匿場所を教えると、見透して、わざとそれがしが、地下牢より遁られるよう、かげで、それがしの使っている男を扶けた気配がございます。但馬守の計画はあたって、それがしは、その場所を知られるところとなりましたが、但馬守が、容易に、この

秘密を、口外するとはおぼえませぬ」

「………」

「但馬守ほどの御仁であれば、猛毒のことは、ただちにさとるでございましょう。……五十万両は、到底小人数をもって、掘り出せるものではありませぬ」

「そちは、わしに、その場所を教えるから、但馬守と奪いあうがよかろう、と申すのか」

伊豆守は微笑しながら、言った。

源四郎は、あらためて、畳に両手をつかえると、

「何卒、志津女の一命、それがしの手に、お渡し下さいますよう、お願い申上げます」

と、平伏した。

伊豆守は、すぐには、こたえなかった。

源四郎が、かさねて懇願すると、きわめてあっさりと、

「そちの力で、とりもどしてはどうか？」

と、言った。

「………？」

じっと、見つめかえす源四郎の鋭い目を、伊豆守は平然と受けとめて、

「わしにできるであろうことは、刑場を何処にするかきめてやれる」

それをきくや、源四郎の頭脳は、すばやく働いた。

「忝じけなく存じます。御高恩、生涯忘却つかまつりませぬ」

中有の道

お江戸日本橋。

全土の小児も、知るこの名称は、しかし、ふしぎにも誰が命けたか、わからないのである。

「慶長見聞集」によれば——。

慶長八年、日本橋初めて架けらる。大川なれば、川中へ両方より石垣を築出し、架けらる。

敷板の上、三十七間四尺五寸、広さ四間二尺五寸。

この橋が架けられてより、ここから、諸国の里程が定められた。すなわち五街道（東海道、中山道、日光街道、奥州街道、甲州街道）へむかって、日本橋の元標から、一里（三十六町）毎に、一里塚を築いたのである。これによって、人馬賃銭の規定が、はっきりした。

橋の南詰に高札が立てられ、駄賃並びに人足荷物のこと、朱印伝馬人足の数、道中継人足、継伝馬の数、人馬賃銭などについて明示してあった。

高札場には、道路に関するものの外、一般刑法、五倫および生活に関する禁令、切支丹宗門に関する禁令、金銭、売買、結社などに関する禁令が、ずらりと揚げてあった。

江戸中において、ここが最も通行人の数が多かったためである。

今日も——。

春風が、音たてて吹き渡るなかを、貴賤上下、のぼる人、くだる人、往く人、帰る人、行列、

乗物、牛馬……文字通り、織るがごとくに、絶え間がなかった。

その雑沓の中に、頭をあげ胸をそらした少年と市女笠(いちめがさ)のかげに、透けるような白いあごをみせた娘と、そして、一歩毎に大きく上半身を傾ける小男とが、仲よく一列にならんで、さしかかった。

「やあ……どこからやって来たんだい、この人間たちは――」

あたりはばからぬ大声をたてて、いきいきと、目をかがやかす少年は、江戸へ出て来て、はじめて、この橋を渡るものと見えた。

「修太郎さん」

市女笠のかげから、やさしくたしなめる声が、かけられた。

「もっと、ゆっくりお歩きなさい」

平気で、通行人にぶっつかりながら、あやまりもしない少年の態度に、はらはらしている美音(みね)であった。旗本奴と大喧嘩をしたことなどけろりと忘れている修太郎が、また、この江戸のまん中で、どんな騒動をひき起さないともかぎらない不安があった。

しんがりの黒兵衛は、ただ、にやにやして、修太郎の濶歩(かっぽ)ぶりを、見まもっている。

高札場の前へ来て、修太郎は、いきなり、そこの人垣の中へ、遮二無二(しゃにむに)もぐり込んで行ったが……。

「わっ！　美音さあん！　黒兵衛おやじっ！」

途方もない大声を、人垣の中から、ふきあげさせた。

美音(みね)と黒兵衛は、あきれて、顔を見あわせた。

姿の見えぬ修太郎は、

「美音さあん！」

と、叫び、

「黒兵衛おやじっ！」

と、どなりつづける。

「やれやれ、なんとしたぞい――」

黒兵衛と美音が、近づいて行くと、群衆も、それと知って、そこを空けてくれた。

高札場の柵がこいの外に、これは、まだ白木の香のする高札が立てられていて、修太郎は、その前にいた。

これは、個人が立てたもので、いわば、公儀の公示場所を利用したのである。

修太郎のそばへ寄った二人は、それを見あげるや、ひとしく、おどろきの声をもらした。

覚

先頃、相逢う陜路にて、瞬息の間、両刃並び立たずと知る。吹毛(すいもう)、急に用う、常に磨きて、腰間にあり。竜を誅(き)るの剣は、蛇に揮わず。ただ、欲するは、何時、何処にて、貴剣と相会うて、極意を尽して、闘うべきか也。すべからく、日時、場所を、この高札の余白に答示されるべし。

十日過ぎて、答示なき時は、天下にその怯懦(きょうだ)を曝(さら)し、恥辱末代に及ぶ可く、右神文にかけて誓約相望み申候事

公示する　牒状如件（ちょうじょうくだんのごとし）

寛永十年闘春朔日

宮本伊織

神子上源四郎殿

「ふーむ！」

黒兵衛は、呼吸永く、うなった。

「おやじっ！　この宮本伊織ってさむらいとは、旅籠（はたご）で、となりあわせていたんだぜ。強いんだ。滅法強いさむらいなんだぜ！」

修太郎が、息をはずませて言った。

「強いはずじゃて。これは、宮本武蔵という西国随一の兵法者の養子で、父以上と称されている仁じゃわい」

黒兵衛は、当惑して、顔中を皺（しわ）だらけにすると、無意識に、あご髯（ひげ）を二三本、ひきぬいた。

美音（みね）は、じぶんにつぶやいた。

——神子上様は、お受けなされる。そして、必ず、お勝ちになる！

伊織の、優雅な美貌がたたえていた氷のように冷たい表情を、甦（よみがえ）らせながら、美音は、微かな戦慄を催しつつ、そう信じた。

「おやじっ！」

修太郎が、黒兵衛の袖をつかんだ。

「大急ぎで、さがしてくれよ、小父さんのところを——」

「よし！」

黒兵衛は、大きく合点してから、美音に笑いかけ、

「待っていなされい。今夜のうちに、御主人の居処をさがしあてて、迎えに参りましょうわい」

と、言った。

美音は、そうきいただけで、胸のはずむのをおさえきれなかった。

美音と修太郎のおちつくさきは、きめられていた。亡父が若い頃から仕えて来た忠僕の加平が、身を寄せている、その甥の家であった。本郷の加賀邸の裏手の貧しい職人街にあった。

「されば、急ぐべし急ぐべし」

黒兵衛は、修太郎の肩を、ぽんとひとつ、たたいておいて、はなれて行った。

ところで——

群衆の中に、編笠をかぶった武士が数名交っていたが、そのうちの、一人が、黒兵衛へ、編笠の窓から、鋭い視線を、あてていたのである。

義足を地面へ突っ立てた高垣弥九郎にまぎれもなかった。他の者は、いずれも、小野道場の高弟であった。

「金谷、小森、あのせむしを尾（つ）けて行け。源四郎の隠れ場所が判る」

ひくく、命じた。

二名の高弟は、すばやく、人垣から、まわり出て、歩き出した。黒兵衛の足はおそろしく迅かったが、白昼であってみれば、どんなに遠くからでも、その特徴のある姿はとらえられる不利が

あった。

尾行する側では、充分の距離を置くことができた。

さすがに、敏感な黒兵衛も、主人をたずねることに一心のあまり、この尾行に、ついに感づかなかった。

一方——。

弥九郎と三名の高弟は、美音と修太郎のあとを、尾けた。

「美音さん——」

修太郎は、おとなっぽい目つきで、市女笠の中を見あげて、

「おいらたちは、小父さんが、試合をする前に会うようになっているんだぜ」

「そうですね」

「こんどはしかし、対手がこの前の対手よりも、うんと強いんだぜ」

「…………」

「大丈夫かな」

「修太郎さんは、神子上様があぶないとお思いですか？」

「ううん——きっと、勝つさ」

「それなら……わたくしを、おどかすために、そんな、心配そうなことを言うのをお止しなさい」

「おいらはね、美音さん——」

修太郎は、美音と手をつなぐと、言った。

「小父さんと美音さんは、きっと夫婦になると思っているんだぜ、ほんとだぜ」

美音は、ちょっと、黙って、遠くへ目を置いていたが、

「……夢ね」

小さく、つぶやいた。

「夢？……夢なもんか。きっと、そうならあ。おいらのカンは当るんだぜ」

修太郎は、力をこめて、言った。

「修太郎さん、わたくしはね、幼い頃から、夢さえもたないで来ました。あきらめることだけで、生きて来たのですもの……だから、夢を抱いているだけでも、しあわせ——」

「いやだな。だから、女は、弱いんだ。夢だけ、もっているなんて、つまんねえや。夢なんて、ふかふかして、雲みたいに消えちまうんだぜ」

修太郎は、空に浮かんでいる一朶の白雲を指さした。

美音も、それを仰いで、

「そうね。……消えるわね」

「よせやい。そんな、なさけない声を出さないでおくれよ。夢じゃないんだ。希望だよ。もうすぐ、じぶんにやって来る希望をもつんだよ。しっかりしておくれよ、美音さん」

「まるで、修太郎さんが、兄様のようね」

美音は、笑った。

「女って、恋をすると、バカみたいに、しょんぼりするんだから、だめなんだよ。……おいら、女に生れなくってよかったな」

分別くさい口をきいて、修太郎は、大あくびをした。
この時、美音は、ずっと彼方の辻を横切って行く一人の女人のすがたを見出して、はっとなった。
——あれは！
にわかに、はげしい動悸をおぼえた。
姉の糸耶に似ていた。
思わず、小走りになろうとした美音は、瞬間、じぶんを見出した姉の激しい表情を想像して、出足をとめた。
姉は、じぶんと会ったら、江戸へもどって来たことを、きびしくとがめるに相違なかった。
嘘のつけない美音は、詰問されたならつつみかくすわけにはいかない。
——すみませぬ。
美音は、心で、詫びた。
姉とじぶんは、すでに、別々の運命の路を辿っている——このことを、はっきりと知った。
「美音さん、どうしたんだい？」
修太郎は、立ちどまってしまった美音をふりかえって、訊ねた。
美音は、視線を足もとに落して歩きだした。

それは、やはり、糸耶であった。
あまりにも冷酷な仕打ちを受けながら、そのそばをはなれることのできなかった糸耶は、五日

前に、出て行ったきり、一度も帰って来ない伊織を、じぶんから、さがして市中へ出て来たのであった。
捕吏の探索を受けている身であることも、もはや考えている余裕はなかった。
じぶんの惨めさをあわれみつつ、煩悩を断ちきれぬ哀しさが、女のものであった。
糸耶が、おとずれたのは小日向の柳生但馬守の隠居所であった。
伊織が、かねて、
「わしは、柳生但馬守と試合をせぬ限り、江戸を去らぬ」
と言っていたのを、思い出したのである。
門番にむかって、糸耶はためらわず、豊島刑部の女糸耶と名のって、面会をもとめた。
すぐに取次がれて、糸耶は、書院に通ることをゆるされた。
父明重と但馬守が親しかったのを、知っていた糸耶は、いまでも、遺児に対して好意をもっていてくれると信じていた。
但馬守が、春日局の下にいることは、考えまいとじぶんに言いきかせた糸耶であった。
——但馬守は、よもや、わたくしを捕えはすまい。
この独語は、書院に坐ってからも、胸にあった。
やがて、入って来た但馬守は、座に就くと、すぐに、
「何処にかくまわれていたな？」
と、問うた。
糸耶は、俯向いて、

「どなた様の庇護も受けては居りませぬ」
とこたえた。
「春日局を襲うたのは、かねての計画であったかな？」
「はい」
「無謀とは思わなんだか？」
「いのちは、すてる覚悟でございました」
「それは、そうであろう。……討てると思い込んだ勇気はほめられてよいが、無謀はやはり無謀でしかあるまい。泉下の父君も、復讐をのぞんでは居らぬと、わしは、思うが――」
「但馬守様」
糸耶は、血の気の引いたおもてを擡げて、
「わたくしを、お捕えなさいますか？」
「それは奉行所の仕事であろう。しかし――」
但馬守は、微笑して、
「わしをたずねて参ったのも、無謀と言わざるを得ぬ。わしに甘える気持がすこしでもあるなら、すてておこう」
但馬守のその言葉は、糸耶の胸の底までしみ通った。
糸耶は、俯向いて、くちびるをかんだ。
「そなたを救うたのは、神子上源四郎と申す牢人であったな？」

「はい」
「わしが捕えたが、また、逃げられての」
但馬守は、微笑して、そう言った。
但馬守は、糸耶が、たぶん、源四郎が捕えられていることをきいて、会わせて欲しいと、嘆願に来たものと、推察したのであった。
糸耶は、顔をあげて、但馬守を見たが、その表情は、そのことをはじめて耳にしたのをしめした。
「但馬守様。わたくしは……」
糸耶は、言いかけて、ふたたび目を伏せると、
「わたくしは、ただいま、宮本伊織の妻と相なって居りまする」
と、告げた。
「宮本伊織の妻に？」
但馬守は、おどろいて、糸耶へ、鋭い眼光をあてた。
「伊織は、貴方様と試合するために、出府して参ったと申して居りましたが、たずねて参りましたでしょうか？」
「いや、来ぬ。……たとえ、参っても、当流は、他流試合はせぬが――」
糸耶の胸で、大きく、不吉な予感が、波のようにゆれた。
――あの人は、もう、江戸を立去ったのではなかろうか？
絶望が、重く、肩にのしかかって来た。

その様子を、見まもっていた但馬守は、
「そなた、宮本伊織が、日本橋に高札を立てたのを、まだ知らぬな」
「え——？」
「神子上源四郎に、勝負を挑んで居る」
「えっ！」
糸耶は、目を見はった。
「あの人が、源四郎殿と——」
当然、糸耶の脳裡に甦ったのは、空斎の予言であった。
神子上源四郎の差料村正と、宮本伊織の差料三条宗近は、いずれ、近い日に出会うて、互いに血をもとめて、斬りむすぶ宿運にある。剣相が、そう教えている。
空斎は、そう予言したのである。
予言は、まさしく当ろうとしている！
天下第一の人通り繁き場所に、挑戦を公示されて、兵法者として、受けぬはずがない。
「おいとまつかまつります」
糸耶に、いとまを告げられて、但馬守は、ひきとめる理由はなかった。
——幸せうすく生れたようだ。
あわれみのまなざしを与えるしかなかったのである。

——これが、人の住むところであろうか！

雑木のしげった坂道を降りた時、美音の足を、急に重くしないではいられない一郭であった。
茅葺屋根は、かぞえるほどしかなく、石をのせた板屋根が、いずれも傾きかかって、互いに、ささえあっている極貧小屋が密集している光景は、美音の目に、生れてはじめて映るものだった。
一町余もへだてて、臭気が、むうっとせまって来るようだった。
「へえ——あんなところに、美音さんはとっても住めやしないぜ」
修太郎は、率直だった。
「止そうよ。三日もいたらからだが、くさってしまうよ」
「でも……」
美音も修太郎も、ふところは乏しいのであった。
「止そう、止そう。美音さん、青松寺へ行って、あの離れに、もう一度泊めてくれるように、たのんでみようよ」
「でも。黒兵衛殿が、連絡して下さるまでは、ここで待っていなければならないでしょう」
「青松寺へ行った、とことづてしてもらえばいいじゃないか」
美音も、ちょっと、考えて、
「そうしましょうか」
と、言った。
とても、この一郭には、住めない気がした。
げんに、坂をのぼって来た男の、ぼろぼろの恰好とこちらをじろじろと見やった目つきは、美

音に、堪えられない嫌悪感を催させた。
「修太郎さん、ここで待っていて下さい。わたくしが、ことわって来ますから——」
美音(みね)が、そう言うと、修太郎は、うんにゃ、とかぶりをふった。
「美音さんの方が、ここで待っていろよ。おいらが、行って来らあ。おいらは、どんなところでも、平気さ。美音さん一人で、行ったら、捕って、食べられちまうぜ」
修太郎は、美音から、加平という老爺が身を寄せている家、ときいて、いっさんに走って行った。
美音は、疲労をおぼえて、路傍の大石に、腰をおろした。
男か女か、遠目には判別しがたいくらいのうすぎたない女が二人、大きな荷を背負って、坂をのぼって来たが、美音の前にさしかかると、一人が、
「へっ！　見ろや！」
と、その膝へ置いた手を指さした。
「まるで、白魚でねえか」
「観世音菩薩かも知んねえぞ」
無遠慮に、笠の中を覗き込もうとしたので、美音は、あわてて、深くうつ向いた。
江戸がつくられた時に建ったままとも見える、朽ちかかった長屋の路地口に立った修太郎は、なんともいえぬ臭気に、鼻のまん中へ皺をよせて、ぱちぱちとまばたきしたが、いきなり、大声をはりあげた。

「おーいっ！　加平という爺さんの家はどこだあっ？」
その叫びに応えて、三軒ばかりの戸口から、化物みたいなよごれ顔がのぞいた。
「どの家だい？」
修太郎が、いちばん手まえの顔に訊(き)くと、それは、次の顔を振りかえって、
「加平ちゅうのは、松助の家へころがり込んで来た爺さんでねえか？」
「ああ、そうだろ」
修太郎は、教えられると数日前の雨でまだ泥濘(ぬかるみ)になっている路地へ入って行った。
その家の前に立つと、中で、咳込(せきこ)む老いた声がきこえた。
「ごめん——」
さむらいらしく、ことわってから、修太郎は、板戸をひきあけた。
「加平殿は、いるかい？」
「ああ……どなたで？」
「美音さんが、そこに来ているんだ」
薄暗い板の間から、起き上るのを、すかし見た修太郎は、
「美音——あ、お嬢様が！」
おどろいて、老僕は、立ちあがった。
「このような、むさいところへ、また、どうしておいでなされたのじゃ」
「宿無しだからさ。でも、あんまりきたないので、泊めてもらうのを、止したんだ」
「あ、あたりまえじゃ。とても、お泊めできるものではない」

修太郎は、加平をつれて、路地を出て行きながら、
「爺さん、ここが、江戸でいちばん貧乏人があつまっているところだろ？」
と、言った。
「そうかも知れぬ。しかしここに住むのは、江戸でいちばん善良な者たちともいえる」
「善良——じゃなくって、バカなんだろ」
「口の悪いわっぱじゃ」
坂をのぼりかけたおり、女が二人、血相かえて、駆け降りて来た。
「た、たいへんだっ！」
「人さらいじゃ！」
それをきくや、修太郎ははっとなって、のびあがった。
美音の姿は、どこにも見当らなかった。
「さらわれて行ったのは、笠をかぶった若い女のひとだろ、小母さん？」
「そ、そうじゃ！」
「ちきしょうっ！」
修太郎は、小鹿のように、ぴょんとはねあがって、走り出した。

美音を拉致したのは、ずうっとここまで尾行して来た小野道場の若い士たちであった。
高垣弥九郎が、途中まで同行して来て、急に、
「あの娘を捕えて、連れて来てくれ」

と命じたのである。
弥九郎の意図が、娘を囮にして、源四郎をおびき寄せるのだ、とさとった若い士たちは、その邪しさにちょっとためらったが、弥九郎のとり憑かれた執念の凄じさを見て来ているだけに、手段をえらんではいられぬこともわかり、それを実行したのであった。
美音は、当て落されて、一人の背中で、ぐったりとなっていた。
雑木林が切れると、宏壮な加賀邸の高塀に沿うて、道は、まわっている。
その道のどこかに、駕籠が用意されているはずだった。
「神子上に、女がいるとは知らなんだな」
「あの男だけは、生涯、女を知らずにすごすと思っていたが……」
そんな会話を交しながらも、周囲に気をくばることを怠らない高弟たちにむかって、雑木林の中から、
「待てっ！」
と、鋭い絶叫が、とんで来た。
「小僧めが追って来たぞ」
「やむを得ぬ。斬るか——」
「いや、小野道場の名にかかわろう。しばらく、ねむらせておこう」
だが——。
彼らが見くびった程、おどり出て来た少年の一刀は、なまくらではなかった。
いきなり、大きな懸声もろとも、打ち込んで来た一撃を、あやうくかわして、

——これは！
と、舌をまいたことだった。
やむなく、差料を抜きはなって、刃を上にして構えた一人は、爛として燃える少年の眼光を受けとめつつ、
——神子上が、手をとって教えたか？
と、思った。
美音を背負った者は、数間はなれてから、
「手ごわいな」
と、眉宇をひそめた。
「えいっ！」
修太郎は、地を蹴って、第二撃に打って出た。
ぱあん、とはじきかえされて、おのれが勢いの激しさの反動で、修太郎は、鞠のように、ひっくりかえった。
しかし、次の瞬間には、発条仕掛けのように身軽くはね起きていた。
もはや——修太郎は、死にもの狂いの小さな阿修羅であった。
「くそっ！」
大きく、振りかぶるや、対手の構えなど思慮するいとまもなく猛然と突進した。
受ける方も、余裕をのこすわけには、いかなかった。

「むっ！」
気合をみなぎらせて、半身にひらきざま、修太郎の突き出した小刀を、丁とたたき落した。
この時、
「何をして居る！」
彼方から、烈しい語気で叫びかけた者があった。
修太郎は、ちらと見やって、それが隻脚の武士であるのをみとめるや、
「あっ！　あいつ！」
と、小さな全身に、あらたな闘志をあふらせて、地べたの小刀へ、とびつこうとした。
そこを、
「こやつ！」
叱咤とともに、峰打ちが来た。
「……ああ……あっ！」
口をいっぱいにひらいた修太郎は、消えてゆく視界に、美音の白い貌を描きつつ、つんのめった。
「たかが小わっぱを……花田、見苦しいぞ！」
高垣弥九郎は、きめつけておいて、美音を背負った者へ、急げ、と命じた。
道が曲ったところに、駕籠が置いてあった。
それへ乗せた時、弥九郎は、はじめて、美音の眉目を眺めて、
「……む！」

と、ひくい声音を洩らした。
その美しさに、つよく牽かれたのである。
——源四郎め！
こんな美しい娘をおのがものにしている宿敵に対するねたましさを、弥九郎はふりはらおうとはしなかった。
源四郎に対する憎悪をいやが上にも強くするためには、嫉妬も羨望も、弥九郎は、恥とはしなかった。
——源四郎の首をつきつけて、この娘が悲嘆にくれるさまを、とくと見とどけてやるぞ！
おのれを復讐の鬼とすることが、いまの弥九郎の生甲斐であった。
「高垣殿、行先は？」
一人に訊かれて、ちょっと思案した弥九郎は、
「吉原だ」
と、命じた。
「吉原？　どうなさる？」
「売りとばしてくれるのだ」
「…………」
若い士たちは、顔を見あわせた。
「その金で、あらためて、この女のからだを買ってやろう」
うそぶいて、陰惨な笑い声をたてた。

……修太郎は、白い雲の中にいた。
「おいら、死んじまったのかな？」
そうつぶやいて、心細げに、あたりを見まわした。
何も見えなかった。ただ、漠々(ばくばく)たる白い雲が、たちこめているだけであった。
「死んじまったらしいや」
泪(なみだ)があふれそうになるのを怺(こら)えて立ち上った。足もとは、ふわふわしているが落ちて行く不安はなかった。
とぼとぼと歩きかけて、急に、淋しさに堪えきれなくなった。
両手を口にあてて、
「美音さあん！」
と、のど一杯に、呼んでみた。
声は、わあんとまわりにひろがり、はるか遠くまで渡って行き、その遠くで、小さく、こだまになって、消えた。
「ちきしょうっ！」
一人ぼっちは馴れているはずなのに、なんで、こんなに淋しくなるんだろ。
修太郎は、躍起(やっき)になって、駆け出そうとしたとたん——。
彼方(かなた)の雲の中に、おぼろに浮きあがって来た人影をみとめて、はっとなった。
——あの小母さんだ！

切支丹屋敷にいた志津女という婦人にまぎれもなかった。

――おいらの……。

母上だ、と叫ぼうとして、修太郎は、ごくっと生唾をのみ込んだ。

なんという蒼ざめた、冷たい顔であろうか。

しばらく、じっと見つめているうちに、修太郎は、ぶるんと、ひとつ、かぶりをふった。

――おいら一人でいいんだ！　母親なんか、いらねえや！　おいら一人で、生きてゆくんだ！

自分の声とも思えないくらい、大きなひびきが、からだをつつんだ。

そのひびきで、ふっと、意識をとりもどした。

「おお――気がついたか！」

のぞき込む老爺の顔を、ちょっと、訝しげに仰いでいた修太郎は、一瞬、はじかれたようにはね起きた。

「しまった！　美音さんをつれて行かれてしまったぞ！」

矢庭に、走り出そうとして、峰打たれた背中の痛みの烈しさに、ぺたんと膝を折ってしまった。

老僕加平は、修太郎が、肩を大きく喘がせて、ぼろぼろと泪をこぼす状を、いたましげに、見まもって、言葉もなかった。

黄昏の薄闇は、そこにもしずかに、落ちて来た。

狂い姫

「いやです！」

突如、きりつけるような烈しい語気で、広姫は、対座する春日局に、叫んだ。

前ぶれもなく、訪問して来た春日局が、四方山話のすえに、ふと思いついた様子をよそおいながら、きり出した縁談であった。

土井大炊頭の次男利正に輿入れすることをお考えねがえまいか、と。

それに対する間髪を入れぬ広姫の叫びだった。

それまでは、しずかな面持で応対していた広姫であった。侍女たちは、むしろ姫様は今日は機嫌がおよろしいようだ、と眺めていたくらいだった。

「…………」

春日局も、さすがに、睨みつける広姫の険しい視線を受けとめるのが、せい一杯で、二の句が継げなかった。

「局は、今日は、その目的で参られたのか？」

「よき御縁組と存じ……」

「勝手にきめられては、迷惑じゃ」

「利正殿をおきらい遊ばす理由がございましょうか？」

ようやく、春日局は、もとの顔の色をとりもどして、穏かに訊ねた。

「利正がきらいなのではありませぬ。わたしは、どこへも嫁がぬのじゃ」

「左様なわけには参りませぬ」

「戦国の世ならば、人身御供も、いたしかたがないであろう。いまは、わたしを嫁がせて、国の安泰をねがわねばならぬほど、徳川家の礎は脆くはあるまい。わたしは、いやなところへは、死んでも嫁ぎませぬ！」

——このわがまま娘を、納得させるのは、容易ではない。

春日局は、胸のうちで、嘆息した。

老猾な将軍家の乳母は、この座で、これ以上、どう言いきかせても、逆効果になるばかりだ、とさとって、

「この儀は、いずれ、あらためて、ご相談いたしたく存じまする。上様よりも、いずれ、お言葉があろうかと存じ、その前に、あらかじめお耳に入れておこうと存じたまでのこと——」

そう言って、一礼して、立とうとした。

「たとえ、将軍家よりのお申しつけがあろうとも、わたしの往く道は、わたしがきめます——」

広姫は、春日局のしらじらしくおちつきはらった態度にも、腹をたてていた。

「何卒、御身分の程をお考え遊ばしますよう——」

これまで、幾度び、広姫は、この忠告を、多くの人々から、きかされたことであろう。

——身分がなんであろう！

広姫は、冷笑した。

「局！」

急に、無表情になって呼びかける広姫を、春日局もまた、冷やかに見つめ返した。

「きかせましょうぞ！」

「…………」

「わたしには、良人があります！」

「なんと申されます！」

流石に、春日局は、愕然として、凄目になった。

広姫は、ふっと、うすく笑った。

「わたしは、じぶんが妻となる男は、じぶんできめました」

「おつつしみ遊ばしませ。かりにも、将軍家のおん妹君たる身が、なんという……」

「わたしは、将軍家の妹であるよりも、女として、まことの心を枉げずに生きるのじゃ！」

「許されることと、許されぬことがございましょうぞ。高貴にお生れ遊ばしたからには、おのずから、ふまねばならぬ道がございます。ふみはずして、家名をけがし、天下に恥をひろめることは、上様ばかりか、東照権現様の御霊をはずかしめる仕儀と存じます」

この言葉が、春日局の切札であった。

しかし、広姫にはなんの効果もなかった。

「わたしは、五障三従などという、古めかしい教えなど、さげすむばかりじゃ。ふみはずす道に、女の幸せがあると思えば、すすんでふみはずして、なんの悔いがあろう。……局、わたしの良人

は、氏素姓も知れぬ牢人者です！」
　広姫（こうひめ）は、言いはなった。
「狂気の沙汰と申上げるよりほかに、ことばもございませぬ」
「氏素姓も知れぬ牢人者ながら、そこいらの旗本などとは比べもならぬ人品器量じゃ。剣をとらせては、天下に、右に出る者はあるまい」
「兵法者と申されますか？」
「小野次郎右衛門の愛弟子神子上（みこがみ）源四郎じゃ」
　春日局は、あっとなった。
　わが生命を狙ったのが、豊島刑部（ぎょうぶ）の女（むすめ）であり、それをすくって遁げ去ったのが、神子上源四郎であったことは、すでに、春日局の耳にもとどいていた。
「姫様！」
　春日局は、その強烈な性情をあまさずしめす表情を据えて、
「神子上源四郎と申す者が、ただいま、公儀の探索する重罪人であることを、ご存じでございましょうか？」
　これに対する広姫のこたえは、平然たるものであった。
「もとより、知っています」
　――これは、問答にならぬ。
　春日局は、そう思いかえした。

「この儀、上様に申上げても、よろしゅうございますか？」
　冷やかに、そう脅した。
「かまわぬ！」
　きっぱりと、こたえておいて、広姫は、さっと座を立つと、打掛けをひるがえして、次の間に、消えさった。
　――小面（こづら）にくや！
　春日局は、廊下に出て行きながら、どう処置してくれようか、と思いにくんだ。
　広姫の方は、居間にもどるや、しばらく、几前に坐って、宙の一点へ、燃えるまなざしを据えていた。
　そのうち、じんわりと、泪（なみだ）が滲み出た。
　――いのちも要らぬ！
　声なく、さけんだ。
　――源四郎に、一夜だけでも添えたら、わたしは、死んでもよい！
　侍女が、廊下から、声をかけたが、
「入って来てはなりませぬ！」
と、きびしく、はねつけておいて、広姫は立ちあがると、衣裳をぬぎすてた。
　たちまちのうちに――。
　若衆姿にかわった広姫は、外の様子をはかって、そっと音もなく、廊下をつききって、空部屋に移り、身がるく、畳を蹴って、欄間にとびつき、張りじまいの天井板をはずして、その裏へも

ぐり込んだ。

いくばくかの後——。

厩から、愛馬を曳き出した広姫は、まっしぐらに、裏門へ疾駆して、門番を叱咤して、扉を左右に開かせるや、風のように、とび出して行った。

「姫様がっ！」

絶叫して、門番が注進におよんで、屋敷中は、騒然となった。

侍女たちが、春日局との争いを目撃していたのである。

神子上源四郎を良人とする、と高言したのも、きいて、唖然となっていたのである。

——姫様は、もう、この屋敷へ、おもどりにならぬ決意をなされた！

ひとしく、そう思った。

一大事であった。

封建確立した時世であった。もし、広姫が、咎めを受けて、抹殺の悲運に遭うこととなれば、当然、それに仕えた者たちも、あの世の伴を命じられる。

侍臣たちは、血相を変えて、広姫のあとを追って、馬を鞭打った。

しかし——。

もはや、どの道にも、その姿は、見当らなかった。

他聞をはばかるために、奉行所のたすけを借りるわけにはいかなかった。

大久保彦左衛門忠教の屋敷は、駿河台の旗本屋敷町にあった。

千石取りの旗本としては、ひどく手狭な屋敷であった。

生涯妻を娶らず、戦場裡に骨を埋めることを本懐として生きて来た彦左衛門は、住居など小屋で足りるとして、全くかまわなかった。屋敷には、具足のほかには、調度らしい品は何ひとつ置いてなかったし、庭は雑草の茂るにまかせてあった。郎党の頭数も最小限にとどめ、女中など一人も使っていない、まことに殺風景なくらしぶりであった。

で——。

玄関先まで、馬を乗入れて来た華やかないでたちの若衆が、

「たのもうっ！」

と、叫んだのに対して、老人自身が、のそのそと、あらわれた。

「ほう——これは！」

それが男装の広姫とみとめて、びっくりして、目を見はったが、女子という存在に対して、抜きがたい偏見の所有者である老人としては、すぐに平伏することをきらった。

「何様でござろうな？」

とぼけて、訊ねた。

「広姫じゃ！　知らぬはずはあるまい」

「広姫君、勿論、在じ上げており申す。したが、お上の御妹君が、この爺を訪問遊ばされるなどという儀は、あり申さぬ。是非に訪問遊ばされる大事がござるとなれば、そのように、あらかじめ、御通報もあろうず——。そしてまた、それだけの供立もござろう」

きめつけられて、広姫は、
——このひねくれ者めが！
と、腹立たしく、にらみかえしたが、やむなく、
「では、よい。わたしは、ただの武家娘として、たずねて参ったことにしましょうぞ」
「されば、粗茶などさしあげましょうわい」
彦左衛門は、女子の武芸好みなど、もってのほか、と思っていた。
女子は、家にひきこもって、子を生んで、育てれば、それで能事足れり、ときめていた。
七人の子を生むとも、女に心許すな、という古諺を信じている老人であった。
将軍家の妹と雖も、彦左衛門にとっては、仏説に謂う十二の角をもった悪性ものにかわりはなかった。
埃くさい書院にみちびいても、上座は、自分がうばって、挨拶ぬきで、
「御用件をうけたまわろう」
と、言った。
「神子上源四郎と、そちは昵懇であろう」
広姫は、憤りをおさえて、問うた。
「左様、源四郎は、それがしが、十余年前、ひろいとって、小野次郎右衛門にあずけ申したでな」
彦左衛門は、こたえてから、

「彼奴め、また、貴女様の乗った馬の脚を斬ったとでも申されるかな！」
と、言って、にやりとした。
広姫は、あの時の光景を甦らせると、
「そうか。そちが、斬れと、源四郎に命じたのであったか」
「屈辱を、まだ、お忘れではないとみえまするな」
「いいえ——」
広姫は、かぶりをふるとおだやかな表情になった。
「あれから、いろいろのことがありました」
「ふうん……いろいろのことがな——」
「彦左衛門！」
「何でござる？」
「わたしが、いま、源四郎を、生涯の良人と思いきめたと申したら、いかがじゃ？」
「…………」
老人は、あまりに突飛な告白に、あっけにとられて、とっさに、返答もできなかった。
「わたしは、もう、春日局に、その決意をきかせました」
「……う！」
老人は、ひくく、唸った。
——これは、相当な度胸じゃわい！
「もう、屋敷へは、もどりませぬ。源四郎の許に参って……離れませぬ」

「…………」
「連れて行って欲しい。……たのみまする」
広姫は、両手を畳につかえて、頭を下げた。老人は狼狽した。
「ま、待たれい！」
立って下座に移ると、
「源四郎は、貴女様の恋慕を、承知いたしておるのでござろうかな？」
「知っております」
「承知して……し、しかし源四郎が、貴女様のお心を受けるとは、到底考えられ申さぬ。彼奴は、兵法者でござる。腰の一剣を妻として生きる身なれば……」
「彦左衛門、そちも、柳生但馬守や春日局と、同じ意見を吐こうとするのか！」
「い、いや——それがしは貴女様の御決意に、反対はつかまつらぬ。つかまつらぬが、いま申した通り、源四郎の方で……」
「源四郎が、わたしを拒むかどうかは、会うての上でのこと。そちの知ったことではありませぬ。そちは、わたしを、源四郎の許へ、連れて行ってくれればよい……どうぞ、たのみます！」
「姫様。……それがしは、源四郎の居処は、知り申さぬ」
彦左衛門は、そっけない口調で、かぶりをふった。

しばらくして、玄関へ出て来た広姫は、彦左衛門から、ひとつの暗示を与えられていた。
『日本橋の高札場へお行きめされ』

そうすすめられたのであった。
老人にすれば、日本橋へ行かせれば、捜索者たちが、姫を発見せずにはおくまい、と考えたのである。
広姫を送り出した老人は、居間にもどると、
「やれやれ、姫が、源四郎に、首尾よく添えたならば、これは、天下の話題じゃ。どっこい、そうは参るまいて。源四郎も、とんだ女子に見込まれたわい」
かぶりをふってから、几に向って筆を把りあげた。
ここ数年間、彦左衛門は、「三河物語」を書き綴るのを、唯一の仕事としていた。
六十余たびおもむいた戦場における自らの武勲を記しのこそうとするのが、目的であった。
徳川氏譜代の家臣である誇りを、骨の髄まで持っている老人は、しかし、筆をすすめるにつれて、おのが武勲に比べて千石の禄があまりにすくないことの不満が、わき立って来ていた。
この不満を、今日は、書きはじめた。
知行を多分に取る人は、左の五つの条件を持っている。
一、主人に弓を引く謀叛人。これは、末も栄えるらしい。二、あやかりをして人に嗤われても平気な人間。三、公儀に仕えて目はしがきき、御座敷内の立まわりの巧みな者。四、讒言がうまく、誹謗が上手で、まわりの者たちにおそれられる人間。五、何処の何者とも知れぬ馬の骨。
それにひきかえて、知行を取ることのできない不運者の条件としては——。
譜代の主人に別心を抱かず、忠節をちかい、弓を引かず、武辺者として生き、公儀に仕えることが下手で、讒言など卑劣となし、譜代久しいことである。

……譜代久しき者が、知行をば得取らざるとみえたれ共、たとえ知行は得取らで、返しぬる共、かならずかならず、夢ゆめ、この心持を一つもすてずして持つべし。

そう記して、筆を擱いた老人は、おのが強情我慢の淋しさを、眉間に刷いて、

「うむ！」

と、ひくくうなった。

三河譜代の家臣は、明け暮れ弓矢の道に志したために、公儀の道すなわち文飾にはおろそかである。しかし、一旦の急変に処して、文飾の徒が、何の役に立つものぞ。徳川氏の隆昌は、みなこれ、武骨の士の辛労によるものなのだ。しかるに、泰平さだまって、武骨の士は遂に葬られ、文飾の徒のみ独り栄えることになる。

彦左衛門は、「三河物語」で、この不満をぶちまけるよりほかに、すべはなかったのである。

これまで、供をつれずに、外出した経験が一度もない広姫であった。

駿河台から、日本橋への、もっともかんたんな道すじを、つい、馳せ迷って、町家の切れた、いちめんの草地へ出て、

――はて？

と、いぶかったのは、むりもなかった。

そこで、通りがかった者に、

「日本橋へは、どの道を参ればよいのじゃ？」

と、訊ねたのが、かえっていけなかった。

これは、職人で、どうやら虫の居どころのわるい状態だったところへ、若衆から、尊大な口調できかれて、

――へッ、わらわせるな！

と、へそをまげた。

――日本橋もわからねえくせしやがって、大層もねえ流行恰好をしくさってら。大方、どこかの大名になめずりまわされている色子野郎だな。

「日本橋は、その道を、まっすぐに行きなさりゃ、目をつむっていても、着きまさあ」

「遠いか？」

「遠いといえば遠いし、近いといえば近いし――」

広姫は、馬脚をあおった。

……行けども行けども、繁華な通りには出なかった。

寺院や大名屋敷の高塀が、いたずらにつづき、それを抜けると、またさびしい草地になった。

――ちがう！　あの者は、いつわった！

広姫は、憤りと苛立ちをおぼえて、馬首を向けかえた。

このおり――。

往還のまん中を、ゆっくり歩んで来る編笠の武士があった。華やかな朱色の武者羽織をつけていた。

二間余に迫っても、どうしたのか、避ける様子もない。

広姫は、かまわず、馬蹄にかかるのはそちらが悪い、とばかり、一気に駆け過ぎようとした。

せつな——。
「……あ！」
どこに衝撃を受けたと感じないにも拘らず、広姫は、馬上から抛り出されて、地上へ、もんどりうっていた。
馬は、そのまま、遠くへ走った。
うめきを噛んで、片膝を立てる広姫の苦しげな様子を、編笠の武士は、
「ふゝゝゝ……」
ひくく、わらい声をたてて、見まもっていた。
ようやく、立ちあがって広姫はよろよろとよろめいた。
「どれ——」
武士は、歩み寄って、手をかそうとした。
その一瞬、広姫は、腰の剣を、びゅっと抜き討った。
啞然としたことだった。
隙をとらえての一撃であったが、きわめて無造作に身を沈められて、編笠上の宙をむなしく横薙いだだけであった。
身を起した武士は、編笠さえも揺れさせてはいなかった。
「おのれっ！」
広姫は、青眼にかまえて、じりっと、間合を詰めた。

殺気をあびせられる武士の静止相は、これを受けるなんの鋭気もしめしてはいなかった。双手をゆるやかに垂らして、こちらの第二撃を待っている。優美とさえいえる、すらりとした立姿であった。
広姫も、武芸ひとすじにうち込んで来た身であってみれば、対手の静けさが、実はおそるべき変幻自在の秘法を誇るものであることを、さとらないわけにはいかなかった。
尋常に立合って、とうてい勝てる敵ではなかった。
それがわかるだけに、広姫の強烈な気性は、躍起となって、闘志を燃えたたせた。
——南無！
思わず、そう祈り、
——八幡！
と、声なく叫んだ。
「ふゝゝゝ……」
編笠の中から、またもや、冷たいわらい声が起った。
「できる！　天稟もある、と申せる」
冴えた口調で、ほめた。
「ただ、所詮、女には、いかほど鍛えても、かなしいかな、限度がある」
「言うなっ！」
広姫は、かっとなって、大きくふみ込みざま、斬りつけた。
対手は、子供の棒振りでも避けるように、無造作に、これをかわすと、

「将軍家おん妹君広姫（こうひめ）——とお見受けしたが、いかがだ？」
と、言いあてた。
広姫は、もはや、冷静な思考力を働かせる余裕など、まったく持たなかった。
ただ、憎らしかった。くやしかった。
無我夢中で、つづけさまに、刃風をあびせかけた。
並の者ならば、とてもはずせぬ鋭い太刀先であったが、この強敵は、児戯（じぎ）のあいてをする大人のように、きわめて、のびやかな動作で、ひらっひらっと、紙一重の差で、空を斬らせつつあとずさった。
ついに——。
息をはずませて、広姫が上段にふりかぶったまま、
「名のれっ！」
と、叫んだ。
名のるかわりに、対手はゆっくりと、編笠をはずした。
広姫は、その面貌の優しさ、美しさに、意外の目を見はった。
「おきかせ申そう。わが名は、西国牢人・宮本伊織と申す」
おのが名を誇るひびきが、その声音には含まれていた。
——宮本伊織！
広姫は、以前に、侍臣の一人から、この西国の麒麟児についての噂をきいたことがあった。

その養父武蔵よりも、手練がまさるということであった。
こういう話が、つたわっている。
宮本武蔵は、試合をする場合、対手の打込む太刀先や突き出す切尖が、殆んど前額にふれるか、胸部にあたるぐらいのきわどさを、平然として、身をひらきもしなければ、受けとめることもせず、それが空を切った間一髪の間に、はねかえしに付入って、勝ちを占めるのを常とした。
門弟が、これをあやしんで質問すると、武蔵は、こたえて、
「これは、太刀先の見切といい、試合においては、最も肝要のことである。平生よく、この間合の見切を修業しておかぬと、大事の場合——すなわち、不意を討たれた刹那に、間に合わぬ。たたかいにおいて、敵の太刀を避けるため、あまり五体を動かすと、その動きによって五体に隙が生ずる。間合の見切は、むだに五体を動かさぬようにするためのものである。……見切の仕様は、いかにするかといえば、対手の太刀先とわが身との間に、一寸の間合を見切るのである。一寸の間合があると見切れば、対手が打ち下しても、突いて来ても、決して、わが身に当るものではない。それが出来難い場合に、受けるとか、はずすとかいう仕儀に相なる。しかし、最初より、一寸の見切は出来難いであろうゆえ、まず、五六寸ぐらいの見切を修業して、四寸に、三寸に、とおいおいに縮めるべきであろう」
そう教えた。
事実、武蔵は、門弟に稽古をつける時、その見切った寸を、正確に当ててみせた。
養子伊織は、この間合の見切を、一寸以内でやってみせた。
武蔵から、

「お前は、五分ぐらいで見切るそうだな」
と言われるや、伊織は、
「おためし下さい」
とこたえて、先に立って白鉢巻をすると、道場へ出た。
武蔵は、態度を小面憎しと見て、真剣を把って、板敷へ降りるや、いきなり斬りつけた。
伊織は、微笑したまま立っていた。武蔵の切尖は、鉢巻を両断したが、額を傷つけてはいなかった、という。
広姫（こうひめ）は、まさにおそるべき天才を対手とした、というべきであった。
「おのれが、宮本伊織か！」
「左様――」
伊織は、にたりと凄味のある微笑をかえした。
広姫は、しかし、つよくかぶりをふると、
「断じて、降伏などはせぬぞ！」
と、叫んだ。
「降伏されよ、とはおすすめして居り申さぬ。名のれと言われたゆえ、名のったまでのこと――」
「抜けっ、宮本伊織！」
広姫は、狂気のごとく、声をふりしぼった。
「広姫君！」

「…………」
「正直に申上げる。それがしは、女色を好みます」
「言うなっ！　けがらわしい！」
「他の男は、好みながらも口にせぬまでのこと。それがしは、それをかくし申さぬ。……殊に、それがしは姫君のごとき、男まさりの女性（にょしょう）を好みますぞ」
「言うなっ！　言うなっ！」
広姫は、なかば絶望の太刀を、振り込んだ。
伊織は、むしろ、かんまんにさえみえる動作で、一歩ひきさがって、
「貴女様のような、高貴なお生れの、勝気な気性の、稀（まれ）にみる美しい女性を、おのがものにする――これは男子の本懐」
「…………」
広姫は、憤怒のために、もはや、声も出なかった。
「貴女様が、それがしを斬ることが叶わぬからには、それがしは、貴女様のからだを自由にすることを高言してはばかるところはありませぬぞ」
「…………」
広姫は、地を蹴って、滅茶々々に、斬りつけた。
……結果は。
刀をもぎとられ、両手をうしろへねじあげられた。
「やわらかいな。この肌のやわらかさが、男を夢中にさせる」

わざと、伊織は、耳もとでそうささやいた。
「は、はなせ、卑劣者っ！」
「いったんとらえた者をはなすことはせぬ。わしのものにする！　わしから、はなれなくしてみせるぞ！」
「お、おのれっ！」
広姫は、死にものぐるいに、もがいたが、むだであった。
伊織は、広姫がもがけばもがくほど、欲情をそそられるようであった。

花の疾風

——たのもしや！
黒兵衛は、大きく上半身を傾斜させて歩きながら、おのずとほころぶ口もとが、むずむずとかゆくなって、時折、ぷつんと、無精髯をひっこ抜いていた。
数歩さきを、すたすたと足をはこぶ源四郎の姿が、なんとも、たのもしい限りに眺められるのであった。
あれから——。
黒兵衛は、猟犬の嗅覚にもまさる的確さで、すぐに源四郎の隠れ家をさがしあてたのであった。

源四郎は、黒兵衛の姿を見ると、微笑して、
「尾けて来たのは、何者だ？」
と、訊ねた。
——しゃっ！　不覚！
尾行されているとは、全く気がつかなかった黒兵衛は、あわてて、おもてへとび出して行こうとした。
「よい！」
とどめておいて、源四郎自身、すっと出て行ったが待つ程もなしに、もどって来た。べつに、どこにも変った様子がないのを、黒兵衛は、いぶかって、
「どうなされましたぞ？」
と、問わずにいられなかった。
「むかし道場で、ともに稽古をはげんだ仲間たちであった」
「ほう……では、小野道場の？」
「うむ」
「どうして、てまえを尾けて参りましたかな？」
「おそらく、高垣弥九郎の指令を受けてのことであったろう」
源四郎は、言いあてた。
「成程。……では、日本橋の高札場から、てまえを尾行して参ったに相違ございませぬて。……斬っておしまいになりましたか？」

「いや、峰打ちをくわせておいた。……高札場に、公儀の新しい禁令でもかかげられてあったか？」
「なんの――」
黒兵衛は、大きくかぶりをふって、
「貴方様に対して果し合いを挑む高札が立てられてありましたぞい」
「わたしに――？」
源四郎は、眉宇をひそめたが、すぐに思い当り、
「それは、宮本伊織であろう」
「い、いかにも、左様で――」
黒兵衛は、高札の文句をまちがえないように、復誦した。
ききおわった源四郎は、なおしばし、沈黙していたが、ふと、
「迷惑だな」
と、もらしたことだった。

「迷惑と申されますと？」
わが主人にも似げない言葉かな、と黒兵衛は、訊きかえした。
「わたしは、目下、兵法者であるよりも、人間でありたいのだ。……真剣試合など、生甲斐とはならぬ。宮本伊織を仆(たお)すことの快味よりも、人を救うことのよろこびの方が、どれだけまさって居るか知れぬ」

――申されたわい！
黒兵衛は、ふかく、うなずいた。
源四郎が、伊織との勝負に、なんのおそれも抱かず、たたかえば必ず勝つであろう自負さえも持っている態度と、受けとったのである。
黒兵衛は、美音(みね)と修太郎が、本郷で待っていることを告げた。
すると、源四郎は、すぐに、立ちあがって、
「会おう」
と、言ったのである。
隠れ家を出て、およそ二里あまり、源四郎は、何事かを沈思しつつ、黙々として、足をはこんで来たし、黒兵衛も、無言をまもってあとにしたがって来た。
と――。
松の疏林わきに出た時、源四郎は、われにかえったように、振りかえった。
「黒兵衛、女の叫びがきこえたようだな」
「いかにも、きこえましたな」
「あれは、刀をふるう懸声(かけごえ)のようだ」
「左様でございますか」
源四郎は、その叫びをきいたとたん、はっと、思い出したのである。
――あれは、広姫(こうひめ)ではないか？
愛宕山上で、広姫が斬りつけて来た瞬間、朱唇からほとばしらせた懸声に、そっくりと、きい

たのである。
「林のむこうの道のようでございますな。見て参りましょうかな」
「うむ――たぶん、お前と知りあいの女性（にょしょう）だろう」
黒兵衛は、眇眼（すがめ）を大きくひらいたが、何も言わずに、林の中へ、駆け込んで行った。
恰度（ちょうど）、その時であった。
広姫（こうひめ）が、伊織にむかって、
「名のれっ！」
と、叫んだのは。
音を消してすばやく、木立をくぐって行った黒兵衛は、
「おっ！」
と、広姫の若衆の姿に、あやうくおどろきの声を発しそうになった。
つづいて、黒兵衛を、あっとうならせたのは、対手の編笠（あみがさ）の武士が告げた姓名であった。
「おきかせ申そう、わが名は、西国牢人・宮本伊織と申す」
一大事！
黒兵衛は、樹間を、けもののように掠めて、源四郎のところへ、馳せもどって来るや、この危急を告げた。
宮本伊織が、広姫を犯そうとしている！
さすがに、源四郎も、愕然となった。

だが――。
源四郎は、動かなかった。
いまここで、広姫を救おうとすれば、伊織ののぞみ通り、決闘におよぶであろう。
いま、源四郎には、その意志がなかった。
伊織の手で、勝手に公示しただけのことである。挑戦に応ずるか否か――それは、こちらの自由なる意志による。
源四郎は、黒兵衛に述懐したごとく、兵法者として天下に高名をかかげる野望など、毛頭なかった。
伊織とたたかって、おのれが仆れたならば、火刑にされる志津女（しずめ）を、誰が救ってくれるであろう。
「黒兵衛――」
「はいっ！」
「わたしは、あの娘と少年に会いに行く」
「…………」
「それは……」
「お前に、広姫を救うてだてはないか？」
「考えてくれ。たのんだぞ！」
言いすてて、源四郎は、歩き出した。
黒兵衛は、この瞬間、

――はて？

と、小首をかしげた。

たのもしいわが主人、とひそかに誇っていた矢先だけに、黒兵衛は、軽い失望をおぼえずには、いられなかった。

――宮本伊織の剣を、殊更に避けようとなさる！

不満であった。

ともあれ、猶予していられぬ事態であった。

――ええい、ままよ、あたってくだけるか！

黒兵衛は、ふたたび、木立の中へ、すっ飛んだ。

そこでは――。

先に述べた通り、貴女様のからだを自由にする、と宣告されて、広姫が、滅茶滅茶に斬りつけた挙句、刀をもぎとられて、両手をうしろへねじあげられていた。

――おのれっ！　そ、それで、天下の兵法者か！

樹蔭から、のぞき見て、黒兵衛は、胸のうちで、絶叫した。

黒兵衛にとって、さんざもてあました驕慢な姫君ではあったが、やはり、それだけに親しみもあった。

当て落されて、ぐったりと崩れる広姫の哀れなすがたを見まもって、

――必ず、お救いいたしますぞ！

と、ちかった。

それから、半刻あまり後、源四郎は、本郷の加賀邸の高塀に沿うた道を辿って、雑木のしげった坂へ出ていた。

昏れて来て、靄のかかった窪地に、螢火のように、ふたつみつ、灯が薄闇に滲んで、またたいていた。

――ひどく貧しい一郭だな。

源四郎は、美音の俤を甦らせて、はき溜に鶴とはこのことであろう、と思った。坂を下った地点で、住人の一人に、

「加平という老人の家はどこか？」

と訊いた。

すると、対手は、急に、警戒の目つきになって、じろじろと源四郎を見やっていたが、何もこたえずに、一散に、長屋の路地へ、かけ込んで行った。

どういうのだ？

と、いぶかっていると、そこが、にわかに騒然となった。

いずれも、乞食同然のうす穢いなりの男女が、血相変えて、手に手に、棒や鍬や石ころをひっつかんで、一斉になだれ出て来るのを、源四郎は、啞然として、眺めた。

この自分にむかって、殺到して来るのである。

「野郎っ！」

「ぶち殺してしまえ！」

「ここは、地獄の一丁目だぞ！」
「やれ、やれっ！」
口々に、喚きながら、武器をふりかざした。
ばらばらっ、と石ころが飛んで来て、源四郎は、不審のままに、
「止さぬか！」
と、叱咤した。
「なにをっ！　恥知らずめ！」
「生かしちゃ、かえさねえぞっ！」
「娘をかどわかしただけで、あきたらずに、子供までしょっぴきに来やがったか！」
源四郎は、この叫びをききとがめて、はっとなった。
「おい！　かどわかされたというのは、加平がつかえていた家の娘のことか？」
「白ばくれやがるない！」
また、石が飛んで来た。
「待て！」
源四郎は、凛乎として、抑えた。
その気魄に圧倒されたし、ようやく、皆は、自分たちが、惑ちがいしたと気づいた様子をしめした。
「娘をかどわかしたのは、わたしのような牢人者か？」
そう訊かれて、一人の女が、

「さむらいだ」
と、こたえた。
「どのようなさむらいだ？」
源四郎が、つかつかと歩み寄った折、加平が、人垣をかきわけて、出て来た。
「も、もしや、貴方様は、神子上源四郎様ではございませぬか？」
そう言いかける老爺に、源四郎は、うなずいてから、
「加平というのは、おぬしだな？」
「は、はい」
「美音さんを、拉致した武士たちを何者と見た？」
「それが……一向に、いずれの者どもとも――」
「公儀の者とは見えなかったか？」
「いえ、そうでは、なかったようでございますが……」
加平は、このことが大きな衝撃となって、かねて持っていた病気が昂じ、牀に臥していたのを、騒ぎで起き出て来たので、もはや、立っていられずに、地べたへ坐り込んで、両手をついてしまった。
源四郎は、住民たちを見わたして、掠奪の現場を目撃した者はいないか、と問うた。
誰一人、目撃してはいなかった。
源四郎は、加平をかかえ起して、

「修太郎という少年は、いかがした？」
「……狂気のようになってお嬢様を、とりもどして来ると、申して——」
——あの少年なら、じっとしてはいないであろう。
源四郎は、対手もあろうに柳生但馬守を討ちとる、と言いはなった小さな面魂を、思い出した。
修太郎がもどって来るのを待つよりほかはなかった。
源四郎は、加平を背負って、その蓬屋に入って、一夜を明かした。
朝日のさしそめた頃あい、炉ばたに横になっていた源四郎は、入口の戸を、がたがた鳴らす音で、起き上った。
土間に、ひょろりと入って来た修太郎は、源四郎の姿を見出すや、なんともいえぬ悲しい表情になって、肩をすくめた。
「どうした？」
やさしく声をかけると、急に、口をぎゅっとへしまげて、ぱちぱちと、目蓋をしばたたいたかとみるうちに、大粒の泪を、ぼろぼろと、こぼした。
源四郎は、立って行き、その肩へ手を置いた。
「泣くことはない。わたしが、美音さんを必ず、とりもどす。……さ、上って、美音さんがつれ去られた時の有様をきかせてもらいたい」
促されて、炉ばたに坐った修太郎は、しばらく、頬の濡れるにまかせていた。
一睡もしていないのであろう。目のまわりに、隈ができていた。くちびるは土色であった。

やがて、源四郎は、修太郎の口から、掠奪者の一人が、隻脚であったことをきいた。

一方——。
広姫を拉致した伊織と、これを尾けた黒兵衛は、どうなったか？
伊織は、ぐったりとなった広姫をかかえて、その馬にまたがるや、一散に、駆け出し——これを見うしなわずに追う黒兵衛は、ひさしぶりに、必死に、汗をかいた。
またたくうちに、千駄ヶ谷の古刹聖輪寺裏手にある一軒家の前にもどりついた伊織は、何を考えたか、広姫を馬上にのこしておいて、すっと家の中に入ると、
「糸耶——」
と、呼んだ。
夕闇がしのび入った部屋は、ひっそりとして、人の気配がなかった。
「ふむ。……出かけたか」
にやりとした伊織は、おもてへ、ひきかえした。
けだし、伊織は、邪魔になる糸耶を斬りすてておいて、広姫を、はこび入れるこんたんを起したのである。
馬から、抱きおろされた広姫は、微かな呻きをもらした。
伊織は、そのからだを両手にのせると、
「将軍家の妹が、これか」
あらためて、自分に、小声で言いきかせた。

畳の上へ、仰臥させ、灯を入れてから、しばらく、その寝顔を見まもっていた伊織は、やがて、その若衆袴をぬがせた。
裾前がめくれて、脛が、しろじろと、浮きあがった。
伊織は、その脛へ、片手をあててみた。
柔かな、あたたかい処女の肌膚が、てのひらに、しっとりと吸いつく――。
――この娘は、家康の血をひいているのだ。
――それを、いま、わしは、妻とする！
自分に与えられた運勢を、ここにも見る伊織であった。
万人に抜きん出た剣の天稟も、優美な容姿も、それが、当然、自分にはさずかるべくしてさずかった――えらばれた運勢と思いなして、疑わずに来たのである。
いわば、日輪は、おのれのためにまわっていると、傲慢に心驕って、ただの一度も、これに恥辱をあびせられたおぼえのない若者であった。
嘗て、伊織は、養父武蔵から、
「お前は、夭折――しかも凶死の相をもって居るぞ、くれぐれも、心せい」
と、言われたことがある。
伊織は、笑って、
「おそらく、父上も、若い頃、その相があったのではありませぬか」
こたえたものだった。
伊織には、人の刃にかかって斃れるなどということは、考えられなかったのである。

――どうする？
木下闇の中にうずくまった黒兵衛は、その家の灯かげを見まもって、自身に問うた。
どうすれば、広姫を救い出せるか――うまい才覚が、一向に、働かないのである。
――まごまごしていると、あとの祭ということになるぞ。
足もとから火がついたように、じりじりしているのだが、なにしろ、対手がわるい。
主人の源四郎でさえ、たたかって必ず勝つとは限らぬ稀世の使い手なのである。
――よわった！
正直、そう思う。
忍びの術のうちの、あれこれと考えめぐらしてみるのだが、いずれも、宮本伊織に対しては、なんの威力も効果もないようであった。
――やむなし！
黒兵衛は、斬られるほぞをかためた。
身を起して、樹の下から、出て行こうとした――その時。
草径を辿って来る人影をみとめて、黒兵衛は、あわてて闇に身を沈めた。
女のようである。
この径は、その家へ行き着くしかない。
じっと、宵の薄闇を透かしていた黒兵衛は、――おっ、とあやうく声をたてそうになった。
その横顔が、美音そっくりだったからである。
別人だと、自分に言いきかせるまでに、数秒かかった。

――他人の空似か？

小首をかしげた黒兵衛は、次の瞬間、

――あっ！

と、声なく叫んだ。

――姉上の糸耶(いとや)様だ！

直接、顔を合せて、話したことはなかったが、駒場野において、源四郎が、その危急を救って、馬を駆って遁れ去る光景を、見とどけている。

――そうだ、糸耶様に相違ない。

それにしても、糸耶が、どうして、宮本伊織の仮ずまいの家に入ろうとするのか？

しかし、それをいぶかってはいられなかった。

「……もし！」

黒兵衛は、思いきって、声をかけた。

ぱっと、向きなおって身がまえた動作は、修練をつんだ者の迅さ、隙のなさであった。

黒兵衛は、するすると、姿をあらわすと、

「豊島様御息女――糸耶様とお見受けつかまつります」

と、言いかけた。

「そなたは、何者じゃ？」

「おしずかに――」

黒兵衛は、手をあげて、制した。

「てまえ、神子上(みこがみ)源四郎の家来にて、黒兵衛と申しまする」

「えっ？」

糸耶は、おどろいて、小さな醜い男を、見まもった。

「ぶしつけながら、貴女様と宮本伊織殿とは、いかなる御関係か、うかがわせて頂きとう存じまする」

そうきかれて、糸耶は、妻だとはこたえられなかった。

――神子上殿の家来ならば、伊織の様子をさぐりに来たのであろう。

伊織と源四郎の決闘について、ずうっと考えながら、わが家へもどって来た糸耶であった。

もとより、現在の妻である身としては、良人の勝利をねがうべきであったろう。しかし、糸耶は、源四郎にも負けて欲しくはなかった。いや、もしかすれば、伊織が、源四郎の剣によって斃れることを、糸耶の意識の底では、のぞんでいるのではなかろうか。伊織がこの世からいなくなれば、糸耶も、妻たる苦しみから解き放たれるのであったから……。

ともあれ――。

糸耶としては、じぶんが伊織の妻になっていることを、源四郎に知られるのは、堪えがたかった。

「ただの知り人にすぎませぬが……」

「たずねて参られたと申されるのでございますな？」

「そうです。……伊織、いえ宮本殿は、御帰宅であろうか！」

「もどっておいでございます。おつれがございますわい」
「え？　つれ？」
「公方様のおん妹君でございます」
「…………」
「拉致されて来たのでございます。妻になさるために——」
糸耶は、わが耳を疑った。
「そ、それは、まことか？」
思わず、嫉妬を声音にあふらせた。
黒兵衛は、内心、にやっとした。
——カンは当ったわい！
夜に入って、女ひとりで、この一軒家をおとずれる。これは、ただの関係ではないはずだ、と推察した黒兵衛であった。
「そのお目で、たしかめて、ごらんなさいませい」
黒兵衛は、おのが使嗾をいささか卑劣とおぼえたものの、この方法以外に、広姫を救い出すべがないのであってみれば、
——ゆるされませい！
と、胸のうちで、詫びつつ、指ささずにはいられなかった。
糸耶はほんのしばし、その場を、石になったように動かなかった。
わが家に点いた明りへ、じっと、目をあてていた。

——将軍家の妹君といえば、広姫のことであろうが……。
武芸に熱中している男まさりの姫君ときいていた。
糸耶は、いつか、伊織がもらしていた言葉を思い出した。
「わしは、子を生んで、家をまもるような女は好まぬ。木曽義仲にしたがって戦場を疾駆した巴のような女こそ、わしが愛すにふさわしい」
じぶんという女に、興味を抱いていたのも、春日局に復讐せんとする情熱を燃やしていると知ったからである。
——そうか！　伊織は、わたくしをすてて、広姫をとろうとしている！
全身を焼くような凄じい嫉妬が、つきあげて来た糸耶は、歯をくいしばり、両のこぶしを、骨がくだける程かたくにぎりしめた。
——させぬ！　断じて、そんなことはさせぬ！　伊織を殺して、わたしも死ぬ！
糸耶は、足をふみ出した。
さすがに、黒兵衛は、糸耶があふらせた狂おしい殺気に、ぶるっと胴顫いして、
「糸耶様。——策を、お用いなさいませい」
と、すすめた。
糸耶は、そんな忠告など耳に入らなかった。
庭に忍び入るや、嘗て駒場野で、春日局を狙った時にまさるともおとらぬ今、神経の緊張によって、おのが気配を、消しつつ、じりじりと、灯かげにむかって、迫って行った。
いつか、右手には、懐剣が抜き持たれていた。

——ただ一投で！

祈るように、糸耶は、胸のうちで叫んでいた。

……灯の中に。

糸耶は、見た。

伊織が、仰臥させた者の裾前をひろげて、その片手を、腰から膝へと、撫で移しているのを——

—。

一瞬。

糸耶は、跼めていた身を、すっくと起した。

「むっ！」

伊織が、宵闇を截って飛んで来た刃物の唸りに、身をねじったせつなは、もうおそかった。

したたか、左肩へ、打ち込まれた伊織は、その衝撃よりも、

「不覚っ！」

と、おのれの油断に、かっとなった。

「……う。むっ！」

呻きを噛んで、左肩から、懐剣を抜きすてた伊織は、差料をひろって、つッ立った。

「糸耶っ！　き、きさま——」

疼痛に堪えて、仁王立った伊織の、灯を逆に受けた形相を、糸耶は、

——けだもの！

と、感じた。

はじめて、糸耶の脳裡に、侮蔑の意識が生れた。

——こんな男に、殺されはせぬ！

はっきり、じぶんに言いきかせた。

「糸耶！　成敗してくれるぞ！　にげるなよ！」

伊織が、一歩ふみ出すや、糸耶は、はじかれたように、身をひるがえした。

「うぬっ！」

伊織は、大きく跳んで、庭へ立つや、猛然と、追跡しはじめた。

この程度の傷で、走力がおとろえるような、並のからだではなかった。

黒兵衛は、伊織が傷つくのを遠い地点から目撃したために、それがかなりの深傷と見てとり、

——あれではいかに、彼奴でも、糸耶様を斬れまい。

と考えたのであったが、これは、まことに迂濶というべきであった。

ともあれ、黒兵衛は、そうと見てとったために、広姫に息をふきかえさせるべく、一散に、裏手へまわったのであった。

糸耶は、奔り、伊織も、奔った。

林をくぐり抜け、小川をとび越え、草地をかすめて、寺院の土塀に沿った往還へ出た時、糸耶は、ついに、運命の神から、見はなされた。

樹株につまずいて、どうっと、のめった。

「こやつ！」

地を蹴って、一間を躍った伊織は、一刀を、その背中へ、振り下した。

「ひっ！」

鋭い笛の音に似た悲鳴が、糸耶の口から、ほとばしった。

首を、肩を、四肢をちぢめて、なお、遁れようと、地面を匐う惨めな姿へ、

「見たかっ！」

伊織は、悪鬼のごとく、喚いて、二の太刀、三の太刀を、撲りつけた。

そして――。

ふいごのように、肩を喘がせた伊織は、よろよろっと、土塀へ、身をよりかけた。

「ば、ばかなやつ――」

そうつぶやいて、永遠にうごかなくなった妻のむくろへ目を落した。

この冷酷な若い兵法者の胸中にも、良心はあったとみえて、微かな疼きが起っていた。

伊織は、かぶりをふると、自分に言った。

「これしきの傷で……わしは、神子上におくれをとらぬぞ！」

生命のきずな

小野道場二代目、次郎右衛門忠常は、書屋にあって、亡父の日誌をひもといていた。

忠常は、次男であり、長男忠也は、亡父の先師伊藤一刀斎の後を相続し、伊藤典膳と名のって、鎌倉に住んでいた。

いわば、一刀流は、伊藤派、小野派に岐れていた。そして、伊藤派の門人には亀井平右衛門、間宮五郎兵衛、溝口新五左衛門など、師忠也にまさるとも劣らぬ優れた使い手がいた。

しかし、小野道場には、もはや、忠常が後継者とすべき人物はいなかった。

神子上源四郎は去り、高垣弥九郎は隻脚となりはてていた。

忠常自身、近年、とかく病床に臥し勝ちであった。

父に似て、強烈な気性であったので、天下一柳生流天下二の一刀流、などという噂が耳に入ると、猛然たる反撥をおぼえて、柳生道場へ、真剣試合を申込んでやろうか、と幾度びとなく、衝動にかられたものであった。

おのが天稟を誇りつつもあまりに弱いからだが、もどかしく、また、秀れた門弟を持たぬことが口惜しく、忠常は、形相が変ってしまったと、蔭口をたたかれるまでに、焦躁していた。兄忠也とも、近頃は、疎遠になっていた。

わずかに、その焦躁をしずめる効果をもっているのが、亡父の日誌であった。

率直で、諂諛を嫌った父忠明は、その日誌に、嘘はひとつも書いてなかった。

ありのままであるだけに簡潔に述べた行間に、忠常は、鬼気迫るものをおぼえたのである。

曽て――。

忠明は、秘命をおびて、薩摩に行った。

島津藩の剣客瀬戸口備前に、招かれて、応じて試合するために、その屋敷をおとずれたが、すでに、忠明は、瀬戸口備前が、自分を隠密と看破して、討ち果すこんたんだなと、さとって、決

死の覚悟をした。

　書院へみちびかれて行く途中、十坪ばかりの板敷の稽古場があり、そこに屈強の若い藩士たちが二十人ばかり控えていた。忠明が、なかば通りすぎた瞬間、一斉に、白刃を抜きはなって襲撃して来た。忠明は、八方へ身を転じつつ、またたくうちに、八名を斬り、五名に重傷を負わせた。

　もはや、任務を遂行することは叶わぬ、と知って、忠明は、薩摩を去るべく、国境まで趨った。そこに、数十名の敵が、待伏せていた。忠明は、たちどころに、六名を討ちすて、七名を傷けた。

　そこから、さらに、半里あまり先の地点に、九尺余の鎌槍を構えた敵が、一人だけ、待ちかまえていたが、忠明は、一太刀で斃した。それが、瀬戸口備前であった。

　忠常は、亡父が記した日誌を読みつづける。

「……そもそも、当流刀術を、一刀流と号けたる所以のものは、元祖伊藤一刀斎なるをもっての故にあらず。一刀流と名付けたるには、その気味あり。万物太極の一より始まりて、無極の十に終り、また無極の十より起って、太極の一に帰するがごとく、一刀より万化して、一刀に治まり、また一刀に起るの理あり。

　一刀流は、活刀を流すの字義あり、流すは〝スタル〟の意味なり。当流、スタルことを要とす。（不争曰く、一念去てなしの義、技もまた然り）スタルと言うは、一刀に起り、一刀にスタルこと也。然れども、そのスタルの理、通じ難し。是に於て、古来、門前の瓦と言える譬あり。

瓦を以て門を叩けば、人出で来りて門を開く。この時、用をなしたる瓦を捨つべきを、そのまま持ちて席上に通らば、かえって不用の品とならん。これ、捨てざるが故なり。業もまた然り。打つべき所あらば一刀にて打ちて、用をなしたる故、ここにスタルことあらば、また起る。万化すと雖も、みな然り。打ちて打たざる元の心となる。これ、刀スタルの至極なり。

また――〝流〟とは、水の流るるなり。流るる水の如く、機に少しも滞りなきの理もあり。されどまた、流るる水の勢い広大なり。山を流し、谷をも越す……」

　縁側に、足音が近づいて来た。

「申上げます」

　声がかかって、忠常は、日誌から目をあげた。

「なんだ？」

「神子上源四郎、臆面もなきていにて、帰参いたしました」

「なに！」

　忠常は、かっと、障子の一点を見据えた。

　――彼奴！

　肚裡に、凄じい憎悪が渦巻いた。

　それを抑えるのに、数秒の沈黙を要した。

「道場へ、据えておけ！」

「かしこまりました」

　門弟が、立ちあがるや、忠常は、ふと思いついて、

「他の者は、入ってはならぬ。源四郎一人にしておけい」

「はい」

門弟は、いそいで、玄関へ行った。

忠常は、日誌を文筥へもどして、立ちあがった。

しかし、すぐには、道場へ行こうとせず、心気をしずめるために、居間に入って、亡父が、印可とともにのこした愛刀葵下坂康継を抜きはなった。忠明が、家康から拝領した名刀であった。

下坂康継は、もと大宮市左衛門といい、江州下坂の住人であったが、性格が強烈で、友人たちと争って、二人までも斬りすてて、北国へ趨った。はじめ、越前の一乗谷に、鞴を据え、のち、柴田勝家が入国して北庄に城を定めるや、そこへ移った。

雌伏の時代は永く、中納言秀康が、領主となるにおよんで、はじめて、見出されて、その差料を打った。これが見事な出来ばえであった。

秀康は、出府して、これを、家康に見せたところ、

「天晴れの名工よ。江戸へ召出して打たして見よ」

ということになった。

一心こめて打ちあげた一振は、家康をうならせた。

殊遇三年を経て、家康から「康」の一字を賜り、葵紋を刀の中心にきることを許された。

康継が、京の伊賀守金道から「日本鍛冶宗匠」の称号を許されたのは、大阪の役の功績によるものであった。

冬の陣がはじまる前に、家康から伊賀守金道に、

「三ヵ月以内に、千振の太刀を製作するように――」

という注文が来た。

金道は、康継に相談したところ、

「もし、京都中の刀鍛冶を、臨時の弟子ということにして打たせたならば、間に合うやも知れぬ」

という返辞だった。

金道は、この儀を家康に願い出た。

家康の命令が、京の刀工たちに下されるや、康継は、金道にかわって、総指揮をとり、おのが意のままの刀を、鍛冶たちに打たせた。そして、首尾よく、三ヵ月以内に、千振の太刀を打ち上げてみせた。しかも、いずれを眺めても、冴えた仕上りだった。すなわち、これが、豊臣打倒の剣として、後年、武士の間に大いに珍重されることになった。

夏の陣によって、大阪城は灰燼に帰し、その際、秀吉以来蒐められた天下の名刀が、戦火によって焼け金と化してしまった。

愛刀家の家康は、

「天下にその名を謳われた名剣を、廃棄するに忍びない。康継に焼き直させてはどうか」

と、本多忠勝に命じた。

この趣旨を受けて、康継は、京において、幾多の名刀を、巧みに打ち直した。それによって、さらに、名をあげた。

いま――。
次郎左衛門忠常が、抜きはなったのは、康継が、はじめて家康のために打った一振であった。
忠常は、二尺三寸の秋霜を凝視することによって、心気をしずめるや、鞘におさめて、立ち上った。
源四郎は、数十坪もある大道場の中央に端座していたが、忠常が、上段の畳敷きにあらわれると、両手をつかえて、平伏した。
しかし、一語の謝罪も、口にはしなかった。
忠常は、しばらく、じっと見据えていたが、
「源四郎！」
と、刺すがごとく、鋭く呼んだ。
「は――」
「自らすすんですてた道場へ、何のこんたんあって舞い戻った？」
「お言葉をかえします」
源四郎は、頭をあげると、
「ご遺言によって、そのご命令を遂行いたすために、やむなく、無断にて姿をかくしました」
「遺言を申せ！」
「最秘にせよとのことでありましたゆえ、これは、守らねばなりませぬ」
「言うなっ！」

忠常の蒼白い顔面が、一層褪めた。
「二代を継いだこの忠常にも明かせぬとは、そのような遺言はなかったと断定して、あやまりはあるまい」
「……………」
「ぬけぬけと……おのれ、当道場を乗っ取るために、舞い戻って来たか！」
「ただいまは、それがし、一刀流を称することも遠慮いたしております牢人者にすぎませぬ。ただ、本日は、のっぴきならぬ急用あって、お叱り覚悟で、罷り出た次第にて、もとより帰参を願う所存など毛頭ございませぬ」
「急用とは、なんぞ？」
「高垣弥九郎儀、ゆるしがたい所業をなしておりますため、それがしに、お引渡し下さいますよう、願い上げます」
「弥九郎が、何をいたしたと申す？」
「それがしが懇意の女人を拉致いたしました」
「たわけ！」
忠常は、かっとなった。
「兵法者が、女色に目晦んで、奪い合うとは、なんたる醜態だ！」
「誤解なさいませぬように――。弥九郎が、血迷うたまでのこと。それがしのために、隻脚となった無念をはらさんために、手段をえらばず、かかる所業におよんだものと存じられます」
「黙れっ！」

忠常は、立ちあがった。

「弥九郎をひき渡して欲しくば、まず、このわしと、真剣勝負せい！」

源四郎は、すぐには、応じなかった。

そのわずかの沈黙は、しかし、忠常にとって、狂い出したいくらい不快きわまる傲慢なものに感じられた。

「立てい、源四郎！」

叱咤をあびせて、忠常は一足、広床へ降りた。

「やむを得ませぬ。お対手つかまつります」

源四郎は、やおら、身を起して、板壁へ架けられた木剣のところへ、寄ろうとした。

「源四郎、おのれの差料で立合え！」

忠常は、叫んだ。

しかし、源四郎は、肯かずに、選びもせずに、無造作に、ひと振りの木剣を手にした。

忠常のこめかみに、青い筋が、走った。

対い立つや、

「貴様、この忠常の腕をあなどって、真剣に、木剣をもって立向うのか？」

「左様な存念は、毛頭ありませぬ。師に対する礼を失せざるよう――心積りにございます」

「師？　貴様、わしを師とほざくか？」

「そうではございませぬ。お持ちの一刀、下坂康継と心得ます。されば、それを、亡き恩師と思

いなし、それに向ける刃はない故に……」

「うぬ！　申したな！」

忠常は、ぎらっと抜き放つや、鞘を、後方へすてた。

もとより――。

木剣は、すでに真剣にひとしい武器であった。腕に異常の力がこもり、技が冴えれば、頭蓋を砕くことはたやすい。先年、宮本武蔵は、佐々木小次郎を、ただ一撃で仆している。

審判役のいない仕合である。危険に対して、なんの掟もつくられてはいない時代であった。

……間合九尺。

白刃と木剣を隔てて、相青眼に、対峙するや、さしも広い道場の空間が、凄じい殺気に盈ちて、真空と化したかの観があった。

「…………」

「…………」

無言をまもり、微動もせず、ただ、炳乎たる眼光と眼光を、宙で火花を散らせながら、この固着状態を、どれだけつづけようというのか？

実は――。

忠常は、道場に正座している源四郎から、みじんも、剣気を感じとらず、むしろ、柔和な態度を持していることに、不審さえもおぼえていたのであったが、こうして、対峙するや、忽然として別人と化したごとく、おそるべき気魄を陽炎のように全身から燃えたたせるのを見て、微かな

戦慄（せんりつ）に襲われたのである。

——これは！

忠常は、おのれが知る源四郎とは、全くちがった剣気を放つ兵法者に対する気力をふりしぼらなければならなかった。

ぴたりと構えた木剣は、澄んだ水面に映る樹木のように静かであったが、次の刹那には、どう変化し、どう動くか、全く予測をゆるさぬものが、そくそくとして、迫って来るのであった。

しかも——。

源四郎の眼光も、おのれの眼光も、ともに、磨ぎすました槍の穂先のように鋭く輝いているとはいえ、おのずから異質のものであることを、忠常自身、意識しているのであった。

源四郎のそれは、いわば、いっさいの感覚を戦いのために罩（こ）めた無心の生命力を湛えていたし、おのれのそれは、

——こいつが！

という憎念に燃えさかって、心気を氷のごとく冷静なものにすることこそ勝機をつかみ得る、という平常の修業が、明らかに紊（みだ）れているのを如何ともなし難い苛立ちをともなっているのだった。

決して、源四郎に、おのれが劣るとは思わぬ。

格正しく積んだ錬磨が、おのが天禀がどれくらいのものかという悟りさえ、忠常に、与えているのである。

いかに、源四郎が、数多く真剣場裡をふんで来ていても、こうした仕合となれば、おのずから、勝負の相を観る目を革（あらた）めなければならない。

忠常の剣には、一刀流の極意がこもっている。

乱闘の間に、自分自身でも、思いがけない程の、凄じい神速の力と技が発揮されることは、源四郎も、経験によって知ってはいたが、そうした動きは、この場合厳しく拒否されている。忠常の青眼の構えが、それをゆるさないのだ。

……ともに、動き出した方が不利とさとった以上、いかに体力と気力を、この緊迫した真空のただ中に、持続するか、であった。

一方が、木であれば、他方は、石であった。

移り行く秒刻の間に、しかし、二個の体軀の中では、徐々に、生命力の消耗において、差がついていた。

それは、やがて、両者の顔面にあらわれた。

源四郎の眼光が、ますます冴え、ひきむすんだ口もとには、むしろ、一種冷酷な影さえ閃くのにひきかえて、忠常の形相は、蒼白くこわばって来た。そして、毛穴のすべてが、気息に喘（あえ）ぎはじめるように、あきらかな疲労度をしめしたのは、それから四半刻も経たないうちであった。

忠常が、のどもとめがけて、胸中からせりあげて来る塊りを、ぐっと呑み下しつつ、その苦痛を、すがたからかくしたのは、流石であった。

だが——。

もはや、これ以上、この凄惨な固着状態をつづけることは、忠常の体力がゆるさなかった。すて身の一撃があるのみであった。

「……むっ！」

かっと、双眸を瞠いた忠常は、氷上を滑るように、すうっと三尺余出たかとみるや、突如、猛鷲が、おそいかかるように、床板を蹴って、躍った。

同時に――。

源四郎は、旋風に乗ったごとく、高く跳んで、一間余を退いた。

忠常の白刃は、源四郎の影を斬った。

そのむなしさに、忠常は、思わず、異常な呻きをほとばしらせた。

せつな――忠常の肺は、大きく裂けた。

がっ！

おびただしい鮮血が、その口から噴いた。

「おっ！」

源四郎は、愕然として、木剣を下げると、忠常のむざんなすがたを見まもった。

白刃を杖にして、上半身を反らした忠常は、わななく片手で、懐紙をつかみ出して、口をぬぐった。

それから、大きく肩を波うたせて、気息をととのえると、血汐の撒かれた床板へ端座した。

源四郎も、木剣をうしろへ置いて、正座した。

「わしの、負けだな……源四郎」

かすれた、ひくい声音でそう言って、忠常は、自嘲の薄ら笑いを、口もとに刷いた。

「おやすみなさいますよう――」

源四郎は、すすめた。

病弱の天才児に、絶望を与えたことを、烈しく悔いる心があった。

忠常は、かぶりをふると、

「……高垣弥九郎は、すでに、破門いたして居る」

と、言った。

「……………」

源四郎は、忠常が、ふたたび、血を喀くのではないかと、不安をおぼえつつ、じっと見まもった。

「弥九郎が、何処かの娘を吉原に売った、という噂をきいたために、破門した。……その娘が、お前の、懇意の女人で、あろう」

――美音を、遊女に！

源四郎は、戦慄した。

――弥九郎め！　人非人！

「……行って、弥九郎を、斬るがよい！」

忠常は、呟くように言った。

人生れて静かなるは天の欲也――ということばがある。

人おのずから、その性いかんによって、運不運が岐れる。

人の身のあだなることを、幼い頃から知らされていた美音が、復讐鬼と化した隻脚の兵法者の手に捕えられて、抗うすべもなく、売春の里内へ投げ込まれながらも、なお、身の清浄を保ち得ていたのは、すなわち、これを指すのであろうか。

偶然であった。

美音は、紅葉太夫が、柳生左馬介憲巌の剣に仆れた、あの茶亭に起臥していたのである。

この青楼のあるじが、寛大な、人情深い人物であったわけではない。

美音は、つれ込まれた時、少量の血を喀いたのである。

あるじは、美音の美しさと病弱を秤にかけて、かなりの療養期間を与えても、これは、利益の方が大きい、と算盤をはじいたのである。

しばらく、気ままに、一人で、くらさせておいて、折を見て、たっぷりと金子を懐中にして登楼して来た風流人を以て任ずる大町人にはべらせてみよう、というこんたんであった。

美音の美しさは、気品が匂うていた。あるじは、その時、すぐに、曽て、京の島原で見た松の位の吉野太夫の俤を思い泛べたものであった。

——病んでいなければ、明日からでも、この吉原随一の、太夫になれようものを！

あるじは、いかほど、くやしがったことだろう。

どういう筋道から、ここへつれて来られたのか——これは、きく必要はなかった。

傾城がどういう勤めをしなければならぬかも知らぬげに見える娘であった。

「改易になった大名のわすれがたみだ」

という売込みも、そのままに受けとったことである。

あるじは、売り手が去ると、美音にむかって、やさしく、

「どうやら、貴女様は、ひどい目にお遭いになったご様子でございますな。……てまえは、斯様ないやしい店を営んではおりますが、酒席へ出していいお娘御か、いけないお娘御か、ぐらいの判別はつきますわい。それに、貴女様は、お気の毒に、わずろうておいでなさる。まず、からだをなおすのが第一の勤めと申すもの。さいわい、裏に、空いた茶室がありますす故、ひとつ、ゆっくりと、養生して頂きましょう」

と、すすめたのであった。

美音が、その親切をおそろしいと疑わなかったのは、救い手が近く現れることを信じていたからにほかならぬ。

今宵も——。

美音は、潮騒のようにひびいて来る絃歌の音をききながら、炉ばたへ、ひっそりと坐っていた。

焚べる薪は、なんの木か炎が美しい色であった。

それを見入る眸は、澄んで、無心であった。

どんな場所に置かれてもその一刻が、じぶんのものであれば、心しずかに坐っていられる美音であった。

置石を鳴らして、小走りに近づいて来る足音があった。

「もうし」

のびやかな、可愛い声が、

「入っても、かまいませぬかえ」

と、呼んだ。

「どうぞ、お入りなさい」

「ごめんなされませ」

両袖を胸であわせて、ちょこちょこと上って来た小さな禿（かむろ）は、炉ばたへ、ぺったりと坐ると、

「今夜は、おおさむ！」

と、あどけなく、首をすくめ、肩をちぢめた。

——まだ十歳にもなるまいに、親の許から、ひきはなされて、こんな廓（くるわ）勤めをさせられるとは！

美音は、幾年かのちの美しさが容易に想像される整った顔だちを、憐みの情をこめて、見まもった。

禿（かむろ）は、美音（みね）を見かえして、

「おさびしゅうはありませねかえ？」

と問うた。

「いいえ、べつに——」

「ほんとに？」

「ひとりでいることには、馴れていますもの」

美音が、微笑して、言うと、禿は、微かに眉をしかめて、

「でも……この茶室に、ひとりで寝ていれば——」

と、言いかけて、急に、なにか怪しい気配でも感じたように、怯（おび）えた目つきになって、ぶるっと見わたした。

「どうしました？　この室に、なにか、怕（こわ）くなる因縁話でもあるのですか？」

美音は、やさしく、訊ねた。

「おききなされたら、今夜から、ひとりではねむれませぬぞえ」

「いいえ、大丈夫です。わたくしは、なにもわるいことをしたおぼえがありませんもの。とり憑（つ）かれたり、たたられたりするはずがありません。……どなたか、ここで、あわれな最期でもとげたのですか？」

「あい」

「どなたが——？」

「紅葉太夫というおひとが……」

「どんなひとでした？」

「貴女さまのように、美しゅうて、さびしそうな太夫でした」

禿は、亡き佳人のおもかげを、美音に見出すように、まじまじと見つめつつ、

「貴女さまも、お武家の出なのでしょう？」

と、訊ねた。

美音が、うなずくと、

「太夫もそうでした。ご不幸な身の上だったにちがいありません」
禿は、そう言って、そっと、ふところをさぐると、小さな品をとり出した。
「太夫は、わたしに、これを下さいました」
それは、青銅の十字架であった。
「これを肌身にはなさず、つけていれば、きっと幸せになれると、教えて下さいました」
――切支丹の信徒であったのか。
暗い運命にもてあそばれて、その悲しみと苦しみを忘れようとして求めた信仰であったのだろう、と想像された。
「やさしい、いいかただったのですね」
「あい――」
禿は、泪ぐみ、小指で、目もとを拭いた。
「どうして、そんないいかたが、あわれな最期をおとげになったのでしょう？」
「若いおさむらいがお登楼りになって、太夫のお客におなりでございました。そのおかたが、太夫のむかしのお知りあいだったのです。……太夫が、あんなにうれしそうにもてなされたのを、わたしは、はじめて見ました。……太夫が、この離れに、お泊めしたお客は、それまで一人もありませんでしたのに、その夜は、そのおつもりになりました」
「……………」
「太夫は、きっと、廓へ来て、はじめて、心をゆるしてもいいお客にお会いなされたのですね」
ちいさな少女の口から、女心の機微にふれる言葉が出たのを、いかにも微笑ましいものにきけたのも、廓の雰囲気に、いつの間にか、美音の気分が溶け込んでいるせいであったろうか。

「ところが、そのおさむらいは、怪しいおかたで、どこからか呼び出し状を受けて、出てお行きなされました。その呼び出し状をお読みになる時、とても、こわいお顔をなされて居りましたゆえ、果しあいのことだったにちがいありませぬ。……わたしが、そっとこの離れの様子を見に来た時、太夫は、おさむらいに、すがって、泣いておいででしたもの……」
「そのおさむらいは、それきり、おもどりにならなかったのですね？」
「いいえ、もどっておいででした。……でも、その時、もう、太夫は、何者かに斬られて、儚ないおすがたにおなりだったのです」
禿は、くちびるをわななかせると、ほろほろと、泪の玉を、頰につたわせた。

「下手人は、何者か、知れないのですか？」
「わかりませぬ。……でも」
禿は、急に、憤りの色をうかべると、
「わたしは、あの男だと思います。おさむらいがおもどりになるちょっと前に、目っかちで、せなかにこぶのある、びっこの男が、たずねて来ました」
「えっ！」
美音は、はっとなった。
――黒兵衛殿ではなかろうか？　もし、そうだとすると、そのおさむらいというのは、神子上様ではなかったのか？

「わたしが、案内したのですけど、とてもイヤな男でした。親がいるなら、そなたのような可愛い子を、こんな泥沼に沈めまい、などと言うて……」

——黒兵衛殿にちがいない！

美音は、にわかに、胸がさわいだ。

「そのおさむらいは、神子上源四郎と申されたのではありませぬか？」

「お名まえは存じませぬ。おもどりになった時、わたしが、怪しい男がたずねて来ている故ご要心なされませ、と申上げると、お笑いになって、それは、自分の家来だ、と申されました」

——ああ、やっぱり！

美音は、なんとなしに、ほっと、ふかい溜息をついた。

この折、中門のむこうのあたりから、

「きん弥……きん弥は、どこだえ？」

と、遣手婆さんの根太い声がひびいて来た。

「あ——呼んでいる」

禿は、ぴょんと立ちあがって、走り出て行った。

美音は、あらためて、茶亭の中を見わたし、ここで、美しいけれど、どことなく影うすい遊女の点前を受けている源四郎の姿を、思い描いてみた。

——もし、わたくしであっても、やはり、別れのつらさに、すがりついて、泣いたであろう。

美音は、じぶんに言ってみた。

言ってみたものの、じぶんに、それだけの恋慕の本能をむき出す烈しさが与えられているかど

うか、心細かった。

——いいえ！　わたくしは、神子上様を、死ぬほど恋している！　わたくしは、このことだけは、どこででも、だれにむかっても、はっきりと言いきれるのだもの！

——お会いしたい！

突如、美音の病める身をゆさぶる火のような衝動が来た。

思わず、立ち上った。

とたん——ばたばたと駆けて来る足音がきこえた。

とび込んで来たのは、禿であった。つぶらな目をいっぱいにひらいて、息をはずませているのだ。

「どうしたのです？」

美音が、不審のまなざしをあてると、禿は、何か言いかけて、のどがつまったか、いきなり、ぐいぐい押した。

「いったい、どうしたというのです？」

「に、にげて！　にげて下さいませ！」

「にげて？」

「ま、また、不幸が、おこります！　はやく、おにげなさいませ！」

必死にすすめられて、美音は、立ちあがりながら、

「わたくしにまた不幸が起るというのは——？」

「あのおさむらいが、来たのです！」
「あのおさむらい？」
美音は、次の瞬間、あっと叫んだ。
——神子上様が！
「おさむらいというのは、紅葉太夫に、ここへ招かれた——そのおかたなのですね？　え？　そうですね？」
「はいっ！　そうです！　ですから、また、不幸が起ります。貴女様が殺されてしまいます！」
「いいえ！　いいえ！　いいえ！」
美音は、烈しく、かぶりをふった。
歓喜が、うしおのように全身をおしつつんで来た。
——神子上様が、ここへおいでになる！　お会いできる！
「よろしいのです、きん弥さん。あのおかたは、わたくしの親しいおさむらいなのです。わたくしは、あのおかたにお会いしたい希望だけで、今日まで生きて参ったのです」
「いいえ、それがいけませぬ。それが、不幸になりまする。太夫も、そうだったのですもの——」
「きん弥さん。女は、恋のためには生命を惜しみませぬ。そなたも、大きくなれば、わかりましょう。わたくしは、あのかたにお会いできなければ、それこそ、死んでしまうでしょう。……どうぞ、神子上様を、ここへ、おつれして下さい」
禿は、美音が、もう死神にとり憑かれてしまった、と解釈してしまって、いたましそうに見あげていたが、

「わたしの親切がおわかりにならなければ、もう、知りませぬ！」
きりすてるように言ってくるっと踵をまわすと、露地へ走り出て行ってしまった。
美音は、いそいで、鏡の蓋をとって、わが貌を映してみた。
——病んだすがたをお見せしてはならない。美しい笑顔でお迎えしなければいけない！
美音は、やつれた翳を、拭い消せるものなら拭い消したいと、苛立った。
あるじが貸してくれた化粧道具を、はじめて、ひき寄せた。

「ほんとですね？　きっと、ほんとですね？」
露地に入る中門のところで、禿は、あいての返辞次第では、この戸を絶対に開けまいとするけなげな気構えをみせた。
「ほんとだ。わたしは、まだ、嘘などついたことはない」
源四郎は、笑って、こたえた。
「あのおひとは、太夫と同じように、これまで、さびしいご様子でした。それだのに、お前さまがおいでになったことをきくと、おひとが変ったようにおよろこびになりました。あの夜と、そっくりです。……おねがいです。おさむらいさま、今夜は、あの茶亭に泊って、あのおひとを、ひとりきりにしないと約束して下さいますか？」
「約束しよう」
「ほんとに——？」
「誓って！」

「げんまん――」

指きりしてから、禿（かむろ）は、さっと、戸を開けた。

源四郎が、この青楼に美音（みね）が売られていることを知るには、さまでの手数を要しなかった。ただの客をよそおって、登楼して、紅葉太夫つきのこの禿を見つけて、案内をたのんだのも、運がよかった。

露地の置石を、しずかに歩んで行きながら、当然、紅葉太夫の俤（おもかげ）が、脳裡に泛んでいた。

太夫の霊魂が、あの娘とわたしをひきあわせてくれるのかも知れぬ。

そう考えた。

あの夜、決闘場へおもむきつつ、美音のことを想ったものだった。いつか、めぐり逢えるかも知れぬ、と。

ゆくりなくも、その再会の場所が、紅葉太夫の非業の終焉をとげた茶亭になろうとは！

奇しき因縁と思わないではいられなかった。

戸口に立つと、案内を乞うまでもなく、美音は、迎えに出て来て、両手をつかえた。

なにか、言おうとしかけて、胸がいっぱいになったのであろう、黙って、頭を下げた。

――わたしを待っていてくれた。

源四郎は、直感した。

こちらも、無言で、上って、炉ばたに坐った。

――なんと言おう。

微かなあせりで、二人は視線を合せた。

心と心は、その瞬間、ひたとむすびついた。

お互いに、あいての気持を、くまなく読みとった。

しばしの沈黙があってから、源四郎は、口をひらいた。

「そなたと、とうとう、会えたな」

「はい――」

美音は、大きく、こくりとうなずいた。

「そなたとは、べつに、親しく、語り合う折もなかったが……」

「………」

美音は、慕心をこめて、まばたきもせず、源四郎を、見つめて、次の言葉を待つ。

「いつの間にか、そなたが、わたしの心の中に在るようになった」

――わたくしも！

美音は、胸のうちで、叫んだ。

「わたくしも孤独だし、そなたも孤独だから……それで、心が牽き合うたのかな」

源四郎は、そう言って、微笑した。

「わたくし……」

美音は、喘ぐように、言いかけようとして、言うべき言葉を知らず、朱唇を微かにふるわせた。

「黒兵衛から、そなたの気持は、きいた」

「はい」

「からだを、大切にしなければならぬ。健康になって……それからだ、幸せは――」

「は、はい！」

――生きなければ！

美音は、いまこそ、強く、じぶんをはげました。

――丈夫にならなければ！

――わたくしは、この方の、妻にして頂くのだもの！

そう呟くや、頬に血がのぼった。

その羞恥の哀情が、源四郎の若い血をあおった。

なんのためらいもなく、ごく自然に、片手をさしのべて、美音の白い細い手をとることができた。

美音の手は、熱かった。

源四郎は、すこしつよく摑めば砕けてしまいそうなその手へ、目を落して、

「……きれいだ」

と、呟いた。

美音は、にわかに、おかしいくらい、からだがこまかく、ふるえて来た。

なんという、快い痛みが、胸に生れたことだろう。

恋する人に手をとられると、このような、ふしぎな痛みが、生れるのであろうか。

美音は、俯向き、まぶたをとじて、この痛みがいつまでもつづくように祈った。

源四郎は、そっと、美音のほっそりした肩を抱いた。

美音は、羽毛のように、ふわりと、源四郎の胸の中へ、落ちた。

「そなたをつれて行く。……一緒にくらすことになろう」

秘剣

その時刻――。

郭の灯を彼方に望む草地の中の通い路を、七、八つの黒影が、黙々として、歩いていた。

先頭に立つ者の服装だけがちがっていたし、かつんかつんと地を鳴らす義足の持主であった。

うしろに一列につらなった黒衣の武士たちは、これは、曽て、源四郎を、日暮池に迎え撃った柳生道場の隠密組とおぼしかった。

高垣弥九郎は、小野道場を破門になるや、この隠密組へ、寝返ったのである。

小野道場の高足も、復讐の執念をつらぬくためには、ついに、手段をえらばず、敵に款を通じて、その走狗となることも辞せず、ただ、念頭には、神子上源四郎が血煙りあげて仆れる光景のみが、思い描かれていたのである。

源四郎が、美音をもとめて、郭に入ったことは、見張りの破落戸から、ただちに、報せがあった。

弥九郎は、おのれ一個の力で斬ることの不可能をさとって、柳生左馬介に、その助力を乞うた

のである。

――源四郎め、今宵こそ！

ここ数日、また脚の切断口が疼き出しているために、愈々その執念は狂的なまでに昂ぶっていた。

「高垣氏――」

背後から、ひくく抑えた声が、かかった。

弥九郎は、ふりかえって、頭巾のかげに、月かげを宿して光る柳生左馬介の鋭い眸へ、視線を合せた。

「神子上は、美音という娘に、惚れていると申される？」

「左様――相違ござらぬ。拙者の腹心が、小野道場に居り、源四郎が、娘をすくうべく、拙者の居処をききに参った、と報せてくれたのでござる」

「ふん――」

左馬介は、ふたたび上半身を傾けて歩き出した弥九郎の後姿を見まもりながら、

「よほど、神子上を憎まれたようだな」

「いかにも！　源四郎を討ちとれば、拙者も、いつ果ててもかまい申さん」

「…………」

それから、ものの二町余――あかあかと紅灯に映える郭の空が、つい、そこまで近づいた時であった。

「おぬし――」

ふたたび、左馬介が、声をかけた。

「神子上を討ちとれば、ご自身、いつ果ててもかまわぬ、と言われたたな」

「申しましたぞ」

「神子上の生命は、われらの手で、こんどこそ、まちがいなく奪おう。やすんじて、死なれるがよい」

左馬介は、冷然として、そう言った。

ぎょっ、となったことだった。

なお、おのが耳を疑ったのは、弥九郎の未練というものであったろう。

向きなおって、問い返した弥九郎は、左馬介の冷たい眼光が、実は、先程から、自分に対する殺意をひそめていたものであるのに、ようやく、気づいた。

「なんと申された？」

「おぬしに、ここで、死んでもらう、と申した」

抑揚のない、ひくい声音で、はっきりと、左馬介は、宣告した。

弥九郎は、義足で、大地を蹴って、半間ばかり、跳び退った。

「たばかったな！」

吼えるがごとく、叫んだ。

「たばかりはせぬ。おぬしが、われらに助勢をたのみに来た時から、このことは、きまって居った」

「拙者を討つ理由を言えっ！」

「おぬしは、兵法者として、すでに、その気概を失って居る。生かしておいたとて、いたずらに、無頼の群の中ですさむばかりであろう」

「言うなっ！」

弥九郎は、腕から一剣を噴かせて、青眼にとるや、

「柳生左馬介ともあろう男が、かかる陰険きわまる佞人であるとは知らなんだのが拙者の不覚――。来いっ！」

びくっと、切っ先を二寸ばかりはねあげて、一刀流一太刀斬りの猛気を刀身にぶちこめた。

左馬介は、抜かなかった。

したがった七名の刺客たちが、一斉に、抜きはなって、風のように、弥九郎の左右を奔った。

これをはばむことは、弥九郎の隻脚をもってしては、叶わなかった。

「うぬっ！」

弥九郎は、まっしぐらに、正面にただ一人のこった左馬介へ向って、突進した。

せつな――。

背後から、刃風が、宙を唸って、襲って来た。

これを、左肩すれすれにはずしたのは、弥九郎の業（わざ）が、いまだ、おとろえていない証左であった。

一人必死なれば、十人当る能わず――釜を破り船を沈む悲壮なる闘魂の発揮がそれから幾分間かの、弥九郎のものだった。

左馬介自身、

「やる！」

と、感嘆しつつ、鞘走らせて、弥九郎の攻撃をふせがなければならなかった。

弥九郎は、一人斬り、一人に傷つけた。

だが――所詮、柳生道場内でも、特にえりすぐられて、左馬介の配下となった手練者（てだれ）揃いに包囲されて、弥九郎の奮迅が、いつまでも、たゆみなくつづくはずがなかった。

耳、目も口も、筋肉も、髪毛一本さえも、闘志のためにふるいたてて、

「う……おっ！」

と、猛獣の吼号するに似た気合を発しつつ、右へ左へ、前へ後へ――四方四隅に、身を抜け、転化させる迅業をとりつつ、敵が殺陣の秩序を破らんとするのだったが、心身の消耗とともに、白刃の檻の中で躍る狂おしさに駆られはじめたのである。

まことに――。

隠密組は、執拗な忍耐強さで、弥九郎の疲労を、待っていたのである。

弥九郎と雖も、十五歳の時から、刻苦の修業を積んだ一流兵法者であった。

敵がたの策戦が、わからぬはずはなかった。しかし、どうしても、その白刃の檻を、突破することは不可能だったのである。

二間あまり後方で、腕を組んで、じっと見まもっていた左馬介が、

「よし！」

と、うなずき、

「かかれいっ！」

と、下知した。

一斉に、敵影は、それまでの包囲圏を、さっと崩したとみるや、

「とうっ！」

「えいっ！」

「やあっ！」

つづけさまの凄じい懸声を発して、八方から、刃風を唸らせて来た。

――くそっ！

――死ぬものか！

――おれは生きてみせる！

心中に、絶叫しつつ、弥九郎は、滅茶々々に、刀をふりまわした。

その一瞬一瞬に、肩へ、腕へ、胴へ、脚へ、衝撃が来た。

しかも、斬りさいなまれつつも、弥九郎が、その狂奔をすこしも止めなかったのは、まさに、魂は鬼と化していたといえよう。

人間の感覚や、意識は、完全にうしなわれていた。

――おれは、死なぬぞっ！

刀身を杖にして、仁王立った弥九郎は、声なく、喚いた。

もはや、体力は、尽きていた。

左馬介が、ゆっくりと、歩み寄って来た。

「最後のたたかいぶり、見事であったぞ」

――お、おのれっ！

弥九郎は、くわっと、双眼をひき剝いた。

その顔面へ、左馬介は、抜き打ちの一閃をあびせた。

皮肉にも――。

源四郎に渡すようにと、果し合いの牒状が手渡されたのは、またもや、十二人もいる禿（かむろ）の中で、きん弥だったのである。

きん弥は、その者が影のように立去るや、その場に凍ったように立ちすくんでしばらく、動くことができなかった。

――どうしよう？

どうしていいか、わからなかった。

――やっぱり、あのおさむらいは、死神なのだ！

きん弥は、源四郎を激しく憎んだ。

この封書を、破りすててしまいたかった。

――あしたの朝、わたしてやろうかしら。

そうも思った。

しかし、もしそんなことをすれば、今夜中ねむれないに相違なかった。

少女は、茶亭へ、とどけるよりほかにすべはなかった。

きん弥が、こっそり、足音をしのばせて、露地に入った時、源四郎は、美音をつれ出すべく、立ちあがっていた。

源四郎は、美音の身代を支払う必要をみとめなかったし、またそんな金子も持合せてはいなかった。

美音は、源四郎から、じぶんが、この青楼へ売られたのだときいて、愕然となり、無断で抜け出すことに罪でも犯すような思いであった。

「参ろう」

源四郎は、おちつきはらって、うながした。

「大丈夫でしょうか？」

「堂々と出て行ってもよいのだ。こちらには、なんのやましさもない」

源四郎は、笑って言った。

だが――。

近づいて来る人の気配を感じて、用心ぶかく、視線を戸口へ向けた。

ぽとりと、戸の隙間から封書が落し込まれるのを、見た。

美音は、源四郎へ不安のまなざしを向けたが、平然たるその表情に、ほっとして、いそいで、それをひろいに、土間へ降りた。

封を切った源四郎は、眉宇も動かさずに、それを一読した。

「あの……なにか――？」

問いかける美音へ、なんの変化もみせぬ態度で、

「ともかく、ここを出て行くことだ」

と、言った。

「はい――」

美音は、うなずいた。

きん弥は、戸口のところに、袖で胸をつつんでうずくまっていたが、二人が裏口から、ぬけ出して行くのに、全く気がつかなかった。

柳生左馬介が、源四郎に指定した決闘場は、王子十条野の果ての、五十万両の軍用金が埋蔵されている、あの魔気の盈ちた場所であった。

その前夜――。

源四郎は、美音をともなって、豊島清光寺に到着し、仏堂の後方にある離れ家に入った。

美音の祖先豊島権守清光が居住した館であった。此処は清光が入道して、かなり宏壮な寺院を建立したものであったが、二度の火災に遭うて、いまは、殆ど見る影もない荒廃ぶりであった。

再建された本堂も仏堂も方丈も小さなもので、弁財天の祀られていた泉水も、いまは涸れはてて、草莽々の中に埋まっていた。

わずかに、離れ家のみが、当時のおもかげをとどめて、江戸氏とともにその覇をきそうた往時を偲ばせる。

灯の中に対座した時、源四郎は、やさしく、

「疲れたであろう。横になったがよい」
と、すすめた。
「いえ、すこしも……」
ふしぎに、美音は、疲労をおぼえてはいなかった。
いきいきとした若い生命力が、源四郎にめぐり会うたために、からだの中に満ちあふれている
——意識は、そう感じていた。
燃え尽きんとする灯火が、さいごに華やかに光を増すことを、美音自身も気がついてはいなかったようである。
美音は、いそいそとして、じぶんが持って来た包みをひらいた。
とり出したのは、黒羽二重の着物であった。あの青楼の茶亭で、美音が、心をこめて縫いあげたのである。
「どうぞ、お召しかえ下さいませ」
「これは、忝じけない」
源四郎は、よろこんで、立ち上ると、塵埃によごれた古着物を脱いだ。
そのとたんに、懐中から落ちた封書が、美音の膝の前で、開いた。
何気なく、目を落して、美音は、はっと、息をのんだ。
戦を以て戦を去れば、戦うと雖も可なり。殺を以て殺を去れば、殺すと雖も可なり。
そんな文句が、いなずまのように、美音の眸の中へ閃いた。
そして、指定した日時が、明朝であることも、美音は、知った。

源四郎は、読まれたものはやむを得ぬ、と肚をきめて、新しい着物をつけた。帯をさし出す美音の指さきが、こまかにふるえているのをみとめながら……。
ふたたび、対座した時、源四郎が、しずかな声音で言ったのは、
「わたしの生命は、今宵限りかも知れぬ」
とのことだった。
美音は、大きく双眸をひらいて、少女が、いやいやをするように、かぶりをふった。
源四郎は、微笑した。
「だからこそ、わたしは、今宵、そなたを妻にするのだ」
美音は、なにか、こたえようとして、ちいさく、くちびるをひらいた。しかしもらしたのは
「ああ……」という、せつない喘ぎだけだった。
よろこびと、不安が、同じ勢いで、美音の病める細いからだをかけめぐった。
「ここへ——」
源四郎は、呼び寄せた。
美音が、前へ坐ると、源四郎は、双手をさしのべて抱きとった。
美音は、その逞しい胸へ顔をうずめたとたん、どっと泪があふれた。
「……どうぞ、生きていて下さいませ」
口のうちで、そうねがった。
そして、その言葉を出すことで、美音は、愛情を得た者の勇気に目ざめた。

女性というものが、こうした瞬間のために、神から与えられているやさしさや美しさを、全能的にしめすことを、美音もまた、ためらわなかった。

「貴方様のために、美音は生れて来ました！」

力のかぎり、しっかとすがりながら、美音は、はっきりと言った。

「死なないで下さいませ！　……美音は、幸せが欲しゅうございます。どうぞ、どうぞ、生きていて下さいませ」

いじらしく、必死に、身もだえする細いからだを、抱きしめながら、源四郎も、愛することの感動に、胸があふれた。

「生きよう！　わたしは、死なぬ！」

「……うれしゅうございます」

源四郎は、その柔かな、さらさらした黒髪を、愛撫しつつ、徐々に、頭を傾けさせて、喘ぐ唇へ、おのが口を合せた。

美音（みね）のふさいだまぶたの中で、この世のものではない恍惚の世界がひろがった。白い肢体のすみずみまで滲み透る歓喜の戦慄で、しだいに、意識も遠のいた。

——幸せ！　わたくしは幸せ！

心は、そうさけびつづけていた。

ようやくにして、口をはなした源四郎は、ほんのりと紅潮した美音の白い貌をこの上もなく、美しいものに眺めた。

「美音！」

「わたしとそなたは、もう永久にひとつのものだ！」

美音は、目をあけた。

「はい——」

そっと、呼んだ。

夜あけが、おとずれた。

雨戸の隙間から洩れ入る幾条かの白い光を、美音（みね）は、じっと、見ていた。

——とうとう、夜が明ける！

このまま、この夜が、永久に明けなければよい、とねがった美音であった。

こんなにも時刻というものは、あっという間に過ぎてしまうのであろうか。

かたわらで、規則正しい寝息をたてている源四郎が、どうぞ、目ざめないで欲しい、と祈る。

妻となったこの幸福感にのみ、ひっそりとひたっていたのであったが、それがゆるされない悲しみが、一秒一秒で刻まれている静寂のひとときであった。

夢をみているのであろう、源四郎が、ひくく、意味のない声をもらした。

——起きなければ！

美音は、じぶんに言いきかせた。

妻として、良人を、後顧の憂いをのこさせずに、送り出さなければならなかった。

美音は、父が、刃傷を決意して、わが家を出て行く時の、母の静かな態度を思いうかべた。

兵法者の妻として、良人を決闘場へ送り出すことは、覚悟しなければならぬことだった。

美音は、そっと臥床をはなれた。

身をうごかすとたんに、のどもとに名状しがたい不快な重いものがこみあげて来た、くらくらと眩暈が来て、美音は、必死に堪えなければならなかった。

——いま、倒れてはならない！

——笑顔で、お送りしなければ！

美音は、身づくろいした。

離れ家の庭は、荒れてはいるが、豊島家の豪壮な館のなごりをとどめていて、井戸の水も絶えることなくきれいであった。

美音は、釣瓶を上げようとして、棕櫚縄をたぐりかけた。

とたん——。

ふせぐすべのない迅さで、のどもとから、口の中へ、なまあたたかな塊りが、せりあがって来た。

美音は、縄にすがりつつ、膝を折って、足もとの流し石へ、それを喀いた。

鮮血は、流し石いちめんに拡がった。

——ああ！

美音は、心も身も、わななかせた。

ついに、おそろしいものが、襲って来たのである。

まぶたをとじ、呼吸困難の中で、

——どうぞ、神さま！

必死に祈った。

——せめて今日いちにちのいのちを、下さいませ！

美音を、はっと、われにかえらせたのは、境内の方角で、人の話声がして、こちらへ近づいて来る気配があったからである。

美音は、釣瓶をたぐりあげて、流し石の鮮血を洗った。

遠くから、この姿を見つけたのは、黒兵衛と修太郎であった。

「美音さあん！」

修太郎は、小鹿のようにはねあがって、いっさんに馳せ寄って来ると、いきなり、美音に、とびついた。

「ごめんよ、美音さん！　ごめんよ！」

美音は、目前が紫色に烟る眩暈に堪えつつ、ぐいぐい押して来る修太郎のからだを、しっかと受けとめた。

「修太郎さん、あやまることなんか……。よかったこと、みんな会えて——ほんとに、よかったこと」

「おいら……おいら——」

修太郎は、泣きじゃくりながら、美音のせなかをさすった。

「修太郎さん。わたくしをたすけ出して下さったのは、神子上様でした。……わたくしは、神子上様が、きっと、わたくしをつれて来て、下さることを、信じていましたもの——」

美音もまた、そう言いつつ、修太郎のせなかを、やさしく撫でた。

「じゃ、小父さんは、ここにいるんだね？」
「ええ、いらっしゃいますよ」
すると、修太郎は、大きく、「うん、わかった！」と叫んだ。
「美音さん、とうとう、小父さんのお嫁さんになったんだね！」
「ええ……ええ、そうよ。なりました」
美音は、修太郎のあたまへ、頬をよせて、こたえた。
「よかったね！　ほんとに、よかったよ」
修太郎は、心から、祝福した。
しかし――。
すこしはなれた地点に彳んで、美音の様子を見まもっている黒兵衛は、祝福する前に、憂いのために、眉宇をひそめなければならなかった。
――ああ、いかんな！
暗然と、胸のうちで、呟いた。
――身も心も美しいこの娘御に、神様は、なんという残酷な仕打をなされるものか！　もうすぐに、いのちを召上げようとしていなさる。わしの寿命をちぢめて、のばしてもらえるものなら、わしはよろこんで、そうしたいものだが……。
それが叶わぬとなれば、源四郎と二人きりのくらしを、せめて十日でも、すごさせてやりたかった。
「あっ！」

黒兵衛は、あわてて、走り寄った。美音が、失神して、修太郎の上に崩れたのである。
「小父さん！」
修太郎は、血相変えて、離れ家へ、走った。
ぐったりとなった美音をかかえあげて、運んで行った黒兵衛は、修太郎から、
「小父さんはいないよっ！」
と、叫ばれて、思わず、
「そんなはずはないわい！」
と、腹立たしげに、どなった。
「いないんだ、ほんとに！」
「いいや！　そこいらを、ぶらついていなさるのじゃて――」
しかし――。
部屋に入って、美音を、牀に横たえた時、黒兵衛は修太郎から、経几の上の紙片を、指さされた。
「ただ一夜を相添うも、契りは永遠に深く、朝露の消やすき互いの身は、未来の幸せを信ずるがゆえに、なまじの別離の場をもとめず。……さらば」
一読して、黒兵衛は、かぶりをふった。
――もののふというものは、なんという、非情な振舞いをするべくさだめられたものか！
腕を組んで、じっと、美音の白蠟色の寝顔を、見つめた。

修太郎もまた、美音の悲しい運命を、ひしと胸に感じたとみえて、枕もとにかしこまって、息をのんだ。

美音が、まぶたをふるわせつつ、薄くひらいたのは、それから、四半刻もすぎてからであった。

「おお……」

黒兵衛と、修太郎は、のぞき込んだ。

「……源四郎さま」

その人が、そばに坐っていてくれるように、微かな声音で、呼んだ。

「…………」

「…………」

人の好い盗賊と、勝気な孤児は、暗然として、顔を見合せた。

「……どうぞ、生きて、もどって、下さいませ。……敵がどんなに、多勢でも、どんなに、強くても……貴方様は、お負けなさいませぬ。……美音は、信じて居ります。……どうぞ、生きて、もどって、下さいますように――美音も、それまでは、死にませぬ。……おねがい、いたします」

その眸子は、もう、物を見わける光をうしなっていた。

黒兵衛も修太郎も、くちびるをかみしめて、嗚咽を怺えた。

「……どうぞ、生きて……もどって……」

その呟きが、この世にのこすさいごの言葉であった。

乳色の空に、かがやかしい光がひろがったのは、このおりであった。

源四郎が、馬を駆って、富士の森に到着したのは、巳の刻（午前十時）すぎであった。

約束の時刻は、辰の下刻であった。

わざとおくれたのは、敵がたをじらせるためではなく、途中で、急に、不吉な胸さわぎが起って、馬首をめぐらして、いっさんに、清光寺へひきかえしたためであった。

美音（みね）は、すでに、この世の者ではなかった。

源四郎は、長いあいだ、ねむっているような死顔へ、目を落していたが、

「待っていてくれ」

その一語をのこして、再び、馬上の人となったのである。

送って出た黒兵衛と修太郎は、こもごもに、無事で帰って来てくれるように叫んだことだった。

源四郎は、いまは、生きのびることの殆ど不可能をおぼえていた。

海山の恩を受けた、母にもまさるひとを、おのれの手ですくい出さねばならぬ使命を抱きながらも、源四郎は、目前に立ちふさがった強敵と果し合わねばならぬ運命に置かれたのである。

おのれの身命が明日まであるか否やは、神のみぞ知る。

源四郎の胸中は、澄みわたり、冴えていた。

この前は、神社の裏手にかくれて、敵の来るのを待ち受けたが、今日は、鳥居の前で、馬をすてて、しずかな足どりで、その下をくぐった。

策略は、すべて念頭からはらいのけていた。第一、すでに、時刻はおくれている。敵がたは、そこに待ちかまえているに相違ないのである。

腰間の一剣をして、おのが闘魂を発揮せしめるばかりである。

境内の中央で、ぴたりと立ちどまった。

堂々たる老樹の梢のあわいから洩れ入るまだら陽をあびて、しばし、源四郎は、不動の静止相を保った。

境内は、ひっそりとしずまりかえって、なんの気配もない。

地底から湧き上っていた毒気も、もはやなかった。松平伊豆守が、ひそかに、埋蔵金を掘り出して、運び去ったことを、源四郎は、知っていた。

ひそかに——とはいえ、伊豆守自身が、数百名を率いて、やって来て、掘り出したのである。柳生の隠密組が、これをはばむことはできなかった。

五十万両は、江戸城内の金蔵に納められたはずであった。

——どうしたというのだ？

源四郎が、ふと、不審をおぼえた時、本殿の中から、音もなく、一個の人影があらわれた。

——これは！

源四郎をして、愕然と目を瞠らせたのは、階の上に立った敵が、柳生左馬介ではなく、意外にも宮本伊織だったことである。

伊織の方は、源四郎と、今日ここにおいて、試合をすべく、やって来たことを、

「おそいぞ！　神子上源四郎！」

睨みつけつつ、その一声で、あきらかにした。

「それがしは、お手前から戦いを挑まれて居ることは承知いたしているが、日時場所をきめたおぼえはない」

源四郎は、しずかにこたえた。

「黙れ、おぬしの答示たしかに受けとって居るぞ」

「それは、何者かの奸策と思いなされる。両虎相与にたたかいて、駑犬その弊を受く——と史記にあるが、それが、故意にしくまれたようだ」

源四郎は、どこかにひそんでいる敵にきこえるように、声を高くして、言った。

「それもよかろう。勝ちのこった虎が、その駑犬を斃せば、それまでのことだ」

伊織は、昂然と、肩をそびやかして、うそぶいた。

「わしには、おぬしと剣をあらそって、兵法の奥義をきわめる目的があるのみ。贋答示を寄せた者のこんたんが那辺にあるか、そのようなことは、歯牙にかけるに足らぬ。わしとおぬしとは、ともに日月をいただかぬ宿運にある。抜けい、神子上源四郎！」

伊織の全姿から、凄じい殺気が放射された。

源四郎は、しかし、なお、穏かな態度をすてず、

「善く戦う者は、人を致して人に致されず、と孫子の虚実にも言う。お手前とそれがしは、第三者のために、致されていると、考えられたい」

そう忠告した。

源四郎は、黒兵衛から、伊織が、糸耶が投げた懐剣で傷ついているのを、きいていた。
手負いの敵に勝ったところで、なんの誇りにもならぬことだった。
「問答は無用っ！　抜けっ！」
伊織は、目にもとまらぬ迅さで、愛刀を抜きはなつや、ぴたっと八双に構えた。
「お手前の傷は、深い、ときいて居る」
源四郎は、あくまで、たたかいを避けようとした。
「言うなっ！　宮本伊織は、いったん、試合を公示したからには、たとえ、片腕片脚となろうとも、断乎として、約束はたがえぬぞ！　これが、兵法者としての面目だ！　神子上、抜かぬかっ！」
伊織は、階へ一段、片足をおろして、猛禽が獲物を狙うに似た姿勢をとった。
源四郎は、地上に立ち――。
伊織は、階の上に居り――。
両者の位置は、その利不利が瞭然としていた。
二間余の距離を置いて、源四郎が、おのれの不利を聊かも顧ずに、その位置を移そうとしないのは、対手が傷つける躯を持っている故であった。
いわば、この位置によって、条件は五分となっていたからである。
伊織は、
「抜けっ！」

と、三度び叫んだ。
自身が傷ついているが故に、条件が五分と五分となっていると考えることは、伊織の誇りがゆるさなかった。
源四郎に、刀を抜かせておいて、猛然と馳せ降りざまに、撃ってみせるぞ、と言いたいところであったろう。
しかし、源四郎は、なお、両手をダラリと垂らしたまま、沈黙をまもった。
「……むっ！」
伊織は、奥歯をかむと、その白面に朱を滲ませた。
汐合は、きわまった。
伊織は、わずかに腰をひねるや、一剣を、右手に摑んで切尖を天に指した。
これは、奇怪の構えというほかはなかった。
片手構えならば、左手であるべきはずだった。すなわち、右手で小刀を抜きはなつ二刀流の法形である。
――はて？
源四郎は、訝りつつも、次の瞬間にしめすであろう伊織の意外の業に対する期待を待った。それだけの余裕があった。
「ゆくぞっ！」
高らかな予告とともに、ぱっと右手が頭上へかざされた。
その刹那――左手は、懐中にかくし持った手裏剣を、抜きとりざま、ひょっと放っていた。

大上段にふりかぶった白刃の煌きで、敵の眸を晦ませておいて、手裏剣を投げ撃つ——これは、養父武蔵が編んだ秘術であった。
手裏剣は、稲妻の迅さで源四郎の立っている位置を——いや、正しく言えば、立っていた位置を、掠めた。
源四郎が、九死に一生を得たのは、伊織の左手のみを、見ていたからである。
その左手は、決して、神速の動きをあやまってはいなかったのであるが、源四郎の躱しかたは、それよりもさらに迅かったのである。
偶然というべきであったのは、手裏剣がつらぬいた空間の彼方に於て、絶鳴がほとばしったことであった。

源四郎も振りかえらず、伊織も、その地点へ、目を投じなかった。
凄絶の殺気は、なお、空間にみなぎっていた。
秘術を仕損じた伊織は、構えを下段にとって、ゆっくりと、階を降りはじめた。
源四郎は、まだ刀を抜いていなかった。
伊織の片足が、土をふんだ——とみたせつな、源四郎は大きく跳び退った。
抜く手もみせず、白刃を陰の形に立てた源四郎を、伊織は、そのまま、その位置で、凝視した。
「いかに！」
呻くがごときその一声は、数秒の息詰まる沈黙ののちに、伊織の口から発しられた。

「来れ！」
源四郎は、ひくく抑えた声音で、応じた。
ツツ……と、伊織は、地上を滑って、一間余を出た。
「…………」
「…………」
斑陽の中に、四つの眸は世界をこの一瞬のために無に還す剣気を罩めて、目に見えぬ火花を散らした。
それから……どれだけの時刻が移ったろう。
この決闘場で動いたものといえば、両者の足もとから延びた影法師だけであった。
もし、この異様な不動の対峙を目撃している者があったならば、これは、無限につづくものであろうかとおそれたに相違ない。両者の姿は、第三者の目に映る限りにおいて、優劣の微塵差もみとめられなかったからである。
しかし——。
おそろしい生命力の消耗度は、両者の体内にあって、あきらかな差があったのである。
伊織にとって、肩の傷は、やはり大きな負担であった。疲労は、そこから、ひろがり、四肢のすみずみまでを犯しはじめていた。
やがて——。
伊織の眼前が、徐々に、灰色に烟りはじめた。
昏くなりゆく視野の中で源四郎の姿が、遠のき、近づき、そして、揺れた。

——むっ！

伊織は、全機能をふりしぼって、闘志と気魄の均衡を保とうとした。

だが——ついに、源四郎の姿は、伊織の双眸から消えはてた。

——これまで！

伊織は、かえって、剣気がきわまった完全なる虚無の中で、生死を超えた静けさを感じるや、

「とうっ！」

と、大地を蹴って撃って出た。

暗黒の虚空を躍るおのが五体の、なんと軽やかであったことか！

……伊織は、躍り込んだその地点に、立っていた。

立ったまま、伊織の意識は、数秒間、全く喪われていた。

薄い紙を、一枚一枚剥ぐように、伊織の目が、視力をとりもどして来た。

ふしぎであった。

自分が、何故に、こうして、何事もなく立っているのか？

甦った意識がつぶやいたのは、その不審であった。

次に——。

わが五体が、斬り込んだのちの、残心の構えをとっていることを、さとった。

——おれは、敵を仆したのか？

一瞬、その錯覚さえ起った。

斬っては、いないはずであった。これは、斬り込んだせつなのむなしさを、伊織自身、絶望しつつ、意識を喪ったのであったから——。

完全に、視力をとりもどした伊織が、まず、みとめたものは、はるか遠く、老杉の根かたに俯伏している屍体であった。

それは、源四郎ではなかった。

源四郎に投じた手裏剣が、偶然にも、老杉の蔭に忍んでいたその者の胸をつらぬいたとは、すでに、伊織は、知っていた。

——彼奴！

伊織は、肚裡で、唸った。

名状しがたい屈辱感が、胸中にうねった。

——どこへ消えた？

奇怪さにとまどう気持も当然湧いていた。

視線をまわそうとして、伊織は、はっとなった。

おのが豪剣——三条宗近が、鍔元より三寸あまり先において、両断されているではないか！

——敗れた！

うしおのような惨めな悲しみが、全身をおしつつんだ。

——敗れたのだ、このおれが！

伊織は、夢遊病者のように、まんさんたる足どりで進んだ。

その後姿を、源四郎は、階の上から、じっと見まもっていた。すでに、刀は、鞘に納めてい

た。

源四郎は、この時、曽て空斎という小男から、この刀について断定された剣相のことを思い出していた。

——あの男は、村正に相違ないと言い、佩びれば、必ずほろぶ、と明言した。

——断じて、村正ではなかった。剣相は大凶ではなく、大吉であった。

源四郎は、おのれに、言った。

実は、源四郎は、伊織と対峙しつつも、背後から、柳生左馬介に狙われていることをさとって、死の覚悟をしていたのである。

左馬介は、伊織の手裏剣で、斃れた——。

雲とともに

江戸における最後の切支丹宗徒三十七名が、品川湾をのぞむ兵陵上で、火炙りの刑に処せられたのは、その年の晩秋であった。

この日は、鉛色の雲がひくく垂れこめて、強風は、もう冬を飛ばせて来たかと思わせるほど冷たかった。

方三十間にめぐらした竹矢来の外には、数千人の見物が、蝟集していた。武士・町人・百姓それぞれ衣服もさまざまな群集であったが、この丘の上を占める雰囲気は、盗賊や豊臣の残党な

どの断罪を見物する時とは、あきらかにちがい、陰鬱な曇天と寒風の日にふさわしく、どの表情も、暗くこわばっていた。

なぜならば、処刑される囚徒たちは、昨日まで、見物する者たちの、親しい隣人だったからである。その信仰をかたく秘めることにおいて異様な努力をはらっていたために、隣人には、すこしも気づかれなかったのである。

隣人たちは、それが邪宗門と知らされて唖然とし慄然となったものの、神に仕える者の厳しい自戒による日常の生活を親しく見聞きしていただけに、個人の感情としては、その無慚な最期に、深い同情を寄せずには、いられなかったのである。

ずらりと並んだ三十七基の十字の柱に、白衣の姿が縄でしばりつけられた光景は、しかし、一種の悲壮な美しさであった。

薪は、柱を距る三尺あまりのところに溝を掘り、その中に積み重ねてあった。溝の深さは、五尺。薪には水を浸してあった。水が燃えあがらないように拵えてあったのである。いわば、刑を受ける者を、じりじりと永く苦しめるための処置であった。

群集にとって、まことに理解に苦しむ奇怪は、三十七人が一人のこらず、はれやかな表情をもっていることであった。

彼らの眸は、ひとしく、暗雲のたれた空へ向けられていた。

いまこそ——天国にのぼり、天主にまみえる法悦に胸をふくらませているのであった。神の栄光が、天よりさしそそぎ、尊き御紀明の喇叭がとどろきわたり、おのが殉教のさまを嘉したまいつつ、大天使がぶりいえるが、迎えに舞い下って来給う——と、かたく信じて疑わぬ信念が、おそ

るべき苦難を凌ぐ力を発揮しようとするのであったろう。

「……御主ぜせす・きりしと、さんたくるすの上において、世界を扶け給うによって、苦業礼拝し奉る……われらが科をゆるし給え、おらみ奉る――」

それぞれの口から、そうしたおらしょがとなえられていた。

右端の柱には、寿庵グレコがつながれていた。その左端にしばられているのは、志津女であった。

「火をかけい！」

高座の検使の声がかかった。

松明をつかんだ獄卒が、薪に近づいた。

すると――。

信徒たちは、一斉に、高らかに、おらしょを唱和した。

「天の門をひらき給う、たすかりのいけにえ――敵軍は、われを責むるがゆえにおんちからを添え、御合力となしたまえ、あめん……」

薪が、銃声の撥ぜ散るような音をたてて、黒煙をあげはじめた。水でしめらせてあったために、炎の色は見えず、黒煙は、強風に煽られて、信徒たちの姿を、おしつつんだ。

黒煙が渦を巻いて、さあっ、と流れの方向を転じるや、その中からあらわれた信徒たちの顔は、のこらず、天を望み見て、澄みかえり、おらしょを唱和する声を、いちだんと高めた。

その時であった。

突如、嘎々たる馬蹄の音をひびかせて、竹矢来の入口に、一騎があらわれたのは……。

そこをまもっていた二人の獄卒が、何か喚いて、槍を交叉させて、はばもうとしたが、これは、苦もなくはねとばされた。

「狼藉者っ！」

「曲者っ！」

呶号が、獄卒たちの口から、あげられたが、奇妙であったのは、高座の検使だけは、冷然として、闖入者の速影を見まもっていた。

すでに、これは、予期していたことであった。

松平伊豆守から、そっと耳うちされていたのである。

「見て見ぬふりをするように――」と。

騎馬は、まっしぐらに、右端の十字柱めがけて、疾駆した。

数人の獄卒たちが、槍をかざして、追いかけたが、闖入者が地上に降り立つや二間をへだてて、包囲しただけであった。

着流しの浪人は、つかつかと進み寄って、

「小母上！」

と、呼びかけた。

「源四郎です！」

万斛の感動をこめて、わが名を告げた。

煙のかげの白い顔が、一変した。

「おお！　そなたは……」
「小母上！　源四郎は、今日まで、一日も小母上のことを忘れはしませんでしたぞ！」
「わ、わたくしも、そなたのことは、忘れては居りませなんだ！」
異常な場所における十余年ぶりの邂逅は、志津女と源四郎に、当然、別離の時を思い泛ばせた。
左様、二人は、猛火につつまれた大阪城内で、はなればなれになったのである。そして、奇しくも、またもや、焔の中で相逢うたのである。
「お救い申す！」
源四郎は、叫びざま、十字柱の縄を切りはなつべく刀を抜いた。
すると——。
なつかしさに、おのが身の焼かれるのも忘れていた志津女が、急に、きびしい面持をとりもどして、
「なりませぬ！」
と、こばんだ。
「なんと申される？」
「見られるがよい。わたくし一人がどうして、生きのびられよう」
「しかし……」
「わたくしの生命は、ここにきわまりました。天国に召される時が参ったのです。……どうぞ、

このまま、行かせて下さるよう——」
「小母上！」
源四郎は、しかし、志津女が、じぶん一人だけたすかりたくはない、と拒否するであろうことは、すでに予期していた。
風向きが転じて、おのれの方へ吹きかけて来る黒煙をかいくぐって、さっと志津女のそばへ寄ろうとした。
一瞬——。
「なりませぬ！」
天の声かともきこえる程犯しがたい凛乎とした口調で、志津女は、叱った。
「そばへ寄ってはなりませぬ！……わたくしをたすけるのは、生きて屍になれということに相成りましょうぞ！　うらみますぞ！　……お下りなさいっ！」
源四郎は、凝然として、その場へ、足を釘づけた。
少年の日、きびしく叱られた思い出が、その声によって、よみがえり……源四郎は、おのれが、志津女の前には、やはり、むかしのままのこどもでしかないのを、知らされたのである。胸は、裂けんばかりに疼いた。
「小母上っ！」
ぼうだとして、泪があふれた。
「源四郎殿！」
志津女の眸も、潤んだ。

「今日からは、そなたの幸せを、空の彼方から、見まもって居りましょう……。正しゅう、生きてたもれ」

吹きあがり、渦巻きかえり、煽られ、靡く黒煙の下から、にわかに、紅蓮が噴いて出た。

源四郎は、いくたびか、その炎の中へ飛び込んで行きたい衝動に堪えるために、歯をくいしばり、両手を骨が砕けるばかりに握りしめなければならなかった。

炎の色を映した志津女の顔は、この世ならぬ崇高なものに見えた。

おらしょの声が、しだいに、細くなり、ついに絶えた時、三十七基の柱は、炎々として燃えあがっていた。

一斑の雲影もとどめずに晴れわたった秋空を、とんびが一羽、大きく弧を描きつつ、のどかに啼いていた。

ここ――清光寺の墓地では、さきほどから、ひくく読経の声がつづいていた。それは、明るい静寂を、粛然たるものにしていた。

二基の白木の墓標の前で、数珠をまさぐりつつ誦しつづける白髯の老僧のうしろには、源四郎と黒兵衛と修太郎が、ならんで佇んでいた。

薄倖であった姉妹の霊に回向しておいて、三人は、江戸の地を去ろうとするのであった。

源四郎は、暗く沈んだ眸を、美音の墓標に据えて、まばたきもしなかった。

胸を噛んでいるのは、おのれという存在が、すべての人に対して、なんの役にも立たなかった――そのことであった。

駒場野においてたすけた姉の糸耶は、宮本伊織のために斬られ、夫婦の契りをむすんだ妹の美音は、別離の場も与えられず、血を喀いて斃れ、そして、生みの母にまさる慈愛をそそいでくれた高恩の婦人は、わが目前で、焼死んだのである。

思えば――。

一剣に拠って生きようとした兵法者の身が、その一剣で、何人をも救うことはできなかったのである。

暗然たる感慨は、古沼の濁り水のように、重く、心底によどんだ。

……読経が、おわった。

三人は、それぞれの悲しい別れの言葉を、口のうちでつぶやきつつ、墓標の前で、手を合せた。

それから、半刻のち――

すでに蕭々たる趣きをおびた武蔵野の中をつらぬく一筋道を、源四郎、修太郎、黒兵衛の順で、黙々として歩んでいた。

棒きれで、草をたたきつけていた修太郎が沈黙をやぶって、

「小父さん、どこへ行くんだい？」

と、訊ねた。

腕を組み、視線を足もとに落していた源四郎は、その声で、顔をあげて、野の彼方を見やった。

「さあ、どこへ行けばよいものか？」

こたえつつ、薄墨でひと刷けしたような連山のとある頂きから、ひとむれの雲が、湧きあがるのをみとめた。
「どこでもいいサ」
　修太郎は、明るい口調で言った。
「小父さんの行くところなら、どこへでもついて行くよ」
　うしろの黒兵衛が、微笑して、ひとりでうなずいた。

解説

「孤剣は折れず」は、昭和三十三年九月十七日から翌年八月十七日まで、約一年にわたって東京新聞の朝刊に連載された。前作「剣は知っていた」の成功が、柴田氏の再登場をうながしたものだろう。さしえは前作にひきつづいて御正伸氏だった。

　昭和三十年ごろからこの時期にかけて、しきりに「剣豪小説ブーム」がさわがれた。ことさらこの時期にそれがいわれたことには、それだけの理由があった。民間放送につづいてテレビの放送がはじまり、マスコミ全体が視聴覚化してゆく傾向にたいして、活字メディア部門からおこされた一種のまきかえしムードが、そのブームの底にはあったようだ。これは「剣豪小説ブーム」から「ミステリーの流行」まで一貫して流れている。しかしその時代をつくった何人かの剣豪作家たちの気持には、マス・メディアがどう色目を使おうと、それとは無関係に、新時代のチャンバラ小説を創造したいという内的な要求がうずいていたことはまちがいない。中山義秀・五味康祐・柴田錬三郎・南条範夫などの諸氏の活躍は、そのことを裏付けてくれる。

　戦後の大衆文学（時代小説）はこの時期に、その性格を一変している。それは読切連載などという形を定着させることで、新しいマスコミ状況に即しながら、机竜之助以来の大衆文学の伝統（余計者の系譜）を更新させ、現代感覚をもりこんだ動きの早いスタイルを創造した点である。殺しの諸タイプに映画的（西部劇的）な効果を添え、剣を武士の魂から凶器にあらため、人間疎

外の意識を、それまでのニヒル剣士のイメージにオーバー・ラップさせたことがそれだ。独断をのべることをゆるしてもらえるなら、柴田氏の諸作品の魅力も、どうやらそれらの点にかかっているように思われてならない。

「剣は知っていた」「美男城」「孤剣は折れず」は、一種の連作小説のおもむきをそなえている。あきらかにことなるこの三作が、私に連作としてうつるのは、これらの作品がいずれも、人生の虚妄をテーマにしているからではないだろうか。眉殿喬之介、御堂主馬之介、神子上源四郎は、三者三様の歴史を歩みながら、なにか共通した相貌を刻まれている。それはその主人公が、共通してもつ出生のくらい翳といったものだけをさしていっているのではない。むしろ、時世に容れられず、それに反逆し、あるいは現実政治のうらにひそむ人間の虚妄を凝めて、別の軌道を描こうとする男の生き方が、作者の分身と思いたくなるほどに強調されているためかもしれない。柴田氏は大学時代に中国の作家魯迅を専攻したということだが、その理由を、これらの人物造型にふれて理解できるような気がする。「絶望の虚妄なることは希望と相等しい」といった魯迅の言葉をなんとなく思いおこすからだ。魯迅を引合いに出すのは、場ちがいな話かもしれないが、喬之介、主馬之介、源四郎のような生き方は、戦後の日本において、すこしも異質なものではないのである。

柴田氏はあるところで、吉川英治氏の「宮本武蔵」を四回読んだと書いていた。評論家のなかには、「剣は知っていた」などの三作に、「宮本武蔵」からの影響を指摘する人もいる。人物のシチュエーションにはそれがないわけではなかろう。武蔵と小次郎の対置に、喬之介と兎角、主馬之介と頼之助、あるいは源四郎に伊織を対比し、お通や城太郎を、朝路・宗太郎、美音・修太

郎と、おいて比較することは容易だ。しかしこの設定は、「宮本武蔵」にかぎらず、日本の大衆文学が発生以来くりかえして来たものの一つであり、「大菩薩峠」以来の伝統であることを考えれば、当然な帰結だったといえる。それらの類似にくらべるとはるかに相違点の方が多い。柴田氏自身「剣は知っていた」を書くにあたって「ハムレット」の悲劇を借りたと告白していた。たしかに喬之介の討つべき敵を「剣は知っていた」。しかし同時に、その剣は、それをもって生死をあらそう人間のむなしさをも知っていたはずなのだ。剣は、求道者の象徴から反逆の凶器へ転移した。そして剣の正義観は、剣の虚妄観へと変質したわけなのである。柴田氏の作品が、「宮本武蔵」など日本の大衆文学の、いわば古典にたいして、異質であることは、その点にかかっている。

「剣は知っていた」は関ヶ原の合戦でおわっていた。「美男城」はその敗亡からはじまり、さらに「孤剣は折れず」では、徳川幕藩制の確立の時期に幕をひらく。従ってその主人公神子上源四郎の運命もまた、おのずと戦国乱世の世相とはことなった道をたどる。

「徳川幕府が、三百年という永い封建制度を確立したのは、やはり一大偉業であったようである。そのためには――ゆるがぬ基盤を据えるにあたって、凄じいばかりの暗黒政治を施さねばならなかった。

私が、常に、好んでえらぶ主人公は、そうした強権に抗する時代的犠牲者である。孤剣をもって、一国をつくる世がさったとき、孤剣をもって、その強権に抗する運命に置かれた者が、いかに生きぬいたか――そこに、作者は、前作『剣は知っていた』と同じく、大きな夢を抱く」

これは連載前に、新聞にのった「作者の言葉」の全文だが、内容についてこれ以上くわしくの

べる必要がないほど、この文章は作者の創作意図を表しているといっていいだろう。

戦国乱世の世において、孤剣は、誰をたおすべきかを教えてくれた。しかし封建制の基礎が固まり、次々とその制度の鉄枠が組まれてゆくなかにあって、神子上源四郎が剣に学んだものはなんだったろうか。新しい制度の施行とその発展の前には、譜代大名の価値は無視され、三代将軍家光の弟忠長の生命まで抹殺されようとする。徳川家の永遠の繁栄に邪魔な一切の障碍物は除去され、異端視され、滅びてゆく以外に道はない。源四郎は、だが「孤剣」を守り、強権に抗しながら、その繁栄も、結局はむなしい営為のくりかえしであることを見抜いていたのではなかろうか。

ただことわっておきたいのは、このような作者の意図は、むきだしにされず、大衆文学の面白さのなかに、たくみにちりばめられている。「孤剣は折れず」には、おなじみの剣客、柳生但馬守、宮本伊織をはじめ、大久保彦左衛門、春日局、松平伊豆守などが登場し、柳生一派に小野道場の剣客までがからんで波瀾にみちた場面をつぎつぎとくりひろげてくれる。忍者、切支丹、埋蔵金のゆくえという伝奇小説本来の配慮も加わって、作者の手なれた語り口が、読者を自然に作中の世界へさそいこんでくれるだろう。「私は、新聞小説は、性に合っているようである。週刊誌小説には七転八倒するが、新聞小説は、むしろ、愉んで書いている」と告白する柴田氏なのだ。

「大衆文学のヒーローたちは、いったん大衆の知的生活のなかに入りこんでしまうと、その『文学的な』出生をはなれて、れっきとした歴史上の人物になってしまう」（グラムシ）というイタリアの革命家の言葉を、日本の評論家の言葉におきかえると、文学の一般読者は「手ぶらで扱われた題材の人間的興味の中にずかずか這入って来るだけだ」（小林秀雄）ということになるかもしれない。大衆文学の読者と、作中人物との交渉はこのような形ではじまる。神子上源四郎の運命は、読者にどのような共感をよびおこすものだろう。柴田氏は大衆文学の「面白さ」とは、「大衆というものが常に、何かを期待している——その期待に応える、ということだ」と、あるところで私の疑問に答えてくれたことがある。日本の大衆がもとめる期待とはいったいなにだろうか。「孤剣は折れず」がくりひろげる世界は、戦後日本が混乱の時代を経て、新しい秩序をもち、それによって生まれたコンベンションが、一般の生活と意識までをしばろうとすることにたいする、あるやりきれなさ——それに一つの息ぬき窓をあける役割をはたした。

源四郎のたずさえた無銘刀の剣相を観た空斎は「佩びればかならずほろぶ」凶剣村正だと教える。しかしその予言はあたらず、源四郎と対決する宮本伊織の豪剣が、つばもと三寸のあたりからポッキリと折れてしまう。現実とはおそらくこのようなものなのであろう。大衆はこのエピソードからどんな啓示をうけるかわからない。神子上源四郎は、やはり大衆の期待のなかに存在する夢なのである。

尾崎秀樹

孤剣（こけん）は折（お）れず

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草150 P

昭和三十七年十月三十一日 発行
昭和五十二年八月十日 二十一刷

著者 柴田錬三郎（しばたれんざぶろう）

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六―五一一一
編集部(〇三)二六六―五四一一
振替 東京四―八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社金羊社　製本・憲専堂製本株式会社
© Renzaburô Shibata 1962 Printed in Japan

自註鹿鳴集　会津八一
春の城　阿川弘之
雲の墓標　阿川弘之
山本五十六（上下）　阿川弘之
羅生門・鼻　芥川龍之介
地獄変・偸盗　芥川龍之介
蜘蛛の糸・杜子春　芥川龍之介
奉教人の死　芥川龍之介
戯作三昧・一塊の土　芥川龍之介
河童・或阿呆の一生　芥川龍之介
侏儒の言葉・西方の人　芥川龍之介
他人の顔　安部公房
壁　安部公房
けものたちは故郷をめざす　安部公房
飢餓同盟　安部公房
第四間氷期　安部公房
幽霊はここにいる・どれい狩り　安部公房

水中都市・デンドロカカリヤ　安部公房
無関係な死・時の崖　安部公房
R62号の発明・鉛の卵　安部公房
石の眼　安部公房
終りし道の標べに　安部公房
人間そっくり　安部公房
冬の宿　阿部知二
或る女（上下）　有島武郎
惜みなく愛は奪う　有島武郎
小さき者へ・生れ出づる悩み　有島武郎
紀ノ川　有吉佐和子
香華　有吉佐和子
助左衛門四代記　有吉佐和子
地唄　有吉佐和子
私は忘れない　有吉佐和子
華岡青洲の妻　有吉佐和子
海暗　有吉佐和子

一の糸　有吉佐和子
不信のとき　有吉佐和子
美っつい庵主さん　有吉佐和子
百人一首　安東次男
焼跡のイエス・処女懐胎　石川淳
紫苑物語　石川淳
石川啄木集（上下）　古谷綱武編
一握の砂・悲しき玩具　石川啄木歌集
結婚の生態　石川達三
日蔭の村　石川達三
望みなきに非ず　石川達三
転落の詩集・智慧の青草　石川達三
蒼氓（そうぼう）　石川達三
幸福の限界　石川達三
泥にまみれて　石川達三
風にそよぐ葦（前後）　石川達三
薔薇と荊の細道　石川達三

自分の穴の中で　石川達三
神坂四郎の犯罪　石川達三
青色革命　石川達三
四十八歳の抵抗　石川達三
人間の壁（上中下）　石川達三
悪女の手記　石川達三
傷だらけの山河　石川達三
愛の終りの時　石川達三
洒落た関係　石川達三
青春の蹉跌　石川達三
生きている兵隊　石川達三
僕たちの失敗　石川達三
開き過ぎた扉　石川達三
若き日の倫理　石川達三
金環蝕　石川達三
人間と愛と自由　石川達三
最後の共和国　石川達三

約束された世界　石川達三
青春の奇術　石川達三
若い人（上下）　石坂洋次郎
あじさいの歌　石坂洋次郎
青い山脈　石坂洋次郎
石中先生行状記（全四冊）　石坂洋次郎
美しい暦　石坂洋次郎
何処へ　石坂洋次郎
暁の合唱　石坂洋次郎
山のかなたに　石坂洋次郎
丘は花ざかり　石坂洋次郎
山と川のある町　石坂洋次郎
わが日わが夢　石坂洋次郎
霧の中の少女　石坂洋次郎
草を刈る娘　石坂洋次郎
陽のあたる坂道　石坂洋次郎
あいつと私　石坂洋次郎

光る海　石坂洋次郎
麦死なず　石坂洋次郎
太陽の季節　石原慎太郎
亀裂　石原慎太郎
完全な遊戯　石原慎太郎
行為と死　石原慎太郎
星と舵　石原慎太郎
挑戦　石原慎太郎
歌行燈・高野聖　泉鏡花
内灘夫人　五木寛之
風に吹かれて　五木寛之
ゴキブリの歌　五木寛之
にっぽん三銃士（上下）　五木寛之
変奏曲　五木寛之
鳩を撃つ　五木寛之
野菊の墓　伊藤左千夫
伊東静雄詩集　桑原武夫・富士正晴編

人生劇場 夢現篇　尾崎士郎
人生劇場 望郷篇　尾崎士郎
帰郷　大佛次郎
宗方姉妹　大佛次郎
旅路　大佛次郎
夫婦善哉　織田作之助
平将門（上中下）　海音寺潮五郎
西郷と大久保　海音寺潮五郎
幕末動乱の男たち（上下）　海音寺潮五郎
パニック・裸の王様　開高健
日本三文オペラ　開高健
ロビンソンの末裔　開高健
フィッシュ・オン　開高健
新しい天体　開高健
フランドルの冬　加賀乙彦
檸檬（れもん）　梶井基次郎
愛の生活　金井美恵子
夢の時間　金井美恵子
大和古寺風物誌　亀井勝一郎
人生論・幸福論　亀井勝一郎
日本のアウトサイダー　河上徹太郎
雪国　川端康成
伊豆の踊子　川端康成
花のワルツ　川端康成
愛する人達　川端康成
掌の小説　川端康成
舞姫　川端康成
千羽鶴　川端康成
虹・浅草の姉妹　川端康成
山の音　川端康成
川のある下町の話　川端康成
東京の人（一二三）　川端康成
女であること　川端康成
虹いくたび　川端康成
みずうみ　川端康成
名人　川端康成
眠れる美女　川端康成
古都　川端康成
新文章読本　川端康成
愛・自由・幸福　河盛好蔵
人とつき合う法　河盛好蔵
親とつき合う法　河盛好蔵
藤十郎の恋・恩讐の彼方に　菊池寛
父帰る・屋上の狂人　菊池寛
硫黄島・あゝ江田島　菊村到
暖流　岸田国士
夜と霧の隅で　北杜夫
幽霊　北杜夫
どくとるマンボウ航海記　北杜夫
どくとるマンボウ昆虫記　北杜夫

船乗りクプクプの冒険　北杜夫
楡家の人びと（上下）　北杜夫
遙かな国 遠い国　北杜夫
高みの見物　北杜夫
南太平洋ひるね旅　北杜夫
星のない街路　北杜夫
奇病連盟　北杜夫
あくびノオト　北杜夫
天井裏の子供たち　北杜夫
へそのない本　北杜夫
北原白秋詩集　神西清編
夕鶴・彦市ばなし　木下順二
ことばの歳時記　金田一春彦
草野心平詩集　豊島与志雄編
武蔵野　国木田独歩
牛肉と馬鈴薯・酒中日記　国木田独歩
現代名歌選　久保田正文編
学生時代　久米正雄
出家とその弟子　倉田百三
婚約　倉橋由美子
暗い旅　倉橋由美子
ヴァージニア　倉橋由美子
妖女のように　倉橋由美子
休日の断崖　黒岩重吾
真昼の罠　黒岩重吾
失われた古代大陸　黒沼健
七人の予言者　黒沼健
霊と呪い　黒沼健
三等重役　源氏鶏太
新・三等重役（上中下）　源氏鶏太
鬼の居ぬ間　源氏鶏太
鏡　源氏鶏太
新サラリーマン読本　源氏鶏太
天上大風　源氏鶏太
実は熟したり　源氏鶏太
夢を失わず　源氏鶏太
停年退職　源氏鶏太
男性無用　源氏鶏太
男と女の世の中　源氏鶏太
家庭との戦い　源氏鶏太
口紅と鏡　源氏鶏太
掌の中の卵　源氏鶏太
歌なきものの歌　源氏鶏太
女の顔　源氏鶏太
小泉八雲集　上田和夫訳
父・こんなこと　幸田文
流れる　幸田文
おとうと　幸田文
黒い裾　幸田文
北愁　幸田文

新潮文庫最新刊

著者	書名	内容	価格
松本清張著	巨人の磯	他殺死体と巨人伝説を結び付けた表題作など5編。不可解な人間心理を描く推理小説集。	220円
森村誠一著	鍵のかかる棺（上下）	鉄と石の超高層の棺――ホテル。利益追求の巨大な機構の陰で発生する連続殺人を追う。	各280円
星新一著	午後の恐竜	現代社会に巨大な恐竜の群れが出現した……地球の運命をシニカルに描く表題作など11編	180円
渡辺淳一著	パリ行最終便	アムステルダムとパリ――別れた男との異境での再会に揺れ動く女性の心理。ほか7編。	240円
遠藤周作著	彼の生きかた	吃りのために人とうまく接することができず日本猿の調査に一身を捧げる男の感動の長編	320円
田辺聖子著	夜あけのさよなら	さまざまな恋の終りを経験し、生きることとの意味を知ったOL、庄田レイ子の恋の物語。	220円
ミッチェル著 大久保・竹内訳	風と共に去りぬ（一～三）	輝くばかりの美貌と、火のように激しい気性の持主スカーレット・オハラの波瀾の人生！	各360円
リチャード・バック著 五木寛之訳	かもめのジョナサン	愛と自由の真の意味を求めてスピードの限界に挑む異端のかもめ。夢と幻想の現代の寓話	220円
城山三郎著	生命なき街	焦熱と砂漠の街にただ一人駐在する商社員の孤独で苛烈な日々を描く表題作など全6編。	260円